
『リリカル銀魂 Striker S』～白夜叉鎮魂歌～

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『リリカル銀魂 Strikers』～白夜叉鎮魂歌～

【Nコード】

N4169H

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

ついに最終章突入！世界を滅ぼそうと企むクリス。フェイト達の前に立ちはだかる攘夷浪士、高杉。蘇る強敵。かつてない最強の敵。迫り来る世界滅亡の危機。世界の危機を救うため、銀時達が再び立ち上がる！世界の……フェイト達の未来は銀時に託された。『リリカル銀魂』史上、最大にして最後の決戦が始まる！！

第一訓：子供ってのは知らない間に大人になっている（前書き）

久しぶりに『リリカルなのは』の世界へ行く事にした銀時

今回は誰と一緒に行くのか？

第一訓：子供ってのは知らない間に大人になっている

0075年。

ミッドチルダ。

深夜の廃墟に一人の男がいた。闇に隠れて顔はよく見えないが、髪は長く、色は金髪である。

「終わりだ。現代の魔導師ども」

金髪の男は、僅かに見える口元をニヤリと歪めた。

「貴様ら出来損ない共は、この腐った世界と共に滅ぶがいい」

廃墟に金髪の男の声が響渡った。

すると、金髪の男の後ろから足音が聞こえてきた。足音は男の背後で止まった。

背後にいる男は、口に煙管きせるをくわえている。

「クリス…お前、自分以外の人間は全部ゴミだと思ってるだろ？」

ククク、と不気味に笑いながら男は言った。

『クリス』と呼ばれた金髪の男は、振り返って男を見た。

「いや…少なくとも、君をゴミだと思つた事は一度もない」

クリスは不敵な笑みを浮かべた。

「高杉晋助」

クリスは男の名を口にした。

雲に隠れていた月が出てきた。

月明りが男の顔を照らした。

左目に包帯を巻き、派手な着物を着ている。

譲夷浪士の中で最も過激で危険な男。武装集団『鬼兵隊』のリーダー。

高杉晋助。

黒き獣を内に飼い、世界の破壊を望む男。

「アレの準備も出来ている」

煙管を離して、ぷーっと煙を吐いた。

「さて…始めるとするか、世界の終焉を」
クリスは窓から月を見上げた。
闇は静かに動き出した。

*

時は遡り。

0071年4月29日。

ミッドチルダ臨海第8空港。

ロストロギアによる大火災が起こっていた。オレンジ色の炎が空港を包み込む。消防隊が消火活動をしているが、炎が収まる気配はない。

「ダメだ！これ以上は無理だ！引き上げよう！」

一人の消防隊が叫んだ。

「だが、まだ中に子供がいるんだぞ！！」

仲間に振返りながら、消防隊が叫んだ。

*

空港の中。

一人の女の子が、炎に囲まれた空港内を歩いていた。

「お父さん…お姉ちゃん…！」

泣きながら父親と姉を呼ぶ女の子。

顔や服は、すでに所々黒くなっている。炎の熱さで大量の汗をかき、息苦しくなっていく。

その時、炎が何かに引火したのか、女の子の近くで爆発が起きた。

「きゃああああ！」

爆風を受けて、悲鳴を上げながら女の子は吹き飛ばされた。

大きな石像の前で、女の子は倒れた。泣きながら必死に体を起こす。涙が床に落ちる。

「…痛いよ…怖いよ…こんな嫌だよ…帰りたいよ…」
顔を俯きながら、泣き続ける。

その時、女の子の後ろにある石像にヒビが入った。ヒビは広がり、僅かに石像が前にズレた。

女の子は後ろを振り返った。

石像が、女の子に向かって前に倒れる。

「ひい…!!」

女の子は短い悲鳴を上げ、目を硬く閉じて頭を抱えた。
その時、

「待て待て待て待て待て待て待てエエエエ!!」

どこからか声が聞こえてきた。

走る音が近づき、女の子は誰かに抱き抱えられた。

女の子を抱き抱えた人物は、そのまま走り、後ろで石像が大きな音を立てて床に倒れた。石像は粉々に砕けた。

女の子は怖くて、自分を抱いている人物の服を、ギュツと強く握っている。

「大丈夫か？」

また声が聞こえた。

さつきと同じ声。女の子はゆっくり目を開けて、顔を上げた。

目に映ったのは、頭から血を流している銀髪の男だった。

「…おじさん…誰…？」

女の子は尋ねた。

すると、

「おじ…!？」

銀髪の男はショックを受けた顔をした。

女の子を床に降ろし、銀髪の男は自分の右腕の匂いを嗅いだ。

「あのさ…俺、加齢臭とかする？」

やや落ち込みぎみに女の子に尋ねた。

そこで初めて女の子は、銀髪の男が酷い怪我をしている事に気付く。
体中傷だらけで、白い着物もボロボロで赤い血の色が滲んでいる。

体には、鋭利な刃物でつけられたような傷や火傷があった。

そして女の子が一番驚愕したのは、

「お…おじさん…！腕が…！！！」

銀髪の男の、左腕がなかった。

震える指で、なくなつた左腕を指差す。

「ん？ああ。こいつぁ元からだ。お前を助けた時に失くした訳じゃねーから気にすんな」

本人は軽く女の子にそう言った。

「っーかい加減『おじさん』って呼ぶのやめてくんない？せめて

『お兄さん』って呼んでくんない？」

真顔で銀髪の男が言った。

どうやら彼にとっては、腕がない事より、そっちの方が重要らしい。

銀髪の男は再び女の子を抱き上げ、悲痛な顔をした。

「結構体に無理させたからな…」

小さく呟いた。

女の子は、その言葉の意味がわからなかった。

銀髪の男は、周りを見回し、一箇所の通路に目を止めた。そこも瓦

礫で塞がれているが、周りに比べたら軽い方だ。

「今からあそこを蹴破つて外に出る。しっかり俺に捕まってる」

女の子は頷いて、銀髪の男の体を強く抱いた。

銀髪の男は走り出した。スピードを上げて瓦礫の山に近づき、

「うおりゃアアア！！！」

瓦礫の山を蹴破った。

そのままスピードを落とさずに、炎の中を駆け抜け、空港の外へと出た。

*

現代。

江戸のかぶき町。

万事屋のオーナー・坂田銀時は、暇を持て余していた。ゾーマとの闘いから数カ月。平和な毎日を過ごしている。相変わらず依頼はあんまり来ないが、装置を使つてたまにフェイト達が遊びに来る。

銀時はため息をついた。

「暇だな……」

ボソツと小さく呟いた。

今部屋には銀時しかない。神楽は定春と公園に遊びに行っている。新八は姉が風邪を引いたとかで、家で看病をしている。

再び銀時はため息をついた。

どうしたものかと考えた。

そこで思いついた。

「俺が向こうに行けばいいんじゃないかね？」

そうだよ。

何故それに気付かなかつたんだ。

銀時は椅子から立ち上がり、ジャンプを片手に歩きだした。

玄関を出て、目指すは源外の工場。

*

「旦那ア」

源外の工場へ向かう途中、後ろから声をかけられた。

銀時は立ち止まって、振り返った。

そこにいたのは、真選組一番隊隊長・沖田総悟だった。

「もしかして、これからフェイト達の世界に行くんですかい？」

「ああ」

銀時は短く答えた。

「だったら、俺も連れてつてくだせエ」

「は？」

銀時は片眉を上げた。

「向こうの世界に行けば、土方さんの目を気にする事なく、仕事をサボれるじゃねーですか」

ニヤリと笑みを浮かべる沖田。

銀時はしばし考えた後、同行を許した。

まあ居ても邪魔になるわけでもないし。

源外のじーさんと会っても、沖田は多分気付かないだろう。

沖田を加え、源外の工場へ向かう。
すると、

「月詠？」

「銀時」

銀時達の前に、一人の女性が現れた。

顔に傷があり、口に煙管をくわえていて、黒い着物を着ている。地下都市『吉原』の自警団『百華』の頭・月詠である。

「どうしたんだ、こんな所で？」

「いや、日輪に”少しは外で休んできたら”と言われてな」

「ああ、そう」

確かに月詠は、ほとんど休まず吉原を見回っている。

日輪が月詠に休みを与えるのもわかる。

銀時がそんな事を思っていると、月詠は沖田に気付いた。

「そっちの男は誰だ？」

「俺の知り合いの総一郎君だ」

「総悟です」

沖田が銀時の言葉を訂正する。

「わっちは月詠でありんす。以後よしなに」

「どうも。沖田総悟でさア」

互いに自己紹介をする。

月詠との挨拶を済ませ、沖田は銀時に小さく声をかけた。

「旦那も罪な男ですねエ。フェイト達以外にもこんな別品さんと付き合って……」

「オーイ。誤解を招く発言はやめてくれ、総二郎君」

「総悟です」

*

三人は源外の工場の前に到着した。なんやかんやで、月詠も一緒に来る事になった。中には、何やら機械を弄ってる老人がいる。

「おい、じーさん」

銀時が老人を呼んだ。

「ん？」

老人が振り返った。

赤いゴーグルを付け、白髭をたくわえた老人は、平賀源外。江戸一番の機械技師であるが、ある事件を起こして今は指名手配されている。

「ちよいと装置動かしてくんねーか？」

「そりゃ構わねーが……」

源外は沖田と月詠を見た。

銀時が源外に近づいて、小声で話し掛けた。

「沖田は頭カラだからよ、じーさんには気付かねーよ」

「そうか？まあそれならいいんだが、あの娘っ子は誰だ？また別品連れてきたな」

月詠を見ながら言った。

顔に傷があるとは言え、月詠はなかなかの美人である。

「まさか銀の字、お前の……」

「違ーよ」

即座に銀時は否定した。

「んな事より、とつとと装置動かしてくれ」

「わかったよ」

源外は移動した。

銀時、沖田、月詠の三人は装置の中に入った。

初めて装置の中に入った月詠は、珍しそうに中を見ている。

向こうに行くのは久しぶりだな。

銀時がそう思っていると、装置の中が赤くなった。すると、スピーカーから源外の声が聞こえた。

「銀の字。装置の中に赤いボタンがあるだろ？そのボタンを押すと」
銀時は嫌な予感がした。

そして予感的中した。何も知らない月詠が、ボタンを押した。

「装置の出力が最大になって制御出来なくなる。絶対に押すな」

「ジジー！そっちを先に言えエエエ！それに何でオメーがボタン押してんだ！？」

源外に向かつて怒鳴った後、月詠にも怒鳴った。

「いや、すまん……気になってしまつて……」

月詠は素直に謝った。

「つーかこんなボタン、前までなかったぞ！第二章にもなかったぞ！」

銀時が怒鳴っていると、装置内の赤い色は濃くなり、電気がビリビリする。

「まあ行き先は、なのはの世界だから大丈夫だろ」

装置の外にいる源外は、呑気にそう言った。

「旦那ア。人生諦めが肝心でさア」

「騒いだ所でどうにもならん」

沖田と月詠は冷静だった。

「落ち着けるかアアアア！！！」

ありつたけの声で、銀時は怒鳴った。

直後、赤い光は強くなり、バチツと強烈な閃光を放った。

光が収まり、源外は装置の扉を開けて中を見た。三人の姿はなかった。

「まあ銀の字なら大丈夫だろ」

*

0075年。5月。

ミッドチルダ。機動六課の訓練場。

「はい。じゃあ午前の訓練終了」

サイドポニーの栗色の髪的女性が言った。

高町なのは。19歳。機動六課の教導官を務めている。

「はい！」

なのはの声に、四人の男女が応えた。

青い髪でショートカットのボーイッシュな少女。スバル・ナカジマ。
15歳。

オレンジ髪のツインテールの少女。ティアナ・ランスター。16歳。

赤髪の男の子。エリオ・モンディアル。10歳。

ピンク色の髪の子。キャロ・ル・ルシエ。10歳。

ちなみにキャロの隣には、使役竜フリードリヒ。通称フリードという小さな竜がいる。

四人とも機動六課の新人フォワード部隊である。

「それじゃあ、お昼にしようか」

「はい！」

五人と一匹は、機動六課の隊舎に向かって歩き出した。訓練で疲れて、みんな少しダルそうな感じである。

隊舎の入口まで来た時、一台の黒い車がやってきた。ドアが開き、二人の女性が車から降りた。

長い金髪的女性と、ピンク色のポニーテールの女性。

「フェイト隊長！シグナム副隊長！」

フォワードの四人が名前を言った。

「みんなお疲れ様。これからお昼かな？」

金髪的女性のフェイト・テストロッサが言った。

フェイトは今、執務官に務め、フォワード部隊のライティング分隊の隊長でもある。

ちなみに、なのははスターズ分隊の隊長だ。

「そうだよ。フェイトちゃんとシグナムさんも一緒にどうかな？」

「うむ。そうしよう」

ポニーテールの女性のシグナムが頷いた。

シグナムは、ライトニング分隊の副隊長である。

みんなが隊舎に入ろうとした時、突如頭上に強い光が現れた。

「な…何これ!？」

フォワード達は、突然現れた光に驚く。

一方フェイト達は、この光が何なのか、わかった。

「この光…もしかして…!？」

光は輝きを増す。

そして、

「ああああああ!!」

光の中から、三人の人影が落ちてきた。三人は、そのまま地面に倒れた。

光は収まり、全員が光から現れた三人を見た。

やがて三人の内の一、銀時が体を起こした。

「いてて…どこだ此処?何か知らねートコに着いたぞ」

頭を押さえながら、銀時は回りを見渡した。

すると、フェイトと目が合った。

「銀…時…?」

フェイトが口を開いた。

銀時はポカンとしている。

「あの…どちら様で?」

と、銀時は目の前の女性が、フェイトと気付かずと言った。

だが、ジッと見ていると何か気になる。

「あれ?ちょっと待って…何か見覚えがあんだよな…どこかで

会ったっけ?」

首を傾げる。

「えっと…これで分かるかな?」

フェイトは、両手で髪を両サイドに束ねた。

銀時はしばらくジッと見た。フェイトの顔が、少しずつ赤くなって

いく。

そして銀時は気付いた。

「お前っ！まさか…フェイトか!？」

驚きながら銀時は言った。

「うん」

フェイトは頷いた。

「えっ!？ちよっ…マジでか!？」

驚いた銀時は、マジマジとフェイトを見つめた。

「私、19歳になったんだ」

「19!!？」

銀時は更に驚いた。

確かに今のフェイトは、大人だ。元々可愛かったが、大きくなって大人の魅力的なモノもあつて綺麗だ。

「あらら、すっかり大きくなっちゃって………ってちよつと待てエエエエ!!」

急に立ち上がつて、銀時は叫んだ。

みんな驚いて、体を震わせた。

「おかしい！絶対おかしい!!だって…お前この前まで、まだ小学生……えええっ!？何これ？どうなつてんだ!？」

目の前の事が信じられず、銀時は混乱した。

「落ち着け、銀時」

シグナムが肩を掴んで、落ち着かせようとする。

「シグナム？お前、シグナムか!？」

「ああ。久しぶりだな、銀時」

シグナムは微笑んだ。

「銀さん、お久しぶりです」

なのはが挨拶した。

銀時は一瞬わからなかったが、フェイト、シグナムときて何となくわかった。

「まさか……なのはか…？」

「はい！」

笑顔でなのはは応えた。

銀時はますます混乱した。

どうなってるんだ、こいつア？シグナムは変わってるねーが、フェイトとなのはは大人になってやがる。訳がわからねエ。

銀時は一人悩み続けた。

フォワード隊のスバルは、銀時をジッと見つめていた。

「ねえ…銀時って…もしかして、アノ”銀時”？」

「た…多分そうだと思います」

ティアナとエリオが、銀時を見ながら話してる。

スバルは銀時に駆け寄った。

「あの…！」

悩んでる銀時に声をかける。

「あ？」

銀時は振り返って、スバルを見た。

「私、スバル・ナカジマです！四年前の空港の火災で、貴方に助けられた！」

そう。この人だ。

私を、あの火の海から助けしてくれた銀髪の男。管理局でも噂になっている男。

この人に憧れて、私も誰かを助けられる人になろうって決めたんだ。スバルは、自分の憧れの人物との再会に喜んだ。

だが次に銀時の口から出た言葉は、意外なものだった。

「誰、お前？」

第一訓：子供ってのは知らない間に大人になっている（後書き）

闇が蠢く中、フェイト達と再会した銀時

謎の男『クリス』と手を組み、何を企む高杉！？

銀時「次回、リリカル銀魂。『知り合いに似てる人を見かけたら声をかけそうになる』。テイクオン！あつ、間違えた。テイクオフ！」

第二訓：知り合いに似てる人を見かけたら声をかけそうになる（前書き）

『銀さん、大人になったフェイト達を見てどうでしたか？』

銀時「いやビックリしたよ。まあ大きくなったらそれなりの美人になるんじゃないかね？とは思ってたけど…まさかあそこまで美人になるとはな。スタイルもよくなってるし」

未来の『リリカルなのは』の世界に来た銀時達

何気に初登場の月詠もよろしく！

第二訓：知り合いに似てる人を見かけたら声をかけそうになる

機動六課部隊長オフィス。

デスクに座っているのは、部隊長の八神はやて。 19歳。

隣にはリインフォースがいる。

ドアが開かれ、銀時、フェイト、シグナム、なのはが入ってきた。

「銀ちゃん！ホンマに銀ちゃんや！」

銀時の姿を見たはやては、思わず立ち上がった。

「銀時！」

リインフォースも銀時を見た。会えた嬉しさで笑顔になる。

「…はやてもでっかくなつたな。リインフォースは変わってねーな」

「私は、年はとりませんから」

リインフォースは笑顔で返事をした。

すると、

「わあ！銀さんです〜！」

三十センチくらいの小さな少女が、銀時に抱き付いた。長い水色の

髪で、見た目はリインフォースにそっくりだ。

「うおっ！なんだコイツ！？リインフォース！？ちっさいリインフ

ォースだ！」

小さなリインフォースを見て、銀時は驚いた。

「その子は『リインフォース・ツヴァイ』って言うてな。リインフ

ォースの妹や」

はやてが銀時に教えた。

「え？妹？マジでか!？」

リインフォースを見ながら、銀時は尋ねた。

リインフォースは、少し照れた感じで頷いた。

「よろしくです、銀さん！」

無邪気な笑顔で、リインフォース・ツヴァイは挨拶した。

「お…おお」

少し戸惑いながら、銀時は返事をした。
リインフォースの妹？性格が全然違うんですけど。めっちゃ明るいんですけど。

まじまじとリインフォース・ツヴァイを見つめる。

「その子の事は”リイン”って呼んであげてな」
はやてが言った。

二人がごっちゃんにならないためか。て事はリインフォースの方は、そのままリインフォースでいいワケか。

銀時は納得して頷いた。

「まあ立ち話もなんやし、座ろうか」

はやてが、デスクの前にある来客用のソファアに座るよう促した。

銀時達はソファアに座った。

「やっぱり銀ちゃんと声が同じやな」

ボソツとはやてが呟いた。

「え？」

銀時は首を傾げた。

「いや、こつちの話や。それにしても、銀ちゃん全然変わっとらん
な」

ソファアに座りながら、はやてが言った。

「銀時は過去から来たみたいなんだ」

フェイトが答えた。

「過去から？」

「装置が制御不能になったみたいで、誤ってこの時代に来ちゃった
みたいなの」

今度はなのはが説明した。

なるほど、とはやては頷いた。

「それにしても、此処は何なんだ？」

銀時は、来たときから疑問に思っていた事を聞いた。

フェイト達が制服を着ているところから推測すると、管理局か何かの部隊みたいだ。

「ここは古代遺物管理部 『機動六課』。ロストロギア関連の危険な任務を扱う部隊や」

はやてが答えた。

「はやてが立ち上げたんだよ」

「えっ！？はやてが！？」

フエイトの言葉に銀時は驚いた。

「って事は、お前が一番偉かったりするんのか？」

「うちは機動六課の部隊長や」

はやてが胸を張って言った。

銀時は驚いた。まさかはやてが隊長とは。世の中わからないものだ。

「ところで銀さん。私の方からも聞きたい事があるんだけど」

驚いてる銀時に、なのはが声をかけた。

「銀さん。本当にスバルの事知らないんですか？」

真剣な表情で銀時に尋ねた。

他のみんなも同じだ。

さっきの隊舎入口での、スバルと銀時の会話が気になる。

「だーから。俺はあんなガキ知らねーよ」

メンドくさそうに銀時は答え、持ってきたジャンプを開く。

なのはが説明する。

「四年前、空港で大火災が起こったの。スバルもそれに巻き込まれ

て、その時に男の人に助けられたの」

「その助けた男が、俺だっつてののか？」

ジャンプから目を離さず、銀時は言った。

「うん」

なのはが頷く。

「人違いじゃねーの？」

「それはないな。スバルは男の特徴を覚えている。銀髪の天然パー

マで、死んだ魚のような目。白い着物を着ていたと言っていた」

「これみーんな銀ちゃんの特徴や。銀ちゃん以外にはおらん！」

シグナムの言葉の後に、はやては断言した。

銀時は困ったように頭を掻いた。

「んな事言われてもよオ。知らねーもんは知らねーよ。ゾーマの野郎を倒してから俺、装置使つてねーし」

あくまで銀時は、スバルを助けたのは自分ではないと主張する。

はやて達はしばし考えた。この様子だと本当に知らないのかもしれない。

嘘をつく理由も見当たらないから、嘘は言っていないはずだ。

「じゃあない。この件は後で考えようか」

はやてが諦めたように言った。

「そういえば、銀時の他に二人こちらに来てると聞きましたか？」

ラインフォースが尋ねた。

「ああ。沖田と月詠な」

「ほんなら、ちよつと挨拶に行こか」

はやてが席を立つ。

「つて事はお前ら、まだ”魔法少女”とかやってんの？」

なんとなく気になったので、銀時は聞いてみた。

「うん。そうだよ」

フェイトが頷いて答えた。

「え？何？お前らその歳で”魔法少女”とかやってるの？痛い痛い痛い痛いよー！お母さーん！ここに頭怪我した人達がいるよー

！！」

腕を押さえながら、銀時は大声で言った。

その瞬間、フェイト達の空気が冷たくなった。

「銀時。少しお話ししようか」

「銀さん。少し頭冷やそうか」

「銀ちゃん。少しお仕置きやな」

冷たい笑みを浮かべ、三人はデバイスを構える。

身の危険を感じた銀時は、後ずさった。

「ちよ待てよ。冗談だって。本気にすんなよ……いや、いいと思う

よ魔法少女」

必死に危険を回避しようとするが、フェイト達は止まらない。

「シグナム！リインフォース！リイン！ヘルプ・ミー！！！」

銀時は三人に助けを求めた。

だが三人は、我関せずと銀時から目をそらす。

リイン！お前はそんな薄情なヤツなのか！？

味方がいなくなり、銀時は涙目になる。

三人のデバイスに魔力が溜まる。

「バスター！！！」

三つの閃光が放たれた。

銀時は成す術もなく閃光に飲み込まれた。

部隊長オフィスで大爆発が起こった。

「すまない、銀時」

シグナムが小さな声で謝った。

*

食堂。

スバル達フォワードメンバー、沖田と月詠は一緒に食事をしていた。既に互いの自己紹介は済んでいる。

「沖田さんって、銀時さんと一緒に『ジュエルシード事件』を解決した、あの沖田総悟さんですか！？」

沖田の名前を聞いたティアナは驚いた。

「ああ」

沖田は軽く返事をして、スパゲッティをおかわりした。

「へー、凄い人なんですね」

エリオも驚いてる。

過去のジュエルシード事件等の話で、ティアナ達は盛り上がった。た。

ただ、スバルだけは少し元気がない。普段は沢山食べるのだが、今はほとんど食が進んでいない。

「あの…スバルさん、大丈夫ですか？」
キヤロが心配そうに聞いた。

「あ、ああ…うん。大丈夫大丈夫」

スバルは笑って答えた。

スバルの様子を見ていた月詠が口を開いた。

「銀時の事か？」

「えっ!？」

月詠の言葉に、スバルは動揺した。

やっぱり銀時に『誰、お前?』と言われたのがショックだったようだ。

「あの阿呆め。自分が助けた女の子の事を忘れおって」

月詠は呆れたように言った。

「でも妙ですねエ」

沖田が口を開いた。

「旦那は、装置を使ってこっちの世界に来るのは久しぶりだって言
ってましたぜ」

うーん、と全員が悩んだ。

一体スバルを助けた銀髪の男は何者なんだろう。

みんなが悩んでいると、銀時達が出てきた。

「みんな午前の訓練お疲れ様。午後の訓練も頑張ってるな」

「はい!」

はやての言葉に、フォワードの四人が応えた。

沖田は、黒焦げ姿の銀時を見た。

「旦那ア。爆撃でも受けましたか？」

「悪魔どもにやられた…」

力無く銀時は答えた。

はやて達は、沖田と月詠に顔を向けた。

「はじめまして。機動六課部隊長、八神はやてです」

「部隊長補佐のラインフォースです」

「ラインフォース・ツヴァイです!」

三人が自己紹介した。

「わっちは月詠じゃ」

「沖田総悟です」

二人も自己紹介した。

スバルは、銀時の事をチラチラと見ている。本当に自分の事を覚えてないのか気になる。

スバルは意を決して、本人に聞いてみる事にした。

「あの、銀時さん！」

「ん？」

「少し…いいですか？」

遠慮がちに銀時に聞いた。

*

スバルと銀時は外に出た。

「あの…えっと…その…」

いざ聞こうとしたら、急に緊張してきた。

なかなか言いたい事が言えない。

「アレか？お前を助けた男の話か？」

ため息をつきながら、銀時が言った。

「あ…はい。そうです」

「言つとくけど、俺じゃねーからな」

銀時は言った。

「誰かと勘違いしてんじゃねーの？」

「そんな事ありません！あの顔を…貴方の顔を見間違えたりなんかしません！」

スバルは大きな声で否定した。

私を助けてくれた人は、間違いなくこの人だ。

ふと、スバルはある事を思い出した。

「あの…腕は平気なんですか？」

「は？」

銀時は片眉を上げた。

何でそんな事を聞くのか。

「私が見た時…左腕がなかったから…」

「えっ!？」

スバルの言葉に、銀時は目を丸くして驚いた。

慌てて自分の左腕を確認する。

普通に左腕はある。

「お前さア、恐いこと言うなよ。ちょっとビックリしちゃったじゃねーか」

「す、すみません！無事ならよかったです！安心しました」

銀時は本当に焦った。

左腕がないって……何やってんだ俺？俺ってというか、俺らしき人物。

「もういいか？」

「はい。どうもすみませんでした」

スバルを助けた男の正体は謎のまま、話は終わった。

二人は中に向かった。

途中で銀時は足を止めた。

「ああ、そうだ。俺の事は”銀さん”でいいぜ。まあこれからよろしく頼むわ」

微笑みながら銀時は言った。

その言葉を聞いて、スバルは嬉しくなった。

銀時には身に覚えは無いようだが、自分は間違いなく、この人に助けられた。

その人から、”よろしく頼む”と言われた。

「はい！私の方こそ、よろしく願います！」

スバルは、いつもの元気な声で応えた。

*

中に戻った銀時は、フェイトに部屋へ案内された。泊まるアテがないので、銀時達は機動六課の隊舎に泊まる事になった。

「ここが銀時の部屋だよ」

フェイトが扉を開けた。

銀時達は別々の部屋に泊まる事にしたのだ。

「悪いな。部屋まで世話になっちまって」

「ううん。隣は私の部屋だから。何かあったら何時でも呼んでね」

「おお」

銀時は部屋を見渡した。

ベッドがあつて、机がある。一人で使うには問題ない広さだ。ただ、ベッドではなく敷布団の方がよかった。なんとなく。

部屋を見渡していると、背中に温かい感触がした。

後ろを見ると、フェイトが背中から銀時に抱き付いていた。

「ちよっ…！おま…！」

銀時は慌てた。

思わず手に持っていた、ジャンプを床に落とす。

「銀時…：また会えて嬉しいよ…：」

フェイトは腕に力を入れて、銀時を強く抱いた。

銀時は物凄く動揺している。子供の頃のフェイトなら、それでもないが、今のフェイトは大人だ。

大きくなった胸が背中に当たる。さすがの銀時も、これには動揺を隠せない。

「銀時。私の気持ちは変わらないから」

フェイトは静かに言った。

「わかった！お前の気持ちはわかったから、一旦離れよう！一旦落ち着こう！なっ？」

動揺しまくりながら銀時は言った。

フェイトは銀時から離れた。

「えへへ」

フエイトは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

銀時はため息をついた。

その時、開いてる扉の方から視線を感じた。

扉の方を見ると、なのは、沖田、月詠がいた。なのはは顔を赤くし、沖田はニタリと腹黒い笑みを浮かべ、月詠は興味深そうに二人を見ていた。

「テメーらアアア！何覗いてんだコラアアアア！」

銀時は額に血管を浮かべながら怒鳴った。

三人は逃走し、銀時はあとを追った。

フエイトは、三人を追っていく銀時の背中を見つめながら微笑んだ。

*

結局、三人を捕まえる事はできなかった。

銀時はベッドに横になって、外を眺めてる。

そっぴゃア、アルファプレシアはどうしてんだ？ついでにクロノも。

青空を見つめながら、そんな事を考えていた。

すると、扉がノックされた。

「開いてるぞ」

軽く返事をする。

「入るぞ」

声が出た後、扉が開かれた。

入ってきたのはシグナムだった。

銀時はシグナムに体を向けた。

「何か用か？」

「ああ。もうすぐフォワード達の訓練が始まるんだが、見学してみないか？」

「そっぴゃ、はやてが午後の訓練とか言ってたな。」

「そっぴゃ。見てみるか」

魔導師の訓練に少し興味が出た銀時は、体を起こした。

ベッドから降りて立ち上がり、ドアに向かって歩き出した。すると、突然シグナムが抱き付いてきた。

「シグナム!？」

銀時は驚いた。

フェイトに続いてシグナムまで。

「会いたかった」

シグナムは頬を赤く染める。

大きな胸が銀時に当たる。

「ま…待て待て、シグナム!俺らそういう関係じゃねーだろ!？」

何とかシグナムを引き離そうとする。

銀時のいた世界には、見た目は綺麗だが、中身が強暴だったり性格に問題がある者ばかりで、まともな女性がない。

だがフェイトやシグナムは、見た目も綺麗で中身も普通の本当に綺麗な女性だから、こんな事をされると余計に銀時は動揺してしまうのだ。

「こういうのは嫌か？」

上目使いでシグナムが言う。

「べ…別に嫌じゃねーけどよ…」

シグナムから目をそらす。

心臓がバクバクする。不覚にも銀時は、上目使いのシグナムを見て可愛いと思ってしまった。

シグナムは銀時から離れた。

「ふふ。今日はこれくらいにしておこう」

シグナムはフェイトみたいな、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

銀時はため息をついた。何にもしてないのに、凄く疲れた気がする。

「早く訓練場まで、案内してくんない？」

「ああ。沖田と月詠は先に行った」

こうして銀時は、シグナムの案内で訓練場へ向かった。

*

訓練場。

沢山のビルが並ぶ所に、スバル達はいた。

訓練の内容は、自律行動型のロボット『ガジェットドローン』をフォワードの四人で倒すというものだ。

ティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』で狙い撃ちし、スバルは、先天魔法『ウイングロード』という水色の道を宙に作り、ローラーブーツ型のデバイス『マツハキャリバー』で走って翻弄し、腕に装着してるデバイス『リボルバーナックル』でガジェットを貫く。

キヤロは、錬鉄召喚で鎖を出してガジェットの動きを止める。エリオの槍型デバイス『ストライダー』がガジェットを貫く。フリードも炎を吐いてガジェットを攻撃する。

フォワードの四人は、それぞれの魔法を駆使してガジェットを破壊していく。

銀時達は、なのは達と一緒に屋上から訓練の様子を見ている。やがて銀時が口を開いた。

「うん。これ魔法じゃねーな」

沖田と月詠以外の全員が、思わずコケそうになった。

「えっと…一応魔法なんですけど」

ハハハ、と苦笑しながらなのはが言った。

「いや機械使ってんじやん。あれ見て魔法ですって言われてもピンとこねーわ」

頭を搔きながら銀時が言った。

すると沖田がカメラ目線になり、

「次回から『機動少女メカニクなのは』スタート。みんな、絶対見てくれよな」

キリッとした顔で言った。

「いや、勝手にタイトルを変えたらマズイだろう」

「それにカメラもないぞ」

月詠とシグナムがツッコんだ。

なのは達は力無く笑った。

「それにしても、スバルの動きが午前の時に比べて、少し硬いかな？」

訓練の様子を見ながら、なのはが言った。

今のスバルは、なんか緊張しているみたいだ。

「もしかして、銀時がいるからじゃない？」

フェイトが銀時を見た。

銀時は訝しんだ。

「俺？」

「スバルにとって、銀時は命の恩人で憧れの人だから。そんな人に自分の訓練を見られたら、緊張するよ」

まさにフェイトの言う通り。

銀時に、自分の訓練の様子を見られているスバルは緊張していた。

「憧れる対象を間違えてるな、アイツ」

銀時はため息をついた。

「そうだ！」

なのはが何かを思いついた。

みんなの注目がなのはに集まる。

「銀さん達も訓練してみませんか？」

「は？」

なのはの提案に、銀時達は片眉を上げた。

第二訓：知り合いに似てる人を見かけたら声をかけそうになる（後書き）

銀時達が訓練に挑戦！？

メンドくさがり屋の銀時は引き受けるのか？

フェイト「次回、リリカル銀魂。『甘い誘惑に負けない強い意志を持って』。テイクオフ！」

第三訓：甘い誘惑に負けない強い意志を持って（前書き）

銀時達の訓練を提案したなのは

なのは達は銀時を説得できるのか？

銀時「『リリカル銀魂』。始まるぜ」

第三訓：甘い誘惑に負けない強い意志を持って

銀時はイザという時には頼りになるが、普段はやる気の欠片も見せない男である。

だから、なのはに『訓練をしてみませんか？』と言われた銀時は、

「んなメンドクせー事やってられっかよ」

と心底メンドクさそうに断った。

だが、銀時の性格を知っているなのは達は、これくらいでは諦めなかった。

ちゃんと奥の手を用意してある。

なのはがフェイトに目配せし、フェイトは頷いた。

「ねえ銀時」

フェイトが声をかけた。

「何だ？」

銀時は、絶対に訓練なんてやらねーぞ、というような顔をする。

「訓練してくれたら、私がチョコレートパフェを好きだけ奢ってあげるよ」

「テメーらア！俺達の活躍、目に焼き付けとけ！」

と、わずか一秒で銀時は心変わりした。

月詠は呆れてため息をついた。

フォワード一同の訓練を終わりにし、銀時達もガジェットを倒す訓練をする事になった。

*

スバル達は、なのは達と一緒に屋上に来ている。

スバルは内心わくわくしていた。これから、あの憧れの銀時の訓練が見られるのだ。

「楽しみだな〜！」

スバルは、本当に楽しそうな笑みを浮かべてる。

一方ティアナ達は、それほどテンションは高くはなかった。もちろんティアナ達も、銀時についてはある程度知っている。

坂田銀時。

『ジユエルシード事件』、『闇の書・ゾーマ事件』を魔法を使わず、剣だけで解決した男。

その鬼神の如き強さから『白夜叉』と呼ばれ、管理局内でも有名で、知らない人は殆どいない。

だが、実際に銀時の戦いの様子を見た者は、当時の事件の関係者やアースラの局員と、極僅かな人数である。だから本当に銀時がそんなに凄い人なのか、まだ信じられない人が多い。

ティアナ達も、まだ銀時の噂には半信半疑である。

ティアナは、下にいる銀時達をジッと見つめた。視線を銀時から沖田に移す。

一緒にいる沖田も、銀時に勝るとも劣らない凄腕の剣の使い手だと聞く。

一体どれほどの強さなのか、噂には半信半疑ながらもティアナは興味を持った。

*

下にいる銀時達は、なのはからの開始合図を待っていた。

「何故わつちまで、訓練に参加しなければならんのじゃ？」

月詠は一人納得がいかなかった。

「ままま。いいじゃねーか。訓練すればチヨコレートパフェが食えて、みんなが幸せになれんじゃねーか」

「それは、ぬししか幸せになつたらんぞ」

銀時を睨みながら、月詠がツッコんだ。

「まあいいじゃねーですかイ。運動不足は体に悪いって言うし」

沖田は肩をコキコキ鳴らしている。

月詠は諦めたように、ため息をついた。

「みなさん。準備はいいですか？」

屋上にいるのが聞いてきた。

「いつでもいいぜ」

「不本意だが、まあよからう」

「待ちくたびれちまったぜエ」

三人は返事をした。

すると、三人の前に二十体のガジェットが現れた。

「襲い掛かるガジェットを五分以内に破壊。それじゃ、ミッションスタート！」

なのはが開始の合図をする。

二十体のガジェットが、一斉に銀時達に襲い掛かる。

一体のガジェットが銀時に向かって、中心にある黄色いレンズから光線を放った。

銀時はガジェットの前から消えた。

「遅せえ」

一瞬でガジェットの横に移り、木刀『洞爺湖』をガジェットに向かって、横薙ぎに振りぬく。

ガジェットは横に真っ二つに斬られた。

すかさず銀時は、近くにいるガジェットを縦に斬った。

「速い！？」

スバル達は驚いた。

動きが素早く、ガジェットを木刀だけで切り裂いているのだから。

「はい！次！次！次！次！次！」

銀時は次々とガジェットを破壊していく。

沖田もガジェットの攻撃を避け、目にも止まらぬ剣技で複数のガジェットを斬った。

月詠は複数のクナイを五体のガジェットに向けて放った。ガジェットは障壁を張ってクナイを防ぐ。

「後ろがガラ空きじゃ」

ガジェットの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。

クナイは障壁が張られていないガジェット達の背中を貫き、中の動力炉を破壊した。

銀時と沖田が四体のガジェットを破壊した。

訓練が始まって一分も経過しない内に、二十体のガジェットは全て破壊された。

訓練の様子を見ていたスバル達は呆然となる。

銀時達は武器をしまった。

「チヨコレートパフェゲットだな」

銀時は満足そうに笑っている。

「なんでイ、なんでイ。もう終わりですかイ？」

沖田は物足りないと言った感じである。

「だからわつちは乗り気じゃなかったんじゃ」

月詠は再び煙管を口にくわえる。

三人とも、まだまだ全然余裕である。

「やっぱり、これくらいじゃ簡単すぎたね」

なのはが言った。

「銀時と沖田の強さは相変わらずだね」

「それに、あの月詠という女性もかなりの手練だ」

フェイトとシグナムも、それぞれの感想を言った。

「あの！」

エリオが声を上げた。

「銀時さん達が攻撃した時、『AMF』が効いてなかったみたいなんですけど……」

『AMF』とは、攻撃魔法を掻き消すシールドみたいなものである。

「銀時達は魔法を使ってないんだ。だから『AMF』は、銀時達には何の効果もないんだよ」

「えっ！？そうなんですか!?!」

キャラ口が驚きの声を上げる。

一分もかからずに、二十体のガジェットを倒したのも驚きだが、魔法を全く使っていない事にも驚いた。

「魔法を使わずに活躍したって噂は、本当だったんだ」

エリオは、改めて銀時達が凄い人であると認識した。

「銀さん、スゴイ！」

スバルは興奮してはしゃいでいる。

みんなが銀時達の強さに騒いでる中、ティアナは複雑な顔をしていた。

魔法も使えないのに、あんな凄い動きが出来るなんて。

ティアナは拳を強く握った。

*

訓練が終わって夕食の時間。

食堂に集まって、みんなで夕食を食べている。

銀時は、デザートチョコレートパフェを食べていた。

「銀時。今日の訓練、お疲れ様」

「お疲れ様です！」

「おお」

フェイトとスバルの言葉に、銀時は短く答えた。

「そういや、フェイト。アルフとプレシアはどうしてんだ？」

「母さんは、本局で働いてるんだ。アルフは母さんの仕事の手伝い」

「そうか。二人とも元気か？」

パフェを口に運びながら、銀時は尋ねた。

「うん。元気だよ。銀時の事を教えたら、二人とも嬉しそうだったよ」

「よ」

「そうか」

銀時はパフェを食べ終えた。

おかわりのパフェを頼もうとした時、

「銀時いゝ！！！」

声と共に背中に衝撃が走った。

「おわっ！」

ビックリした銀時は後ろを見た。

そこには、

「アルフ！ヴィータ！」

人型の姿になつてるアルフと、別の用事から帰ってきたヴィータがいた。

「銀時い、久しぶり〜！会いたかったよ〜！」

「銀時！元気だったか？」

アルフとヴィータは、銀時に抱き付いた。

周囲の注目が銀時達に集まる。

「ちよっ…離れる、バカ犬！ハンマー小娘！」

「素直じゃないな〜」

嬉しそうな顔をしてるアルフは、なかなか離れない。もちろんヴィータも。

「フーか何でお前が此処にいるんだ？本局でプレシアの手伝いしてたんじゃねーのかよ？」

「銀時に会いたくて来たんだよ」

フェイトからの知らせを聞いて、本局から来たらしい。

「とりあえず離れる！」

銀時が叫んだ。

*

夕食を食べ終え、みんなそれぞれの部屋に戻り、眠っていた。ちなみにアルフは、フェイトの部屋で一緒に寝ている。

銀時はベッドに横になっている。食堂では怒鳴ってばっかだったが、元気なアルフとヴィータの姿が見れて、銀時は安心した。

だが、銀時の中には少し不安があった。

前に新八達と一緒に『A・S編』を見た。

そして物語にゾーマが出ていない事に気付いた。プレシアの時もそうだったが、どうやら銀時達が介入した事で、原作のストーリーとは違う展開になっているようだ。
だとしたら、今回も違う展開になる可能性がある。
まあ原作の内容は知らねーけどな。
銀時はため息をついた。
何も問題が起こらなきゃいいが。
不安を抱えたまま、銀時は眠った。

*

翌朝。

ヴィータが教導に加わって、フォワードのみんなは個別訓練を受ける事になった。

ちなみにヴィータはスターズ分隊の副隊長である。

それぞれの個性を活かすための訓練に、スバル達は頑張る。

銀時達は訓練の様子を見守っている。

そこへシグナムとアルフがやってきた。

「ここにいたのか」

「ああ。暇だからな。つーかお前は仕事しなくていいのかよ？」

シグナムに答えた後、アルフに言った。

「ちゃんとプレシアからは、休みを貰ってるもーん」

気軽にアルフは答えた。

「ふむ。アルフは天人に似ているな」

アルフを見ながら、月詠が言った。

月詠の隣では、沖田がいつものアイマスクを付けて寝ている。

シグナムが銀時の隣に立った。

「銀時。私と模擬…」

「ヤダ、コワイ、イタイ」

「…何故外人口調？それにまだ言い終わっていないぞ」

僅かに顔をしかめて、シグナムは言った。

銀時を模擬戦に誘おうとしたが、見事に断られた。

銀時達は雑談をしながら、スバル達の訓練の見学した。

「よし。午前の訓練は終わりだ！」

ヴィータがスバル達に告げた。

訓練を終えたスバル達は、それぞれストレッチをした。

「こんな訓練毎日やんのか。大変だな」

ジャンプを持ちながら、銀時は他人事のように言った。

*

昼食を食べるため、銀時達は食堂にいた。

そこでティアナ達は顔をしかめていた。原因は銀時とフェイトにある。

二人は、真っ白いご飯の上に『ある物』をかけているのだ。意を決して、エリオが聞いてみた。

「あの……お二人とも何をかけてるんですか……？」

「これか？」

銀時はエリオに顔を向けた。

片手で丼を掴み、顔の前まで持ち上げた。

「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

ご飯に小豆を乗せるという、銀時特製の宇治銀時丼。

ティアナ達は顔を歪め、嫌悪感を露にする。さすがのスバルも少し引いてる。

宇治銀時丼自体にも驚いたが、更に驚きなのが、隣に座ってるフェイトがそれを美味しそうに食べているのだ。

フェイトの意外な食の好みに、スバル達はア然とした。

シグナムとヴィータは、宇治銀時丼を始めて見るが、とても好きにはなれないと思った。

「食つか？」

銀時がスバル達に尋ねた。

「え…遠慮しときます!」

慌ててスバル達は断った。

そんな皆の様子を見て、なのはとアルフは苦笑した。

「つーかよオ」

銀時は視線を上に向けた。

「何でお前はそんなトコにいんの?」

銀時の頭にリインが乗っていた。

「銀さんの天然パーマは気持ちいいです」

リインは、天然パーマの上をコロコロ転がる。

とても気持ちよさそうで、幸せそうな笑顔をしている。

「俺の天然パーマを鳥の巣か何かと勘違いしてない?何?泣いていい?」

銀時は少し落ち込んだ。

天然パーマが憎い。やっぱりサラツサラヘアになりたい。

銀時はそう願った。

「リインと仲良くできてるみたいで、安心しました」

リインフォースが言った。

「つーか何で妹がいんの?」

「主はやてが『何か妹とかおったら、楽しいやん』と言い出し、リインが生まれました」

「それだけ?」

と銀時。

何かこう…凄い理由とかあるのかなあと思ったら、『妹がいたら楽しそう』だからか。

はやてにとってリインフォースやシグナム達は家族みたいなものだから、はやてらしいと理由と言えば、らしい理由である。

「そっぴやア、はやての奴、俺の声が誰かに似てるみたいな事言ってたが…お前知ってるか?」

銀時は、未だに頭に乗っかってるリインに尋ねた。

「知ってますよ。銀さんと同じ声です！」

「誰だよ？」

「それは秘密です。でも、銀さんも知ってる人ですよ」

「俺も？」

銀時はしばし考えた。

自分が知ってる限りでは、声が似てる人に心当たりはない。

「いや、しかし女ばかりですねエ。将来有望なメス豚が見つかりそうですね」

何やら沖田が怖い事を言っている。

「いや、その前に俺達はアレを育てなきゃならねエ」

「アレ？」

銀時の言葉に、月詠は首を傾げた。

アレとは一体何だろうか？

月詠が疑問に思っていると、銀時が答えた。

「新八に代わる”ツッコミ役”だ」

*

薄暗い部屋。

部屋はかなり広く、王室のような内装で、壁に緑色の炎がともっている。

王座には金髪の男が座っている。

高杉と一緒にいた、クリスという男だ。

部屋の扉が開かれ、誰かが入ってきた。

「来たか」

クリスはニヤリと笑みを浮かべた。

部屋に入ってきた者は、ゆっくりと歩きながらクリスに近づいた。

クリスの前で立ち止まる。

「何か用か、クリス？」

ソイツはクリスに尋ねた。

「実は数日後に、ホテル・アグスタで骨董オーディションが行われる」

「それが、どうかしたのか？」

ソイツはクリスの意図がわからず、頭をぽりぽりと掻いた。

「機動六課がそのホテルの警備をするらしい。少し連中の相手をしてくれないか？」

どうやら機動六課の実力を確かめるのが目的らしい。

説明を聞いたソイツは、しばらく考えた。

そこでクリスは、ダメ押しの一言を言った。

「もしかしたら、『白夜叉』と戦えるかもしれないぞ」

白夜叉と言う言葉に、ソイツは反応した。

口元が不気味に歪んだ。

「いいぜ。行ってやる」

上機嫌となり、了承した。

クリスも満足そうな笑みを浮かべた。

白夜叉。

クリスは高杉から、何度か話は聞いていた。

天人との戦で鬼神の如き強さを誇り、こちらの世界では魔導生物兵器・ゾーマを倒した。

「白夜叉。君の実力を実際に、この目で確かめさせてもらおう」

クリスは不敵な笑みを浮かべる。

緑色の火が、クリスの顔を不気味に照らした。

第三訓：甘い誘惑に負けない強い意志を持って（後書き）

ついに闇が動き出す！

銀時との戦いを望む者の正体は！？

月詠「次回、リリカル銀魂。『ツッコミはなかなか高度な技術』。
テイクオフ！」

第四訓：ツッコミはなかなか高度な技術（前書き）

ホテル・アグスタの警備を任された機動六課

そしてツッコミ役は誰に？

銀時「そんじゃ、『リリカル銀魂 S t r i k e r s 』。始まるぜ
」！」

第四訓：ツッコミはなかなか高度な技術

銀時達はヘリに乗って、ホテル・アグスタに向かっていた。

そこで行われる骨董オークションに出る、取引出品許可されているロストログアをレリックと間違えてガジェットが現れる可能性がある。機動六課が警備に呼ばれたのだ。

現場には昨夜から、シグナムとヴィータが既に警備している。

なのは、フェイト、はやて、ついでに銀時は、建物の中の警備をする。

最初は嫌がった銀時だが、ビッグサンダーチョコレートパフェ三つという条件で引き受けた。

そして只今ヘリの中では、

「機動六課ツッコミ育成計画〜！」

なんて事が始まっていた。

銀時の隣に座ってる沖田と月詠が、パチパチと小さな拍手をしている。

「ツ…ツッコミ育成計画…？」

スバル達フワードメンバーは戸惑った。

今回の警備に対する話し合いがされると思ったら、全然関係ない”

ツッコミ”の話だった。

「あの…これは一体どういう事なんですか？」

キャラが当然の質問をした。

すると銀時はこう答えた。

「今回、江戸一番のツッコミ使い志村新八が不在だから、お前らにツッコミ役をやってもらう」

「何で私達が、ツッコミなんかしなきゃいけないんですか!？」

ティアナが銀時に叫んだ。

「ツッコミがなきゃ、ギャグが成立しねーからだ」

冷静に銀時は答えた。

そして、ここから銀時によるツッコミ講座みたいなものが始まった。
「さつきも言ったが、ギャグはボケだけではなく、ツッコミもあって初めて成立する。ただし、ただツッコめばいいと言う訳じゃねエ」
真顔で銀時は説明する。

諦めたスバル達は、黙って銀時の説明を聞いている。

同乗している、なのは達やシャマル、アルフは苦笑し、獣姿のザフィーラはため息をついている。

「『ツッコミ』というのは『ボケ』のおかしな点をわかりやすく教える役目を担っている。だから丁寧過ぎるツッコミは冷めるし、逆に適當過ぎても冷めます」

右手の人差し指を立て、どっかの講師のように教える。

「つまり…ただ説明すればいいって訳じゃないんですね？」
手を挙げながら、スバルが発言した。

「その通りだ。スバル一等兵」
早速銀時がボケた。

「あの…私、二等陸士なんですけど…」
やんわりとスバルはツッコんだ。

「まあ最初そんな感じでいいだろう。これからは、もっと勢いよくツッコむように」

「は…はい！」

反射的にスバルは返事をした。

「そっぴや旦那。まだ俺達の中でのリーダーを決めてませんぜ」
沖田が言った。

「そっぴや旦那。じゃあまず、リーダーを決める方法を考えるリーダーを決めよう」

と、銀時。

「いや待て。それならまず、リーダーを決める方法を考えるリーダーを決めるリーダーを考え…」

と月詠が言いかけた時、

「いつまで経っても終わらないわよ！このままじゃ全員リーダーじ

やない!!」

ティアナが、額に血管を浮かべてツッコんだ。

「よし!その調子だ、もつとツッコめ!」

「その勢いだティアナ。お前なら、もつとツッコめるはずだティアナ」

銀時と沖田が言った。

どうやら三人は、ティアナ達にツッコミをやらせるために、ワザとボケたらしい。

「黙れボケ共!!」

ティアナは怒鳴った。

危うくクロスミラージュを撃つトコだった。

「あの…シヤマル先生。その荷物は何ですか?」

キヤロは、シヤマルの隣に置いてある四つのカバンを指差した。

「ああ、これ?隊長達と銀さんのお仕事着」

ニッコリ笑いながら、シヤマルは答えた。

キヤロ達は首を傾げた。

ついでに銀時も、意味がわからず首を傾げた。

*

ホテル・アグスタ。

到着したスバル達は警備を始めた。

オークションが行われる会場の入口では、チケットを受付の男に見せて次々と人が入っていく。

一人の女性がチケットではなく、機動六課の身分証を見せた。

「あっ!」

身分証を見た受付の男は驚いた。

「こんにちは。機動六課です」

はやて、フェイト、なのはが綺麗なドレス姿で受付前に立っている。その三人の後ろには、

「何で俺まで、こんな恰好なんだ？」

スーツ姿の銀時が愚痴っていた。

普段の白い着物を脱ぎ、黒いスーツを着ている。

「よく似合ってるよ、銀時」

フェイトはニコツと微笑んだ。

「二人ともお揃いやな」

銀時とフェイトを見ながら、はやてが言った。

フェイトのドレスの色は、銀時の着てるスーツの色と同じ黒である。

「も、もう、はやて！」

フェイトは頬を赤くした。

「どう、銀さん？フェイトちゃんのドレス姿は？」

なのはが銀時に尋ねた。

銀時はドレス姿のフェイトを見つめた。色っぽい黒のドレス。大人になったフェイトの魅力をさらに上げている。

銀時に見つめられ、フェイトの顔がみるみる赤くなっていく。

「よく似合ってるじゃん。綺麗だよ」

銀時は見た感想を言った。

「…ありがとう」

フェイトは嬉しそうに微笑んだ。

四人は、危うく任務中である事を忘れそうになった。

*

ティアナは、ホテルの周辺を警備していた。

すると、ホテル内にいるスバルから念話があった。

（今日は、八神部隊長と守護騎士団全員集合かあ）

（そうね。あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長の事…）

周辺を確認しながら、スバルに聞いた。

（うん。お父さんやギン姉から聞いたことぐらいだけど……。八神

部隊長が使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が夜天の書。副隊長達とシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力。で、それにリインフォース部隊長補佐とリインさんを合わせて七人揃えば、無敵の戦力って事。まあこんな所かな)

(ティア、何か気になるの?)

(別に)

(そ。じゃ、また後でね)

スバルとの念話は終わった。

ティアナは一人考え込んだ。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。隊長格全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク。

他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。あの年で、もうBランクを取ってるエリオと、レアで竜召喚士のキヤロ。

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップのあるスバル。

そして魔法は使えないけど、優れた身体能力だけでオーバーSランクを超える強さを誇ったゾーマを倒した坂田銀時。

坂田銀時に勝るとも劣らない戦闘能力を誇る、沖田総悟と月詠。やっぱり…うちの部隊で凡人は私だけか……。

ティアナは静かに目を閉じる。でも、そんなの関係ない。

しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

私は、立ち止まるワケにはいかないんだ。

ティアナが改めて決意した時、

「す〜す〜」

小さな寝息が聞こえてきた。

ティアナは、寝息が聞こえてくる方へ向かった。

見ると、人をおちよくったようなアイマスクを付けて寝ている沖田

がいた。

ティアナはため息をついた。

「沖田さん、警備中ですよ。起きてください」

肩を揺すつて、沖田を起こそうとする。

沖田はアイマスクを外し、眠そうな目をティアナに向ける。

「なんだよ母ちゃん。今日は日曜だぜい。つたく、おっちょこちよいなんだから」

「今日は日曜じゃないし、私はお母さんじゃありません!!」

大きな声で、ティアナはツツコんだ。

新八の代わりのツツコミ役は、ティアナでほぼ決まりそうだ。

「仕事なめてるんですか？ガジェットが攻めてきたら、どうするんですか？」

「俺がいつ仕事なめた？」

急に沖田は目を鋭くした。

思わずティアナは、小さく体を震わせた。

「俺がなめてんのは、土方さんだけでさ」

「それ貴方の上司でしょ!!」

*

ホテルを囲む森。

森の中を走る集団があった。

ホテルへ向かって、真っ直ぐに森の中を移動してるのは、ガジェットの集団だった。

屋上で警備をしているシャマルのクラールヴィントが反応した。

「シャーリー！」

シャマルが叫んだ。

「はい！」

管制室にいるロングアーチのメンバーのシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーが返事をした。

管制室でも、ホテルに接近しているガジェットを感知した。

ティアナがシャマルの近くまで駆け上がった。

「シャマル先生！私も状況を見たいんです。前線のモニターももらえませんか？」

「了解。クロスミラーージュに直結するわ」

シャマルはモニターを回した。

モニターをもらったティアナは、沖田の所に戻った。しばらくしてスバルがやってきた。

すると沖田が、ガジェットがいる方へ向かって走り出した。

「ちよっ…沖田さん!？」

「向こうの方が面白そうだから、行ってきやーす」

沖田は森の中に入っていった。

ヴィータ、シグナム、ザフィーラの三人が迎撃に向かう。あと勝手に動いてる沖田も。

「私が大型を潰す。お前は細かいのを叩いてくれ」

「おおよ！」

シグナムは地上に降りて、大型と対峙する。

「行くぞアイゼン！」

空中にいるヴィータは、八個の鉄球を出した。

「まとめて、ぶち抜けエエエー！」

グラーファイゼンを振り、八個の鉄球を打ち放った。

全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。

「レヴァンティン！」

カートリッジロードをし、炎が刀身を包む。

「紫電一閃!!!」

レヴァンティンを上段から振り下ろし、大型ガジェットを破壊した。

「ここは通さん!!!」

ザフィーラの声の後に、地面から光の柱が現れ、ガジェット達を貫

いた。

森の中を進んでいた沖田の前にも、ガジェットの大群が現れた。

「おいでなすった」

ゆっくりと鞘から刀を抜いた。

ガジェット達が光線を放つ。沖田は軽くかわして、目の前のガジェットを縦に斬った。続けて周りにいるガジェットを次々と斬り捨てていく。

*

スバルとティアナは、モニターで戦いの様子を見ている。

「副隊長達とザフィーラ、それに沖田さんスゴイ！」

スバルは驚きの声を上げた。

「これで、能力リミッター付き……沖田さんも、まだまだ本気じゃない……」

ティアナは自然と強く拳を握った。

焦りと苛立ちが生まれる。

「連中は連中。ティアナはティアナじゃ」

突然、後ろから声が聞こえた。

煙管をくわえた月詠がいた。

「気にする事などありません」

優しくティアナにそう言った。

「あ……」

月詠の言葉で、ティアナの中の焦りと苛立ちが少し和らいだ。

「わっちらは守りの要じゃ。気を引き締めるぞ」

「はい！」

月詠の言葉に、ティアナとスバルは力強く応えた。

*

中にいる銀時はトイレにいた。用を足し終えて、手を洗っている。ガジェットが来たみてーだが…あいつら大丈夫かなんやかんやで、スバル達の心配をしてる銀時。

「まあ月詠や沖田がいれば、大丈夫だろ」

手を拭いて、トイレから出ようとした。

その時、トイレに入ってきた人と肩がぶつかった。

「おつと悪い」

「いえ、こちらこそ…」

二人は互いに顔を見た。

すると銀時にぶつかった男は目を見開いた。

「ぎ…銀さん!？」

男は銀時の名を叫んだ。

「…どこかで会ったか？」

銀時は首を傾げた。

「僕ですよ！ユーノ！ユーノ・スクライアです！」

自分を指差しながら、男は名乗った。

名前を聞いて銀時は思い出した。

「ユーノ!? えっ? マジでユーノ!？」

思い出した銀時は驚いた。

ユーノは長い髪を後ろに束ねていて、少し面影が残っている。

「マジでビックリしたぜ。え? お前、今何やってんの?」

「今は考古学者で、無限書庫の司書長をしています」

「お前も偉くなったな」

10年でみんな見間違える程に変わったな。変わってねーのは俺だけか。

何か先を越されたと言うか、置いてかれたみたいで、銀時は軽く落ち込んだ。

*

「な…これは!?!」

管制室にいるシャーリーが、異変を察知した。

「別の方向から、複数の魔力反応がホテルへ接近しています!」
シャーリーがシャルマル達に伝えた。

「ヴィータ。お前は新人達の所へ向かえ。向こうには月詠もいるが、念のためだ」

「わ、わかった!」

シグナムに言われ、ヴィータはホテルへ向かった。

ホテルの前では、スバル達がデバイスを構えて待機していた。

「来る」

魔力を感じたスバル達は構える。

月詠もクナイを握る。

そして、五人の前にソレは現れた。

複数の直径五十センチくらいの黒い球体が、宙に浮いている。

「何あれ?」

スバルが呟いた。

黒い球体は、翼の生えた人型の化物に変形した。大きさは二メートルくらいで、鋭い爪を持っている。

「まさか…召喚獣!?!」

「いえ、違います!」

スバルの言葉をキヤロが否定した。

「何でもいいわ。迎撃いくわよ!」

「おお!」

ティアナの言葉にスバル達が応えた。

ティアナは、怪物達にクロスミラーージュを向ける。

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいっただってやってきた。

「ギャゴオオオオ!」

叫びながら、怪物達がティアナ達に襲い掛かった。

クロスミラーージュを構え、怪物に向かって撃つ。怪物は魔力弾をか

わし、口から緑色の液体をティアナに向かって吐き出した。
「ちっ！」

ティアナは舌打ちしながら、後ろに跳んで液体をかわした。液体は地面にかかり、ジューと音を立てて地面を溶かした。

「溶解液!？」

ティアナは再びクロスミラージュを構え、魔力弾を撃った。

怪物は腕で急所を防御する。

月詠が怪物達に向かって走る。腰にある小刀を抜き、怪物に向かって振りぬいた。

怪物達の腕が地面に落ちた。すかさずクナイを怪物の頭目掛けて放った。クナイは怪物達の頭に突き刺さり、怪物達は倒れ、溶けてなくなった。

(防衛ライン!もう少し持ちこたえてね!ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから!)

シヤマルが念話で、スバル達に伝えた。

ティアナの表情が険しくなる。

「守ってばっかじゃ息詰まります!ちゃんと全部倒します!」

(ちよつと…ティアナ大丈夫?無茶はしないで!)

「大丈夫です!毎日朝晩、練習してきてんですから!」

そう言いながら、クロスミラージュを構える。

月詠はティアナの顔を見た。何か焦っているような顔に見えた。

ティアナは、エリオとキャロに顔を向けた。

「エリオ、センターに下がって!私とスバルのツートップでいく!」

「は、はい!」

言われた通り、エリオ達は下がった。

「スバル!クロスシフトA、いくわよ!」

「おお!」

スバルはウイングロードを使って、怪物達の注意を引き付ける。

その際にティアナは、カートリッジを四発もロードした。

証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくなつて…どんなに危険

な戦いだって。

ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。

「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」
クロスミラーージュを構える。

「クロスファイヤー」

スバルは、怪物達の攻撃を避け続ける。

「シユート！！」

オレンジ色の魔力弾が、一斉に怪物達に迫る。
次々と怪物達に魔力弾が当たり、倒していく。
だが、魔力弾が一発反れて、スバルに迫る。

「いかん！スバル！！」

月詠が叫びながら走り出す。

「えっ！？」

スバルが振り返るが、今からでは避けられない。

月詠も間に合わない。

魔力弾がスバルに当たるかと思われた時、赤い人影が現れ、持っているハンマーで魔力弾を弾いた。

「ヴィータ副隊長！？」

突然現れたヴィータに、スバルは驚いてる。

「ヴィータ。助かった」

月詠が礼を言った。

「気にすんな。礼なんていらねーよ」

「そうか。すまぬ。わっちがついていながら」

「お前が謝ることじゃねエよ」

月詠にそう言った後、ヴィータはティアナを睨んだ。

「ティアナ！この馬鹿！！無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！」

怒鳴られたティアナは、魔法陣を展開させたまま啞然としている。

「あの…ヴィータ副隊長。今のも、その…コンビネーションの内で……」

「直撃コースを走るのが、コンビネーションなのか？」

ティアナをフォローしようとするスバルに、月詠は静かに聞いた。

「違うんです！今のは私がいけないんです！」

「うるせエ、馬鹿ども！！」

ヴィータが怒鳴った。

「もういい…後はアタシと月詠がやる！二人まとめてすっこんでろ！！」

怒鳴られた二人は、啞然とした。

その時、突然上空から何かが落下し、地面に激突した。

「な…何だ！？」

辺りに砂埃が立ち込めた。

月詠や、周りの者に怪我はない。

砂埃がなくなってきた、落下してきたモノが見えてきた。

ソレを見た瞬間、空気が重くなった。

「な…！？」

ヴィータは我が目を疑った。

「ひい…！！」

スバルは短い悲鳴をもらした。

月詠ですら冷汗を流している。

「あ…ああ…！！」

ティアナは顔を青ざめ、体が震えている。

エリオとキャロは、言葉も発せず震えていた。

ソレから放たれる、強大で禍々しい魔力とプレッシャー。

スバル達は、今まで味わった事がない『恐怖』と対面した。

「…何で…」

だが、ヴィータはソレを知っている。

「何でお前が…」

信じられないといった顔で、ソレを睨みつける。

人型で二メートルを超える巨体。黒く鋼のような強靱な肉体。血の

ように赤い二つの目。額から生えている一本の角。

「何でお前がいるんだ、ゾーマアアアア!!!」

ヴィータがありつたけの声で叫んだ。

黒い化物・ゾーマは空に顔を向け、

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

戦慄の雄叫びを上げた。

魔導生物兵器『ゾーマ』、再襲。

第四訓：ツッコミはなかなか高度な技術（後書き）

悪夢再び！

ウィータ達の運命は！？

沖田「ゾーマを知らねエ人は、『魔法少女と銀髪の侍』の第二章を読んでください。次回、リリカル銀魂 Strikers。『悪夢はなかなか終わらない』。テイクオ〜フ」

第五訓：悪夢はなかなか終わらない（前書き）

戦慄の雄叫びを上げるゾーマ！

銀時が倒したはずのゾーマが何故！？

ヴィータ「リリカル銀魂 Strikers」。始まるぜ！」

第五訓：悪夢はなかなか終わらない

ウイングロードの上で、スバルは体を震わせながらゾーマを見ていた。

ヴィータ副隊長は、アレに向かって『ゾーマ』と叫んだ。

という事は、アレが世界を滅ぼす力を持つ、魔導生物兵器ゾーマ。大量の冷汗を流す。

足が震えて立っているのもやっつとだ。たまに呼吸する事を忘れそうになる。

ゾーマは禍々しい魔力を放ちながら、ジッと立っている。

こ…こんなのと……戦えるの!?

ヴィータと月詠を見る。

二人とも、武器を構えたままゾーマを睨んでいた。

ゾーマの魔力とプレッシャーに圧されないよう、必死に耐えている。

ヴィータは、ワケがわからなかった。

ゾーマは十年前に銀時が倒したはずだ。

アタシもこの目で見た。

なのにコイツは此処に…アタシ達の目の前にいる。

ヴィータはスバル達を見た。

コイツの事を考えるのは後だ。今はスバル達を逃がするのが先決だ。

「逃げる！お前らの敵う相手じゃねエエ！！」

スバル達に向かって、ヴィータが叫んだ。

ヴィータの声を聞いたスバル達は、ビクツと体を大きく震わせて反応した。

「は…はい！」

スバルが応えた直後、

「ゴオオオオオオオオオオオオ！！！」

再びゾーマが吠えた。

ゾーマの声に怯え、スバル達は固まってしまった。足がすくんで動

スバルが叫ぶ。

必死にすくんだ足を動かそうとする。

ゾーマの口から、閃光が発射されるかと思われた時、

「おらアアアアア!!」

ヴィータがグラーファイゼンを下から振り上げ、ゾーマの顎を打った。

顎を打たれ、ゾーマの顔は上を向き、空へ向けて口から黒い閃光が放たれた。

閃光が放たれた後、ゾーマの視界に両手にクナイを構えた月詠が現れた。

「『死神太夫』月詠でありんす。以後よしなに!!」

ゾーマの顔目掛け、一斉にクナイが放たれた。

クナイはゾーマの両目、開いた口の中に刺さった。

「ゴオオオオオオ!!」

攻撃を受けたゾーマは叫んだ。

「ぬしの気迫は大したものだが、鳳仙には劣る!!」

ゾーマの前に立ち、再びクナイを放つ。

放たれたクナイは、ゾーマの体中に刺さる。

「ゴオオオオオオ!!」

体中に力を入れ、刺さったクナイを抜き飛ばした。

並外れた再生能力で、損傷した両目と口の中が治る。

「いくぞヴィータ!!」

「おおっ!!」

月詠とヴィータがゾーマに突っ込む。

「ゴオオオオオオ!!」

咆哮を上げながら、ゾーマは迎え撃つ。

「ティア!大丈夫!?!」

なんとか動けるようになったスバルが、ティアナに駆け寄った。

「ス…スバル…？」

いくらか落ち着いたティアナは、スバルに気がついた。

「二人とも大丈夫ですか!？」

エリオとキャラロが二人に駆け寄った。

「え…ええ」

ティアナは頷いて答えた。

四人は戦いの様子を見た。月詠とヴィータが、怯まず巨体のゾーマに挑んでいる。

「凄い…！」

「近くにいただけで、押し潰されそうな魔力とプレッシャーなのに…」

エリオとキャラロは、驚きの表情を浮かべている。

スバルとティアナも戦いの様子を見ている。

月詠とヴィータの戦ってる姿を見て、二人の奮えはいつの間にか止まっていた。

「うおおおおお!!」

ヴィータがグラーファイゼンを振り下ろす。

ゾーマが左手を伸ばした。グラーファイゼンを『受け止める』のではなく、弾いて『受け流した』。

「えっ!？」

ヴィータは驚いた。

月詠がクナイを放つ。

ゾーマは右手をクナイの方へかざし、障壁を展開して防いだ。クナイを防いだ直後、月詠の前に巨大な黒い壁を出した。

視界を奪われ、一瞬月詠は動揺した。背後から気配と殺気を感じ、横に跳んだ。

直後、月詠の横を何かが掠め、地面を砕いた。

月詠の横を掠めたのは、ゾーマの拳だった。壁で視界を奪った直後、

月詠の後ろに回り込んでいたのだ。

ヴィータは、ゾーマの戦いに違和感を感じた。
おかしい。ゾーマの戦い方が昔と違う。

ヴィータが考え込んでいると、ゾーマが拳を振るってきた。

「ヴィータ！！」

「！！」

月詠の叫びで、ヴィータは拳に気付いた。

だが、今からでは避けられないし、障壁を張る暇もない。

ヴィータが諦めた時、

「デイベイン・バスター！！」

左側から青い閃光が放たれ、ヴィータに迫るゾーマの拳を弾いた。

ヴィータは、左側を見た。

そこには、右拳を突き出しているスバルがいた。

「スバル！！？」

ヴィータは驚きの声を上げた。

直後、ティアナがクロスミラージュを構え、ゾーマへ向かって魔力弾を放った。全弾、ゾーマの顔面に命中した。

「錬鉄召喚！！」

キヤロがピンク色の魔法陣を展開し、鎖を召喚した。

鎖はゾーマの体を拘束した。

「いくぞストラダー！！」

エリオのストラダーの出力が最大になり、ゾーマに向かって突っ込む。

ストラダーは、ゾーマの腹に直撃した。

一連の攻撃が終わり、フォワードの四人はヴィータと月詠の所に集まった。

「お前ら……！アタシは逃げろって言ったんだぞ……！」

ヴィータは、勝手な行動をしたフォワード達に怒鳴った。

「すみません、ヴィータ副隊長！でも私達、ヴィータ副隊長と月詠さんを見捨てるなんて出来ません……！」

スバルが謝りながら、自分達の想いを言った。

「ヴィータ副隊長！さつきはすみませんでした！もうあんな失敗は
しません！だから一緒に戦わせてください！！」

失敗を謝りながら、ティアナが懇願した。

「命令違反の罰は、後でちゃんと受けます！」

エリオが言った。

「お願いします！足手まといにはなりません！！」

キヤロも退く気はない。

「お前ら……」

ヴィータは四人の眼を見た。

全員の眼には、強い決意と覚悟が宿っていた。先程まで震えていた
のが、嘘のようだ。

「こうなつては、止められんな」

月詠がため息をついた。

ヴィータも諦めたようにため息をついた。

「…仕方ねエ。今回は特別だぞ」

「ありがとうございます！！」

四人は揃って礼を言った。

「おい」

ヴィータ達に声がかけられた。

声の主はゾーマだ。

「話は済んだか？」

ニヤリと笑った。

スバル達の攻撃を受けて、ダメージは殆どない。

「いいか、お前ら。一瞬でも氣イ抜くんじゃねーぞ。アタシ達の力
を百パーセント発揮して、初めてアイツと『戦い』になる……」

険しい表情でヴィータが言った。

月詠とフォワード達は、武器を構えて気を引き締める。

ヴィータは更に表情を険しくした。

「…『昔のままのゾーマ』ならな……」

*

ホテル内。

銀時とユーノは、トイレから出た後も話をしていた。

「そっぴゃ、お前まだフェレットになれんの？」

「はい。なれますけど？」

ユーノは首を傾げながら答えた。

「フェレット姿で、まだ女湯覗いてたりすんのか？」

ニヤニヤ笑いながら、銀時は聞いた。

「だから！それは誤解ですってば！」

ユーノが必死に弁解する。

「銀時！」

そこへフェイト達がやってきた。

銀時はフェイト達を見た。

何だか様子がおかしい。外で何かあったか？

「銀ちゃん！さっきヴィータから連絡があったんや！」

「何て？」

三人の慌てように、銀時も真剣な表情になる。

フェイトが険しい表情で言った。

「…『ゾーマ』が現れたの」

「…！！」

聞いた瞬間、銀時は驚愕の表情に変わる。

隣にいるユーノも目を見開き、驚愕している。

「今、ヴィータちゃんと月詠さん、フォワードの四人が交戦してるわ」

「…本当にゾーマなのか？」

銀時が尋ねた。

「ええ」

フェイトが頷いた。

「そんな…ゾーマは銀さんが倒したはずじゃ…!!」
ユーノが叫んだ。

「ユーノ君!？」

そこでなのは達は、初めてユーノに気付いた。

「お前らは中の警備続けてろ!」

銀時は走り出した。

「待つて銀さん!僕も行く!」

「死んでも知らねーぞ!」

ユーノも外に向かう事になった。

「銀時!!」

フェイトが呼び止めた。

銀時は振り返って、フェイトを見た。

「気をつけて!」

「ああ」

銀時は走り出した。

「ユーノ君も気をつけてね!」

「ありがとう、なのは!」

ユーノも走り出した。

フェイト達は、走っていく二人の背中を見つめた。

フェイトは銀時の無事を祈った。

*

銀時とユーノは、ホテルの出入口に着いた。ドアを開けて、外に出る。

ホテルの前にヴィータ達の姿はなく、地面が抉れ、木が何本も折れていた。戦いの跡だけが残っていた。

「ホテルに被害が出ないように、場所を変えたんだ」
ユーノが言った。

「銀時!」

狼形態のアルフがやってきた。口に銀時の木刀をくわえている。

「アルフ！」

「ユーノ！？何でアンタが！？」

ユーノを見て、アルフは驚いた。

「オークションに呼ばれてね」

「そうかい。後で話でもしようよ！」

「ああ」

そこで挨拶を終わりにした。

アルフは銀時に顔を向けた。木刀を銀時に渡した。

「話はフェイトから聞いている。二人ともあたしの背中に乗りな！」

二人はアルフの背中に乗った。

「久しぶりに頼むぜ、アルフ！」

「はいよ！しっかり捕まってな！」

二人を乗せて、アルフは走り出した。

*

ホテルから離れた森の中。

ゾーマの周りに、大量のウイングロードが張り巡らされていた。

その上には、マツハキヤリバーで走るスバルと月詠がいた。

「ゴオオオオオオ！！！」

ゾーマは口や手から黒い閃光を放つ。

スバルと月詠は素早く動いて閃光をかわす。

「なかなか当たらねーな」

ゾーマは慌てた様子もなく、落ち着いて二人を見ている。

「錬鉄召喚！」

キャロが鎖を召喚して、両腕を縛ってゾーマの動きを止める。

ティアナが魔力弾を撃つ。全弾直撃するが、ダメージはない。

「ストラーダ！！！」

エリオがストラーダの突きを放つ。

ゾーマは鎖をちぎり、ちぎった鎖をストラダに巻きつけ、キヤロ達に向かって放り投げた。

「ぶっ潰せ！アイゼン！！」

上からヴィータが、グラーフアイゼンを振り下ろす。

ゾーマは横に動いて、グラーフアイゼンをかわす。

ウイングロードでスバルはゾーマの背後に回り、リボルバーナックルを振るう。

だが拳は、ゾーマが張った障壁に防がれてしまう。

「後ろを見ないで障壁を！？」

スバルは驚きながら下がった。

ゾーマは後ろを振り返った。

すると、そこには沢山のスバルと月詠とティアナがいた。ティアナが幻術で生み出した幻である。

「何だこりゃ？」

ゾーマは首を傾げた。

ティアナが作った沢山の幻は、ゾーマを取り囲んだ。中には、本物も混じっている。

沢山の月詠とティアナが、一斉にクナイと魔力弾を放つ。

「小細工じゃ俺は倒せないぜ！」

ゾーマはニヤリと笑い、

「バアツ！！」

ゾーマの体中から、無数の棘が突き出た。

棘は幻の攻撃を掻き消し、幻に混じってる本物の攻撃を弾いた。棘はどんどん伸びて、全ての幻を貫いて消した。

本物の月詠とスバル、ティアナは、掠りながらも棘を避けた。

「あいつ…全身が武器！？」

ティアナが悔しそうに顔を歪めた。

「ただ魔力が強いただけじゃない…技もある」

月詠がクナイを構える。

「隙もありません」

スバルも表情を険しくする。

「月詠さん！スバルさん！ティアさん！大丈夫ですか？」
心配してキャラロが叫んだ。

「心配いらん。大した傷ではない」

「大丈夫だよ！」

「これくらい平気よ！」

三人は、キャラロを安心させるように答えた。

「エリオ君も大丈夫？」

「うん。大丈夫だ！」

キャラロに答えながら、エリオはストラードを構えた。

ヴィータはグラーファイゼンを構えたまま、ジツとゾーマを睨んでる。

やっぱりおかしい。ゾーマの戦い方が、明らかに昔と違う。

昔のゾーマは、ただ力任せに魔力を使っていた。

けど今のゾーマは、周りを見て、戦い方が前より頭脳的になってる。それにあいつの一人称が『我』から『俺』に変わってる。

ヴィータは一人、昔のゾーマとの違いに考え込んでいた。

ゾーマは、ぽりぽりと頭を掻いている。

「つまんねーな」

「え？」

ゾーマの一言に、ヴィータ達は顔をしかめた。

「その黒い女とハンマーの小娘はそれなりに強えが、他の奴らは弱くてつまんねーって言ってた」

スバル達に向かって、ゾーマはハッキリと言った。

スバル達は悔しさで歯を食いしばった。

だが、次にゾーマは意外な言葉を言った。

「だが、弱いつて事は別に悪い事じゃねーぜ」

「えっ!？」

ゾーマの意外な言葉に、スバル達は驚いた。

「弱いつて事は、まだまだ強くなる余地があるって事だ。せいぜい

強くなるよう頑張りな」

笑いながらゾーマが言った。

スバル達は、ゾーマの言葉を聞いて呆然となる。まさか、こんな事を言われるとは思わなかった。

そしてゾーマの言葉に一番驚いているのは、ヴィータだった。

アタシの記憶が正しければ、ゾーマは人間を見下していた。絶対に今みたいな言葉を言うようなヤツじゃない。

やっぱりコイツは、昔とは違う。

強さも中身も。

「だがやっぱり…つまんねー事には変わんねエな」

ゾーマは、ヴィータに顔を向けた。

「坂田銀時はいねえのか？」

ヴィータに尋ねた。

ゾーマの狙いは銀時か？

「銀時はいねエ。お前なんかアタシ達で充分だ！」

ヴィータは、目を鋭くしてゾーマを睨む。

ゾーマは再びぼりぼりと頭を掻いた。

「…悪いが、お前らじゃ役不足だ」

そう言うとゾーマは、口を大きく開き、黒い魔力を溜め始めた。

しかも溜めてる魔力の量が尋常じゃない。

ヴィータの脳裏に、ゾーマの魔砲が蘇った。

直径十キロの威力を誇る、ゾーマ最大の攻撃魔砲。

「コイツで無理矢理にでも出させてやる」

どんどん魔力が溜まっていく。

しかも方角はホテル・アグスタ。

「やめるー!!」

ヴィータが魔砲を止めようと走り出す。

その時、ヴィータの横を影が通り過ぎた。

影は真っ直ぐにゾーマへ向かい、木刀を振り上げてゾーマの顎を叩き上げた。ゾーマは顔を上に向け、空に向かって魔砲が放たれた。

黒い魔砲は空で大爆発を起こした。

ヴィータ達は、突然現れた人物を見た。

オレンジ色の狼の背中に乗って、木刀を持つ銀髪の男。

「銀時！！」

月詠とヴィータが同時に叫んだ。

「なんとか間に合ったか」

ヴィータ達の後ろから、声が聞こえた。

後ろを振り返ると、ユーノがいた。

「お前、ユーノか！？」

ヴィータが驚きの声を上げた。

「ああ。久しぶり」

久しぶりに会ったヴィータに挨拶した。

アルフの背中に乗ったまま、銀時はゾーマと対峙していた。

「よオ」

銀時は鋭い目でゾーマを見上げた。

「またテメーのツラア、拝む事になるとは思わなかったぜ」

ゾーマは顔を下げて、銀時を見た。

「来たな。坂田銀時」

銀時を見て、ゾーマは口元を歪めた。

第五訓：悪夢はなかなか終わらない（後書き）

ヴィータ達のピンチに合った銀時！

次回、ゾーマとの因縁の対決が始まる！

なのは「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『悪党は高みの見物が好き』。テイクオフ」

第六訓：悪党は高みの見物が好き（前書き）

銀時 対 ゾーマ

激戦が蘇る！

沖田「『リリカル銀魂 Strikers』。始まりませ

第六訓：悪党は高みの見物が好き

月詠やヴィータ、スバル達が見守っている中、銀時はゾーマと対峙していた。

「アルフ。下がってる」

銀時はゾーマから目を離さず、アルフの背中から降りながら言った。アルフは無言で頷き、後ろに下がった。

「気をつける、銀時！ソイツ、昔のゾーマじゃねエエー！」

ヴィータが大声で銀時に伝えた。

銀時は片眉を上げた。

「やっと会えたぜ」

ゾーマは不敵な笑みを浮かべた。その顔は、どこか嬉しそうにも見える。

拳に、体に力を入れる。ゾーマの魔力が上がる。

「ま…まだ魔力が上がって…！？」

スバル達は、ゾーマの魔力に驚愕した。

「坂田銀時イイイ！」

魔力を纏った右拳を銀時に向かって振り下ろす。

銀時は右に動いて、拳を避けた。ゾーマは銀時に顔を向け、口から黒い閃光を放った。

銀時は体勢を低くして黒い閃光をかわし、そのままゾーマへ向かって走る。横薙ぎに木刀を振るい、ゾーマの脇腹に直撃する。

ゾーマは右腕を上げ、黒い大剣に変えた。黒い大剣となった右腕を

銀時目掛けて振り下ろす。

銀時は横に跳んで大剣を避ける。

ゾーマは大剣で地面を抉り、破片を銀時に向かって飛ばした。

木刀を振るって、飛んでくる破片を打ち落とす。危険を察して上を見ると、二十本の黒い槍のような物が宙に浮いていた。

「バアッ！！」

ゾーマの声を合図に、黒い槍が一斉に銀時に襲い掛かる。

銀時は木刀を振るって、槍の雨を弾く。その隙にゾーマは、走って銀時に迫る。黒い大剣を銀時に向かって振るう。

ゾーマの接近に気付いた銀時も木刀を振るい、二本の剣は激しい音を立て、火花を散らせて激突した。

「きゃああっ!!」

剣がぶつかり合って出来た衝撃が、離れて見守っているスバル達の所まで届いた。

銀時とゾーマの動きが止まる。

徐々にゾーマの大剣にヒビが広がり、刀身が折れた。

銀時の右頬に、小さなかすり傷が出来る。

スバル達は、銀時とゾーマの戦いを見て呆然とした。

「ゴオオオオオオ!!」

ゾーマが咆哮を上げ、体から黒い魔力が放たれた。

黒い魔力は、広い黒いドームとなり、銀時とゾーマを中に閉じ込めた。

「な…何よコレ!? 結界!? 広域魔法!?!」

突然現れた黒いドームに、ティアナは驚いた。

*

黒いドーム内。

銀時は、『上から降り懸かる力』に圧されながらも、なんとか立っていた。

ちっ。またこの空間か。

険しい表情で空間内を睨んだ。

ゾーマは銀時から距離を離し、自分の周囲に複数の黒い魔力弾を出した。

「バアッ!!」

全ての魔力弾が、一斉に銀時に襲い掛かる。

銀時は木刀を振るって、魔力弾を弾く。だが、空間内では動きが鈍く、左腕に一発、右足に一発と食らってしまった。

「ゴオオオオオオオ！」

右腕を狼のような顔に変え、銀時に向かって腕を伸ばした。

大きく口を開き、鋭い牙が襲い掛かる。

銀時は横に跳んで、牙を避けた。

ゾーマは腕を引いて戻した。

銀時はゾーマを睨んだ。

野郎……前の戦いじゃ接近してきたが、今回は距離を離れた攻撃をしてきやがる。まあ、俺が立ってるって理由もあんだろっが……。

その前も、地面を抉って破片を利用してきやがった。

確かにヴィータが言った通り、前のゾーマとは違う。

銀時は軽く舌打ちした。

「ゴオオオオオオオオ！」

ゾーマは黒い閃光を複数放った。

何発か体に掠めながらも、銀時は閃光をかわし、閃光は地面に当たって爆発した。

間髪入れず、ゾーマは両手を蛇の形に変えて、銀時に向かって腕を伸ばした。

銀時は身構えた。

すると銀時に迫る蛇の頭が途中で分かれ、数が四本になった。四本の蛇はそれぞれ正面、右側、左側、真上と四方向から銀時に襲い掛かる。

「くっ！！」

銀時は後ろへ跳んだ。

直後、蛇が激突して地響きが起こり、銀時がいた所に砂埃が立ち込めた。

ゾーマは腕を引いて戻そうとした。

その時、ゾーマの腕に痛みが走った。

砂埃から出てきた自分の腕を見ると、銀時がゾーマの腕に木刀を刺して掴んでいた。縮んで戻っていく事を利用してゾーマに近づいていく。

「しまった!」

ゾーマは慌てて銀時を振り落とそうとする。

銀時は木刀を抜いて、自分から降りて全速力でゾーマに向かって走った。

「うおおおおお!!」

雄叫びを上げ、ゾーマの腹に木刀を突いた。

そのまま勢いを殺さず、ゾーマを後ろに押ししていく。

そして黒い空間の外へ、ゾーマを押し出して脱出した。

「銀時!!」

「銀さん!!」

ゾーマと一緒に黒いドームから出てきた銀時を見て、月詠やスバル達が叫んだ。

銀時は木刀を上段に構え、ゾーマの頭目掛けて振り下ろした。木刀がゾーマの頭に直撃し、重い打撃音が響いた。

打撃を受けたゾーマは、口から紫色の血を吐いた。

ゾーマは頭を押さえ、よろめきながら銀時から離れた。

「す…凄…!!」

銀時の姿を見て、スバルは呟いた。

いつの間にかスバルは、銀時の強さに見惚れていた。

ゾーマは顔を上げると、不気味な笑みを浮かべた。

「ハッハッハッハッ!!」

突然ゾーマは笑い出した。

銀時達は、突然笑い出したゾーマに戸惑った。

「な…何で笑って…?」

戸惑いながら、エリオは疑問を口にした。

やがてゾーマは笑いを止めた。

「強えな。俺が倒されたのも納得がいくぜ」

笑みを浮かべたままゾーマは言った。

「…テメエ、本当に『ゾーマ』か？」

グイータと同じく、銀時も目の前のゾーマに疑問を抱いた。

戦い方もそうだが、ゾーマの中身が以前と違う。

ゾーマにとって、銀時は憎むべき復讐の対象。

だが目の前のゾーマからは、怒りや憎しみ等の負の感情が感じられない。

それどころか、楽しんでいるように見える。それも以前のような『殺しや破壊』ではなく、『戦う事』を楽しんでいる。

明らかに以前のゾーマとは別人である。

「銀時……記憶はねエが、お前の強さは、俺の細胞一つ一つが覚えてるぜ」

銀時を指差しながら、ゾーマが言った。

銀時は、ゾーマの言葉に目を細めた。

記憶がない？

なら何で俺の事を知ってるんだ？誰かから聞いたのか？

すると、ゾーマはため息をついた。

「本当なら最後まで闘り合いたいが…今回はここまでだ」

残念そうにゾーマは言った。

「あんまり長くやってると、『アイツ』がつるさいからな」

「『アイツ』？」

ゾーマの言葉に、銀時はピクリと反応した。

「じゃあな、銀時。いつか本気で闘り合おうぜ」

言った後、ゾーマは顔を下に向け、黒い閃光を地面に向かって放った。

黒い閃光は地面に当たって爆発を起こし、砂埃が巻き上がってゾーマの姿を隠した。

「ゾーマアアア……！」

グイータが叫んだ。

砂埃が晴れると、ゾーマの姿はなかった。

「シャーリー!!!」

ヴィータは、管制室にいるシャーリーに声をかけた。

「ダメです！目標のスピードが速過ぎて追跡出来ません!!!」

悔しそうにシャーリーが答えた。

ヴィータは、ギリツと歯を食いしばった。

銀時は傷口を押さえながら、ジツと前を見つめた。

「銀時!!!」

「銀さん!!!」

みんなが銀時に駆け寄った。

「銀さん、大丈夫ですか!?!」

心配そうな顔で、スバルが聞いた。

「ああ」

銀時は短く答え、

「お前らも頑張ったな」

微笑みながら銀時は、スバル達に言った。

「そんな…私達なんてまだまだです…」

少し顔を俯きながら、スバルは答えた。

「…シグナム達の方も、ガジェットを倒し終えたみてエだ」

念話で報告を受けたヴィータが、みんなに伝えた。

その後、ユーノが回復魔法で、みんなの傷を癒した。

とりあえず、今回の戦いは終わった。

*

ホテル・アグスタから遠く離れた山の頂上。

そこに二人の男がいた。

クリスと高杉である。

二人とも、ホテル・アグスタの方角を見ている。

赤い眼に魔力を集中させ、クリスは銀時達の戦闘の様子を見ていた。

「どうだ、クリス。機動六課の実力は？」

煙管を口にくわえ、高杉が尋ねた。

魔力の集中を止め、クリスはため息をついた。

「ハッキリ言つて、確かめる価値もなかったよ」

呆れた口調でクリスは答えた。

「高杉。この世界の魔導師は、デバイスと呼ばれる補助道具を使って魔法を駆使している」

クリスの顔は、見下したような冷たい表情をしていた。

「デバイスというガラクタがなければ、まともな魔法が使えないという事さ。やはり人間どもは滅ぶべき存在だ」

侮蔑の感情を隠そうともせず、クリスはハッキリと言った。

クリスの言葉を聞いた高杉は、思わず笑った。

「ククク。お前に合わせるつてのが無理あるぜ」

笑った後、高杉はフーツと煙を吐いた。

「それよりも白夜叉……わかっていた事だが、彼は合格だ。あんな出来損ない共と一緒にいるべきじゃない。できれば仲間に引き入れたいよ」

さつきまでの見下した表情とは違い、嬉しそうな笑みに変わる。

「ソイツは無理だろうな」

「それでも、一応誘ってみるさ」

すると、空から巨体が降ってきた。地面に激突し、砂埃が舞い上がった。

クリスは緑色の魔法陣を展開し、突風を起こした。砂埃は消えて、

ゾーマが姿を現した。

「やあ、ゾーマ。ご苦労だったね」

「ったく。せつかく銀時が出てきたのによオ」

ゾーマは愚痴を零した。

銀時と最後まで、全力で戦えなかったのがよっぽと残念で悔しかったようだ。

クリスはため息をついた。

高杉は煙管をくわえたまま、クククと笑っている。

「行くぞ、ゾーマ。もう用は済んだ」

クリスはゾーマに背を向けて歩き出した。

「おい、クリス」

ゾーマが呼び止めた。

クリスは、二度目のため息をついた。足を止めて振り返った。

「まだ文句があるのかい？」

「違ーよ。アレは探さなくていいのか？何だっけ？赤いエネルギーの結晶体」

ホテル・アグスタの方を指差しながら、ゾーマが言った。

「ああ、『レリック』か。それなら問題ない。馬鹿な科学者とその部下が集めている。僕に奪われるとは、夢にも思っていないだろうね。それにホテルにはないよ」

ゾーマにそう言った後、クリスは高杉に顔を向けた。

「君の情報には助かるよ、高杉。おかげで無駄に動く必要がなくなつたからね」

『レリック』。

僕の計画には必要な物だ。高杉の情報では、ジェル・スカリエツティとかいう科学者が集めているようだ。

僕が自分で集めなくても、奴が集めたところを奪えばいい。

クリスは邪悪な笑みを浮かべた。

それを見て高杉が笑う。

「ククク。スカリエツティとその部下に同情するぜ。お前を敵に回すなんざ、想像もしたくねエ」

そう言うが、高杉の顔には恐れてる表情がない。

「『彼』もだいぶ力を使えるようになってきている。僕らを止められる者はいない」

クリスは不敵な笑みを浮かべた。

第六訓：悪党は高みの見物が好き（後書き）

ゾーマはクリスマス達と手を組んでいた!?

そしてクリスが求める『レリック』とは？

はやて「次回、リリカル銀魂 Strikers。『人という字は
支え合って出来ているのではなく片方に支えられて出来ている』。
テイクオフ」

第七訓：人という字は支え合って出来ているのではなく片方に支えられて出来て

激戦を終えた銀時達

ゾーマの謎は深まる

ティアナ「『リリカル銀魂 S t r i k e r s 』。始まります」

第七訓：人という字は支え合って出来ているのではなく片方に支えられて出来て

ガジェットとの戦い、そしてゾーマとの激戦を終え、現場では調査班が現場検証をしていた。

フェイト達やフォワードの三人も現場検証の手伝いをしている。

ティアナは、スバル達から少し離れた所で、なのはと話をしていた。ゾーマが生み出した怪物との戦いでミスショットの事で、なのはに少し怒られた。

話が終わり、ティアナはゆっくりとした足取りで、スバル達の所へ向かった。

*

現場検証が行われてる近くで、銀時達が集まっていた。集まっているのは銀時、月詠、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、シャマル、コーノ、アルフの八人。

ちなみに沖田は、いつものアイマスクをつけて寝ている。

「まさかゾーマが現れるとはな……こちらでも奴の魔力は感じていたが、にわかには信じ難いな」

険しい表情でシグナムが言った。

隣にいるザフィーラが頷いた。

「私も最初は信じられなかったけど、銀さん達が戦っていた相手は、間違いなくゾーマよ」

モニターで戦いの様子を見ていた、シャマルが言った。

モニターでゾーマの姿を確認した時、シャマルは驚愕の表情を浮かべていた。

「ただ…あのゾーマ、何かおかしいんだ…」

複雑な表情でヴィータが言った。

「どういう事だ？」

「昔と性格が違っつて言うか…とにかく昔と別人なんだ。戦い方も違っつた」

シグナムの問いに、ヴィータが答えた。

「僕は銀さんと一緒に途中からしか見てないけど、確かに前のゾーマとは明らかに違っつた」

ユーノも自分の意見を言った。

「銀時は以前奴と戦ったのだらう？どうなんじゃ？」

煙管をくわえながら、月詠が銀時に尋ねた。

月詠は前の戦いに参加していないので、ゾーマの情報がないのだ。

「俺から見ても、野郎は昔のゾーマとは違う。アイツはもつと残忍で殺しを楽しんでた」

銀時もヴィータやユーノと同じく、ゾーマに疑問を抱いている。

「っつていうかさ…」

頭を掻きながら、アルフが口を開いた。

「何でアイツが生きてんのさ？ゾーマは銀時に斬られて倒されたはずだろ？」

アルフが最大の疑問を口にした。

確かにゾーマは、銀時に倒された。アルフ達はその瞬間を見ている。その後、倒されたゾーマの死体は、管理局本局で焼却処分された。

リンディ提督やクロノも立ち会っていたので、確かである。

「ゾーマの野郎は、『あんまり長くやってると』『アイツ』がうるさいからな』って言っていた」

「ゾーマの背後に誰かいるって事か？」

銀時の言葉にシグナムが尋ねた。

「ああ。多分ソイツが、ゾーマの野郎を何らかの方法で復活させたんだ」

銀時は腕を組んで、シグナム達に言った。

全員が黙って考え込んだ。場が静寂になる。

するとユーノが口を開いた。

「今はこれ以上考えても、わかりそうにないよ。情報が少な過ぎる」

「…そうだな。今回はここまでにして、主に報告しに行こう」
ザフィーラが頷きながら言った。

他のみんなも同意した。

「では、我々は報告に行く。銀時達は休んでいてくれ」

「ああ」

シグナム達は、はやて達に報告しに行った。

月詠は煙管を離して、口から静かに煙を吐いた。

「どうやら、厄介な事になりそうじゃな」

銀時を見ながら言った。

ため息をつきながら、銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

「銀さん。僕も出来る限り協力するよ」

ユーノが協力を申し出た。

「悪いな」

「いえ」

そこで銀時は、ある事を思いついた。

*

夕方。

ヘリに乗って銀時達は、機動六課に戻った。

フォワード四人の前に、なのはとフェイトが立っている。

「今日の午後の訓練はお休みね」

「ゆっくり休んで、明日に備えてね」

「はい！」

なのはとフェイトの言葉に、スバル達は声を揃えて応えた。

なのは達と別れ、スバル達は隊舎に向かった。銀時達は、一足先に

隊舎に戻っている。

隊舎の入口の前で、ティアナが足を止めた。

「スバル。私これから、ちょっと一人で練習してくるから…」

「自主練？私も付き合おうよ」

「じゃあ僕も」

「私も」

みんな、ティアナの練習に付き合おうとした。

ティアナはエリオとキャロに振り返った。

「ゆっくりしてねって言われたでしょ？アンタ達はゆっくりしてなさい」

二人の付き合いを断った。

「それにスバルも…悪いけど一人でやりたいから」

「…うん…」

スバルは、少し表情を暗くして頷いた。

*

ティアナは一旦部屋に戻って準備をした。引きだしを開けて、写真を見る。

写真には、小さな女の子と若い男が写ってる。

女の子はティアナ。

男はティード・ランスター。ティアナの兄である。

写真を眺めた後、ティアナは決意を胸に部屋を出た。

*

隊舎の庭に出たティアナは、準備体操を始めた。準備体操を終え、両手にクロスミラージユを構え、周囲に的となる光の玉を複数出した。

光の玉にクロスミラージユを向けて、一人訓練を始めた。

*

訓練開始から4時間。

ティアナは訓練を続けていた。辺りはすっかり暗くなり、夜空には綺麗な星が輝いている。

途中でティアナは息が荒くなり、地面に膝をついた。

汗を拭いて呼吸を整え、立ち上がった時、

「いや、精が出るねエ」

のんびりとした声が聞こえた。

後ろを見ると、木にもたれかかっている沖田がいた。

「沖田さん！」

ティアナは驚いた。

「い……いつから見てたんですか？」

「準備体操してる時から」

「それ最初からじゃないですか！」

沖田に向かって叫んだ。

「まあそうなりますねエ」

木から離れて、沖田がティアナに近づいた。

「もう4時間ぶっ続けだぜ。ここら辺で終わりにしたらどうだい？」

私の事を心配して？

ティアナは少し戸惑った。

「だ、大丈夫です。まだもう少し続けます！」

慌てて沖田から顔をそらす。

ティアナの様子を見て、沖田はため息をついた。

「旦那達から聞きやした。俺がいない間に、なんかいろいろ大変だったみてエで」

「……………」

ティアナは、少し顔を俯いた。

「ミスショットがそんなにシヨックかい？」

沖田が尋ねた。

ティアナは黙ったまま答ええない。沖田に背を向けて、クロスミラージユを構えて訓練を再開する。

「朝晩の訓練を見てて思ったんだが、ティアナはちよいと無理して

る感じがあるゼイ」

訓練してるティアナを見つめながら、沖田は言った。

ティアナは動きを止めた。

「訓練の様子…見てたんですか？」

少し驚いた感じでティアナは尋ねた。

「たま〜にだがねエ」

欠伸をかきながら、沖田は答えた。

「…詰め込んで練習しないと上手くななんないんです。凡人なもので
そう答えて、ティアナは訓練を再開した。

「俺から見りゃあ、魔法が使えるっただけで凄いやと思うがねエ」

少し羨ましそうに沖田は言った。

頭の中では、上司の土方に対する魔法を使った嫌がらせを考えているのかもしれない。

ティアナは再び動きを止めた。

「ただ魔法が使えるだけじゃ…ダメなのよ……」

沖田に背を向けたまま、ティアナは言った。

「私には…スバル達みたいな才能もないし…キャロみたいなレアスキルもない…」

クロスマirrorジユを握る手に力が入る。

沖田は黙って、ティアナの話聞いてる。

「だから私は…少しぐらい無理をしないと、強くなれないんです！
！」

ティアナの大きな声が庭に響いた。

すると、また沖田がため息をついた。

「こりゃあ全然、懲りてねエな」

「え？」

沖田の言葉を聞いて、ティアナは振り返った。

同時に沖田は、隠し持ってたロープでティアナの両手を後ろ手に縛った。

「ちよっ…何するんですか!？」

ティアナが声を荒げて叫んだ。

だが沖田は、ティアナの叫びなど気にせず次の行動に移る。どこに隠していたのか、長いロープを出してティアナの両足を縛り、近くの木に逆さ吊りにした。

「な……！？何するんですか！降ろしてください……！」
体を揺らしながら、ティアナは沖田に叫んだ。

「そうはいきませんぜ。こいつアお仕置きでさア」

「お……お仕置き？」

ティアナは顔をしかめた。

「なのはからちよいと怒られたみてエだが、全く懲りてる様子がないんで、俺がお仕置きする事にしたんでイ」

沖田はニヤリと笑みを浮かべた。

久々の”S”の顔である。

「わ……私はちゃんと反省してます！」

「そのわりには、さっきまで一人で無理した訓練してたぜイ？」

「……………！」

ティアナは黙ってしまふ。

すると沖田は、ポケットから缶ジュースを一つ取り出した。蓋を開けて、ティアナの顔の上まで近づけた。

「罰として、コレ鼻から飲みなア」

そう言つて沖田は、缶ジュースを斜めに傾けて、中身のジュースをティアナの顔にかけた。

「わ……ぷっ……！」

顔にジュースをかけられて、ティアナは呻く。
鼻にもジュースが入つて、ツーンとする。昔プールで溺れた時みたいな、懐かしい感覚だった。

「実はティアナ。俺もちよいと前に、上司に殴られた時があるんでイ」

お仕置きを続けながら、沖田が話し始めた。

「え……！？」

零れてくるジュースに耐えながら、ティアナは沖田の言葉を聞き取った。

「一人、気に食わねエ野郎がいて、ソイツの事で無茶やらかしそうになって上司に殴られちゃった」

話の途中で缶ジュースを戻した。

ティアナの顔は、ジュースでビツシヨリと濡れていた。

「俺が言いてエ事わかるかい？」

ジュースを飲みながらティアナに尋ねた。

ティアナは黙って考えた。

少し考えて、ティアナは沖田に顔を向けた。

「…自分を心配してくれてる人がいるって事ですか？」

「正解」

沖田はまたティアナの顔にジュースをかけた。

「ちよつ…！何でかけるんですか！？」

ジュースをかけられて、ティアナは怒鳴った。

「正解したご褒美でさア」

沖田はサディステイックな笑みを浮かべた。

「まあ人間ってのは脆い生き物でねエ。誰かに支えられてねーと、生きていけねエんでさア。それが例え、気に食わねエ野郎でも…」

まあ沖田は、その気に食わねエ野郎、土方十四郎をバズーカ等で狙ってたりしてるのだが。

沖田の話聞いて、ティアナは考えた。

私が傷つけば、心配したり悲しむ人がいる。なのはさんやスバル、他にも沢山の人が。

「……………」

私の兄のティード・ランスターは、逃走中の違法魔導師を追っていた。犯人に手傷は負わせたけど、取り逃がしてしまった。地上の陸士部隊の協力のおかげで、犯人はその日のうちに取り押さえられたけど、その任務中に兄さんは死んでしまった。

その時の上司が『ティードの魔法は無意味で役に立たない』と言っ

た。

私は悔しかった。兄さんが教えてくれた魔法は役立たずじゃない。それを証明したくて。兄さんの執務官になる夢を叶えたかった。でも、沖田さんの話を聞いて、スバルや皆に心配させてまで、仲間を危険な目に遭わせてまでする事じゃない気がする。

「あの…沖田さん……」

「ん？」

ジュースを飲み終えた沖田は、缶ジュースを潰した。

「ごめんなさい！私…自分勝手に…沖田さんや、みんなに心配ばかりかけて……」

目を固く閉じて、大きな声で沖田に謝った。

沖田さんの言葉で気がついた。

私は一人じゃない。私の事を想ってくれる人達がいる。

「どうやら反省してみたみてエだな」

こういう事は普通、旦那や近藤さんの役なんですがねエ。

まあたまにはいいか、と沖田は思った。

「これからは、もっと自分と仲間を大事にしなア」

「はい！」

ティアナは力強く答えた。

「あ…あの、沖田さん……」

「何でイ？」

「そろそろ降ろしてくれませんか？」

逆さ吊り状態のティアナが言った。

「イヤでイ」

沖田は断った。

「何ですか！？」

「俺が楽しむからでイ」

沖田は、再びサディスティックな笑みを浮かべた。

「そんな…！じゃあせめて、顔にかかっているジュースを拭いてくださいー！」

「ベタベタになるまで拭きませんぜ」
「ドSウウウウー!!!」
ありったけの声でティアナは叫んだ。
庭はこんな状態なのに、夜空には無数の星が宝石のようにキラキラ輝いていた。

*

翌朝。

みんな食堂に集まって、朝食を食べている。

昨日の件で、スバルはティアナの事を心配していたが、

「おはよう、スバル」

と、元気な笑顔で挨拶してきたので安心した。

席に座って朝食を食べ始めた。

そこへ沖田と月詠がやってきた。

「おはようございます!!」

二人に気付いたスバル達は挨拶した。

「おう」

「おはよう」

二人も挨拶した。

すると、ティアナが顔を赤くしながら立ち上がった。

「あの…沖田さん!」

少し大きな声で沖田を呼んだ。

沖田はティアナに顔を向けた。

「その…あの…えっと……」

ティアナは顔を赤くして、手をモジモジさせている。

いつもと違うティアナの様子に、スバル達は首を傾げた。

「わ…私の事……」ティアナ”って……呼んでください……」

恥ずかしがりながら、ティアナは言った。

ティアナの言葉にスバル達は驚き、沖田はポカンとなる。

「じゃあティアって呼びまσα」

軽く答えて、沖田は席に座った。

ティアナは嬉しさで笑顔になった。

スバルはそんなティアナをニヤニヤした顔で見ている。

朝食を食べていると、銀時がやってきた。

「えー、実はみんなに重大発表がある。新八に代わる新たなツツコミ役が決まった！」

銀時の言葉に食堂がざわついた。

ツツコミ役ってティアナじゃなかったっけ？などの声が上がった。

「新たなツツコミ役、ユーノ・スクライアだ！！」

銀時は、後ろに立っているユーノを手で示した。

「いや、いつ決まったんですか！？」

即座にユーノが銀時に尋ねた。

「昨日だ」

銀時が即答した。

「何で僕がツツコミ役なんですか！？」

「新八と同じメガネだからだ」

ユーノを指差しながら、銀時が言った。いや正確には、ユーノがかけているメガネを指差している。

「そんな理由！？」

ユーノは納得がいけないと言った感じに叫んだ。

わざわざ司書長の仕事を休んで来たのに、何でいきなりツツコミ役に任命されるんだ。

「待て待て！」

ここで沖田が待ったをかけた。

「ツツコミ役はティアアでσα！」

ティアナを指差しながら言った。

「お…沖田さん！？」

いきなり沖田に名前を呼ばれ、慌ててティアナは立ち上がった。

銀時と沖田が睨み合う。

「ツツコミ役は地味なメガネだと決まってるだよ」

「おい！それは僕が地味って事ですか！？」

ユーノが声を荒げた。

「ウチのティアも負けてませんぜ！胸が小さくて地味でさア！」

「私の胸はそんなに小さくないわよ！！」

ティアナは顔を真っ赤にして、沖田に怒鳴った。

食堂に銀時と沖田のボケ、ユーノとティアナのツツコミが響いた。

第七訓：人という字は支え合って出来ているのではなく片方に支えられて出来て

沖田の言葉で変わったティアナ

ツッコミはユーノとティアナの二人か！？

リインフォース「次回、リリカル銀魂 Strikers。『身も心も一つになりたい』。テイクオフ」

第八訓：身も心も一つになりたい（前書き）

ゾーマに対抗すべく、部隊長のはやては、ある事を思いつく

その”ある事”とは！？

リインフォース『リリカル銀魂 S t r i k e r s 』。始まります」

第八訓：身も心も一つになりたい

ホテル・アグスタの件から数日。

昼近くの機動六課部隊長オフィス。

デスクに座ってるのは八神はやて。デスクの前には、銀時が立っている。

朝食を食べ終えた後、銀時は部隊長オフィスに呼び出されたのだ。

「何か用か？」

目の前のはやてに尋ねた。

「実は、銀ちゃんの能力アップをしたいと思つとるんや」

「能力アップ？」

はやての言葉に銀時は片眉を上げた。

「銀ちゃんも知つてると思っけど、ゾーマの背後に得体の知れない何者かがいる可能性がある。もしかしたら、ソイツはゾーマ以上の実力者かもしれん」

ゾーマ以上の実力者。

あんまり想像したくない事だ。実際銀時は、ゾーマ以上に強い者と戦った事がある。

夜王・鳳仙。

かつて、宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』の頂点に君臨した、夜兎の王。

自身の身長以上の巨大な傘を使い、圧倒的な力を誇っていた。銀時一人では勝てず、多くの仲間達の協力を得てやっと倒した。

ゾーマ以上の実力者という事は、鳳仙並の強さという事になる。

そうなるも今のままでは正直キツイ。

「そこで、銀ちゃんの能力アップをやるうと言う事になったんや」

はやてが右手の人差し指を立てながら言った。

「具体的にどうすんだ？」

本当にそんな事が出来るなら、やらない訳にはいかない。

「詳しい事はシャーリーが教えてくれるから、デバイスルームに行つてな」
はやくに言われ、銀時は部隊長オフィスを出て、デバイスルームへ向かった。

*

廊下を歩き、銀時はデバイスルームの前に着いた。扉を開けて部屋の中に入った。

「あつ。銀さん」

部屋の中にシャーリーと、

「来ましたか」

ラインフォースがいた。

「何でラインフォースもいんだ？」

「銀さんの能力アップに、ラインフォースさんが必要なんです」

ラインフォースの代わりに、シャーリーが答えた。

「どういう事だ？」

自分の能力アップに、何でラインフォースが必要なのかわからない。

「ラインフォースさんは、『融合型デバイス』なんです」

「『融合型デバイス』？」

シャーリーの言葉に銀時は片眉を上げた。

「その名の通り、他者と融合するデバイスです。適合率の高い者と融合する事で、飛躍的に能力を向上させるん事ができるんです」

シャーリーが説明した。

「おいおい！ドラゴンールのフュージョンみてーじゃねエか！ヤベツ。テンションが上がってきちゃったよ！」

シャーリーの説明を聞いた銀時は興奮した。

「ただし、適合率が低いと融合事故が起こる可能性があるので、気をつけてくださいね」

シャーリーは、テンションが上がってる銀時に注意した。

銀時は不安げにシャーリーを見た。

「それって……デブになったり、ガリガリになったりするんのか？」

銀時はゴクリと唾を飲み込んだ。

「まあ外見に変化が現れたり、能力がおかしくなったりいろいろだ
と思います」

「思いますって……」

急に銀時は不安になった。

だが他に方法がないのなら、ユニゾンとやらをやるしかない。
諦めたように、銀時はため息をついた。

「それじゃあ、早速始めましょう。リインフォースさん、お願いし
ます」

「はい」

シャーリーに言われ、リインフォースは銀時に近寄った。

リインフォースの胸が銀時に当たる。銀時は少し戸惑った。

「では銀時。これからユニゾンをします。ジツとしてください」
そう言っつて、リインフォースは目を閉じた。

「ユニゾン・イン！」

リインフォースが叫んだ直後、二人は白い光に包まれた。

光の強さに、シャーリーは目を閉じた。数秒の輝きの後、光は消え
ておさまった。

シャーリーはゆっくりと目を開けた。目に入ったのは銀時だった。

リインフォースの姿はない。銀時とユニゾン出来たみたいだ。

シャーリーは銀時を観察した。瞳が赤くなっている所以外、特に外
見に変化は見られない。どうやら一応ユニゾンは成功のようだ。

「あの……どうですか銀さん？」

ユニゾンした感じを尋ねてみた。

銀時はシャーリーには答えず、手足を動かして自分の体を見ている。
すると突然、銀時は驚愕の表情をした。

「おおおっ！何だこいつア！？体の中から力が溢れ出てくるみてエ
だアアア……！」

両手で拳を握って、銀時は興奮した声を出す。

(シャーリー。銀時とのユニゾンに成功しました)

銀時の中にいるリインフォースが、シャーリーに報告した。

「よかった」

シャーリーはユニゾン成功に一安心した。

一方、銀時は内側から漲る力にまだ興奮していた。

おいおいおい、マジでか。これヤバイよ。どれくらいヤバイかって言うと、マジヤバイ。

今なら鳳仙と一対一で闘り合っても勝てる気がする。かめ め波が出せる気がする。

最初はフュージョンの失敗版みたいな、デブやガリガリにならないか不安だったが、そんな不安は完全に消えていた。

「リインフォースさんとユニゾンしている状態なら、魔法を使う事も可能だと思います」

「マジでか!？」

シャーリーの言葉に銀時は更に興奮する。

試しに手を前に出して、障壁を張ってみる事にした。フェイト達が出しているような障壁をイメージする。

すると手の前に、銀色の障壁が展開した。

「うおおおおお!！」

銀時は驚きと興奮の声を上げた。

(見事です、銀時)

リインフォースが褒めた。

銀時は障壁を消した。

マジでスゴくね?それじゃあ空とかも飛べんのか。

タイトル『魔法侍リリカル銀ちゃん』に変更するか?

なんて事を考えていると、

(ああ……銀時の中……気持ちいい……)

リインフォースが艶かしい声を出した。

「何言ってるのお前?気持ち悪いんだけど……」

銀時は若干引いた。

（好きな人と一体化するのが、こんなに気持ちいいとは……）
「え……？」

今のリインフォースの言葉に、銀時は目を細めた。

「お前、今何て言った？」

（ですから、好きな人と一体化……あつ！！）

リインフォースは、しまったと言うような声を出した。

「ええええええ！！？」

銀時の叫び声が、デバイスルームに響いた。

「おま……お前まで俺の事……！？ええええええ！！」

銀時は動揺がおさまらない。

リインフォースは黙ってしまふ。

「あの……どうかしたんですか？」

シャーリーが心配そうに尋ねた。

どうやら今の会話は、聞かれてなかったみたいだ。

「いやいやいや！何も問題ねーぞ！うん、問題なし！」

動揺しまくりながら、銀時は答えた。

「そ……それじゃあユニゾン解くか！」

銀時の声に応えるように、体から光が発した。

光はおさまり、銀時の前にリインフォースが現れた。

リインフォースは、顔を真っ赤にして俯いている。

「リインフォースさん。大丈夫ですか？」

シャーリーが尋ねた。

「ああ！じゃあ俺が医務室まで連れてくわ！」

そう言っつて銀時は、リインフォースの腕を掴み、急いでデバイスルームを出た。

シャーリーは不思議そうに首を傾げた。

*

デバイスルームを出た銀時とリンフォースは、屋上にいた。

「リンフォース。お前さっき言った言葉、マジなの？」

急いで屋上に来たので、銀時は肩で息をしている。

リンフォースの顔は赤いままである。

顔が真っ赤で反応なし。

うん。こいつアマジか？

と、銀時は思った。

両者口を閉じたまま沈黙が続いた。

銀時が頭を掻いた時、

「十年前、貴方は私に言いました」

リンフォースが口を開いた。

銀時は頭を掻くのを止め、リンフォースの話聞いた。

「『笑ったお前の顔も見てみてーし』。人にあんな言葉を言われたのは初めてでした」

懐かしむようにリンフォースは語った。

「嬉しかった。その時まで、私は道具としてしか扱われなかった」

リンフォースは、胸に手を当てた。

「あの時から、私の心の中には銀時がいた。貴方の事を考えると、胸が熱く、苦くなる」

俯いてた顔を上げる。

赤い瞳が真っ直ぐに銀時を見つめる。

思わず銀時は唾を飲み込んだ。

この緊張感、何回目？

リンフォースがゆっくり歩み出す。そっと銀時に抱き付く。

「銀時。貴方が好きです」

リンフォースは頬を赤くして、銀時に告白した。

銀時は、体が固まって動けなくなっていた。

フェイトやシグナム達からも告白されたが、やっぱり慣れない。

「銀時」

リンフォースが顔を上げて、銀時を見つめた。

「フェイトやシグナム、アルフには負けません」

銀時を見つめながら、リインフォースはハッキリと言った。

「貴方のユニゾンのパートナーとなり、貴方を護ります」

決意と想いを銀時に伝える。

護られてばかりでなく、私も銀時を護りたい。

愛する貴方の力になりたい。

「…リインフォース」

銀時はリインフォースの両肩を掴んだ。

リインフォースの顔が更に赤くなった。

「この先、ゾーマ以上にヤベー敵が現れるかもしれねエ。もしかしたら、俺一人じゃ手に負えねエようなヤベー敵が」

真剣な表情でリインフォースに語る。

「だから、そんな時は…俺に力を貸してくれ」

銀時がそう言った瞬間、リインフォースの顔が明るくなった。

「はい。喜んで」

頬を赤くし、リインフォースは嬉しそうに頷いた。

銀時は『ユニゾン』という新たな力を手に入れた。

リインフォースの心もゲットした。心の方は、十年前に既にゲットしてるんだけど。

「では戻りましょう、銀時」

リインフォースは銀時と腕組をした。

「何で腕組？」

銀時が尋ねるが、リインフォースは気にせず嬉しそうに腕を組んだまま、銀時と屋上を出た。

銀時はため息をついた。まさかリインフォースからも告白されるとは。

フェイト、シグナム、アルフ、リインフォース。銀時に告白した女性は、四人に増えた。

これからどうするか、銀時は悩んだ。

*

現在二人は廊下を歩いている。腕を組んで。ふと銀時は思った。

もしこの状態で、フェイトやシグナムと出会ったら……。そう考えた瞬間、嫌な予感と共に冷汗が流れてきた。

「銀時」

前から声が聞こえた。

声を聞いた瞬間、銀時は予感が当たってしまった事を悟った。酷い目に遭うのは、主人公の宿命なのか。

この時、銀時は主人公というポジションを呪った。

銀時は恐る恐る前を見た。

そこには予想通り、フェイト、シグナム、アルフの三人がいた。

「リインフォースさんと」

「腕なんか組んで」

「何してるんだい？」

フェイトとシグナムはデバイスを構え、アルフは狼形態に変身した。

三人は凄まじい殺気を放つ。

銀時は顔を青ざめた。

「リ…リインフォース！」

「はい」

リインフォースは、銀時の言葉に頷く。

「ユニゾン・イン！」

二人が光に包まれた。

「えっ!？」

「ユ…ユニゾンだと!？」

フェイト達は驚いた。

光が消えて、三人の前にユニゾン完了した銀時が姿を現した。

「パワーアップしたこの力で、俺がやる事は一つ」

銀時は目を鋭くした。

フェイト達はデバイスを構えた。

すると銀時は、クルツと後ろに振り返り、

「逃げるオオオオ!!」

ダッシュで逃げ出した。

「ああっ！逃げたアア!!」

てつきり向かってくると思っていた三人は、銀時の行動に少し呆れた。

銀時はユニゾンでパワーアップしてるので、逃げ足も速くなっていく。

あっという間に、銀時は三人の視界から消えた。

「速い……」

廊下に残った三人は、ポツリと呟いた。

第八訓：身も心も一つになりたい（後書き）

次回、ついに銀時と声が同じの『あの男』が登場！？

そしてカリムの予言は何を示す？

銀時「次回、リリカル銀魂 Strikers。『先の事がわからないから人生は面白い』。テイクオフ！」

第九訓：先の事がわからないから人生は面白い（前書き）

フェイト、アルフ、シグナム、リインフォース

四人の恋のバトルが本格的に始動する！？

スバル「『リリカル銀魂 Strikers』。始まります！」

第九訓：先の事がわからないから人生は面白い

機動六課の食堂。

引きつった顔で席についてるのは銀時。その銀時の右側にフェイト、左側にシグナム、その前にアルフとリインフォースが座っていた。四人とも、なんかこう…負のオーラの的なモノを放っていて、近寄り難い雰囲気が出来ている。実際、フェイト達が座ってる席に近寄ろうとする者はいなかった。

そんな負のオーラの中心に座ってる銀時は、冷汗をダラダラ流している。

気のせいか、胃が痛くなってきた気がする。腹の辺りを摩りながら、銀時は思った。

周りの人達は、フェイト達が放つ負のオーラに当てられて、食があんまり進んでいない。

そんな中、沖田だけは腹黒い笑みを浮かべて、楽しそうに様子を見ている。

「沖田さん…アレ、何とかしなくていいんですか？」

沖田の隣に座ってるティアナが、フェイト達を指差しながら小さな声で言った。

「あんな面白そうないイベント、止める訳ねエだろイ」

「アンタただけ腹黒いんですか!？」

心底今の状況を楽しんでる沖田に、ティアナは怒鳴った。

「銀さん、大丈夫かなア？」

銀時を心配そうに見ながら、ユーノが言った。

「あんなに恐い顔したフェイトちゃん、初めて見るよ…」

苦笑いしながら、なのはが言った。

エリオとキャロも、銀時の心配をしていた。

「月詠さん。銀さん達…あのままにして、いいんですか？」

「下手に手を出したら火傷するだけじゃ。放っておけばよい」

月詠は気にせず食事を続けた。

「銀さん……」

月詠の隣に座ってるスバルは、小さく呟きながら銀時の無事を祈った。

*

「まさかリインフォースさんまで、銀時が好きだったなんて予想外でした」

フェイトが沈黙を破った。

「言っておきますが、銀時は私のモノです。譲る気はありません」
毅然とした態度で、リインフォースは言った。

「いや……俺、お前のモノでも誰のモノでもないから……」

銀時が少し弱々しく言った。やはり、いつもの勢いはない。

「悪いがリインフォース。私も譲る気はない。銀時とユニゾンが出来るからと言って、調子に乗ってもらっては困る」

銀時の言葉をスルーし、シグナムは目を鋭くして言った。

「銀時との付き合いは、あたしとフェイトの方が長いんだ！つまり

銀時は、あたしのモノだ！！」

大声でアルフが言った。

銀時は顔をしかめた。

コイツら俺の話、聞いちゃいねエ。

「アルフ。私の事、忘れてるよ？」

ニツコリと、フェイトは黒い笑みを浮かべた。

「悪いけどフェイト！銀時は渡さないよ！」

アルフは狼のような鋭い目で、フェイトを睨んだ。

今この時、ご主人様と使い魔という関係は無くなっていた。

「いや、だから……俺は誰のモノでもな……」

「銀時は私の男だ！誰にも渡さんぞ！」

銀時の言葉を遮って、シグナムが三人に言った。

四人の口論はヒートアップし、ギャーギャー騒ぎ始めた。銀時はため息をついた。

「何で俺の周りにいる女は、みんな人の話を聞かないんだ？俺、何か悪い事したか？」

「あ…あの…、なんか俺邪魔みたいだから、向こう行ってようか…？」

ゆっくりと席を立ちながら、恐る恐る四人に聞いてみたとすると、

「逃げないで銀時！」

「お前もここにいろ！」

「あたしを置いて行かないで！」

「銀時と合体したい！」

四人は銀時に向かって叫び、無理矢理イスに座らせた。歴戦の侍『白夜叉』も、四人の修羅には勝てなかった。

再び四人の白熱した口論が始まる。

諦めた銀時は、黙って見守る事にした。

ふと沖田の方を見る。銀時の困ってる様子を楽しそうに見てる。

あのクソガキ。いつかヤキ入れてやる。

沖田を睨みながら、銀時はそう思った。

「銀時は私のだよ！」

「いや、私の男だ！」

「あたしのだ！」

「私のモノです！」

四人の口論は続く。

なかなか終わらない口論に終止符を打つため、フェイトが勝負に出た。

「私は小さい頃に、銀時に裸を見られた事があるんだよ！」

フェイトが爆弾発言した直後、周りのみんなが口から飲み物やら食べ物を噴いた。

「おいイイイイ！何言っちゃってんのお前！？」

慌てて銀時は叫んだ。

「は…裸を…!!?」

リインフォースは顔を赤くした。

だが、シグナムは怯まない。

「甘いな、テスタロツサ。お前も見ていただろ？銀時は私の胸の谷間に顔を埋め、しかも手で胸を揉んだ」

少し誇らしげにシグナムは語った。

「お前も何言っちゃってんのオオオオ!!?」

テーブルを叩きながら銀時が叫んだ。

「む…胸を揉んだ…!!?」

リインフォースの顔が更に赤くなっていく。

「テメーらア！何、昔の恥ずかしい出来事語ってんだ!?!」

マズイ。

銀時は思った。

このまま二人を放っておいたら、大変な事になる。

「私は裸を見られただけじゃなくて、銀時の手料理を食べたり、一緒に寝たりしました!」

トドメとばかりに、フェイトが言い放った。

「て…手料理だとオオ!?!」

「い…一緒に寝たア!?!」

シグナムとリインフォースは、ショックを受けて愕然とした。

二人は力無くうなだれた。

銀時は口を大きく開けて固まった。

「あたしも混浴で、一緒に温泉に入ったー!」

手を挙げながらアルフが言った。

「混浴!!?!」

シグナムとリインフォースは更にショックを受け、テーブルに突っ伏した。

「だアアアア!!お前そういう事、言うんじゃねエエエ!!」

怒鳴った後、銀時はチラッと周りを見た。

周りのみんなは、軽蔑の眼差しを銀時に向けていた。

小さな女の子の裸を見て、一緒に寝た。しかもシグナムの胸を揉んだり、アルフと一緒に温泉に入った。みんなの頭の中で、銀時はロリコン、エロオヤジであると認識された。

「ちょ待てよ……その目、やめてくんない？心がスゲー痛むから」
銀時は必死にやめるよう訴えるが、軽蔑の眼差しはなくなるらない。本当に俺、何か悪い事した？

ヤベツ。前が霞んで見えねエ。

銀時は手で涙を拭いた。

「銀さん！」

涙を流す銀時に、リインが近寄ってきた。

「はやてちゃんと呼んでるです」

「…はやてが…？」

涙目でリインフォースを見ながら、銀時は呟いた。

フェイトとアルフの口論が始まり、シグナムとリインフォースはシヨックでテーブルに突っ伏したままだ。

この隙に銀時は、リインと共にそっと席を離れ、食堂を出た。

*

部隊長オフィス。

デスクには、腹を抱えて笑いを堪えているはやてが座っていた。

「プクク…！銀ちゃん、なんだかおもしろい事になつとるな…！」

手で口を押さえ、必死に笑いを堪える。

「…オメーさっきの様子のごき見してやがったな？沖田みたいに楽しみやがって…」

額に血管を浮かべて、銀時は静かに怒った。

「ごめん。勘忍や、銀ちゃん。プクク…！」

はやては謝りながらも、まだ笑いがおさまらない。

隣では、リインが苦笑している。

「……で？俺に何の用だよ？」

不機嫌な顔のまま、はやてに尋ねた。

とつとと用件を済ませて、一人で落ち着ける場所に行きたい。宇治銀時井でも食べて、気分を落ち着けたい。

「ふう。わかった。ほんなら本題にいこか」

やつと落ち着いたはやてが本題に入る。

「これから私と一緒に、『聖王教会』に行ってもらいたいんよ」

「聖王教会？」

銀時は首を傾げた。

「詳しいことは向こうで話す。ええかな銀ちゃん？」

「…あの四人の争いから解放されんなら、何処にでも行ってやるよ」
半場ヤケクソ気味に銀時は答えた。

はやては、また笑いそうになったが、何とか堪えた。

「決まりやな」

はやては席を立った。

「そっや、銀ちゃん」

「ん？」

「うちも銀ちゃんの事が好きって言うたら、どないする？」

「はあっ!？」

はやての言葉に、銀時は驚いて目を見開いた。

「ふふ。冗談や」

笑いながらはやてが言った。

「オメーなア……そういう冗談やめてくんない？マジで焦っちゃまったよ」

銀時は大きなため息をついた。

「リインは銀さん好きです〜!」

銀時に飛び付きながら、リインが言った。

「オイ」

銀時は半眼でリインを睨んだ。

*

聖王教会。

銀時とはやては、ある一室の扉の前で止まった。
二回ほどノックをする。

「どうぞ」

中から返事が聞こえた。

「お邪魔します」

挨拶しながら、はやては扉を開けた。

部屋の中には、二人の男女が椅子に座っていた。

「いらつしやい、はやて」

金髪の女性が、はやてに挨拶した後、銀時に顔を向けた。

「初めまして、銀時さん。私は聖王教会の騎士カリム・グラシアと言います」

「どうも。坂田銀時です」

互いに自己紹介を済ませた。

「それと…こちらの方は、知ってますよね？」

男の方を見ながら、カリムが言った。

銀時は男を見た。

短い黒髪で黒い制服を着ている。

見えていて何となく見覚えはあるが、誰なのか思い出せない。

「悪い。覚えてねエや。男の顔覚えるのは苦手なんだ」

頭をぱりぱりと掻きながら、銀時が言った。

直後、男はガクツと体がよろけた。

「コホン。僕ですよ。クロノ・ハラオウンです」

と、大人になったクロノが銀時に言った。

その瞬間、銀時は目を見開き、口を大きく開いて固まった。

大人になったクロノに驚いた訳ではない。いや、確かにそれにも驚きだが、それを上回る衝撃の事実を銀時は知った。

「こ………ここ、声が…俺と同じイイ！？」

震える指でクロノを指差しながら、銀時は叫んだ。

そう。銀時と大人クロノは声と同じなのだ。全く同じ。

「あはははは！どうや？驚いた、銀ちゃん？」

銀時の反応を見て、笑いながらはやてが尋ねた。

「驚きました。本当に声と同じですね」

カリムも驚いている。

「えっ？ちよっ……マジで!？」

慌てて銀時はクロノに近寄った。

まじまじとクロノの顔を見る。

「ちよっ…顔近いですよ、銀さん！」

クロノは銀時から離れた。

「いや、ゴメーン。スツゴイ声が似てたから、っっていうか同じだからビツクリして」

そこで銀時は言葉を切り、右手でクロノの顔を掴んだ。

「って、ふざけんなよコノヤロー!!」

叫びながら、クロノの後頭部を壁に叩きつけた。

「銀時さん!!？」

銀時の行動にカリムは驚いた。

「あちゃ〜」

はやては頭を押さえた。

「テメー、誰の許可得て人様の声使ってたんだコラ!!」

「僕だつて、なりたくてこんな声になったんじゃない!!」

手を払いのけながら、クロノが叫んだ。

「こんな声って何だよ!？殺すぞコノヤロー!!」

胸倉をつかみ合って、銀時とクロノが怒鳴り合う。

「ちなみに銀ちゃん。クロノは次元航行部隊の艦船艦長で、エイミ

イさんとも結婚してるんや」

「え?」

はやての言葉を聞いて、銀時はピタリと動きを止めた。

艦長。結婚。

出世と幸せな家庭。

片や万年金欠で、ひもじい生活。

同じ声なのに、二人の現状はまるで違う。

「マジでふざけんアアア！」

銀時は再びクロノの後頭部を壁に叩きつけた。

「何だこの違いは！？同じ声なのに扱いが違い過ぎるじゃねーか！

差別だ！差別反対イイイ！！」

クロノの頭を壁にグリグリ押し付けながら、銀時は叫んだ。

「いい加減にしろオオオ！！」

堪忍袋の緒が切れたクロノは、銀時の顔に頭突きを食らわせた。

はやては二人の様子を見て、腹を抱えて笑った。

*

三十分後。

なんとか二人の喧嘩を止めて、落ち着かせた。

四人は席についたが、まだ銀時とクロノは睨み合っている。

「え…えつと…それでは本題に入らせて頂きます」

二人の様子を見て、若干戸惑いながらカリムが話を始めた。

途端に、はやてとクロノは真剣な表情に変わった。が、銀時はクロ

ノを睨んだままである。

「実は銀時さんと呼んだのは、私の『預言』についてなのです」

「預言？」

やっとクロノへの睨みをやめ、銀時はカリムに顔を向けた。

「彼女のレアスキル『預言者の著書』は、最短で半年、最長で数年

先の未来の出来事を散文形式で書き出した預言書になっているんだ」

カリムに代わって、クロノが説明した。

「…オメーの声を聞くと、なんか落ち着かねエな」

銀時が再びクロノを睨む。

クロノも銀時に睨み返す。

「まあまあ二人とも。喧嘩は後や」

「大事なのはここからです」

はやてとカリムの言葉で、二人は睨み合いをやめた。

「実は、私の預言書にある預言が現れたのです」

カリムは黄色く光る預言書を出し、読み上げた。

忘れられし都を闇へと変えし金色の悪魔、破滅の魔獣と黒き刃を率いて現れる。古き結晶を用いて、世界を滅ぼさんとする。

なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに、数多の海を守る法の船も砕け落ちる。

「どういう意味だ？」

預言の内容がわからず、銀時は尋ねた。

「世界を滅ぼそうとする何者かが現れ、地上本部が壊滅し、管理局までもが崩壊してしまう事を示しています」

険しい表情でカリムが語った。

銀時も目を鋭くして、普段は見せない真剣な表情になる。

「『破滅の魔獣』とは、恐らくゾーマの事だろう」

クロノが顎に手を当てながら言った。

「問題は、『忘れられし都を闇へと変えし金色の悪魔』と『黒き刃』
や」

はやてが腕を組んで悩む。

この時、銀時は胸騒ぎがした。

何故だかわからないが、『あの男』の顔が頭に思い浮かぶ。

いや、そんなはずはねエ。『アイツ』がこの世界にいるはずが……。

必死に自分の予感を否定する。

だが銀時のこういふ時の予感は、皮肉にもよく当たってしまう。

*

時空管理局地上本部。

その一室に、デスクの上に肘をついて手を組んで、険しい表情をしてる男がいた。

レジアス・ゲイズ中将。地上本部の実権を事実上握っている重鎮である。

「…間違いないのか？」レジアスは、目の前に立っている人物を睨むように見た。

「はい。間違いありません」

レジアスの前に立っている女性、オーリス・ゲイズ副官が答えた。

「ホテル・アグスタに現れたゾーマは、あの研究所から紛失したモノに間違いありません」

手に持っている資料に目を通しながら、オーリスは報告した。

「クソッ！」

レジアスは怒鳴りながら、拳を固めてデスクを強く叩いた。

「一体誰だ！？私の計画を邪魔する者は！？」

忌々しげにレジアスは言った。怒りが込み上げてきて、ギリツと歯を食いしばった。

「ゾーマだけではなく、『アレ』もゾーマと一緒に紛失しています。研究所からゾーマを盗んだ者が所有している可能性があります」

激怒しているレジアスとは対照的に、冷静にオーリスは言った。

「おのれエ…！」

レジアスは更に表情を険しくした。

「一体誰だ？誰がゾーマと『アレ』を研究所から盗み出した？」

レジアスは焦りの色を浮かべた。

第九訓：先の事がわからないから人生は面白い（後書き）

レジラスとゾーマの関係は？

そして預言にあつた『黒き刃』の正体とは！？

今回は、誰が銀時と出掛けるかを決める戦いが勃発！？

銀時「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『勝負の王道はジヤンケン』。テイクオフ！」

第十訓：勝負の王道はジャンケン（前書き）

機動六課の休日

たまには休まないよね

アルフ「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるよ！」

第十訓：勝負の王道はジャンケン

今日は機動六課初めての休日。

みんな制服を脱いで、普段着を着ている。これから市街地へ出掛けるのだ。

銀時はメンドくさくて最初は断ったが、スバルに頼まれて仕方なく行く事にした。

みんなが出掛ける準備を終えて外に出ると、隊舎の玄関前に四人の女性が集まっている。

フェイト、シグナム、アルフ、リインフォースである。

「それじゃあ、ジャンケンで勝った二名が銀時とデートする事が出来る。いいね？」

フェイトが三人に確認した。

「望むところだ」

「絶対勝つぞ！」

「負けません」

四人は熱い闘志を燃やした。

「あのさ。俺の意見を尊重しようって考えはないの？」

銀時が声をかけるが、四人は聞いてはいない。

「スバル。お前のデイバイン・バスターで、あの四人ぶっ飛ばしてくれない？」

「いや、それは…」

スバルは頭を掻きながら苦笑した。

「いいじゃねエですかイ。女の醜い争いほど、面白いモノはありませんぜ」

腹黒い笑みを浮かべて、沖田が言った。

「沖田さん。ホントいい加減にしてください」
ため息をつきながら、ティアナが言った。

四人は睨み合ったまま動かない。

フェイトは三人を見据えた。

シグナムは攻撃的な剣の使い手だから、おそらくチヨキを出す。アルフとリンフォースさんはサポート役で護りな感じだからパーかな？

シグナムは強く拳を握る。

テスタロッサは、チヨキかグーを出す気がする。

リンフォースはパーを出すか？だがアルフが何を出すか読めない。アルフは鋭い牙を覗かせながら、三人を見た。

うくん。あたしこっぴつという考え事って苦手なんだよなア。もう適当に出しちゃえ。

リンフォースは、ジツと自分の手を見つめている。

そして、

「最初はグー！ジャンケン…ポン！」

それぞれの手を出した。

フェイトはチヨキ。

シグナムはグー。

アルフはチヨキ。

リンフォースはグー。

「ふふ。私達の勝ちだ」

「約束通り。勝った二名の私達が、銀時とデートします」

勝負に勝ったシグナムとリンフォースは、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「負けたアアアア！！」

アルフは頭を抱えて叫んだ。

「そ…そんな…！リンフォースが”グー”を出すなんて…！！？」
フェイトはガクガクと体を震わせ、信じられないと言った顔をしている。

「やはり私が”パー”を出すと思っていたんですね。貴女の考えなどお見通しです」

リンフォースは不敵に笑った。

「ふむ。決まったようじゃな」

煙管をくわえた月詠が言った。

「もうちよい醜く派手に争ってくれりゃあ、最高だったんですけどねエ」

沖田は、少し物足りないと言った顔をした。

「いや、ジャンケンじゃそんなに醜い争いは見れないんじゃ…」
隣にいるティアナが言った。

「それでもねエゼ。チョコキで目潰ししたり、グーで鼻を殴ったり、パーで…」

「それもうジャンケンじゃないでしょ!!」

沖田の言葉を遮って、ティアナがツッコんだ。

「では銀時。私達と一緒に行きましょう」

シグナムとラインフォースが、銀時に近寄った。

「ああ。スバルも一緒にな」

「は？」

銀時の言葉に、二人はポカンとなる。

「いや、俺スバルに市街地行こうって誘われたからよオ」

銀時の横には、少し頬を赤くしたスバルがいた。

シグナムとラインフォースは驚愕した。

た…戦わずして、銀時とのデート権を手に入れただとオオオオ!?
二人は心の中で叫んだ。

*

市街地。

機動六課のみんなは、それぞれ別れて休日を堪能していた。

銀時、スバル、シグナム、ラインフォースの四人は、適当に街を歩いていた。

シグナムとラインフォースは、難しい顔をしている。

街には来たが、デートとは一体何をすればいいのかわからない。

二人が悩んでいると、
「あつ。アイスクリーム屋がある！」
スバルがアイスクリーム屋を見つけた。
「おつ。いいねエ。一つ食おうかな」
銀時とスバルはアイスクリーム屋に向かった。
慌ててシグナムとリインフォースも二人の所へ向かう。
マズイ。このままでは、スバルに銀時を独り占めされてしまう。
二人は焦った。

*

ティアナと沖田は、ゲームセンターにいた。
只今二人でシューティングゲームをプレイ中。
襲い掛かる怪物達を撃ち倒す。
ティアナは見事な銃の腕前で、大半の敵を一人で撃ち倒していく。
「あゝまたティアナのポイントの方が高いや」
悔しそうに沖田が言った。
「シューティングには自信がありますから」
銃を片手に、ティアナは得意げな笑みを浮かべた。
「俺はこういう小さい銃より、バズーカとかデケーのを撃つ方がし
つくりくるんでイ」
「さすがにバズーカでプレイするゲームは、ありませんね…」
ははは、とティアナは苦笑いする。
「それにしてもティアナ。最近俺に絡んでくる時が多くねエかい？」
「えっ!？」
ティアナの顔が赤くなる。
「ベ…別に…！そんな事はないと思いますけど…!」
沖田から顔をそらす。
「もしかして…」
沖田が何か思い当たったように言った。

ティアナは動揺した。
もしかして気付かれた？
横目で沖田を見る。

「ティアナ。お前……」
真顔でティアナを見つめる。

ティアナの顔が、どんどん赤くなる。

そして沖田は、ニヤリと笑みを浮かべて言った。

「そんなに俺のSMプレイが、気に入ったのかイ？」

「違います!!」

顔を真っ赤にして、ティアナは即座に否定した。

*

エリオとキャロは、シャーリーが作ってくれたデートプランをこなしていた。

ただ隊舎前で銀時は、

「そういうのはグダグダでもいいから、自分達で考えろ」

と二人に言った。

まあ銀時自身、ちゃんとした恋愛をした経験がないのだが。

ちなみに二人は今、公園を散歩中。

「なんだが今日は、ほんとにのんびりだね」

エリオに顔を向けながら、キャロが言った。

「そうだね。六課にいる時は訓練ばかりで、銀さん達が来てからいろいろ騒がしかったしね」

特にこの前、食堂で銀時を巡る口論をしていた時のフェイト隊長は凄かった。

「あの時は、ちょっと恐かったね」

「銀さんも、ちょっと気の毒だったし」

思い出しながら、二人は苦笑した。

「次はあっちに行ってみようか」

「うん」

二人は仲良く手を繋ぎながら歩いて行った。

*

なのはとユーノは、喫茶店でお茶を飲んでいた。

「新人達の調子はどうだい？」

「うん。みんな第二段階を無事クリアしたよ」
嬉しそうになのはは答えた。

模擬戦でもスバル達は、いい動きをしてるし、訓練をする度に良くなっている。

ティアナも以前のような無茶な行動はやらなくなり、パートナーのスバルや周りと協力して臨むようになった。

「そうか」

ユーノはお茶を一口飲んだ。

「そういえば、こうしてユーノ君と二人っきりで、のんびりするの
は初めてかな？」

「う…うん。そうかもしれないね」

なのはとユーノの顔が、少し赤くなる。

「フェイトちゃんも銀さんに恋してるんだし、私もそろそろ恋しちゃおうかな」

「えっ!？」

なのはの言葉にユーノは動揺した。

危うく手に持っているカップの中身を、テーブルにぶちまける所だった。

「な…なのは…」

顔を赤くしながら、ユーノはなのはを見つめる。

「ユーノ君」

なのはも顔を赤くしている。

テーブルの上にある二人の手が、そっと重なった。

*

ジャンケンに敗れ、銀時とデートする事が出来なくなったフェイトとアルフ。

「フェイト〜。元気出しなよ……」

ビルの屋上で落ち込むフェイトをアルフが励ます。

フェイトは、はあと本日何度目かのため息をついた。

「また次のチャンスがあるよ。その時に頑張ろう」

フェイトの肩に、そっと手を置いた。

「……うん。ありがとう、アルフ」

アルフに励まされ、フェイトは立ち上がった。

まだ一回失敗しただけだ。これから挽回すればいい。

「銀時。私、諦めないよ」

改めて決意を固めるフェイトであった。

隣のビルの屋上から、月詠が様子を見ていた。立ち直ったフェイトを見て、安心したように笑った。

*

え？はやて達がない？

はやては溜まってる書類を片付けてます。ラインと一緒に。

「うちに休日を〜!!」

部隊長オフィスに、はやての叫び声が響いた。

*

はい、戻って銀時達。

「いや〜食った食った」

「おいしかった〜」

アイスを食べ終えた二人は歩き出した。

二人の後ろをシグナムとリインフォースが歩いている。

「いや、お前ら…」

「アイス六個は食べ過ぎです…」

二人は呆れながらため息をついた。

銀時とスバルは、六個ずつアイスを食べたのだ。

しかも普通よりも量が多い、大体一カップ分くらいのアイスだ。

二人の胃袋は大丈夫なのか？

いや、大丈夫じゃなかった。

「お腹痛いイイイ!!」

スバルがお腹を押さえながら叫んだ。

案の定、アイスの食べ過ぎでお腹を壊したようだ。いくら大好物の

アイスでも、食べ過ぎればお腹を壊すのは当然である。

「まったく」

シグナム達は呆れてため息をついた。

「仕方ありません。私が近くの病院まで運びましょう」

リインフォースがスバルを背中に担いだ。

「銀時。私も二人に付き合う。少し待っていてくれ」

「おお。行ってこい」

スバルを背負ったリインフォースとシグナムは、病院へ向かった。

一人になった銀時は、壁に寄り掛かって待つ事にした。

すると、何か物音が聞こえた。

「ん？」

銀時は物音が聞こえた方を見た。

不審に思い、物音が聞こえた所へ向かった。気のない路地裏に入

った。

そこで銀時は、以外なモノを目にした。

小さな少女がいた。ボロボロの服を着ていて、左腕には鎖が巻かれ

ていた。その鎖の先には、二つの黒いケースが繋がっていた。

「オ…オイ!!」

銀時は少女に駆け寄った。

そっと少女の肩に手を乗せる。

少女は顔を上げて、銀時を見た。

「だ…れ…？」

首を傾げながら、銀時に尋ねた。

銀時は改めて少女の状態を見た。

ボロボロの服に鎖に繋がれた二つのケース。

どう見ても普通ではない。銀時は厄介事の危険を察した。

確か元の世界でも、同じような事があったような。

そう、勘七郎の事件である。あの時は万事屋の前に、勘七郎という赤ん坊が置かれてあって、橋田屋の後継ぎ騒動に銀時は巻き込まれたのだ。

しかもその赤ん坊が、やけに俺に似てたんだよな。それで俺の隠し子疑惑が浮上しちまって酷い目にあ……。

そこまで考えた銀時は、思考を止めた。

ちよっと待て。もしこんな所をフェイト達に目撃されたら……。

そう思った瞬間、銀時は冷汗を流した。

「お……俺は殺される……！」

ガタガタ体を震わせる。

アイツらきつと、俺を幼女誘拐犯とかと勘違いするに違いない。い

や、前回と同じく隠し子だと勘違いされる可能性もある。

そうなったら間違いなく、俺は殺される。

銀時は顔を歪ませ、冷汗を流し続ける。

少女は、不思議そうに銀時の顔を見ている。

銀時は緊張して、唾をゴクリと飲み込んだ。

落ち着け、俺。

そうだ、親を探せ。

この迷子少女の親を探して見つけければ、全て解決だ。

そう決意して、銀時は少女に笑いかけた。

「なアお嬢ちゃん。パパ、ママって呼んでみ」

「パ…パ。マ…マ？」

少女が、銀時の言った言葉を口にした。

すると、路地裏の左右の入口に複数の何かが現れた。

銀時は顔を上げて、路地裏の入口に現れたソレを見た。

現れたのは数体のガジエツトだった。

「オイオイ。随分とメカニツクな両親だな」

思わず銀時は笑みを浮かべた。

第十訓：勝負の王道はジャンケン（後書き）

一人の少女と現れたガジェット

次回、銀時がナンバーズと出会う！？

フェイト「次回、リリカル銀魂 Strikers。『アイスの食べ過ぎにはご注意ください』。テイクオフ！」

第十一訓：アイスの食べ過ぎには注意（前書き）

いや〜暑いですねえ

皆さんもアイス等、冷たい物の摂り過ぎには気をつけてください

セイン「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるよ〜！」

第十一訓：アイスの食べ過ぎにはご注意

入口をガジェット達に塞がれ、銀時と少女は路地裏の真ん中に挟まれた。

「ちっ。また面倒な事になってきたな」

ガジェットを見ながら、銀時は舌打ちした。

少女とケースを見ながら銀時は、ガジェットの狙いを考えた。

少女が狙いとは考えにくい。それなら、少女の鎖に繋がれている二つのケースと考えるのが自然だ。

ガジェット達がゆっくりと銀時達に近づく。

さて、どうしたものかと考える。

すると、下から着物が引つ張られた。銀時は下を見た。

ガジェットに怯えて、少女が銀時の着物を掴んでいる。

銀時は真剣な表情になった。

ガジェット達が一齐に銀時達に襲い掛かる。

銀時は木刀で鎖を斬り、二つの黒いケースを両手で持つ。

「そんなにコイツが欲しけりゃ、くれてやるよ！」

二つの黒いケースを上投げた。

ガジェットの注意が黒いケースに向いた。

その隙に銀時は少女をだき抱え、

「しっかり捕まってる！」

前方にいる五体のガジェットへ突っ込み、木刀を振るった。

木刀の斬撃で五体のガジェットは斬られ、爆発した。休まず地を蹴って、反対側のガジェットの所へ向かった。

残るは四体。

ガジェットが光線を放つ。

銀時は光線をかわし、木刀を振るう。一瞬にして四体のガジェットは斬られ、爆発して粉々に砕け散った。

「よーし、終了オ」

木刀を腰に差しした。

銀時は少女を床に降ろし、さっき投げた黒いケースが降ってきて、両手で受け止めた。

「大丈夫か？」

両手にケースを持ちながら、銀時は少女を見た。

少女は、コクリと頷いた。

とりあえず銀時は一安心した。銀時達の周りには、ガジェットの破片が転がっている。

銀時が少女と向き合った時、地面から人の手らしきモノが出てきた。手はゆっくりと銀時の背後に近づく。手の接近に気付いてない銀時は、背を向けたままだ。チャンス。

地面から女の子が現れ、銀時が持つてる黒いケースを奪おうとした。手が黒いケースに触れそうになった時、

「おっ！小銭見つけ！」

銀時が地面に落ちてる小銭を発見し、体を屈めた。

「えっ！？」

銀時が体を屈んだせいで、黒いケースを奪おうと伸ばした手は空を掴んだ。

「わっわっ！」

しかもバランスを崩して、前にいる銀時に向かって倒れそうになる。「ん？」

銀時が振り返った直後、

「わあああああ！」

女の子は銀時に向かって倒れた。

「んがっ！」

女の子が銀時の背中に倒れ、銀時も地面に倒れてしまった。手に持っていた黒いケースが、二つとも地面に落ちる。

少女はビククリして体を震わせた。

場がシーン、と静まる。

「いたた〜」

女の子は上半身を起こした。

「……いたた〜、じゃねーよ」

下から声が聞こえ、女の子はハツとなった。

恐る恐る下を見た。

銀時が額に青筋を立てて、背中に乗っかっている女の子を睨んでいる。

「ご、ごめん！大丈夫？」

謝りながら女の子は、銀時に聞いた。

「とりあえず、そこからどけ」

睨みながら銀時が言った。

女の子は慌てて銀時の背中から離れた。

銀時は立ち上がって、埃をはたいた。

少女が銀時に抱き付く。

銀時は目の前にいる女の子を見た。薄緑色の髪で、長さは肩ぐらゐまでである。体にピッタリとフィットしたスーツみたいなモノを着ている。

「随分と恥ずかしい恰好してるな。で？お前誰だよ？」

銀時が女の子に尋ねた。

「あ〜…え〜つと……」

女の子は困ったような表情をして、銀時から顔をそらした。

まいったな〜。こんなはずじゃなかったのに。

チラッと銀時を見た。

よりによって坂田銀時と接触しちゃったよ。確かゾーマっていう、生物型のロストロギアを一人で倒した男じゃん。

しかも魔法無しで。

ガチンコで戦って勝てる相手じゃないよな〜。

本当なら、銀時の隙について『レリック』を二つ奪って、そこにいる『マテリアル』も連れていく予定だったのに。

女の子は、大きいため息をついた。

「オイ、何ため息ついてんだよ」

「えっ！？ああ、ごめん」

「ため息つきたいのは、こっちなんだよ。ボロボロの迷子少女を見つけるわ、ロボットに襲われるわ……頼むから俺を休ませてくれ……」
最初は怒っていた銀時だが、何かだんだん落ち込んできた。

ゾーマとの激戦を終えたら、六課では女同士の争いが始まつたり、銀時の周りには騒ぎが絶えない。

「あはは〜。何かお疲れのようで……」

頭をぽりぽり搔きながら、女の子が言った。

「そうだよ疲れてんだよ……今日だって本当なら休日なのに全然休めてねーしよオ」

再び怒りが込み上げてきた。

「俺に休みをくれエエエエエ……ぐおっ！！」

叫んだ直後、銀時は腹を押さえた。

「あれ？銀時どうした？」

女の子が尋ねた。

少女も心配そうに銀時を見ている。

「は……腹が……腹の調子がア……！」

腹を押さえながら、銀時の顔が歪む。

さ……さっきのアイスか？今頃になって、腹の調子が悪くなりやがったア。

ゴロゴロとしたこの感じ。おそらく下痢だ。

銀時は力を振り絞って、女の子の腕を掴んだ。

「た……頼む……！お、俺をトイレまで連れてってくれエ〜！！」

涙目で銀時は頼んだ。

腹の中の暴動が激し過ぎて、一人で歩くことが出来なくなっていた。女の子は少し悩んだが、さすがにこのまま放っておくのは可哀相だと思い、トイレまで連れて行く事にした。

「じゃあ、あたしにつかまって。君もつかまってね〜」

女の子の言う通りにして、銀時と少女は女の子につかまった。二つ

のケースも忘れずに掴んでいる。

「IS『ディープダイバー』」

女の子がそう言うのと、三人は硬い地面の中に沈んでいく。

「おっ！おっ！？何だコレ！？地面に沈んでんぞ！？」

「大丈夫、大丈夫」

慌てる銀時を、女の子が落ち着かせる。

地面の中に沈み、三人の姿はなくなった。

*

小さな公園。

さっきの路地裏から、そう遠くないこの公園のトイレ前に、女の子と少女が立っていた。

公園には今、誰もいない。

「おおおおお！！」

トイレの中から、銀時の叫び声が聞こえてくる。

必死に下痢と戦っているのだろう。

「坂田銀時…か」

外で待つてる女の子は、空を見上げた。

ゾーマを倒して世界を救った男。おっかない人かなアって思ったら、全然イメージしてたのと違ってたなア。

「面白い男だなア」

笑みを浮かべて、女の子は呟いた。

女の子は、銀時が用を足している間にレリックと少女を回収しようかと考えたが、なんとなくやめた。

しばらくして、銀時がトイレから出てきた。

「おっ。戻ってきた」

女の子がそう言った瞬間、少女が銀時に抱き付いた。

「よオ。お前のおかげで助かったぜ。ありがとよ」

銀時は女の子に礼を言った。

「間に合ってよかったねエ」

笑って女の子は答えた。

「ところでよオ。何でワザワザ地下に潜ったんだ？俺の名前も知ってたし」

「あゝ…それは……」

女の子は困った顔をした。

「……まっ、言いたくなくちゃ無理に答えなくていいぜ」

「あはは。そう言ってもらえると助かるよ」

とりあえず女の子はホッとした。

そこで思考を切り替える。

いくらなんでも、手ぶらで帰る訳にはいかない。せめてレリックを一つくらい回収しないと。

だが銀時と戦って勝てる可能性は低い。

どうしようかと悩んだ末、レリックを一つくれないか？とダメ元で頼んでみる事にした。

「あ…あのさア銀時」

「ん？」

「そのケース、一つあたしに出来ない？」

ケースを指差しながら、女の子が言った。

銀時は地面に置いてあるケースを、チラッと見た。

「別にいいけど」

女の子に向き直って、銀時は答えた。

「えっ！？本当！？」

女の子は驚いた。

まさかこんな簡単に手に入るとは思ってたなかった。

「けど大丈夫か？コイツ狙ってる妙なロボットとかいんだぜ？」

ケースを差し出ししながら、銀時が言った。

「え？」

女の子は少し驚いた顔をした。

あたしの心配してるの？まだ会ったばかりなのに。

女の子は、ちよつと複雑な気持ちになった。

あのガジェット、あたし達が所有してる物なんだよね。

「平気、平気。あたし強いからさア」

笑つて答えながら、銀時からケースを受け取った。

「まあ氣イつけるよ」

「おう。後、あたしと会つた事は秘密にしといてくれない？」

「へいへい」

銀時は軽く答えた。

「それじゃあ、あたしは帰るね」

そう言つて女の子は、銀時に背を向けて歩き出した。

途中で足を止めて、銀時に振り返った。

「あたしさ、セインっていうんだ」

女の子、セインは銀時に名乗った。

太陽の光に照らされ、セインの薄緑色の髪が綺麗に輝く。

「また会おうね、銀時」

銀時に挨拶をして、セインは地面に潜水した。

公園には、銀時と少女が残った。

「銀時！」

セインがいなくなつてから少し経つて、シグナムが走ってきた。

「こんな所にいたのか。探したぞ」

「ああ、悪いな。ちつとバタバタしてよ」

頭を掻きながら、銀時は謝った。

「ん？」

そこでシグナムは、銀時の足に抱き付いてる少女に気がついた。

「銀時……その子供はどうしたんだ？」

途端にシグナムの雰囲気が変わり、鋭い目で銀時を睨む。

「あつ！」

銀時は思わず声を上げた。

しまったア！このガキの事すっかり忘れてたアア！

冷汗をダラダラ流す銀時の目の前で、シグナムはレヴァンティンを

構えている。

「返答次第では、ただでは済まんぞ？」

ものっそい殺気を銀時にぶつける。

「た…頼む！せめて話を聞いてくれ！いや、ホントマジでお願い！」

問答無用で痛い目に遭うのは、もう懲り懲りだ。

ああ、さっきのセインって奴がいてくれたら、アイツの潜水魔法で逃げられたのになア。

なんて事を銀時は思っていた。

と、シグナムは、地面に置いてある黒いケースを見つけた。

「こ…これは！？」

さっきまでの殺気や怒りは消え、シグナムは黒いケースを手にとった。

シグナムの様子がおかしく、銀時は首を傾げた。

「お前、それが何か知ってるのか？」

「これはレリックが入っているケースだ！」

真剣な表情でシグナムは答えた。

「レリック？」

銀時は記憶を探った。

確かレリックは、はやて達が搜索してるロストログアだったな。

そこまで思い出して、銀時は目を見開いた。

「ああああああ！！」

急に銀時は大声を出した。

「ど…どうした銀時！？」

驚いたシグナムが尋ねた。

銀時に抱き付いている少女も驚いている。

「あ…いや、何でもねエ……」

動揺を隠せないまま、銀時は答えた。

実物見た事ねーから、わからなかったが、コレがレリックの入ってるケースかよ。

ヤベエ。レリック一つ、セインにあげちまった。

*

どこかの研究所。

「たっただいま」

レリックケースを持って、セインが戻ってきた。

「おかえりっす、セイン姉」

赤い髪を後ろに束ねた女の子が、セインに声をかけた。

「ただいま〜ウエンディ」

赤い髪の女の子、ウエンディに挨拶した。

「戻ったか」

紫色のショートヘアの女性がやってきた。

「トーレ姉」

セインは紫色の髪の女性、トーレに顔を向けた。

「レリック回収してきましたア。一つだけだけど」

そう言っつて、レリックケースを二人に見せた。

ケースを置いて中身を確認する。

「ジャジャ〜ン！」

蓋を開けて中を見る。

赤い結晶、レリックがあった。

「へえ。ちゃんと回収してきたんだ」

茶髪の女の子、デイエチが感心したように言った。

「あたしだつて、ちゃんと任務はこなせるさ！」

セインは胸を張った。

「だが、もう一つのレリックとマテリアルの回収には失敗したようだな」

トーレが厳しい言葉を言った。

セインはガクツと落ち込んだ。

「まあレリック一つを回収できただけでも、良しとしましょう」

栗色の髪を両脇に束ね、眼鏡をかけている女性、クアットロがやってきた。

「クア姉」

セインは、助け船を出してくれたクアットロを見た。

「それじゃあ、私はこのレリックを持って、ドクターに報告しに行くわねエ」

クアットロはレリックを持って、研究室へ向かって行った。

とりあえず、みんな解散した。セインとウエンディの二人が、その場に残った。

「あつ、そうそう。今日、銀時に会ったんだ」

「えっ！？銀時って、あの坂田銀時っスか！？」

セインの言葉に、ウエンディは興奮した。

「銀時って、どんな人だったんスか？」

興味津々でウエンディが尋ねた。

以前ドクターから、過去の銀時とゾーマの戦闘シーンを見せられ、その時からウエンディは銀時に興味を持っているのだ。

「ウエンディはどんな人だと思う？」

逆にセインが、ウエンディに聞いた。

「そうっスね。あの鬼神のような強さだから……物凄く恐ろしいイメージがあるっス」

ウエンディは、映像を見たときの自分なりの意見を言った。

「あゝやっぱり」

「違うんスか？」

ウエンディは首を傾げた。

「あたしも最初はウエンディと同じ考えだったけど、実際に会ってみたら全然違ってたね。面白い人だったよ」

「へエ」

ウエンディは意外そうな顔をする。

「私も会ってみたいっス！」

「あたしも。また会いたいなア」

そんな事を言いながら、二人は廊下を歩いていった。

第十一訓：アイスの食べ過ぎにはご注意（後書き）

ちゃんとナンバーズらしく書けてるか、ものっそい不安です（汗）

レリックをセインに渡しちゃった銀時

今回は、銀時が見つけた少女を巡って、またフェイト達のバトル勃発！？

銀時『パパ』になる！？

フェイト「次回、リリカル銀魂 Strikers。『血の繋がりだけが家族の絆じゃない』。テイクオフ！」

第十二訓：血の繋がりがだけが家族の絆じゃない（前書き）

（作者の今更）

赤夜叉「リリカルなのはStrikerSのキャラ多すぎイイイイ
！！」

少女を連れて機動六課に戻った銀時達

再び女達の戦いが始まる！

沖田「『リリカル銀魂 StrikerS』。始まりませ

第十二訓：血の繋がりがだけが家族の絆じゃない

機動六課。

銀時がレリックと謎の少女を見つけた事で、機動六課の休日は強制終了。全員制服に着替えて、機動六課隊舎に集まった。

部隊長オフィス。

「まさかレリックを見つけてくるとは驚きやな」
はやてが驚き半分、呆れ半分で言った。

「しかも…」

視線を銀時の隣に向けた。

銀時がレリックと一緒に見つけた少女が、銀時の着物を掴んでいた。

「小さな女の子まで連れて」

「しょうがねーだろ。あのまま置いてく訳にもいかねーし」
メンドくさそうに銀時は答えた。

なのは達がやってきた。

「さつき陸士108部隊のギンガから連絡があつて、銀さんがその子を見つけ近くの場所で、トレーラーの横転事故が発生してたの」

「その現場で、中身が空っぽの生体ポッドと、何か重い物を引きずっていった痕を発見したって」

なのはとフェイトが報告した。

「では、その生体ポッドの中に入っていたのは、この少女だと？」
リンフォースが少女を見つめた。

「そうだと思います。さつきこの子の体を検査してみたら、人造生命体である事がわかりました」

最初は検査を嫌がった少女だったが、銀時の説得で何とか検査を受けてくれた。

「で？このガキどうすんだ？」

銀時がみんなに聞いた。

「此処で保護するに決まってるやろ？その子、銀ちゃんに懐いてる

「ようやし」

はやてが当然とばかりに言った。

銀時の中でイヤな予感がした。

「ちよつと待て。え？まさか俺がこのガキの保護者になんのか？」

この流れでいくと確実にそうなる。

何とかそれだけは阻止したい。これ以上の面倒事は、ハッキリ言つて御免だ。

「当たり前や。今日から銀ちゃんは、その子のパパや！」

「ビシィ！」と銀時を指差して、はやてが言った。

「パパ？」

少女は銀時を見上げながら呟いた。

「じよ…冗談じゃないぜ！俺はガキの面倒なんて見ねエぞ！」

銀時は声を荒げて断った。

すると、少女が銀時の着物を引つ張った。銀時が下を向くと、少女が着物を掴みながら銀時を見上げてる。

「パパ」

上目使いで銀時を見つめる。

「う…」

うるうると潤んでる少女の瞳に、銀時はたじろいだ。

「よ…止せ！そんな無邪気な瞳で俺を見るんじゃねエ！」

上目使いをやめるように言う。

だが少女は、上目使いをやめない。

はやては、少女の上目使いにたじろいでる銀時を見て笑っている。

そして銀時は、少女の上目使い攻撃に耐えられなくなり、

「わかったよ！俺が面倒見ればいいんだろ！？やってやるよコノヤ

ロ…！！」

少女の面倒を見る事になった。

少女は嬉しそうに、銀時に抱き付いた。

「決まりやな」

「頑張ってください、銀さん！」

リインが応援した。

「ったく。オイ。お前、名前何て言うんだ？」

銀時は少女に名前を尋ねた。

「ヴィヴィオ」

少女はヴィヴィオと名乗った。

*

隊舎のロビー。

ヴィヴィオを連れだした銀時と、スバル達が集まっていた。

「ええっ！？銀さんがその子の面倒見るんですか！？」

スバルが驚いた声を出した。

周りのみんなも驚いている。確かに銀時が子育てなんて、想像もできない。

「やりましたね旦那。これでガキ二人目ですぜエ」

「オーイ、沖田君。二人目ってどういう事だ？一人目は、勘七郎の事言ってるのか？アイツは俺のガキじゃねエって言っただろうが。殺すぞ」

銀時は沖田を睨んだ。

「しかし、ぬし一人に子育てなど出来るのか？」

月詠が銀時に尋ねた。

ちなみに、今は煙管をくわえていない。さすがに小さな女の子の前では煙管は吹かせない。

「大丈夫ですよ。私が一緒に面倒を見ますから」

そう言ったのはフェイトだった。

「何を言っている、テストロッサ？ヴィヴィオの面倒は、私と銀時が見る」

腕を組んで、シグナムが言った。

「いえ。私が一緒に面倒を見ます」

そう言っって手を挙げたのは、リインフォース。

「あたしが銀時と一緒に面倒見る〜！」

ハイハイ！と手を挙げてアルフも言った。

「どうすんだ、銀時？」

ヴィータが尋ねた。

っていうか、何かヴィータ出てくるの久しぶりじゃね？

銀時は困ったように頭を掻いた。

「では、誰がヴィヴィオの母親になるか、勝負しようではないか」
シグナムが提案した。

「受けて立ちます！」

三人はシグナムの案に乗った。

また四人の争いが始まるうとしていた。

「外でやれエエエエ！！！」

頭痛を覚えながら、銀時が怒鳴った。

「では、訓練場へ行きましょう」

熱き闘志を燃やしながら、四人は訓練場へ向かった。

四人は既にデバイスを持っていたり、狼形態になったり戦闘準備万端である。

銀時は四人が去ったのを見届けると、ダルそうにソファアに座った。
「よし。これで前みたいなのに、四人の争いに巻き込まれて俺が被害を受ける、なんて事にはならないはずだ」

銀時はため息をついた。

「銀さん。大丈夫ですか？」

スバルが声をかけた。

「何でアイツらの戦いなのに、俺が疲れなきゃいけないんだ？」

銀時は頭を抱えた。

頭痛薬でも買いに行こうかと考えた。今まで女にモテなかったので、四人が想いを寄せてくれるのは嬉しい。

だが、その四人の争いに自分を巻き込まないでほしい。

外から、ドカーン！バコーン！ズガン！と魔法を撃ち合ってる音が聞こえてくる。どんだけ激しい戦いしてんだよ。

ふと銀時はある事を思い出し、ヴィヴィオを見た。
「ヴィヴィオ。ちょっといいか？」
ヴィヴィオは首を傾げた。

*

ロビーを出て、銀時とヴィヴィオは誰もいない廊下にいる。
銀時は屈んで、ヴィヴィオに視線を合わせた。

「いいかヴィヴィオ？俺がセインってガキに、レリックを渡した事は誰にも言っなよ？」

真剣な表情で銀時が言った。

レリックを見知らぬ誰かに渡した、なんてはやて達に知られたら間違いないぶっ飛ばされる。

「言ったらダメ？」

首を傾げながら、ヴィヴィオが言った。

「そつだ。俺とヴィヴィオだけの秘密だ。いいな？」

念を押すように銀時が言う。

「ヴィヴィオと銀時パパだけの秘密？」

「そつだ」

銀時は頷いた。

「わかった。誰にも言わない。ヴィヴィオとパパだけの秘密」

ヴィヴィオは無邪気な笑顔で頷いた。

秘密という言葉の意味をヴィヴィオがわかっているか怪しいが、誰にも言わないと約束した。

「よし、いい子だ」

ヴィヴィオの頭を撫でた。

とりあえず、銀時は一安心した。

これで多分、レリックを一つあげちゃった事はバレない。安心して銀時が立ち上がった時だった。

窓ガラスが割れ、金色の閃光が飛んできた。どうやら訓練場で戦っ

ているフェイトの魔法が、狙いが外れて隊舎に飛んできたようだ。金色の閃光は、真っ直ぐに銀時に迫り、

「ごばあー!!」

見事にクリーンヒットした。

閃光を受けた銀時は、壁に叩きつけられ、ズルズルと力無く床に倒れた。

「パパ!」

ヴィヴィオが銀時に駆け寄った。

「パパ! しっかりして!」

涙目で銀時の体を揺する。

閃光を受けて、銀時の天然パーマは爆発ヘアになっていた。

「……何でこーなるの?」

黒焦げの銀時が呟いた。

*

一時間後。

「銀時、勝ったよ!」

バリアジャケットをボロボロにしたフェイトが戻ってきた。

フェイトの後ろには、同じくボロボロになっているシグナム達がい
た。

「く……! このシグナム、一生の不覚!」

悔しそうに歯を食いしばる。

「また負けたア……!」

アルフは、ガツクリと肩を落としている。

「…銀時と私の幸せな家庭が……」

リンフォースもかなり落ち込んでいる。

「いや〜良かったねエ」

黒焦げの銀時の眉は、イライラとひくついている。

「あれ? 銀時、どうして黒焦げになってるの?」

フェイトが尋ねた。

「オメーにやられたんだアアア！」

額に青筋を立てて、銀時が怒鳴った。

周りで様子を見ている皆は、苦笑している。

はやてと沖田だけは、楽しそうに笑っていた。

*

とりあえず勝負は着いたので、フェイトがヴィヴィオの母親代わりになる事になった。

三人はロビーを出て、フェイトの部屋にいる。

「ヴィヴィオ。今日から私がヴィヴィオのママだよ」

「ママ？」

ヴィヴィオは首を傾げた。

「そう」

フェイトは、優しい笑顔をヴィヴィオに向けた。

ヴィヴィオは、銀時とフェイトを交互に見た。

「銀時パパに、フェイトママ？」

「うん。そうだよ」

ヴィヴィオは嬉しそうに笑った。

やれやれという風に、銀時はため息をついた。

そして心の中で、ひそかにこう願った。

ヴィヴィオが凶暴な女になりませんように。

*

夜。

銀時は自分の部屋に戻ろうとしたが、ヴィヴィオが嫌がって泣き出した。

フェイトが泣き止ませようとするが、なかなか泣き止まない。この

ままでは安眠できないと判断した銀時は、仕方なくフェイトの部屋で一緒に寝る事にした。

三人でベッドの中に入る。するとヴィヴィオは泣き疲れたのか、早く眠りについた。小さな寝息を立てて、二人の間で眠っている。その寝顔は、とても幸せそうだった。

「やれやれ。散々泣きわめいて、迷惑かけたヤツが先に寝やがって

…」

ヴィヴィオの寝顔を見ながら、銀時が言った。

「それじゃ、私達も寝よつか」

「……あのさ…俺、ここで寝なきやダメ？」

一応、フェイトに聞いてみた。

「できれば一緒に寝てほしいな。ヴィヴィオと私のためにも」

「さりげなく自分も入れるのね」

だが、さっきのヴィヴィオの反応からすると、朝起きて銀時の姿がないとヴィヴィオが泣く可能性がある。

銀時は諦めたように、ため息をついた。

「わーっ たよ。今夜だけだからな」

仕方なく、銀時は了承した。

「うん。ありがとう、銀時」

そう言つて、フェイトは銀時にキスをした。

驚いた銀時は、目を見開いた。

「おま…！俺ア積極的な女は嫌いだぞ！？」

動揺しながらも銀時は、ヴィヴィオを起こさないように小声で言った。

「でも、私は銀時が好きだよ？」

「う…！」

銀時は一瞬たじろいだ。

小さい頃の面影はあるものの、フェイトは立派な大人だ。パジャマが少しはだけて下着が見えていて、色っぽい恰好だ。

「それに言ったでしょ？いつか絶対に銀時を振り向かせるって」

微笑みながらフェイトが言った。

銀時もフェイト達の気持ちだが、わからないでもない。前の時や昼間の時の争いが起きるのも、本当に本気で銀時の事が好きだからである。

結果、フェイト達は積極的に動くのだ。

考えてみれば、フェイト達は十年も銀時の事を想っているのだ。そんな長い間、一人の人物を想い続ける人なんてそうそういない。

「じゃあ、おやすみ銀時」

「ああ」

明かりを消して、フェイトも眠りについた。

一人起きてる銀時は、ぼりぼりと頭を搔いた。

今まで気付かなかったが、俺アとんでもねエ幸せ者かもしれねエなア。

隣で寝てるヴィヴィオを見る。

「フェイト達みたいなの、強くて優しい、いい女になれよ」

そう言って、銀時も眠った。

機動六課初の休日は、新たな家族が加わって終わった。

第十二訓：血の繋がりがだけが家族の絆じゃない（後書き）

いや〜今回も疲れたなあ

今回は、銀さんと他数名が陸士108部隊に行きます

ユイ「次回、リリカル銀魂 Strikers。『宝探しは下調べを充分にしてからやれ』。テイクオフ！」

第十三訓：宝探しは下調べを充分にしてからやれ（前書き）

陸士108部隊のギンガ・ナカジマ

ゲンヤ・ナカジマ

スバルの姉と父親です

シグナム「『リリカル銀魂 Strikers』。始まります」

第十三訓：宝探しは下調べを充分にしてからやれ

ヴィヴィオが機動六課に来てから数日。

ヴィヴィオの保護責任者になってから、銀時の朝は刺激的になった。カーテンの隙間から太陽の光が差し込んできて、部屋はそれなりに明るい。

朝目を覚ますと、まず目に入るのは天井。意識がハッキリしてきて、自分の体の上に何か乗っかっている感触がした。視線を腹の辺りに向けると、ヴィヴィオが銀時の腹の辺りに乗っかって寝ていた。またか、と思いながら銀時は、起こさないようにヴィヴィオをゆっくりと腹から降ろして、ベッドに寝かせた。

眠い目を擦り、欠伸をしながら上半身を起こす。太陽の光が眩しい。

「おはよう銀時」

女性が挨拶する声が聞こえた。

顔を声がした方へ向けると、そこにはフェイトがいた。

しかも着替えの途中で、下着姿である。

「いや、おはようじゃねーよ！オメーまだ着替えてなかったのかよ！？」

ベッドの上で、銀時は慌てふためく。

朝っぱらから美女の下着姿を見たら、誰でも慌てる。

銀時も例外ではない。

「あはは。ごめんね銀時。すぐ着替えるから」

少し恥ずかしがりながら、フェイトは着替えを続けた。

「つーか俺が目エ覚ますと、必ずと言っていいほどお前着替え中だよな。何？ワザとやってんの？」

細目でフェイトを睨む。

結局、ヴィヴィオの保護責任者になった日から、銀時はフェイトの部屋で三人一緒に寝ているのである。

ちなみにシグナム達は、毎日フェイトに嫉妬と怒りの混ざった視線

をぶつけている。

フェイトが着替え終わると、ヴィヴィオが目を覚ました。大きく欠伸をして上半身を起こす。

「おはよう、ヴィヴィオ」

フェイトが挨拶した。

「おはよう、フェイトママ」

まだ少し眠そうにしながらヴィヴィオも挨拶し、隣にいる銀時に顔を向けた。

「おはよう、銀時パパ」

「おお」

頭を掻きながら、銀時はヴィヴィオに返事をした。

*

部隊長オフィス。

朝食を食べ終えた銀時は、たまもはやてに呼び出された。メンドクさがりながらも、銀時は部隊長オフィスにやってきた。

「今度は何の用ですか？部隊長殿」

いつもの気だるげな声で、銀時は尋ねた。

「実は、銀ちゃんに陸士108部隊に行ってもらいたいんや」

「何で俺が？」

銀時は目を細めた。

「人手が足りんらしくてな、うちの部隊の人を何人が貸してくれって頼まれたんや」

「だから何で俺？」

再度、銀時は尋ねた。

「銀ちゃん、頼まれれば何でもやる『万事屋』やる？」

「ここで万事屋出すのかよ。つーか依頼なら、出すもん出してもらわにゃ」

手をはやての前に差し出して、クイッククイックと動かした。

依頼料を請求しているのだ。

「まあ、働いた分の給料くらいは出るはずや」

「後払いかよ」

仕方なく銀時は、手を引つ込めた。

「あと何人が一緒に連れてってな」

「では、私も行きます」

すかさず手を挙げたのは、リインフォース。

「まあ、うつすら予想はしてたけどな」

銀時は、軽いため息をついた。

*

隊舎ロビー。

銀時は、沖田達やフォワード四人、その他何人がロビーに集めた。

「つーわけで、一緒に陸上部隊に行きたいヤツ、いねーか？」

説明し終えた銀時が尋ねた。

「陸上部隊じゃなくて、陸士108部隊です！」

ティアナが銀時の間違いを訂正した。

すると、沖田が手を挙げた。

「暇なんで行きやす」

「沖田決定」

沖田が前に出て、銀時の隣に立った。

「わ…私も行きます！」

沖田が行くと聞いて、慌ててティアナが手を挙げた。

「おっ。その慌てよう。さては沖田に…」

「ち…違います！そんなんじゃないやありません！！」

顔を真っ赤にして、ティアナは銀時の言おうとした事を否定した。

「若いつていいねエ。ティアナ決定」

顔を赤くしたまま、ティアナは沖田の隣に立った。

「あの…私も行きます！」

スバルが手を挙げた。

「おつ、スバルか。姉ちゃんに会いたくなつたか？
ちやかすように銀時が言った。」

「まあ、それもありますけど……」

スバルは恥ずかしがりながら、少し顔を俯かせる。

銀時と一緒にいきたい、とは恥ずかしくて言えないようだ。

「ん？よくわかんねエが、まあいいや。スバル決定」

スバルが銀時の隣に立った。

「んじゃこのメンバーで、陸士108部隊に行く事にする」

こうして、銀時と一緒に行くメンバーが決まった。

ちなみに、真つ先に手を挙げそうなシグナムとアルフは、この場にはいない。

シグナムは、

「アタシらは、仕事があるだろ」

と、ヴィータに言われ、連れていかれてしまった。

アルフは、

「そろそろ戻ってきなさい」

と、プレシアに呼び戻されてしまった。

フェイトは、残ってヴィヴィオの面倒を見る事にした。

「パパ……」

ヴィヴィオが寂しそうに銀時を見る。

「そんな顔すんなよ。今日中には帰るからよ」

銀時は、そつとヴィヴィオの頭に手を乗せた。

「だから、フェイト達といい子で待ってるよ？」

「うん！行ってらっしゃい、パパ！」

頭を撫でられ、ヴィヴィオは笑顔になった。

「行ってらっしゃい、銀時」

「行ってらっしゃい、銀さん」

フェイトとなのはも、銀時に挨拶した。

「おつ」

銀時達は機動六課隊舎を出て、陸士108部隊へ向かった。

*

陸士108部隊。

銀時達は、陸士108部隊の前に到着した。

「ここか」

銀時は建物を見上げた。

すると入口から、制服を着た一人の女性局員が出てきた。

「ギン姉！」

スバルが、出てきた女性局員に駆け寄った。

「スバル、久しぶり。元気だった？」

「うん！」

スバルと女性局員は、楽しそうに会話をする。

「あれがスバルの姉ちゃんかい？」

「そうよ。スバルの姉で、陸士108部隊の陸曹、ギンガ・ナカジマさん」

ティアナが沖田に答えた。

髪の色はスバルと同じだが、長さはギンガの方が長い。

ギンガが、銀時達に歩み寄った。

「お久しぶりです、ギンガさん」

ティアナが挨拶した。

「ティアナ。元気だった？」

「はい」

ティアナとの挨拶も済ませ、ギンガは銀時達に向いた。

「貴方達が坂田銀時さんと沖田総悟さんですね。私は陸士108部隊のギンガ・ナカジマです」

「どうも」

二人は短く返事をした。

「お話は、はやくさんから聞いてます。お父さんの所へ案内します」

ギンガの案内で、銀時達は中に入った。

しばらく廊下を歩いて、部隊長室の前で止まった。

扉を開けて中に入る。

「お父さん。六課から銀時さん達が来たわよ」

「おう」

部屋の中には、白髪の男がいた。

「部隊長のゲンヤ・ナカジマだ。お前さん達が、坂田銀時と沖田総

悟か？」

「ああ」

「どうも」

二人はギンガの時みたいに、短く返事をした。

「スバル、ティアナ。それにリインフォースも元気そうだな」

ゲンヤは三人を見た。

「うん！」

「ゲンヤさんも、お元気そうでした」

「ご無沙汰してます」

三人は、それぞれゲンヤに挨拶した。

「そんで？俺達は何をすりゃいいんだ？」

銀時が尋ねた。

「実はな、ちょっとお前さん達に資料整理を手伝ってもらいてエ

だ」

「は？」

銀時は片眉を上げた。

*

資料室。

ゲンヤに頼まれたのは、資料室にある資料を整理する事だった。テーブルに山積みされている資料を棚に戻す。それが今回の仕事内容である。

「ただの雑用じゃねーか」

文句を言いながら、銀時は資料を一つずつ棚に戻していく。

「まあ、これも仕事ですから」

隣でリインフォースも資料を棚に戻す。

「沖田さん！本を踏み台にしないでください！」

ティアナが注意した。

「悪い。でも気持的には、土方さんを踏んづけてるんで」

「そういう問題じゃありません！ってかどんだけその上司嫌いなんですか！？」

沖田とティアナの漫才が繰り広げられていた。

「二人とも、すっかり仲良しですよねエ」

二人のボケとツツコミの光景を見ながら、スバルが言った。

「こりゃあツツコミ役は、ティアナで決まりか？」

銀時はそう思った。以前はユーノをツツコミ役に推していたが、出番が減ってきてるので諦めかけていた。

沖田達の方を見ていて、銀時は床に置いてある本につまづいた。

「おわっ！」

バランスを崩し、銀時は棚にぶつかった。

棚の中から資料やら分厚い本やらが、ドサドサと落ちてきた。

「あゝあ。旦那やつちまいましたねエ」

沖田は床に落ちた資料と、倒れてる銀時を見下ろした。

「ああ！くそっ！何でこんな目に…！」

怒鳴りながら銀時は起き上がった。

「ちゃんと片付けてくださいよ、旦那ア」

そう言っつて沖田は、資料を持って奥の方へ行つた。

ティアナも沖田に続いて、奥へと歩いていった。

「大丈夫ですか、銀さん！？」

「銀時。怪我はありませんか？」

スバルとリインフォースが、銀時に駆け寄った。

「ああ、大丈夫だ。心配いらねーよ」

頭を摩りながら銀時は答えた。

「よかった。あの…片付け手伝いしましょうか？」

「いいよ。片付けは自分でやっから、オメーは資料整理、続けてろ」
銀時は手を振って、スバルに資料整理を続けるよう促した。

「そうですか…じゃあ私向こうの方の整理しますから、何かあったら呼んでください」

「おお」

スバルは資料を持って移動した。

「ったく。資料がゴチャゴチャして、頭の中もゴチャゴチャになってイライラしてきたぜ」

文句をグチグチ言いながら、銀時は落としたりした資料を片付け始めた。

「手伝いましょうか？」

隣で資料整理しているリインフォースが聞いてきた。

「いいって。自分の仕事や…？」

リインフォースの申し出を断ろうとして、銀時は言葉を止めた。

「…銀時？」

不審に思ったリインフォースは、首を傾げた。

銀時はリインフォースには答えず、ある一点を見つめながら手を伸ばした。

資料の中から掴み取ったのは、一枚の古そうな紙。

両手で持って、紙を見て銀時は驚愕の表情を浮かべた。

「こ…こいつア…！！？」

興奮して、紙を持つ銀時の両手が震える。

「どうしました、銀時？」

リインフォースは屈んで、銀時が手にしてる紙を覗きこんだ。
紙には地図が記されていて、ある一点に×印があった。

「た…宝の地図じゃねエかアアア！？」

出来るだけ小さな声で銀時が言った。

「宝の地図…？」

リインフォースは怪訝な顔をした。

「間違いねーよ。だって古い地図に×印だぜ？宝の地図に間違いねえよ！」

興奮しながら銀時が語る。

「いや、ですが…何で陸士108部隊の資料室に？」

リインフォースは、信じられないと言った顔をしてる。

銀時はリインフォースの言葉を気にせず、キョロキョロと周りを見回した。

沖田達は資料整理を続けている。

「リインフォース。こっそり此処から出て、一緒に宝探しに行こうぜ？」

「は？」

リインフォースは顔をしかめた。

「いえ、しかし…仕事をサボる訳には…」

「四割だ」

リインフォースの言葉を遮り、銀時が交渉に出た。

「宝探しに協力してくれたら、見つけた宝の四割をくれてやる」

銀時は邪悪な笑みを浮かべる。

リインフォースは呆れた顔をした。

「はあ……わかりました。私も一緒に行きます」

仕方なく、宝探しに付き合う事にした。

最初は断ろうと思ったのだが、放っておけば銀時は一人でも探しに行くだろう。銀時はどんな無茶をするかわからない。

私も一緒に行つて、銀時が無茶をしないように見張ろう。

「よし。そうと決まれば、後は行動あるのみだ」

銀時は宝の地図を懐にしまった。

そして二人は沖田達に気付かれないように、静かにコッソリと資料室を出た。

*

資料整理をサボり、陸士108部隊を出た二人は宝探しに出発した。二人は、街から離れた森の上空を飛んでいた。リインフォースが、両手で銀時を掴んで飛んでいる。

「どうですか銀時？」

「もうちょい先だな」

地図を見ながら、銀時が指示した。

少し飛んでると、小さな丘を見つけた。銀時は地図と丘を交互に見た。

「リインフォース。あそこの丘に降りてくれ」

二人は丘の上に降りた。

特に変わった所はない、普通の丘である。

「地図によると、この丘の前辺り……」

地図を見ながら前に進んだ。

「銀時！」

「おおおおっ！」

案の定、銀時は足を滑らせて、崖の下に消えて行った。

「いでっ！」

銀時はケツから地面に落ちた。

「銀時！大丈夫ですか？」

リインフォースが降りてきた。

「いただただ……ったく。今日はヒデー目に遭う日だな」

尻を摩りながら、銀時は立ち上がった。

崖はたいした高さではなかったので、銀時に怪我はない。

「まったく。気をつけてください」

ため息をつきながら、銀時に注意した。

再び銀時は地図を見た。丘の前に×印がある。丁度今、銀時達が立っている場所だ。

「ここだ！」

銀時は地図をしまい、持ってきたシャベルで穴を掘り始めた。

「大判小判ザクザク！」

シャベルを使つて穴を掘り続ける。

「この世界に、大判小判があるのですか？」

リインフォースが疑問を口にした。

ちなみにリインフォースは、穴掘りを手伝わず、隣で様子を見ている。

「大判小判じゃなくても、宝なら何でもいいんだよ！」

金の亡者、いや宝の亡者となった銀時は、休まず掘り続ける。

銀時の金に対する執着が、これほどとは……。

リインフォースは改めて驚いた。

掘り続けていると、カツンとシャベルが硬い物に当たる音がした。

「おっ！」

シャベルを置いて、手で土を掃つた。

すると、土の中から金属製の箱が出てきた。

「おおっ！マジで出てきたぜ！」

興奮しながら箱を持つ。

リインフォースも驚いた顔をする。

銀時は穴から出て、箱を地面に置く。

「さうで。中には、どんなお宝があるのかな？」

ニヤニヤ笑いながら、箱の蓋に手をかけた。

さつきまで興味がなかったリインフォースも、緊張した顔で見ている。

ゆっくりと蓋を開ける。

そして二人は見た。箱の中にあるモノを。

「ん？」

二人は目を細めた。

箱の中には、一枚の紙があった。

銀時は紙を手にとって見た。リインフォースも覗きこんだ。

紙にはこう書かれてあった。

『管理局を辞めたら、けん玉作る職人になりたいです（笑）』

けん玉局員』

「これは……？」

リインフォースは首を傾げて考えた。

地図。箱。中に入っていた紙。

「もしかして…昔の若い局員が埋めた、タイムカプセルでしょうか？」

とリインフォース。

「笑えるかアアア（怒）」

銀時は怒鳴りながら、紙をビリビリに破った。

「何しようもねエ事書いてんだ、この馬鹿局員！？けん玉じゃなくても、他にいろいろあるだろ！どんだけ、けん玉好きなんだよ！！」
額に青筋を立てて、銀時が怒鳴る。

黙って仕事を抜け出して、宝だと思つて掘つてみたら実はタイムカプセルでした、なんてオチに銀時は落ち込んだ。

ガクツと地面に膝をついた。

「銀時。帰りましょう」

リインフォースが、優しく銀時の肩に手を置いた。

大きいため息をつき、銀時が立ち上がった時、

「動くな」

突然、声が聞こえた。

銀時は顔を上げて、前を見た。

そこには紫色のショートヘアの女性、トーレが銀時に紫色の刃のよ
うな物を向けていた。

「なっ！？」

リインフォースは周りを見回した。

数人の女性が、銀時とリインフォースを囲んでいた。

「え？何これ？どういう事？」

銀時とリインフォースは背中を合わせた。

「あれ？もしかして…」

聞き覚えのある声が聞こえた。

銀時は声がした方を見た。

そこには、

「ああ！やっぱり銀時だ！」

以前路地裏で出会った、セインという女の子がいた。

「お前…セイン！？」

銀時は目を見開いて驚いた。

「あたしの名前、覚えててくれたんだ！」

セインが嬉しそうに笑った。

「おおっ！本物の銀時っスー！」

興奮した声を出して現れたのは、ウェンディ。

「……誰？」

銀時は目を細めた。

第十三訓：宝探しは下調べを充分にしてからやれ（後書き）

ナンバーズに囲まれた銀時とリインフォース

果たして二人の運命は！？

ウエンディ「次回、リリカル銀魂 Strikers。『人造生命
体も戦闘機人も人と変わらない』。テイクオフ！」

第十四訓：人造生命体も戦闘機人も人と変わらない（前書き）

ナンバーズ達って普段、何食べてるんでしょうね？

ナンバーズの中に、料理出来る人いるのかな？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第十四訓：人造生命体も戦闘機人も人と変わらない

銀時とリンフォースは、ナンバーズに囲まれていた。一触即発の緊張感が場を支配していたが、二人のナンバーズと銀時によって、緊張感は壊れた。

「銀時、元気だった？」

セインが親しげに声をかけた。

「ああ、まあな。つーかお前、まだそんな恥ずかしい恰好してんのか？」

銀時も普通に返事をする。

「わああ！坂田銀時、初めて生で見るとス！もう感激っス！！」
テンション上げてはしゃいでるのは、ウエンディ。

「え？何？俺ってそんなに有名なの？」

はしゃぐウエンディに、銀時が尋ねた。

「当たり前っスよ！なんせゾーマを倒して、世界を救った英雄っスから！」

興奮しながらウエンディは答えた。

両拳を握って、興奮を抑えられないでいる。そんなもって、銀時に尊敬にも似た眼差しを向けている。

銀時に尊敬の眼差しを向ける者が、この世にいたとは驚きである。

「え？マジで？ちよっ…その目やめてくんない？あんまり見つめられると、照れちゃうから」

銀時は嬉しいような困ったような、複雑な表情を浮かべた。

「照れてる銀時って、可愛いな」

笑いながらセインが言った。

「おい。大人をからかうんじゃないエ！」

三人はワイワイ会話を続ける。

その様子を見ているリンフォースや、他のナンバーズのメンバーは目を細めていた。

何でそんな仲良いの？

全員が疑問に思った。

すると、トーレの前に画面が現れた。

画面には、紫色の長髪の女性が映っている。

「トーレ。ドクターが彼を招待したいと言ってます。彼らの中へ案内してください」

女性がトーレに指示した。

「……わかりました」

トーレは頷きながら了解した。

彼女の前から、画面が消える。

改めてトーレは、銀時達を見た。何か三人とも、楽しそうに会話をしている。

敵と仲良く会話をしている二人の妹を見て、トーレは思わずため息をついた。

今度は、銀時の隣にいるリインフォースを見た。彼女は何やら、嫉妬のこもった視線をセインとウエンディに向けている。

あの男もそうだが、自分達の立場がわかっているのか？

調子が狂う。

そう思いながら、トーレは銀時達に歩み寄った。

「坂田銀時。ドクターが会いたがっている。我々と一緒に来てもらおう。もちろんお前もだ」

トーレは最後に、リインフォースを見た。

銀時は無駄とは思いながらも、一応聞いてみる事にした。

「断る権利は？」

「ない」

トーレが即答した。

「まあいいじゃん。行こうよ、銀時」

セインが気楽に言った。

「銀時。ここは彼女達に従いましょう」

出来るだけ戦闘は避けたい、と考えているリインフォースが言った。

銀時はため息をついた。
こりゃあ今日中に六課に帰るのは、無理かもしれねエなあ。
帰ったらフェイト達に殺されるな。
そう思いながら、銀時はリインフォースと共に、ナンバーズの後に
ついて行った。

*

スカリエツテイのアジト。
アジトの入口は、タイムカプセルが埋まっていた場所の近くにあっ
た。

銀時達は、ナンバーズの案内でアジト内を進んでいた。長い廊下を
歩いていくと、広い部屋に出た。

そこには沢山の生体ポッドが壁際にズラリと並んでいて、ポッドの
中には裸の女性が一人ずつ入っていた。

何だコイツは？

銀時は、目を細めてポッドを見た。

リインフォースも警戒しながら、周りを見ている。

ナンバーズ達も、銀時達が妙な動きをしないか警戒しているが、セ
インとウェンディだけは特に警戒してる様子はない。

少し歩いてると、銀時は小さな少女を見つけた。長い紫色の髪で、
年はキャロと同じくらいに見える。少女は、ジッと上の方を見つめ
ている。

「何見てるの、銀時？」

セインが、少女を見ている銀時に声をかけた。

「アイツは？」

少女を指差しながら、銀時が尋ねた。

「ああ、ルーお嬢様っスね」

ウェンディが答えた。

「ルーお嬢様？」

銀時は片眉を上げた。

「ルーテシア・アルピーノ。ベルカ式ベースの召喚魔法を操る魔導師だよ」

セインが説明した。

ふうん、と短く応え、銀時は前を向いた。

しばらく歩いていくと、扉の前に到着した。

「中に入れ。ドクターが待っている」

トーレが言った後、扉が開かれた。

銀時は、部屋の中へ足を踏み入れた。

リインフォースも入ろうとしたが、

「お前はここにいろ」

ナンバーズに止められてしまう。

リインフォースは、ナンバーズを睨んだ。

銀時が振り返って、リインフォースを見た。

「心配いらねーよ。外で待ってる」

「銀時…」

リインフォースは、心配そうに銀時を見つめた。

銀時が部屋の中へ入り、扉が音を立てて閉じた。

「ようこそ」

部屋の奥から男が現れた。

紫色の髪で、白衣を着ている。

「はじめまして。坂田銀時。私はジェイル・スカリエッティだ」

口元を歪めて、スカリエッティは自己紹介した。

「テメーも俺の事知ってるのか…」

「もちろんさ。映像でキミとゾーマの戦いは見させてもらった。キミは素晴らしいよ。Sランクを超える魔力と強さを誇ったゾーマを、キミは魔法なしで、剣だけで倒した！その強さ、実に興味深い！」

スカリエッティは、狂気にも似た笑みを浮かべる。

銀時は若干引きながら、ため息をついた。

「男に興味持たれても、嬉しかねーよ。っーか帰っていい？」

「まあ待ちたまえ。もう少し居てくれてもいいじゃないか」

「いや、早く帰んねーと俺、殺されるから……」

銀時は想像した。

帰りが遅くなり、それに心配して怒ったフェイト達を。みんなそれぞれデバイスを構え、必殺の魔法を撃ってくるに違いない。ヴィヴィオも泣いて抱き付いて、離れなくなるかもしれない。

まあヴィヴィオの方はなんとかなるとして、フェイト達の方はさずかに止めるのは無理だ。

緊張と恐怖のせいか、銀時はゴクリと唾を飲み込んだ。

「キミは帰りたいだろうが、彼女達はキミに居てほしいみたいだぞ」
視線を銀時の後ろに向けて、スカリエツティが言う。

銀時は後ろを振り返った。

そこには、いつの間にかセインとウエンデイがいた。

「銀時」

「一緒に居てほしいっす」

上目使いで、二人は銀時をお願いした。

銀時は、横目でスカリエツティを睨んだ。

野郎。男の頼みじゃ断られると思って、女のコイツらに……。

スカリエツティがニヤリと笑った。

銀時は額に青筋を立てた。

腹立つ。ああいう憎たらしい嫌な笑みは、本来俺か沖田がやるもんだ。

「銀時」

横からセインとウエンデイが、上目使いで迫ってくる。

銀時は、ため息をついた。

「……わかったよ。一泊二日してやるよ」

諦めたように言った。

「やった〜!!」

セインとウエンデイは、ハイタッチして喜んだ。

「よくやった君達！任務成功だ！」

両手を上げてスカリエッツィが言った。

殴っていいか？

イラッときた銀時は、スカリエッツィを睨んだ。

「そうだ。少し大事な話があるから、彼と二人っきりにさせてくれないかい？」

「わかりました」

「銀時、また後で会おうっす！」

スカリエッツィに言われ、二人は部屋を出た。

再び部屋には、銀時とスカリエッツィの二人だけになった。

「何だよ、大事な話って？」

頭を掻きながら、銀時がメンドくさそうに聞いた。

「『プロジェクトF』の二人は、元気でやっているかい？」

スカリエッツィの言葉に、銀時はピクリと反応した。

「フェイト・テストロツサ。エリオ・モンディアル。この二人はプロジェクトFによって生み出された人造生命体だ」

「……何でテメーがそんな事知ってたんだ？」

目を鋭くして、スカリエッツィを睨む。

フェイトが人造生命体である事は、銀時も知っている。

だが、エリオも同じ人造生命体だったとは知らなかった。

「プロジェクトFのベースとなる、基礎論理を構築したのは私なんだよ」

自慢話をするような感じで、スカリエッツィが言った。

「な……！？」

銀時は驚愕した。

てっきりプレシアが独自に作り出した技術だと思っていたが、その基となるモノを構築したのは、この男だったのか。

「プロジェクトFの残滓である、あの二人にも興味があつてね……」
画面を出して、フェイトとエリオを映し出す。

興味深そうに画面を見て、スカリエッツィは笑みを浮かべた。

その時、スカリエッツィは凄まじい怒気を感じた。

画面から目を離し、目の前にいる銀時を見た。

怒気を放ちながら、銀時はスカリエッツィを睨んでいる。

「……アイツらの事を『残滓』なんて呼ぶんじゃない」

凄みの加わった声で、銀時が言った。

スカリエッツィは、銀時の怒気に怯む事なく、真っ直ぐに銀時を見ている。

「確かにアイツらは、テメーの論理が基になつてゐる技術で生まれたけどな、アイツらは俺達と変わらねエ、『人』として生きてんだ」

「……………」

スカリエッツィは、黙つて銀時の話を聞いている。

「アイツらを物扱いする野郎は、俺が許さねエ」

今にも斬りかかりそうな雰囲気を出す銀時。

「そうか。それは失礼した」

画面を消し、スカリエッツィは銀時に謝った。

「どうやらキミにとって、彼女達は掛け替えのない存在のようだね」
笑みを浮かべながら、スカリエッツィが言った。

「…俺の大事なもんを手を出す奴ア、誰だろうと叩つ斬る。よく覚えとけ」

「肝に命じておこつ」

銀時はスカリエッツィに背を向け、扉に向かって歩き出した。自動的に扉が開き、銀時は部屋を出た。

こうして、銀時とスカリエッツィの初顔合わせは終わった。

*

スカリエッツィの部屋を出た銀時は、ナンバーズ達が集まつてゐる広い部屋にやってきた。

「銀時」

ナンバーズと一緒に、部屋で待っていたリインフォースが駆け寄ってきた。

「よオ。待たせたな」

「大丈夫でしたか？」

「ああ。少し話したただけだ」

そう言うのと、銀時は近くの椅子に座った。

「銀時〜！」

セインとウエンデイがやってきた。

銀時は、だらつとした視線を二人に向けた。

リインフォースも顔をしかめる。

他のナンバーズの視線も銀時達に集まる。

「ドクターと、どんな話したの？」

「世間話」

銀時は適当に答えた。

「そついやア、セイン。前から気になってたんだがよ…」

「ん？何？」

セインは首を傾げた。

「お前ら、その恰好何なの？何で全身タイツみてーな恰好？シッ

カーの戦闘員ですかコノヤロー」

セイン達を見ながら、銀時が言った。

トーレ達は、何だか馬鹿にされてる気がして眉をひそめた。

「一応あたし達の戦闘服なんすけど。変スか？」

首を傾げながらウエンデイが答えた。

「いや変だろ、どう見ても。下手すりゃ、ザコキャラに見られるぞ」

銀時は冷ややかに言った。

すると、

「誰がザコだ、天然パーマ!!!」

赤髪の女の子、ノーヴェエが銀時に怒鳴った。

「なんだとクソガキ！」

銀時がノーヴェエを睨む。

「何だよ？やんのかよ!？」

「上等だア！」

睨み合う両者。

「ノーヴェ、落ち着くつスよ〜」

ウエンデイがなだめる。

「うるせエ！人間のくせに、あたし達をナメやがって！！」

ウエンデイが止めるのも聞かず、ノーヴェは怒鳴る。

銀時はノーヴェが言った中で、気になる言葉を見つけた。

「『人間のくせに』？オメーら人間じゃねーのか？」

それではまるで、自分達は人間ではないと言っているように聞こえる。

「私達は、人体に機械を移植・融合させて能力を強化した存在。戦うために造られた『戦闘機人』だ」

トーレが答えた。

本来、戦闘機人は論理的、技術的な問題からタブー視され、違法行為とされている。

様々な問題から、実用化は不可能とされてきたが、スカリエッティは人造魔導師を用いる事で戦闘機人技術を完成させた。

「そうなんだ」

銀時は改めて、ノーヴェ達を見た。

恰好はおかしいが、それ以外は人間に見える。

と、銀時は尿意を感じて股間を押さえた。

「ちよっ…トイレどこだ？シヨンベンしたくなってきた！」

「シヨンベンとか普通に言うな！」

ノーヴェが顔を赤くして、銀時に怒鳴った。

「それよりトイレどこだよ？漏らすぞコラア！」

「わあああ！トイレは、向こうの廊下の突き当たりだよ！」
慌ててセインが、トイレの場所を教えた。

「サンキュー、セイン！！」

セインに礼を言って、銀時は走ってトイレへ向かった。

「間に合えばいいっすけど…」

ウエンデイが苦笑いする。

「…あれがゾーマを倒して、世界を救った人間とは……」
トーレは呆れて、ため息をついた。

*

「あゝスッキリしたぜ」

無事トイレに間に合って、用を足した銀時が出てきた。

廊下を歩いて、リインフォース達がいる部屋へ向かう。

「ん？」

廊下を歩いてる途中で、銀時は足を止めた。

急いで走ってきた時には気付かなかったが、廊下の左側に部屋があった。

銀時は部屋の中に入った。

先ほどの部屋に比べると少し狭く、テーブルと椅子が幾つか並べられている。

そんな部屋に、一人の少女が座っていた。銀色の長髪で、右目に黒い眼帯をつけて、背が小さい。コーヒーが入ってるカップに、ミルクを入れている。

「ん？」

少女が銀時に気付いた。

「あ…どうも」

とりあえず、銀時は軽く挨拶した。

「ああ、坂田銀時だな？私はチンクだ」

銀髪の少女、チンクが自己紹介した。

「え？チンク？オイオイ、なんつー卑猥な名前だよ。名付け親の顔が見てみてーぜ」

銀時は少し引いた。

「チンク、コじゃなくてチンクだ！！」

顔を真っ赤にして、チンクが怒鳴った。

「わかった、わかった。チンク、コじゃなくてチンクな」

手をヒラヒラさせて、銀時は答えた。

コホン、とチンクは咳をした。

「……まだドクターと話し中だと思ってな。紹介が遅れた。すまない」

どうやら話が終わるまで、コーヒーでも飲んで時間を潰そうとしてたらしい。

「いや、いいって。フーか、お前も戦闘奇人なのか？」

「字が違う。戦闘機人だぞ」

間違いを訂正して、チンクはコーヒーを飲んだ。

「マジでか？こんなに小さなガキなのに……」

「……背は関係ないだろ」

チンクは頬を膨らませ、少し拗ねたように言った。

「悪い悪い」

謝る銀時だが、反省してる様子はない。

チンクはため息をついた後、銀時に聞いた。

「ところで銀時。お前は私達が怖くないのか？」

「は？」

銀時は首を傾げた。

何でそんな事を聞いてくるのか、わからない。

「私達は、戦う為に造り出された戦闘機人だ。私達はいずれ管理局と戦う。その時に、私達はお前を殺す事になるかもしれない」

真剣な表情でチンクが言った。

そんな事か、と銀時はため息をついた。

「甘いチンク」

「え？」

チンクは首を傾げた。

「世の中にはな、お前らよりもおつかねエ女がいるんだぜ？例えば、卵でダークマターを作れる殺人料理人。変態納豆ストーカー女。男にちよっと肩を触れられただけで、男を投げ飛ばす女。怒るとすぐに鎌を振り回す女」

銀時は、自分の周りにいる凶悪女性陣を紹介した。

「そ…それは凄いな…」

チンクは苦笑した。

「それによオ」

銀時はチンクの前に座った。

「お前らも、笑ったり怒ったり拗ねたり、俺達『人間』と何にも変わんねエよ」

銀時は、思った事をそのままチンクに言った。

チンクは銀時の言葉を聞いて、少し驚いた。

自分達は人間と変わらない。そんな言葉を言われるとは、思ってもみなかった。

でもチンクは、その言葉が少し嬉しかった。

「…そうか」

チンクは微笑んだ。

「ありがとう、銀時」

「止せよ。俺ア思った事を言っただけだ」

そう言つて、銀時も微笑んだ。

チンクは手を伸ばして、空のカップを一つ手に取った。

「銀時も飲むか？」

「おお。砂糖多めで頼むわ」

なんだか、いい雰囲気が出来ていた。

*

クリスの部屋。

玉座に座ってるクリスは、本を読んでいた。近くにある本棚には、沢山の本が納まっている。

本を読んでもクリスの前に、ゾーマがいた。クリスは本を閉じた。

「さて…レリックも大分集まった頃だろう」

クリスは、ゆつくりと王座から立ち上がった。

スカリエッツィのアジトへ向かい、レリックを奪う時が来た。

「あ？また俺に行けっただか？」

メンドくさそうに、ゾーマが言った。

ホテル・アグスタでは、銀時と最後まで戦えず不完全燃焼。クリス自身はホテルから離れた所で高みの見物。

ハッキリ言っただけだ。

断ろう、とゾーマは思った。

だがゾーマが断る前に、クリスが口を開いた。

「いや、キミは此処で待っていてくれ」

珍しくゾーマに残るように言った。

ゾーマは、スカリエッツィとその部下に同情した。

「僕が行く」

クリスは口元を歪め、邪悪な笑みを浮かべた。

第十四訓：人造生命体も戦闘機人も人と変わらない（後書き）

ついにクリス自らが動き出す！

銀時達とナンバーズに危機が迫る！！

リインフォース「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『心の
ない人なんていない』。テイクオフ！」

第十五訓：心のない人なんていない（前書き）

「作者からのお知らせ」

赤夜叉「この小説には、アギトとゼストは出てきません。すいませ
ん。お知らせ遅っ！！」

やっとナンバーズ全員が出ます

あっ、一人出ないや

チンク「『リリカル銀魂 Strikers』。始まります」

第十五訓：心のない人なんていない

銀時とリインフォースが、スカリエッツィのアジトに来て二日目の朝。

銀時は目を覚ました。

すると、左右から小さな寝息が聞こえ、自分の体の上に何か乗っかっていて、そこからも寝息が聞こえてきた。

確か自分は、一人で寝たはずだ。銀時は左右を見た。

そこには、セインとウエンディがいた。気持ち良さそうな寝顔で、スヤスヤと寝ている。

いつの間に、俺の布団に潜り込んだんだ？

次に銀時は、自分の体に乗っかっていてるモノを見た。

そこには、銀時を抱きしめてる形で寝ている、リインフォースがいた。リインフォースの柔らかい胸が当たる。

一つのベッドに四人で寝て、キツくて暑苦しい。

「テメーらアア！自分の部屋で寝やがれエエエー！」

アジトに、銀時の怒鳴り声が響渡った。

*

食堂。

銀時とリインフォース、ナンバーズが集まって朝食を食べている。

ちなみに料理は、料理ロボットが作った。ナンバーズは全員ではなく、ウーノとまだ見ぬドゥーエ、それとスカリエッツィがいない。

ちなみにナンバーズって、『数字』で呼ばれてるって知ってた？あつ、知ってる？すいません。

銀時は、ナンバーズが数字で呼ばれてる事を今朝、初めて知った。

No.1のウーノ。No.2のドゥーエ。No.3のトール。No.

4のクアットロ。No.5のチンク。No.6のセイン。No.7

のセット。No.8のオットー。No.9のノーヴェ。No.10のディエチ。No.11のウェンディ。No.12のディード。手抜きだな。

まあ長つたらしくて、覚えにくい名前よりマシか？

朝食を食べながら、銀時はそう思った。

ちなみにセインは、自分の名前を結構気に入っているらしい。

銀時はナンバーズの名前の事を考えながら、目の前にあるウィンナーに箸を伸ばした。

すると銀時の箸と、前から伸びてきた箸が当たった。銀時は箸の持ち主を見た。

箸を伸ばした人物は、ノーヴェだった。

銀時は顔をしかめた。

「ちよつと…箸どけてくんない？」

「うるせエ。お前がどける」

ノーヴェも銀時を睨む。

「このウィンナーは俺が先に目エつけてたんだ。おとなしく引つ込んでろ」

「あたしの方が、お前よりも先に目エつけてた！」

互いに譲ろうとせず、二人は箸を引こうとしない。

周りで食べてるナンバーズとリインフォースは、呆れながら二人の様子を見ている。

「ウィンナーは渡さねエエエ！」

銀時とノーヴェは、箸を使って戦い始めた。

テーブルに片足を乗せ、手を振るって箸と箸がぶつかり合う。火花こそ散らないが、微妙に迫力のある戦いである。

「やめる貴様ら！見苦しいぞ！！」

トーレがテーブルを叩いて怒鳴った。

「うるせエ！男には引けねエ戦いがあるんだ！」

「この男に負けるのだけは、絶対に嫌だ！！」

攻防を続けながら、二人はトーレに怒鳴り返した。

しかし、ちつちやな理由のアホみたいな激闘にも、終局が訪れる。
二人が争っている間に、第三者の箸が伸びて、争いの原因であるウ
ィンナーを掴んだ。

「あっ!?!」

第三者の箸に気付いて、銀時とノーヴェエは動きを止めた。

「ウィンナー、貰った」

箸を伸ばした第三者、デイエチが静かに言った。

「ああああ!!」

ウィンナーを確保したデイエチを見て、二人は叫んだ。

「卑怯だぞデイエチ!ウィンナー返せ!」

「テメーそれでも侍か!?!」

二人はデイエチに怒鳴った。

「いや、彼女、侍じゃないですよ」

冷静にリインフォースがツツコんだ。

「くそっ!だったら標的変更だ!」

銀時は別の皿に顔を向けた。

同時にノーヴェエも顔を動かした。二人が次に狙うは、ミートボール

………なのだが。

「あれ?」

二人は、また動きを止めた。

皿の上にミートボールはなく、

「ミートボール、頂きました」

ピンク色の長髪の女の子、セツテの持つ箸にミートボールがあった。

「先越されたアアアア!!」

二人は、頭を抱えて叫んだ。

「いい加減にしろ、貴様らアアアア!!」

ここでトーレの堪忍袋の緒が切れた。

紫色の刃のような固有武装『インパルスブレード』を出して、二人
に襲い掛かった。

怒りに任せて、インパルスブレードを振り回すトーレ。悲鳴を上げ

ながら、トーレから逃げる銀時とノーヴェ。
ドタバタと騒がしい食堂。

「もお。これじゃあ、落ち着いて食べれないじゃない」
頬を膨らませて、クアットロが言った。

三人は、まだドタバタ騒いでいる。
チンクはため息をついた。

「やれやれ。こんなに騒がしい朝食は初めてだな」
呆れながらも、チンクは楽しそうに微笑んだ。

「あははは！やっぱり銀時、面白いな〜！」
セインは腹を抱えて笑った。

「あゝあ。今日で銀時とお別れっスか…結構寂しいっス」
ウエンディはため息をついた。

「まあまあ。すぐに帰るワケじゃないんだからさア」
セインがウエンディを励ました。

「ところでセイン。昨日から少し気になっていたのですが」
リインフォースがセインに声をかけた。

最初はナンバーズを警戒していたが、今では普通に会話をするようになった。

「ん？何？」
セインはリインフォースに顔を向けた。

「セインは銀時と仲が良いみたいですが、どういう関係ですか？」
少し嫉妬のこもった目をセインに向ける。

銀時の事が好きならリインフォースにとって、銀時が他の女の子と仲良さそうにしてるのは面白くなかった。

「どういう関係って…あっ！」
セインは何かに気がついた。

「もしかしてリインフォース、銀時の事が好きなの？」
「はい」

毅然とした態度で、リインフォースは答えた。

「ええっ！？そうなんスか!？」

「ほっ」

リインフォースの答えに、ウエンディは驚き、チンクも興味を持った。

「じゃあ、二人は付き合ってるんスか？」

ウエンディが、興味津々に聞いてきた。

「いえ。告白はしましたが、付き合ってはいません」

「どうしてだ？」

チンクは首を傾げた。

リインフォースはかなりの美人だ。そんな美人が告白までしたのに、何故まだ付き合っていないのか不思議だった。

「銀時に好意を寄せている女性は、私以外にも三人います」

「三人も!？」

チンク達は驚いた。

「ですから、銀時は誰の好意に応えるべきか迷っているのです」

リインフォースはお茶を啜った。

「恋愛というのはよくわからんが、銀時も大変そうだな」

言ってチンクもお茶を飲んだ。

「ところで、さっきの質問なんですが……」

リインフォースが本題に戻す。

「ああ、あたしと銀時の関係ね。別に何も無いよ。前にちよこつと会っただけ」

セインが軽く答えた。

「そんな話聞いてませんが……」

リインフォースは顎に手を当てて考え込んだ。

まあ銀時はセインに、あたしと会った事は秘密にしてくれと言われているし。なにより、その時にレリックをセインに渡してしまったので、言える訳もない。

言ってしまったら、いろんな理由でフェイト達に袋だたきにされてしまう。

「でもねエ、リインフォース」

「ん？」

セインに呼ばれ、考え込んでいたリインフォースは顔を上げた。

「あたしも好きになっちゃったんだア。銀時の事」

少しテーブルに身を乗り出して、セインが言った。

「えっ!？」

リインフォースが驚いた直後、ウエンデイが手を挙げた。

「あたしも実際に会って、銀時好きになったっス！」

「ええっ!？」

ウエンデイの発言に、今度はリインフォースだけでなくチンクも驚いた。

実際、銀時はそれなりにカッコイイ。普段は死んだ魚のような目だが、シリアスになれば目と眉が近くなり、キリツとした顔になる。

まあセインの場合、自分の事を何気なく心配してくれた所や、面白い所が気に入ったのだと思う。

「おっ、ウエンデイも好きなんだ」

「そうっスよ」

二人は楽しそうに笑い合った。

「……またライバルが増えました」

リインフォースはため息をついた。

*

食堂から離れた広い部屋。

トーレから逃げ切った銀時とノーヴェがいた。

「こ……殺されるかと思っただぜ……」

「……訓練以上に……疲れた……」

二人とも全速力で逃げ回ったので、汗だくになって、肩で息をしている。

フラフラになりながら、二人はその場に座り込んだ。

「テメーのせいで……ヒデー目に遭っただぜ……」

銀時は手で汗を拭いた。

「お前のせいだろ！」

「いや、ウインナーを俺に譲らなかったオメーが悪い！」
再び両者は睨み合う。

ふと銀時は横を見た。

そこには、昨日も見た紫色の髪の少女、ルーテシアがいた。

昨日と同じように、女性の裸が入ってる生体ポッドが並べられている棚を見上げている。

「アイツ昨日もああしてたけどよオ、何やってんの？」

少女を見ながら、ノーヴェに聞いた。

「ん？ああ、お嬢様か。自分の母親を見てんだよ」

「母親？」

銀時は片眉を上げた。

何で母親がこんな所に？と疑問に思いながら、銀時は立ち上がった。

ルーテシアに歩み寄った。

「お〜い」

ルーテシアに軽く声をかけた。

銀時に気付いて、ルーテシアは顔を向けた。

「えっと…俺の事知ってる？」

「…坂田銀時。ドクターから聞いている」

ルーテシアは静かに答えた。

「母ちゃん見てんのか？」

ルーテシアは頷いた。

「どこにいった？」

銀時は棚を見渡した。

全ての生体ポッドの中には、裸の女性が入っている。ハッキリ言って、目のやり場に困る。

これもドクターの研究ってヤツなのか？

最初に会った時にも思ったが、やっぱりあのドクターは苦手だ。何考えてるのか、さっぱり解らない。

そんな事を考えていると、ルーテシアが一つの生体ポッドを指差した。

銀時は、そつちに顔を向けた。見ると、ルーテシアより少し色が濃い、紫色の長髪の女性が入ってる生体ポッドがあった。

「あれが母ちゃんか？」

ルーテシアは頷いた。

銀時は後ろで様子を見ている、ノーヴェエに顔を向けて、小声で尋ねた。

「アイツの母親、生きてんのか？」

「あたしも、よくわかんねエ」

二人が小声で話していると、

「ドクターは、X I 番のレリックを使えば、目が覚めるって言った」

「ヤベツ…聞こえてたよ…」

頭を掻きながら、銀時はルーテシアに向き直った。

「私には心がないから……お母さんが起きれば、私に心が生まれるってドクターが言った」

母親を見つめながら、ルーテシアは語った。

銀時は思った。それって、コイツにレリックを集めさせる為の嘘なんじゃねエか？

「なあルーテシア」

ルーテシアは、銀時に顔を向けた。

「お前は心がないって言ってるけどよオ、それ間違いじゃねエか？」
ルーテシアは首を傾げた。

ノーヴェエは、黙って二人の様子を見ている。

「理由はどうあれ、お前は母ちゃんを助ける為に、レリックを探し続けてんだろ？」

ルーテシアは頷いた。

「だったらお前には、母ちゃんを想う心があるって事じゃねエのか？」

ルーテシアは少し驚いた顔をした。

自分には心がある？母親を眠りから起こそうと、レリックを探し回ってるのは、自分に心があるからなのだろうか。

銀時の言葉に、ルーテシアは迷った。

「…わからない」

「まあ、ゆつくり考えろや」

そう言つて銀時は、懐から小さな紙を一枚取り出して、ルーテシアに渡した。

ルーテシアは渡された紙を見た。そこには、銀時の名前等が書かれてあつた。名刺である。

「俺ア何でもやる、万事屋つてのをやってんだ」

そう言つと銀時は、ルーテシアに背を向けた。

「何かあつたら、いつでも来い。サービスするぜ」

手をヒラヒラと振りながら、歩いて行つた。

「あつ。待てよ銀時！」

慌ててノーヴェエは、銀時のあとを追つた。

残つたルーテシアは、銀時の後ろ姿を見つめた。手に持っている名刺を見た。しばらく見つめた後、大事そうに名刺をしまった。

*

広い部屋を出て、銀時とノーヴェエは廊下を歩いている。

「お前があんな事言つうなんて、意外だつたな」

頭の後ろに手を組んで、ノーヴェエが言った。

普段の銀時だけを見ていれば、確かに銀時がさっきのような言葉を言つたのは意外だろう。

「オイオイ、俺がいつもふざけてると思つてんのか？」

「当たり前じゃん」

ノーヴェエは即答した。

すると前から、二人の人物が歩いて来た。

長い茶髪の女の子、デイドと短い茶髪のオットーだ。

「よオ。もう朝食、食べ終わったのか？」

銀時が聞いた。

「はい」

二人は頷いて答えた。

そこでオットーは、自分に向けられてる視線に気付いた。見ると、ノーヴェがオットーをジッと見つめている。

ノーヴェは、オットーを見てから気になっていいる事があった。

「お前って”男”なのか？それとも”女”か？」

オットーは一目見た感じでは男に見える。服装もジャケットを着ていて、男っぽい恰好だ。

だが他のナンバースは、全員女性。

そう考えるとオットーも女だと考えるのが自然だが、見た目が男っぽくて判断しづらい。

オットーとデイドは、顔を見合わせた後、

「秘密です」

と二人に答えた。

「何だよそれエ」

ノーヴェは顔をしかめた。

銀時はジッとオットーを見つめた。何か違和感がある。しかもこの違和感は、前にも感じた事がある。

そこまで考えた銀時は、ハツとなって違和感の正体に気付いた。

「なるほどねエ」

銀時はニタリと笑った。

「何だよ銀時？気持ち悪いなア」

隣にいるノーヴェは、若干引いた。

「ノーヴェ。コイツアどうやら、お坊ちやまじゃなくて、お嬢さんみたいだぜ」

「えっ!？」

ノーヴェは、銀時の発言に思わず驚きの声を上げた。

「何でわかるんだよ？」

「他の連中はわからなくても、俺の股間のセンサーはお見通しだぜ」
「ただの下ネタじゃねエかアアア！」

得意げに話す銀時の顔面に、ノーヴェは右拳を振るった。

「テメー！いきなり何すんだコノヤロー！！」

二人の乱闘が始まった。

オットーとデイドは、静かに乱闘を見守っている。

まあ、オットーが女性と言うのは当たってますが。

乱闘を見守りながら、デイドは思った。

銀時の世界にも、柳生九兵衛という一見美少年に見える者がいるの
だが、実は家の事情で男として育てられた女なのである。

その時も銀時の股間センサーが反応して、九兵衛が女であると見抜
いたのだ。

乱闘が続く中、二人を探していたウエンデイがやってきた。

「あつ！銀時とノーヴェいたつスよ〜！」

二人を見つけ、後ろを向いて他のメンバーに知らせた。

ウエンデイの知らせで、ラインフォースとセイン、チンクがやって
きた。

「あゝあ。また乱闘しちゃってるよオ」

呆れた口調でセインが言った。

チンクも、やれやれとため息をついた。

「銀時。落ち着いてください」

「ノーヴェ姉様も落ち着いてください」

ラインフォースとデイドが、それぞれ銀時とノーヴェを押さえて
引き離れた。

その後もしばらく二人はギャーギャー騒いだ。

二人の騒ぎを止めるために、ラインフォースやナンバーズが多大な
労力を消費したのは、言うまでもない。

*

スカリエッツィの部屋。

そろそろ帰る時間がきたので、別れの挨拶をする事にした。

部屋にいるのは銀時、スカリエッツィ、紫色の長髪の女性のウーノ、クアットロの四人。

「もうお別れとはね。キミ達との賑やかな生活が、今日で終わりと
思うと少し寂しいね」

名残惜しそうにスカリエッツィが言った。

「よく言うぜ。人のこと散々、実験体にしようとしやがって」

アジトに来てから、銀時は何度かスカリエッツィ達に襲われた。

いきなりビームが発射されたり、落とし穴に落ちそうになったり、
ガジェットに襲われたり、上からタライが落ちてきたり、バナナの
皮に滑ったり。

とにかくスカリエッツィ達は、あの手この手を使って銀時を捕まえ
て体を調べようとしたのだ。

「本当に残念ですわア」

心底残念にクアットロが言った。

「ふざけんなよコラ。お前アレだろ？眼鏡とつたら性格悪いキャラ
に変わるってベタなヤツだろ？古りーんだよ」

クアットロを睨んだ。

「ヒドイ、銀さん。私泣いちゃいますよオ？」

猫撫で声で銀時に言う。瞳も少しうるうるしてる。

「勝手に泣けよ」

銀時は冷たく突き放した。

それからウーノに顔を向ける。

「あんたドクターの秘書だろ？ドクターの暴走を止めるのも秘書の
仕事だろ？」

「私はドクターの願いなら、どんな事でも協力します」

笑みを浮かべて、ウーノは答えた。

銀時はため息をついた。

「もういいわ。今日でお前らとも、おさらばだからな」
銀時は三人に背を向けて歩き出した。
「また会えるといいな？」
スカリエツテイが、銀時の背中に言った。
「もう会いたくねエ！！」
振り返って銀時は怒鳴った。

*

アジトの入口。

銀時とリインフォース、ナンバーズが集まっていた。

「あゝあ。もうお別れかア」
残念そうにセインが言った。

「もつと銀時と一緒にいたいっス」
上目使いでウエンデイが言う。

「いや、いい加減帰んねーとマジで俺、殺されるから……」
銀時は六課に帰った後に起こるであろう、悲劇を想像した。

「貴様がいなくなつて、私は清々するがな」
トーレが言った。

「お前はカルシウムを摂れ」
と銀時。

すると、デイエチが前に出てきた。

「賑やかで楽しかった。ありがとう」

初めて銀時に笑みを見せた。

「出来れば、貴方と手合わせしたかったです」
セツテが言った。

「お元気で」

デイドとオットーが、声を揃えて言った。

「次会ったら、絶対ぶっ殺すからな！」
顔を赤くしながら、ノーヴェが言った。

「この二日間、楽しかった。ありがとう銀時」

チンクが微笑んで礼を言った。

ナンバーズの挨拶が済むと、ルーテシアがやってきた。

「ごきげんよう」

銀時に一言挨拶した。

「お前らも元気でな」

そう言っただけで銀時は去ろうとした。

だがリインフォースは、セインとウエンディの前に歩み寄った。

銀時は足を止めて、振り返った。

三人は、ジツと見つめ合っている。銀時に惚れた三人の女性。

セインが口を開いた。

「絶対、銀時をあたしのモノにするからな！」

「あたしも負けないっすよ！」

二人はリインフォースに宣戦布告した。

「ふっ。私も負けませんよ」

リインフォースは不敵に笑った。

「いや、お前ら何やってんの？」

三人を見て、銀時は目を細めた。

こうして、銀時とリインフォースのナンバーズ達との生活は終わった。

*

二人が去った後、ナンバーズはアジトの中に戻り、スカリエッティの部屋に入った。

「やあ。銀時達はもう行ったかい？」

ナンバーズに振返り、スカリエッティが尋ねた。

「はい」

メンバーを代表して、チンクが答えた。

「そうか。出来れば彼を我々の仲間にしたかったな」

スカリエッツィは残念そうな顔をした。
チンクやセイン達も、銀時が帰って寂しいのか、少し表情が暗くな
った。

その時、スカリエッツィ達の前に緑色の魔法陣が出現した。

「な……!?」

ナンバーズは身構えた。

魔法陣から、金髪の青年が現れた。

瞬間、空気が変わった。金髪の青年から放たれるどす黒い重圧が、
その場の全員にのしかかった。ナンバーズ全員の顔色が青くなり、
冷汗を流した。

あのスカリエッツィですら、一步後ずさってしまふ。

「……き……貴様……何者だ!？」

金髪の青年のどす黒い重圧に耐えながら、トーレが叫んだ。

「何者だ?」

金髪の青年の赤い瞳が、射抜くようにナンバーズに向けられた。
その瞬間、全員の背筋が凍った。目が合っただけで、殺されるかと
思った。

「これから死ぬキミ達に、名前を言っても意味がないだろう」

金髪の青年、クリスは邪悪な笑みを浮かべた。

クリスの横には、スカリエッツィ達が集めた大量のレリックがあっ
た。

レリックはクリスの瞳の色と同じく、赤い輝きを放っていた。

血のように赤い輝きを。

第十五訓：心のない人なんていない（後書き）

スカリエッツァの前に現れたクリス

スカリエッツァ、ナンバーズの運命は！？

ウエンディ「次回、リリカル銀魂 Strikers。『弱肉強食』
。テイクオフ！」

第十六訓：弱肉強食（前書き）

謎の男、クリス

果たしてその実力は？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第十六訓：弱肉強食

銀時とリンフォースは、六課に帰るために森の中を歩いていた。銀時の足取りは重い。テンションも低い。元々テンションは低い方だが、今の銀時は更に低い。

「あゝあ。帰ったら容赦なく、フェイト達に殺されるな。せめて半殺しで済まねエかなア……」

銀時は深い溜め息をついた。

その時、銀時の後ろを歩いていたリンフォースが止まった。

慌てた様子で、後ろを振り返った。スカリエッティのアジトがある方角だ。

「ん？どうした？」

銀時も足を止めて、振り返ってリンフォースを見た。

リンフォースから返事はない。

銀時は怪訝な顔をした。リンフォースは、人の言葉を無視するよ
うな者ではない。

不審に思いながら、リンフォースに歩み寄った。隣に立って顔を覗きこんだ。

リンフォースは、目を見開いて冷汗を流し、驚愕の表情を浮かべて震えていた。

「オイ！どうしたリンフォース！？」

リンフォースのただならぬ様子に、銀時は声を荒げた。

「……銀時……スカリエッティのアジトに……強い魔力が現れました……」

前を見つめたまま、リンフォースが言った。

「強い魔力？チンク達じゃねエのか？」

「いえ……違います……！」

リンフォースは、震える自分の肩を抱いた。

「彼女達よりも……もっと強く……邪悪な魔力です……！」

「なっ!？」

銀時は思わず、目を見開いた。

*

スカリエッティのアジト。

スカリエッティの部屋。

ナンバーズとスカリエッティは、クリスと対峙していた。場を支配してるのは、クリスが放つどす黒い重圧と禍々しく鋭い殺気。

全員動かなかつた。いや、動けなかつた。クリスが放つ重圧に耐えるので、精一杯だった。

呼吸が荒くなる。足が震える。

(トーレ…)

チンクが念話で、トーレに話かけた。

(ああ。わかつてる)

トーレはクリスを睨みつける。

タダ者ではない。しかも男の魔力量が半端ではない。おそらく軽くSランクを越える。

それに量だけでなく、魔力から禍々しいモノを感じる。こんな危険な感じには、今まで出会った事がない。

(デイエチ!)

トーレはデイエチに念話を送った。

(はい!この男に、様子見や手加減は不要!)

念話を受けたデイエチは動いた。

机の上に置かれてある、布に包まれた長い棒のような物を掴んだ。布を取り、長い砲身の重狙撃砲が姿を現した。

デイエチの固有武装『イノーマスカノン』。

砲身をクリスに向ける。

クリスは慌てた様子もなく、砲身を見つめた。

「ドクター！」

ナンバーズがドクターを下がらせ、自分達も下がった。

デイエチはIS『ヘヴィバレル』を発動。自身のエネルギーをイノーマスカノンの弾丸に変換する。イノーマスカノンにエネルギーが溜まり、

「発射！」

イノーマスカノンの砲撃が、クリスに向かって放たれた。

砲撃は寸分変わらず、クリスへと迫る。

決まる。デイエチも含め、ナンバーズがそう思ったと同時に、クリスは右手を前に出した。

そして砲撃に向かって右手を振り、砲撃を弾いた。

弾かれた砲撃は、壁に当たって大爆発した。

「な……!?」

全員が驚愕した。

だが、一番驚いているのは、砲撃を放ったデイエチだった。

「か…片手で……イノーマスカノンの砲撃を……!?」

恐怖のあまり、デイエチはガタガタと体を震わせた。

クリスは右手を降ろした。

「道具を使つてこの程度かい？」

つまらなそうにデイエチを見た。

「ひい……!!」

クリスの赤い瞳と目が合つて、デイエチは短い悲鳴を出して尻餅を着いた。

「デイエチ!!」

チンクがデイエチに駆け寄った。

「この野郎オオオ!!」

ノーヴェがウイングロードに酷似した黄色い道を出して、その上を固有武装『ジエットエッジ』で走り、クリスの方へ向かった。

「待て、ノーヴェ!!」

トーレが叫ぶが、ノーヴェは止まらない。

クリスの周りに黄色い道を次々に作りだし、その上を走り回る。

「動き回って混乱させる作戦かい？無駄な事だ」

馬鹿にした風にクリスが言う。

ノーヴェはクリスの後ろに回った。黄色い道から飛び降り、クリスに向かって蹴りを放つ。

蹴りが当たる直前、クリスの左手がノーヴェの蹴りを掴んで止めた。

「な…！？」

振返りもしないで蹴りを止められ、ノーヴェは動揺した。

「驚いてる暇があったら、逃げる手段でも考えたらどうだい？」

クリスは足を掴んだまま左手を振り下ろし、ノーヴェを床に叩きつけた。衝撃で床に亀裂が入る。

「がはっ！」

ノーヴェは口から血を吐いた。

クリスはノーヴェの足から手を離れた。

「ノーヴェから離れるっす！」

ウエンデイがボード型の固有武装『ライディングボード』をクリスに向けて構えた。

クリスの視線が、ノーヴェからウエンデイに移る。

ライディングボードから、数発の魔力弾が発射された。

クリスは片手で魔力弾を全て弾いた。

魔力弾を弾いている隙に、セインがディープダイバーでクリスの足元に出て、ノーヴェを連れて離れた。

スカリエツィを護るように、ナンバーズは一箇所に固まる。

「大丈夫か、ノーヴェ？」

セインが声をかける。

「だ…大丈夫だ…」

答えながら、ノーヴェは立ち上がった。

「どうした？戦闘機人の力は、この程度なのかい？」

クリスは氷のような冷たい眼で、ナンバーズを見る。

「ドクター、ウーノ。我々が奴を足止めします。その隙に逃げてく

「ださい」

インパルスブレードを構えて、トーレが言った。
他のナンバーズも、それぞれの武器を構えた。

「ドクター」

スカリエッツィの隣に立っているウーノが、逃げるように促した。
だが、スカリエッツィは動こうとはしなかった。何か彼の動きを止めている。

スカリエッツィは、自分を引き止めている何かを考えた。
すると、銀時との会話が思い浮かんだ。

プロジェクトFによって生み出された、二人の人造魔導師を大切に想っている銀時。彼にとって二人は掛け替えのない存在。

では、私にとって彼女達、ナンバーズは？

スカリエッツィは考える。

失ったら、また造ればいい。以前よりも完成度の高い作品を。

だが『目の前にいる彼女達』を新たに造り出す事は出来ない。全く同じモノは造れない。

スカリエッツィは短く笑った。

「すまないが、自分の大事な作品が壊されるかもしれないとわかっていて、逃げる訳にはいかないよ」

「えっ!？」

スカリエッツィの言葉に驚き、ナンバーズが振り返った。
隣に立っているウーノも驚いた顔をしている。

「やれやれ。銀時。キミのせいで、私もおかしくなってしまったよ」
スカリエッツィは笑みを浮かべた。

銀時。私にも大事なモノが出来てしまったよ。

まあ、キミと違って私の場合は『人』ではなく『作品』だがね。

クリスが右手を前に出した。

「さて。そろそろ僕から攻撃しても、構わないかね？」

ナンバーズがクリスに向き直る。

「わかりました、ドクター。ならば我々は、全力でドクターを護り

ます！！」

トーレの気迫で、ナンバーズの目の色が変わった。

クリスという巨悪に立ち向かう目に。

「いくぞ、ノーヴェ！セツテ！デイド！」

「了解！」

三人はトーレの声に応える。

四人はクリスに向かって、一斉に動き出した。

「IS『ライドインパルス』！」

ライドインパルスを発動し、トーレは高速移動を始める。

ノーヴェも黄色い道『エアライナー』を作り、その上をジェットエツジで走る。

セツテは、鋭い刃の付いた巨大なブーメラン、固有武装『ブーメラ
ンブレード』を構えた。

デイドは紫色の双剣、固有武装『ツインブレイズ』を構える。

トーレは高速移動でクリスの背後に回り、インパルスブレードを振
るった。クリスは振り返らずに、緑色の障壁を張って防いだ。

ノーヴェとデイドが、左右から拳と双剣を振るった。クリスは両
手を横に出し、障壁を展開して拳と双剣を防ぐ。

最後に残ったセツテが、ブーメランブレードをクリスに向かって投
げた。クリスの顔目掛けて、真っ直ぐに飛んでいく。

クリスは前方に魔法陣を展開し、ブーメランブレードに向かって緑
色の閃光を放った。

閃光が当たる直前、ブーメランブレードは軌道を変えた。上昇して
閃光をかわした。

セツテのIS『スローターアームズ』。ブーメランブレードの軌道
を自在に操る能力。

閃光をかわしたブーメランブレードは、クリスの頭部に迫る。

当たるかと思われたが、寸前で障壁を張られ、弾かれてしまった。

（みんな離れる！）

だが、これも想定内。

トーレの合図で、ノーヴェ達はクリスから離れた。
直後、

「発射っス!!!」

ウエンデイとデイエチの砲撃が放たれた。

イノーマスカノンの砲撃とライディングボードの魔力弾の雨が、一斉にクリスに襲い掛かる。

全弾命中し、クリスが立っていた所で大爆発が起こった。

すかさずチンクが両手に、クナイに似た固有武装『ステインガー』を数本構え、爆心地に向かって放った。

「IS『ランブルデトネーター』!」

爆心地まで到達し、チンクがISを発動した瞬間、ステインガーが爆発した。

「IS『レイストーム』!」

オットーが、数本の緑色の閃光を爆心地に向かって放った。

閃光は爆発した。

ナンバーズによる一斉攻撃が終了した。

「や…やったっスか…?」

煙が立ち込めていて、様子が確認できない。

ナンバーズは油断なく、構えている。

煙が晴れてきた。

「この程度か…」

煙の中から声が聞こえた。

ナンバーズは驚愕した。

あれだけの攻撃を受けて、煙の中から姿を現したクリスは無傷だった。

「所詮、ガラクタはガラクタだな」

ゴミを見るような目で、ナンバーズを見つめた。

「そ…そんな…!!!」

ナンバーズは震え上がった。

スカリエツティとウーノ、クアットロも驚愕している。

「それにしても、派手に撃つてくれたな。僕がレリックを転移させてなかつたら、ここら一带は跡形もなく吹き飛んでいたぞ」

クリスに言われて、ナンバーズはハツとなって気付いた。

クリスの近くにあったレリックが、なくなっている。

「化物：！！」

ノーヴェは歯を食いしばり、鋭い目でクリスを睨む。

「化物？それは違うな」

クリスは口元を歪め、邪悪な笑みを浮かべた。

「僕は”悪魔”さ」

クリスが言った直後、部屋の床全体に巨大な緑色の魔法陣が展開した。

「これは…！？」

ナンバーズは動揺した。

「キミ達の遊びに付き合うのは、ここまでだ」

クリスは無表情となって、ナンバーズを見た。

「爆」

クリスの言葉を合図に、魔法陣は強い輝きを放ち、部屋は大爆発した。

*

銀時とリインフォースは、スカリエッツィのアジトを目指して走っていた。

銀時は焦っていた。魔導師でないから魔力は感じないが、禍々しいどす黒いモノを感じる。

ゾーマと同じか、それ以上。

こんな事なら、もう少しアジトに残ったときゃよかったぜ。

だが今更後悔しても仕方ない。一刻も早くアジトに着かなければ。

そして二人はアジトの前に着いた。

だが中には入れなかった。

「何だこいつア？」

薄い緑色の半球状の蓋のようなモノが、アジトの敷地全体を覆っているのだ。

「これは結界です。しかもかなり強力なモノです」

リインフォースが言った。

銀時は木刀を抜いて、結界を殴った。

木刀による打撃を何回も当てるが、結界には小さなヒビ一つ出来ない。

銀時は舌打ちした。

来る途中に、何回か爆発音が聞こえた。もう中では戦闘が始まっているはずだ。

早く行かないと、取り返しのつかない事になる。

*

スカリエツティの部屋”だった”所に煙が立ち込める。爆発によって、部屋にあった機材等は跡形もなく消えていた。天井も吹き飛び、空から太陽の光が入ってくる。

太陽の光が当たる中心に、クリスは立っていた。

煙は量が多く、なかなか消えない。溜め息をつきながら、足元に魔法陣を展開した。

「風」

言った直後、竜巻のような強風が吹き荒れ、煙を吹き消した。

クリスは辺りを見回した。

誰もいなかったが、血と思われる赤い池があった。

「ほう。生きていたか。少し威力を抑え過ぎたか？」

特に驚いた様子もなく、クリスは歩き出した。

ナンバーズの魔力を辿りながら。

*

ナンバーズは、傷ついた体を引きずりながら、生体ポッドがある広い部屋を歩いていった。

全員で障壁を張ったが防ぎ切れず、咄嗟にセインのディープダイバーで離脱したが、みんな爆発のダメージを受けていた。

「チンク、大丈夫か？」

背中にチンクを抱えたトーレが聞いた。

「あ…ああ…何とか……」

弱々しくトーレに答えた。

チンクは頭から血を流し、左腕、右足をやられている。

「転移魔法が使えません。おそらく結界を張られています」

ウーノとクアットロが調べ、アジトに結界が張られている事がわかった。

「頑張るっすよ、ノーヴェ！もうすぐ出口っす！」

傷ついたノーヴェの腕を肩に回して掴み、一緒に歩きながらウエンデイが言った。

「わ…わかってるよ……」

息を荒くしながら、ノーヴェは歩く。

結界が張られている以上、外には出れない。だが今は、少しでもあの男から離れなければ。

「どこへ行くつもりだい？」

後ろから声が聞こえた。

全員が振り返った。視線の先にはクリスがいた。

ナンバーズは顔を歪めた。

「よくここまで逃げれたね。少し褒めてあげよう」

クリスはニヤリと笑みを浮かべた。

だがその笑みはすぐに消え、冷酷な顔に変わる。

「もう悪あがきする力も無いんだろ？おとなしくしていれば、楽に消してやる」

そう言っつて、右手をナンバーズに向ける。

スカリエツティは何か対抗策を考えようとするが、ロクな作戦が思いつかない。

ゴミを見るような冷たい目で、ナンバーズを見つめながら右手に魔力を溜める。

そしてクリスが魔力を放とうとした瞬間、乱入者が現れた。

乱入者はクリスの右手を蹴り上げ、溜めた魔力は天井に放たれた。

天井で爆発が起き、瓦礫が落ちてくる。

クリスは乱入者を睨んだ。

乱入者は人型に近い形で、全身が黒く、尻尾があった。

「あれは……！」

ナンバーズが目を見開いて驚いた。

すると、ナンバーズの後ろから足音が聞こえた。

振り返って見ると、そこにはルーテシアがいた。

「ルーテシア！」

「ルーお嬢様！」

スカリエツティとナンバーズは、驚きの声を上げた。

「ガリユー。お願い」

ルーテシアは静かに言った。

クリスの攻撃を妨害した乱入者、ルーテシアの召喚獣『ガリユー』

がクリスに攻撃を仕掛ける。

素早い拳と蹴りをクリスに放つ。

だがクリスは、それを片手で軽々と防ぐ。

「出来損ないの召喚獣なら、この程度だろうな」

クリスは魔力の衝撃波をぶつけて、ガリユーを吹き飛ばした。

「ガリユー！」

ルーテシアがガリユーに駆け寄った。

「いい加減終わりにしよう」

クリスが右手を上に掲げた。

すると右手の上に、緑色の巨大な魔力の球体が出現した。

「な………！？」

その密度の高い魔力の塊に、全員は驚愕した。アレを防ぐだけの魔力は、誰にもない。

「仲良く、あの世へ逝くがいい」

楽しむでも哀れむでもない、無表情な顔でクリスは、魔力球をナンバーズ達に向けて放った。

全員が諦め、死を覚悟した。

だが、チンク、セイン、ノーヴェ、ウエンディ、ルーテシアの脳裏に、一人の男の姿が過ぎった。

銀時！

五人は心中で同時に叫んだ。

直後、ナンバーズ達の頭上を人影が飛び越えた。

飛び越えた人影は、木刀を振り下ろして、魔力球を真っ二つに両断した。

「!?!」

この時、初めてクリスは動揺した。

人影は光に包まれ、二人に別れた。

長い銀髪の女性が、ナンバーズ達の前に着地した。

「リインフォース！」

セインが、銀髪の女性の名前を叫んだ。

そしてリインフォースと別れた銀髪の男は、木刀をクリス目掛けて上段から振り下ろした。

クリスは障壁を展開して、木刀を防いだ。

銀髪の男は、床に着地した。

「銀時!!!」

ウエンディ達が、銀髪の男の名を叫んだ。

銀時は木刀を障壁から離さぬまま、クリスを鋭い目で睨みつけた。

「テメエ何やってやがる？何者だ？」

静かに怒りを燃やしながら、クリスに聞いた。

「ふっ。こんな所でキミに会うとは思わなかったよ、白夜叉」
クリスは不敵な笑みを浮かべた。

銀時は、白夜叉という言葉に反応して、眉をひそめた。

「初めまして、白夜叉」

銀時の反応を気にせず、クリスは挨拶をする。

「僕はクリス。クリス・ロードだ」

第十六訓：弱肉強食（後書き）

ついにクリスと対峙した銀時！

銀時の力はクリスに通用するのか！？

ダイエチ「次回、リリカル銀魂 *Strikers*。『戦う前に一度話し合いをしろ』。テイクオフ」

第十七訓：戦う前に一度話し合いをしる（前書き）

ついに対峙した銀時とクリス

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第十七訓：戦う前に一度話し合いをしる

クリスは木刀を弾いて、銀時から離れた。

「まさか結界を破って入ってくるとはね」

余裕の笑みで、クリスは銀時を見つめる。

銀時は鋭い目のまま、クリスを睨んでる。

「皆さん、大丈夫ですか？」

リインフォースがナンバーズに聞いた。

「あんまり大丈夫じゃないかなア……」

苦笑いしながら、セインが答えた。

ナンバーズは、みんな腕や足を損傷していて、機械の部分が露出していた。

「すみません。結界を破るのに手間取って……」

「謝る事はない。二人のお陰で助かった」

謝るリインフォースに、デイエチが礼を言った。

他のナンバーズも頷いた。

デイエチの言葉とナンバーズの感謝の気持ちに、リインフォースは嬉しくなって微笑んだ。

ふとリインフォースは、ルーテシアに顔を向けた。

「ルーテシア。アジトの入口に置かれていた、貴女の母親が入っている生体ポッドは、結界を破壊した後、安全な場所へ転移させました」

ルーテシアはクリスの出現を感じて、すぐに母親の生体ポッドをアジトの入口に移動させたのだ。

「……ありがとう」

ルーテシアは、小さいが感謝のこもった声で、リインフォースに礼を言った。

リインフォースは微笑んで頷いた。

「それより、銀時一人で大丈夫なのか？」

クリスと対峙してる銀時を見て、トーレが言う。
リインフォースも、振り返って二人を見た。

確かにクリスからは、底知れない何かを感じる。ゾーマを倒した銀時でも、一人で戦って勝てるかどうかわからない。

「銀時……」

リインフォースは、拳を強く握った。

いざとなったら、ユニゾンをして銀時を助ける。

*

銀時とクリスは、一步も動かず睨み合っている。

数秒の睨み合いの後、銀時が口を開いた。

「テムエ……さつき”白夜叉”って言ったな。どこで聞いた？」

「高杉晋助……と言えばわかるだろう？」

「何……!？」

クリスが口にした名前を聞き、銀時は驚愕した。

高杉は銀時と同じ世界の住人。だからこの世界の者が、高杉の名を知っているはずがない。

だがクリスは、確かに高杉の名を言った。

それに以前、カリムの預言で『黒き刃』と聞いた時、一瞬高杉の顔が思い浮かんだ。

まさか、高杉もこの世界に来ている？

「何で高杉の名を知ってる？」

銀時は表情を険しくした。

「名前だけではない。実際に彼と会い、彼の住んでいる世界、鬼兵隊のリーダーであるという事、全て知っている。もちろん攘夷戦争の事もね」

そこでクリスは、興味深そうな目で銀時を見た。

「白夜叉。当然、キミの事も高杉から聞いている」

白夜叉と呼ばれ、銀時は少し不快感を抱いた。

銀時にとって攘夷戦争は、多くの仲間を失った辛い過去。その時に呼ばれていた『白夜叉』という名も、銀時にとっては快くないものだ。

「…テメエの目的は何だ？」

「ふっ。腐った世界の滅亡さ」クリスは短く笑って答えた。

「この世界と高杉やキミが住んでいる世界。二つの世界は腐っている。この世界の魔導師は下等で愚かだ。下等な人間どものせいで、この世界は腐っている。高杉の世界も、天人のせいで醜く腐った国になった。そこで世界を壊すという目的が一致し、僕らは手を組んだ」

銀時を真っ直ぐに見つめながら、クリスが語る。

「それで手始めに、この世界を壊そうってのか？」

眉間にシワを寄せて睨んだまま、クリスに聞いた。

「そうだ」

笑みを崩さずクリスは答えた。

「もちろん、この世界を壊した次は、キミの世界を壊す」

「!!!」

わかっていた事だが、実際に言われると動揺は隠せない。

「白夜叉」

驚愕してる銀時に、声をかけた。

「僕と一緒に来ないか？」

銀時を勧誘した。

クリスから勧誘を受け、銀時は片眉を上げた。

リインフォースやナンバーズも驚いている。

「キミ達から大事なモノを奪った、天人や幕府が憎いだろう？僕と一緒に来れば、ヤツらに復讐できる力が手に入るぞ」

口元を歪めて、クリスが言う。

「キミはそこにいる出来損ない共とは違う。僕はキミの事を認めているんだ」

銀時を見るクリスの目は、明らかにナンバーズを見ていた時とは違

う。

「そんな出来損ない共と一緒にいては、キミまで腐ってしまう。それでは宝の持ち腐れだ」

ナンバースは、悔しくて歯を食いしばった。出来損ない。

造られた存在であるナンバースにとって、その言葉は自分達の存在を否定する言葉だった。

悔しい。

だが言い返せる言葉がない。実際にナンバースの力は、クリスに通用しなかった。戦いにすらならない。逃げることも出来ない。

自分達の無力さに、ナンバースは拳を強く握った。

「悪いがよオ」

銀時が口を開いた。

「せつかくの誘いだが、断るぜ」

銀時の答を聞き、クリスは目を細めた。

「俺は世界に復讐する気なんかねエからよ」

確かに世界は、銀時から大切なモノを奪った。

攘夷戦争で沢山の仲間を失った。世界が憎くないと言えば、嘘になる。

だが復讐をした所で、死んだ仲間は生き返らないし、何にもならない。

復讐を果たした所で、残るのは虚しさだけだ。死んだ者のためにしてやれる事など何もない。

銀時は大切なモノを失う辛さ、悔しさを知ってからは、もう二度とそんなモノ持たないと決めた。そう決めたはずだったのだが………いつの間にか、新たな大切なモノを背負っていた。

ツッコミ地味眼鏡。大食い毒舌娘。

他にも気に入るヤツ、気に食わないヤツ、いろんな連中がいる。毎日賑やかで騒がしく、面白い。

「あんな口クでもねエ世界でも、俺の大事モンがあるんだよ。もち

るん、この世界にもな」

小さな魔導師と、その使い魔との出会い。

新たな絆を繋ぎ、掛け替えのない大切なモノが増えていった。

「白夜叉」

クリスは目を閉じて、かぶりを振った。

「考え直したまえ。情にとらわれ、愚かな選択をするつもりかい？

そんな出来損ない共から離れて、僕の元へ来い。それが正しい選択だ」

冷徹な表情でクリスが言う。

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

「何度誘われても、俺の答は変わらねエ」

ハッキリと拒絶の意志を示す。

「それによオ」

銀時は一旦言葉を止めた。

振り返って、後ろにいるナンバーズを見た。

ナンバーズ一人一人の顔を見た後、クリスに向き直る。

「コイツらは出来損ないなんかじゃねエよ」

「……………」

クリスは目を細めた。

「だがもし、この中に出来損ないがいるとすれば……………」

そこで一旦言葉を止め、銀時はクリスを鋭い目で射抜いた。

「そりゃあダメエだ」

「何……………」

クリスは眉をひそめた。

「銀時……………」

ウエンデイが小さく呟いた。

クリスに自分達の存在を否定され、ナンバーズ達は傷つき悔しがった。

だが銀時は、そのクリスの言葉を否定した。コイツらは出来損ないなんかじゃない。

その言葉が、凄く嬉しかった。

ウェンディは、思わず涙を流した。

会話がなくなり、場が沈黙に包まれた。

誰も口を開かない中、クリスは口元を歪めた。

「ククク…面白い事を言うじゃないか、白夜叉。この僕が出来損ない？」

不気味な笑みを浮かべて、銀時を見た。

その瞬間、クリスから凄まじい殺気が放たれた。

「では僕が出来損ないかどうか、確かめてみるかい？」

クリスの右手に緑色の雷が、バチバチと鳴る。

「上等だ」

銀時も両手で木刀を持って構える。

クリスの殺気を受けても、動揺や緊張の様子は見られない。

クリスは右手を上げて、銀時に向けた。

右手が強く光った瞬間、緑色の電撃が銀時に向かって放たれた。

電撃が放たれたと同時に、銀時は動いた。

自身に迫る電撃を横に動いてかわし、クリスに向かって一直線に走る。

クリスの前までたどり着き、クリスの顔面目掛けて木刀を振るった。

第十七訓：戦う前に一度話し合いをしる（後書き）

侍 対 魔導師！

坂田銀時 対 クリス・ロード！！

いよいよ激闘開始！！

ノーヴェ「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『上には上が
いる』。テイクオフ！」

第十八訓：上には上がいる（前書き）

ナンバーズを圧倒したクリス！

強大な力を持つクリスに銀時が挑む！

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第十八訓：上には上がいる

クリスの顔面目掛け、銀時は木刀を振るった。

顔に当たる直前、クリスは障壁を張って木刀の攻撃を防ぐ。

クリスは右手を銀時に向け、緑色の魔力波を放つ。当たる寸前、銀時は頭を下げて魔力波をかわし、クリスの後ろに回り込んで木刀を振るう。

クリスは素早く振返り、左手の手刀で木刀を弾いた。

「うおおおおお！！」

木刀を上下左右に振り、クリスに連撃を繰り返す。

しかしクリスは、銀時の連撃を片手で全て防いでしまう。

クリスは、木刀の攻撃を防いでる右手に魔力を溜める。木刀を弾き、右手を銀時に向けて魔力波を放つ。

間一髪で魔力波をかわし、再びクリスの顔面目掛けて木刀を振るった。だが木刀はクリスの顔には届かず、右手で掴まれて止められてしまった。

銀時が歯噛みすると、クリスは右手を振って、銀時を壁に向かって投げた。

「ぐあつ！！」

銀時は壁に叩きつけられた。

顔を上げると、クリスが目の前まで迫っていた。咄嗟に横に跳び、クリスが突き出した右拳を避けた。拳は壁にぶつかり、大きな音を立てて壁を粉々に砕いた。近くに並べられていた生体ポッドも幾つか砕け、次々に中身が出て床に倒れた。生体ポッドの中の液体も床にぶちまかれ、水たまりが出来た。

クリスの赤い眼は、すぐに銀時の姿をとらえた。

足元に緑色の魔法陣を展開した。

魔法陣から四本の黒い触手のようなモノが現れ、一斉に銀時に襲い掛かった。

銀時は襲い掛かる触手を木刀で薙払う。

触手の相手をしてる隙に、クリスは右手に魔力を溜めた。

そして、銀時が触手を全て斬り終えたと同時に、クリスは緑色の魔力の球体を放った。

「!!!」

銀時が気付いた時には、もう遅かった。

魔力の球体は銀時に迫り、緑色の爆発を起こした。

「銀時!!!」

リンフォースとナンバーズが叫んだ。

「あの野郎オ！」

ノーヴェがクリスに向かおうとする。

「ダメです、ノーヴェ！」

リンフォースがノーヴェを止めた。

ノーヴェは、怒りと悔しさで歯を食いしばった。

爆発が起こった所に煙が立ち込める。

クリスはジッと煙を見つめる。

動きがないまま数秒の時間が過ぎ、煙の中から人影が飛び出てきた。

頭から血を流した銀時が、クリスに向かって真っ直ぐに走る。

「ふっ。直撃は避けたか」

クリスは右手を前に掲げ、緑色の魔法陣を展開した。

同時に銀時は、薄い緑色の球体の中に閉じ込められた。

「な…!?!」

閉じ込められ、銀時は動揺した。

木刀を振るって打撃を当てるが、球体には傷一つ付かない。

「無駄だ、白夜叉」

言っただクリスは、開いていた右手を閉じて、グッと拳を握った。

瞬間、薄い緑色の球体は爆発した。

「銀時イイ!!!」

リンフォースが叫んだ。

ナンバーズも目を見開き、驚愕の表情になる。

煙の中から銀時の姿が現れ、バタツと床に倒れた。体に火傷を負い、服も焦げて黒い煙が出ている。

「く…！」

銀時は顔を少し上げ、目の前に立っているクリスを睨んだ。

魔導師は、デバイスという補助道具を使って魔法を駆使する。

だがクリスは、デバイスも杖もなしで強力な魔法を使っている。

「白夜叉。僕をこの世界の出来損ないの魔導師と一緒にしないでくれ」

銀時を見下ろして、クリスが言った。

「僕こそ完璧な魔導師だ」

ニヤリと口元を歪めた。

ラインフォースは驚愕を隠せなかった。

目の前の出来事が信じられなかった。ゾーマを倒したあの銀時が、手も足も出ない。

傷ついた体に力を入れ、銀時は立ち上がった。

「…まだやるのかい？」

クリスは呆れた口調で言った。

銀時は何も答えず、代わりに木刀を構えた。

「…そうか」

クリスは無表情になり、右手に魔力を溜める。

「この野郎オオ…！」

「やめるっス！」

我慢できず、ノーヴェとウエンデイが叫んだ。

ノーヴェは右手につけている固有武装『ガンナツクル』を突き出して、黄色い魔力弾を生成し、ウエンデイもライディングボードをクリスに向けて構え、同じく魔力弾を生成する。

「止せ、二人とも！」

二人を止めようと、トーレが叫ぶ。

だがトーレの制止も聞かず、二人はクリスに向かって魔力弾を放った。

クリスは横目で見た後、左手を動かして魔力弾を全て弾いた。

「くっ……！」

二人は悔しくて歯を食いしばった。

「僕と白夜叉の闘いを邪魔するな」

そう言つてクリスは、銀時に放つつもりだった魔力弾をノーヴェとウエンディに向けて放った。

二人は怯えた表情して、動けなかった。

やられる。

そう思つて二人は目を固く閉じた。

当たる直前、二人の前に銀時が駆け付け、両手で木刀を持ち、バツトのように振つて魔力弾に当たった。魔力弾と木刀の間に火花が散る。

「うおおおおお！！」

気合いと共に木刀を振りぬき、魔力弾を弾いた。

弾かれた魔力弾は壁に当たり、大爆発を起こしてアジト全体が揺れた。

ノーヴェとウエンディは閉じた目を開き、目の前に立っている銀時の姿を見た。

銀時は床に膝をついた。

「銀時……！」

二人は屈んで銀時の肩を掴んだ。

「銀時……お前……あたし達を護るために……！？」

「……すまないっス……あたし達のせいで……」

二人は悲痛な顔になった。

銀時の行動を見ていたクリスは、呆れて溜め息をついた。

「はあ……理解に苦しむよ。何故そんな出来損ないを護る？」

冷たい眼で銀時を見つめる。

「……言つたる……この世界にも……大事なモンができたつてよオ……」

銀時はゆっくりと立ち上がった。

頭から流れてる血が、ポタポタと床に落ちる。

「それにコイツらには姉妹がいる……大事なモンを失う辛さを味わ

うのは：俺だけで充分だ：」

もう二度と失わない。

手離さないと決めた。

そして他の者に、同じような苦しみを味合わせたくない。

右手に木刀を持ち、居合いに似た構えをする。

「俺の大事なモンを傷つけて、タダで済むと思つなよ」

鋭い眼で、クリスを射抜くように睨む。

銀時の雰囲気が変わる。

近くにいたノーヴェとウエンディは、思わず体を震わせた。

他のナンバーズも銀時の異変に気付いた。

「あれは…」

ラインフォースは、この感じを知っている。

あの時に感じたモノだ。

今の銀時の雰囲気は、ゾーマと戦った時と同じ。

クリスも銀時の異変に気付いたようだ。目を鋭くし、銀時を見つめている。

次の瞬間、銀時は動いた。

床を蹴って、一気にクリスとの距離を詰める。

速い。

銀時の動きが、先ほどよりも速くなっていた。

クリスだけでなく、ナンバーズやスカリエッティ、ルーテシアも驚いている。

クリスとの距離を詰め、銀時は木刀を振るった。一瞬、銀時の動きに驚いたクリスだったが、すぐに冷静になり、高速移動で銀時の後ろに回り込んだ。木刀は空を切り、クリスが右拳を振り下ろす。

だがクリスの右拳は、銀時には届かなかった。空を切った木刀をそのまま後ろに振って、クリスの右拳を弾いた。

「何っ!？」

クリスの顔が一瞬歪んだ。

僕の動きに反応した。

銀時は横目で、クリスを睨んでいた。

クリスは後ろに飛んで、銀時から距離を離れた。

銀時も走ってクリスを追う。

クリスは周囲に魔力弾を出し、銀時に向かって全弾放った。

魔力弾の雨が銀時に迫る。

銀時はスピードを落とさず、そのまま魔力弾の雨の中に入った。

木刀で魔力弾を弾き、防ぎ切れない魔力弾は体を捻ってかわす。掠りこそすれど、致命傷にはならない。

あっという間にクリスの前にたどり着き、木刀を振るった。クリスは障壁を張って防ぎ、左手から緑色の魔力波を撃つ。

銀時は上に跳んで魔力波を避けて、クリスの頭上から木刀を振るう。クリスは障壁を張って防ぐ。

着地したと同時に、銀時は横薙ぎに木刀を振るった。クリスは振り返って、障壁を張って防いだ。

*

ナンバーズは驚愕した。

明らかに銀時の動きが、良くなっている。

「あんなに傷だらけなのに、ダメージを負っている今の方が強いだと!?!?」

トーレも驚いている。

「これはア……ゾーマの時と似てるわねエ」

銀時の戦いの様子を見ながら、クアットロが鍵盤型のコントロールパネルを操作した。

画面に、ゾーマと銀時の戦いの映像が映し出された。

「ゾーマ戦でも銀さんは、傷ついた体で驚異的な動きを見せてるわア」

コントロールパネルを操作しながら、クアットロが言った。

「銀時は……本当に人間なのか……?」

デイエチが目を見開いて呟いた。

「リンフォース。アレって…？」

セインが隣にいるリンフォースに尋ねた。

「銀時は戦いの中で過去の記憶…：白夜又と呼ばれていた戦いの記憶が甦り、白夜又としての本能が目覚めたのです」

銀時の戦いから目を離さずに、セインに説明した。

「戦いの記憶…」

セインは小さく呟いた。

銀時は今、辛い過去の戦いの記憶を呼び起こして戦っている。

私達を護る為に。私達に自分と同じ思いをさせない為に。

「銀時」

セインは、自分達の為に戦っている銀時の勝利と無事を願った。

*

クリスは手を前に出して、魔法陣を展開した。先ほどの緑色の球体で銀時を閉じ込めようとしたが、魔法陣に反応した銀時は素早く横に跳んで、緑色の球体から逃れた。

クリスは大量の魔力弾を銀時に向かって放った。

思い出せ。あの忌まわしき記憶を

魔力弾の雨を木刀で弾き、前に進む。

飛び散る鮮血

クリスが緑色の閃光を放つ。

目の前に広がる数多の敵と屍の山

紙一重で閃光をかわす。

牙を剥け、刃を持って

クリスの前までたどり着く。

大切なモノを護る為

居合いの構えから、木刀を放つ。クリスは障壁を張る。

魂を狩る夜叉となれ

木刀は、クリスの障壁を打ち砕いた。

砕け散った障壁を見て、クリスは目を見開く。

「うおおおおお!!!」

両手で木刀を持ち、気合いと共に上段からクリスの頭目掛けて振り下ろす。

重い打撃音が部屋に響いた。

クリスは右腕を頭の上に構えて、木刀の攻撃を防いでいた。

「なるほど……」

クリスは不敵な笑みを浮かべた。

木刀を弾いて、銀時から離れる。

「戦いの記憶が甦り、『白夜叉』としての力が目覚めたか」

赤い瞳が銀時を見つめる。

銀時は木刀を構え直す。

「いいだろう。キミの力に敬意を表し」

クリスの足元に魔法陣が展開される。

「僕も少しだけ本気を出そう」

第十八訓：上には上がいる（後書き）

クリスはまだ本気ではなかった！？

白夜叉の力もクリスには通用しないのか！？

次回、底知れぬクリスの力が銀時に襲い掛かる！！

トーレ「次回、リリカル銀魂 Strikers。『追い詰められた鼠は怖い』。テイクオフ！」

第十九訓：追い詰められた鼠は怖い（前書き）

底知れぬクリスの力！

銀時に勝機はあるのか！？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第十九訓：追い詰められた鼠は怖い

クリスの言葉に全員が驚愕した。

少し本気を出そう。クリスはそう言った。白夜叉の力を引き出した銀時が、やっとクリスと互角に戦えたと思ったら、クリスはまだ本気を出していなかった。

リインフォースは表情を険しくした。

クリスの力は底無しなのか？

ナンバーズも険しい表情で、クリスを睨んでいる。

銀時はクリスの言葉に驚きながらも、木刀を構えた。

クリスの足元の緑色の魔法陣が、強い光を発する。同時にクリスの禍々しい魔力が高まっていく。

クリスの強大な威圧感が、銀時達にのしかかった。心臓を鷲掴みにされたような気分になり、息苦しくなる。その場で立っているのがやっとだ。

ルーテシアが床に膝をついた。

「ルーお嬢様！大丈夫ですか！？」

ナンバーズがルーテシアに傍に寄る。

「だ…大丈夫…」

顔を悪くしながら、ルーテシアは答えた。

「オットー、デイド。お嬢様を外に避難させる。結界は銀時達が破壊したから、出られるはずだ」

「了解」

トーレに伝えて、オットーとデイドはルーテシアを連れて、アジトの出口へ向かった。

召喚獣のガリユーム、ルーテシアを護るようについていった。

「ドクター、大丈夫ですか？」

ウーノがスカリエッティに尋ねた。

「正直、少しキツイね…」

クリスのプレッシャーを受けて、スカリエツティも顔色を悪くし、大量の汗を流している。

「クアットロ。ドクターを連れて、私達も外に出ます」

「はい」

ウーノとクアットロは、スカリエツティを連れて外に出ようとする。

「だが…」

スカリエツティは、他のナンバーズを置いていく事に少し戸惑った。「妹達なら大丈夫です」

そう言つて、ウーノはクアットロと共に、スカリエツティを連れて出口に向かった。

残ったナンバーズとリインフォースは、クリスと対峙している銀時を見守っている。

銀時と対峙してるクリスは、口元を歪めた。

「第二ラウンド……いや、これが最終ラウンドになるかもしれないね」

言つた直後、クリスは銀時の視界から消えた。

クリスを見失い、銀時は慌てて周りを見た。

「上だ」

銀時の頭上から声が聞こえた。

本能的に危険を察知し、咄嗟に前へ跳んだ。直後、上から緑色の閃光が放たれ、床に直撃して大爆発が起きた。

床に大きな穴が出来た。

なんとか閃光を避けた銀時は、立ち止まって上を見た。そこにはクリスの姿はなかった。

「どこを見ているんだい？」

今度は背後から声が聞こえた。

銀時は咄嗟に右前方に跳んだ。その直後、後ろから緑色の閃光が放たれて銀時の体を掠めた。閃光は壁を突破り、外まで突抜けた。

「な……な……!？」

閃光によって、壁に空いた巨大な穴を見て、リインフォースとナン

バースは戦慄した。

「…さつきまでとは威力が段違いだ…！」

トーレも体が震えている。

銀時はクリスに向かって走る。

クリスは赤い瞳を銀時に向けた。その瞬間、銀時の体がピタリと止まった。

「!？」

体に力を入れるが、全く動かない。ビクともしない。

か…体が動かねエ！金縛りか？

歯を食いしばって、前にいるクリスを睨む。

クリスは右手を前に出し、魔力弾を放った。魔力弾は銀時に直撃し、爆発した。

「銀時イ…！」

戦いを見守っていた、ラインフォース達が叫んだ。

煙が晴れてきて、ボロボロになった銀時の姿が見えてきた。ガクツと床に片膝をついた。

クリスは、片膝についている銀時を見下ろした。

「いい加減わかつたる？キミは僕には勝てない」

薄笑みすら浮かべず、無表情で銀時に言う。

「白夜叉。弱い者を護る為に戦っても、自分が傷つくだけだ。この世に弱い者は必要ない！ここにいるガラクタも出来損ないの魔導師も、下等なゴミにすぎない！」

無表情な顔が、蔑みの感情と共に歪められた。

「今からでも遅くはない。僕の所に来い」
再び銀時を仲間にしようと誘う。

銀時は無言でクリスを睨みながら、ゆっくりと立ち上がった。木刀を構えて、戦う意志を見せた。

クリスはわずかに目を細めた。

「…まだ戦う気なのかい？」

クリスの声には、僅かな苛立ちの感情が混ざっていた。

何度誘おうとも拒絶し、何度倒しても立ち上がってくる。

「悪いが……俺の中には……絶対に曲げられねエもんがあるんだ……」
前髪に隠れて、銀時の目がよく見えない。呼吸が荒く、肩で息をし続ける。

「どんだけ傷ついても……何度倒されても……コイツだけは……真っ直ぐじゃなきゃいけねエ……今ここでやめちまったら……ソイツが折れちまうんだよ……」

顔を上げて、前髪で隠れていた目が見えた。その目には決意と覚悟、信念の光が宿っていた。

「俺の武士道が……魂が折れちまうんだよ……」
体はボロボロで、血もたくさん出ている。

しかし、それでも銀時の魂は揺るがない。クリスの魔法を何度受けようとも、圧倒的实力差を見せつけられても、銀時の魂は折れない。目の前に捨えるモノがあるなら、護れるモノがあるなら、必ずソレを護り通す。

「テメエがどんだけ強えかなんて関係ねエ……」
護るべきモノを護れなかつたら、それは死んだと同じ。

「俺の武士道を貫いて、俺の護りてエもんを護る」
見捨てるのなら、最初から背負い込んだりなどしない。

戦う。この魂がある限り、背中に護るモノがある限り、戦い続ける。
「ぶっ……」

クリスは、目を閉じて短く笑った。

「わかったよ。キミの決意は、変わらないようだ」

クリスは少し残念そうな顔をした。

どうやら、銀時を仲間にする事を諦めたようだ。

「だが……」

そう言つてクリスは、ゆっくりと目を開けた。

同時に、銀時は両膝を床につけた。両手も床につく。思ったよりも出血とダメージが酷い。

「銀時……」

ナンバーズが叫んだ。

クリスはニヤリと笑みを浮かべた。

「その体では、戦う事もできないな」

哀れむような目で、銀時を見下ろす。

右手を銀時に向けて、魔力を溜める。

「さて……本当に残念だが、キミとはお別れだ。白夜叉」

先ほどの哀れみは消え、無表情で銀時を見下ろす。

「銀時！」

デイエチが叫んだ。

隣にいるトーレは、歯を食いしばり、険しい表情でクリスを睨む。

銀時でさえも、クリスを倒す事は出来ないのか？

「あの世で、死んだ仲間達と再会するといい」

クリスの手から、魔力の球体が銀時に向けて放たれた。

「銀時イー！」

リインフォースが動いた。

だが、リインフォースよりも先に動いていた者達がいた。

複数の人影が銀時の前に立ち、全力で障壁を張った。球体と障壁が

火花を散らせてぶつかった。

「貴女達……！？」

「お前ら……！？」

リインフォースと銀時は驚いた。

障壁を張って、球体から銀時を護っているのは、残ったナンバーズ

だった。全ての魔力を使って、全員で強力な障壁を維持する。

「く……！うう………！」

ナンバーズの表情が歪む。

障壁にヒビが入る。

「無駄だ」

クリスが指を鳴らしたと同時に、球体は爆発した。

障壁は粉々に砕け、爆発を受けてナンバーズも吹き飛んだ。

「あああああ……！」

悲鳴を上げて、ナンバーズは床に倒れた。

「オイ！」

銀時が必死に体に入力を入れて立ち上がり、傷だらけのナンバーズに近寄った。

リインフォースもナンバーズに駆け寄った。

「オイ！お前ら、しつかりしろ！」

「ぎ…銀時……良かった…無事つすね……」

ウエンデイが体を起こした。銀時が無事で、安心したように笑った。

「銀時……貴方は一人で無茶をし過ぎです……」

優しく微笑みながら、デイエチが言った。

「一人でカツコつけんじゃねエよ、バカ！」

顔を赤くして、ノーヴェが叫んだ。

「人間、助け合わなきゃ」

こんな状況でもセインは笑っている。

「貴方を死なせたくない」

無表情なセツテ。

「お前には借りがあるからな」

無愛想にトーレが言う。

「お前ら…」

銀時は少し驚いた顔で、ナンバーズを見回す。

「みんなお前の事が好きなのさ」

チンクが言った。

銀時はチンクに顔を向けた。

「私は別に好きではないがな」

ボソツとトーレが呟いた。

トーレの呟きを聞いて、チンクは小さな溜め息をついた。

「私達にとっても銀時は大切な人だ。絶対に死なせない」

力強い笑みを浮かべて、チンクが自分達の想いを伝えた。

ウエンデイ達は頷いた。

銀時は大事な事を忘れていた。

人とは護り護られるモノ。大事なモノを護る事ばかりを考えて、そんな事も忘れてしまっていた。

思い出した銀時は、思わず笑った。

「ククク：サンキューな、お前ら。助かったぜ」

銀時は立ち上がった。

木刀を強く握り直して、前に進んだ。

「さて、もう一頑張りすつか」

ナンバーズの前に立って、再びクリスと対峙する。

「リインフォース」

振り返らず、後ろにいるリインフォースを呼んだ。

「はい」

リインフォースが銀時の隣に歩み寄った。

「ちよいと力貸してくれるか？」

クリスから目を離さず、隣にいるリインフォースに聞いた。

銀時の言葉を聞いて、リインフォースは微笑んだ。

「もちろんです、銀時」

力強い声で銀時に答えた。

銀時はニヤリと笑みを浮かべた。

「そんじゃ、追い詰められた鼠がどんだけの力を持つてるか、あそこ

こで余裕こいてる猫に教えてやるうぜ！」

「はい！」

クリスは怪訝な顔をした。

これだけ力の差があるのに、まだ諦めない。

何か秘策でもあるのか？

クリスが考えていると、リインフォースが銀時の前に立った。

「ユニゾン・イン！！」

銀時とリインフォースの体が、白い光に包まれる。

眩しさに、ナンバーズは思わず目を閉じた。

クリスは目を細めて、光を見つめる。

やがて光が収まり、ユニゾンした銀時の姿が現れた。ユニゾンによ

つて赤くなつた瞳が、クリスを射抜くように睨む。

「何をやっても無駄だという事が、わからないのかい？」

クリスは全く動じない。

右手を前に出して、閃光を放とうとした瞬間、頭に衝撃が走った。

気付いたら床を見ていた。一瞬、何が起こったのかわからなかった。

クリスの前に銀時がいた。

一瞬でクリスの前に近づき、木刀を振り下ろして頭を叩いたのだ。

ナンバーズは驚愕した。

ユニゾンによつて、銀時の動きが更に良くなっている。動きだけ

はない。魔力で体を強化させて力も上がり、木刀による一撃も更に

重くなっている。

クリスの頭から赤い液体が流れた。手で液体を触って見た。

「血…？」

手についてる自分の血を見て、クリスは小さく呟いた。

この僕がダメージを受けた？

直後、たまクリスは衝撃に襲われた。木刀で顔を殴られ、顔は上を

向いた。クリスは口から、赤い血を吐いた。吐いた血は床に飛び散

った。

すかさず木刀が戻ってきて、またクリスの顔が殴られた。銀時の容

赦のない、嵐のような木刀の連撃がクリスを襲った。

「うおおおおお！！」

雄叫びと共に、銀時は上段から木刀を振り下ろした。

木刀はクリスの頭に迫り、部屋に重い打撃音が響いた。

第十九訓：追い詰められた鼠は怖い（後書き）

ユニゾンした銀時の嵐のような反撃！

次回、激戦決着！！

セツテ「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『人間には白と黒がある』。テイクオフ」

第二十訓：人間には白と黒がある（前書き）

（作者の独り言）

赤夜又「なんやかんやで第二十訓までできましたが、この激しいバトル展開、違う小説になってね？ってか銀魂ファンのくせに銀さんらしく書けてないような気がする。俺には銀魂は荷が重すぎるのか？チクシヨオオオオ！！では第二十訓をどうぞ」

ユニゾンして反撃を開始した銀時！

激闘の行方は！？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十訓：人間には白と黒がある

クリスの城。

城に残るように言われたゾーマは、暇を持って余していた。やる事が何もない。

先ほど大量のレリックが転移されてきた。クリスがスカリエッティ達から奪った物だ。それを別の部屋に運び終えたら、また暇になった。

この城には、ほとんど何もない。あるとすれば、クリスが読んでいる本。棚に並べられているが、ゾーマは読書が苦手だ。

他にある物は、先ほどレリックを運んだ部屋にある妙な装置だ。高杉とかいう人間が運んできた物らしい。あの装置とレリックを使って、クリスは何かやらかすつもりらしい。

まあ、クリスが何をするかなんて、興味ねエけどな。

それよりも、高杉という男には興味がある。

人間のくせに、なかなか危険な匂いを漂わせてやがる。剣の腕前も、おそらく銀時並だろう。

まあ協力関係にあるから、戦えないが。

「暇だ……」

ゾーマは一人呟いた。

こんな事なら、クリスと一緒にスカリエッティのアジトに行くんだつた。でも今から行っても全て終わっているだろう。

ゾーマは顔を俯いて、溜め息をついた。

そこである事を思いついた。

「そうだ。」アイツ”の相手でもするか」

ゾーマは歩いて、ある一室を目指した。

少し歩いて目的の部屋の前に到着した。

扉を開ける。部屋の明かりをつける。

そこには誰もいなかった。

「あれ？」

ゾーマは首を傾げた。

「おかしいな。いつもこの部屋にいるんだが……」

ゾーマは部屋の中を見回した。やはり誰もいない。

一体どこに行ったのか。

ゾーマは考えた。

「あ……」

嫌な予感がした。

「まさかクリスの所に行ったんじゃない……」

可能性はなくはない。

部屋には『アレ』もなくなっている。『アレ』を持ってクリスを”

止め”に行ったのかもしれない。

ゾーマは数秒考えた後、

「俺、知らね」

無責任な事を言っ、部屋を出た。

*

スカリエツテイのアジト。

ユニゾンした銀時とクリスの激闘が続いていた。

「うおおおおお!!」

銀時は雄叫びと共に、クリスの頭目掛けて、木刀を上段から振り下ろした。

クリスは咄嗟に両腕を交差する形で頭上に構え、木刀の一撃を防いだ。

「ククク……」

急にクリスが、小さく笑い出した。

「ハハハハ！そうだ白夜叉！そうでなくては、面白くない！」

攻撃を受けたのにも関わらず、クリスは楽しそうに笑った。

木刀を弾いて、銀時から離れる。両手が緑色に光り、前に振って二

つの緑色の魔力弾を銀時に向かって放った。

クリスが両手を動かすと、それに合わせて二つの緑色の魔力弾も軌道を変える。不規則に飛びながら銀時に迫る。

銀時はユニゾンによって強化した動体視力と反応速度で、魔力弾の不規則な動きを捉らえ、動きに合わせて木刀を振りぬいた。二つの魔力弾は弾かれ、壁に激突して爆発した。

「よし！」

「やったっす！」

ノーヴェとウエンデイが、ガッツポーズをした。

魔力弾を弾かれても、クリスの余裕の表情は崩れない。

「融合によって力を上げたか。なるほど。最初に現れた時にキミから魔力を感じたのは、融合をしていたからか」

最初にナンバーズを助けに現れた時、銀時から魔力を感じた。

魔導師でもない銀時から魔力を感じた事に疑問を抱いていたが、魔力を持つ者と融合していたのなら納得だ。

「白夜叉。僕と共に来れば、僕に匹敵する力を得る事が出来たものを……残念だよ」

クリスは大きな溜め息をついた。

「キミを消さなければいけないなんて、本当に残念だよ」

「消えんのは、テメーだ」

両者、鋭い目で睨み合う。

今まで以上の緊迫した空気が場を支配する。

ナンバーズは、緊迫した空気の重さに汗を流し、ゴクリと唾を飲み込んだ。全員が銀時達の勝利を祈っている。

クリスは両手を高らかに上げた。

「さあ白夜叉、キミの力、信念、魂、全てを僕にぶつける！僕はそれを上回る力でキミを倒そう！！」

「やれるもんなら、やってみやがれエエエ！！」

叫んで銀時は、クリスに向かって走り出した。

クリスは両手を上げたまま動かず、魔力を溜めている。

両手の間に巨大な緑色の魔力の球体が出来上がる。

「龍」

言葉と同時に、クリスは両手を振り下ろした。

緑色の球体は、巨大な龍に形を変えて銀時に襲い掛かる。

「！！！！」

龍が地を揺るがす咆哮を上げる。瓦礫を吹き飛ばし、床を抉りながら銀時に迫る。

龍の咆哮に怯まず、銀時は両手で木刀を握り、龍に向かって振りぬいた。

銀時の木刀と龍が激突する。激突した衝撃で、壁や床に亀裂が走る。

「ぐ……くうう……！！」

歯を食いしばって、全身に力を入れる。

筋肉が悲鳴を上げる。

骨が軋む。

一瞬でも力を抜けば、目の前の巨大な龍に食われる。

一方、クリスは冷静な顔で、自分の出した龍と銀時の衝突の様子を見ている。

木刀と龍が火花を散らせて、ぶつかり合っている。銀時と龍を中心に、台風のような強風が吹き荒れる。

ナンバーズは吹き飛ばされないように、必死に堪えている。

「ぶっ」

クリスは口元を歪めて、短く笑った。同時に銀時の木刀にヒビが入る。

「！！」

銀時は目を剥いた。

ヒビは木刀全体に広がり、次の瞬間バラバラに砕けてしまった。木片が飛び散り、床に音を立てて落ちる。

龍が大きく口を開け、鋭い牙を見せる。

「銀時イ！！」

ナンバーズが叫ぶ。

だが龍は止まらない。銀時は成す術もなく、巨大龍の開いた口の中に飲み込まれ、口を閉じられて食われた。口を閉じた時の轟音が部屋に鳴り響き、床が砕ける。

クリスは不敵な笑みで、龍を見つめている。

銀時を食らった龍の姿が消えていき、銀時とリインフォースの姿が見えてきた。龍の攻撃を受けて、ユニゾンが解けたのだ。

二人は力無く砕けた床に倒れている。

「銀時！！」

「リインフォース！！」

二人の名を叫びながら、ナンバーズが駆け寄った。

「銀時！しっかりしろ！」

セインが銀時の体を起こす。

「…セ…セイン……リインフォース！？」

銀時はリインフォースの名を叫んで、周りを見た。

「リインフォース！」

トーレがリインフォースを抱き上げて、声をかける。

「…あ……私は……？」

薄く目を開けて、リインフォースはトーレを見た。

リインフォースが生きている事に、トーレはひとまず安心した。

「銀時！リインフォースは生きてます！」

トーレの傍にいるセツテが、銀時に伝えた。

「…そうか……」

銀時は一安心した。

「わかつたる？」

クリスが言った。

全員が、クリスの方へ顔を向けた。

「キミ達が力を合わせた所で、僕を倒す事はできないんだよ」

ボロボロの銀時達を見ながら、クリスが言った。

ナンバーズは歯噛みした。

これでもう万策尽きた。奴には何も通用しない。せめて、銀時とリ

インフォースだけでも逃がさねば。

だが今の疲弊しきった状態では、奴を食い止める事も出来ない。いや、例え万全の状態でも奴を食い止めるのは無理だろう。

転移魔法で逃げようにも、クリスには隙がない。奴の隙を作らなければ、逃げる事は出来ない。

ナンバーズが打開策を考えていると、銀時が立ち上がった。

「銀時！！」

ナンバーズが叫んだ。

クリスは氷のような冷たい眼で銀時を見る。

「立ち上がった所で、そんな体で何が出来る？戦いを挑んだ所で、キミは無様にやられるだけだ」

クリスの強大な魔力とて無限ではない。

今の龍の魔法攻撃で、クリスの魔力も随分減った。しかし、それでも弱い魔法攻撃を撃つ事は出来る。今の弱った銀時達なら、それで充分だ。

だからクリスの余裕の態度は崩れない。

「腕もげようが…足ちぎれようが…てめーの魂が折れねエ限り…俺ア戦い続ける……！」

銀時の闘志も崩れない。

クリスは呆れた顔で、大きな溜め息をついた。

「では、これで終わりだ。仲間と一緒に消えてなくなれ」
銀時達に右手を向ける。

ナンバーズは脱出の手段が思いつかない。

リインフォースとのユニゾンも出来ない。

まさに絶体絶命。

魔法を放とうとした時、クリスの顔が驚愕の表情に変わった。

「……何故キミがここにいる？」

魔法攻撃を中止し、誰かに問い掛けた。

クリスの視線は、銀時には向けられていない。

銀時は、わけがわからないと目を細め、ナンバーズとリインフォー

スも呆然としてる。

その時、

「悪いな」

銀時の背後から、声が聞こえた。

声を聞いた瞬間、銀時は目を見開いた。

聞き覚えのある声。

いや、聞き覚えがあつて当然の声。

「しばらくの間」

銀時はゆっくりと後ろを振り返った。

「眠つててもらうぜ」

目に映つたのは、『黒い刃』、『銀髪の天然パーマ』、『黒い着物』

銀時は驚愕の表情で、その男を見た。

「テメエは…!？」

黒い刃が銀時を襲った。

縦に振り下ろされ、銀時の体を左肩からバツサリと斬った。傷口から鮮血が噴き出て、床が真っ赤な血で染まる。

出血と共に意識が薄れていく。薄れゆく意識の中で銀時は見た。自分を斬つた人物を。

銀髪の天然パーマ。死んだ魚のような目。

その姿は、紛れもなく『坂田銀時』だった。

ただ着ている着物は、デザインが同じだが色は黒く、手に持っている剣も違っていた。

その剣にも見覚えがある。腕と一体化している不気味な剣。黒い刀身で紫色の光を発している。

「…どういふつもりだ『黒夜叉』？」

クリスの声が聞こえた。

黒夜叉。それが俺を斬った、俺そっくりの奴の名か？

銀時は力無く、その場に倒れた。出血で床に血の池が広がる。

自分を呼ぶリインフォースとナンバーズの声が聞こえるが、返事を

する事が出来ない。口を動かす事も、指を動かす事も出来ない。
銀時は意識を失い、目の前が真っ暗闇になった。

第二十訓：人間には白と黒がある（後書き）

もう一人の銀時、『黒夜叉』

窮地に陥った銀時達の運命は！？

。セイン「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『病院で騒ぐな
テイクオフ』

第二十一訓：病院で騒ぐな（前書き）

（作者の反省）

赤夜叉「前回は取り乱して、すいませんでした。俺には銀魂は荷が重すぎるのか？って『銀魂』も『なのは』も重いに決まってんだろ
うが！軽い訳ねーだろう！ホント俺のバカ！では第二十一訓をどうぞ」

切り替え早っ！

赤夜叉「ナレーさん、うるさい」

銀時そっくりの男、黒夜叉

黒き刃に斬られ、倒れた銀時は！？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜー！」

第二十一訓：病院で騒ぐな

聖王病院の一室。

窓際にベッドが一つ。その上に、銀髪の天然パーマの男が眠っていた。銀時である。カーテンの隙間から、太陽の光が差し込む。

銀時は意識を取り戻し、目を覚ました。

目に入ったのは白い天井。

「銀時。気がついた？」

横から声をかけられた。

見ると、フェイトがいた。心配そうな顔でこちらを見ている。

「大丈夫？私の事わかる？」

「ガキの頃、怒るとすぐ鎌振ってきた死神女でしょ？」

答えた直後、フェイトはバルディッシュを起動させ、鎌の形態に変えて構えた。

顔は笑っているが、目が笑っていない。

「ちよっ…おま…！ここ病院だろ！？んな物騒なモン出すんじゃないよ！」

冷汗を流しながら銀時が言った。後ずさりたかったが、窓際で後ろには壁があるので下がれない。

「病院じゃなかったら、いいのかな？」

「いいわけねエだろオオオオオ！！」

額に血管を浮かべて、銀時は叫んだ。

その時、

「パパ？」

また声が聞こえた。

銀時は視線を落とした。

そこにはヴィヴィオがいた。涙目で銀時を見つめている。

「パパ！」

ヴィヴィオは銀時の腕を掴んだ。

目からポロポロと涙が零れる。

「ヴィヴィオも心配して、ずっと私と一緒に銀時に付き添ってたんだよ」

フェイトはバルディッシュをしまい、優しく微笑んだ。

「パパ！パパ！」

ヴィヴィオは、泣きながら何度もパパと呼んだ。

銀時は短く笑うと、ヴィヴィオの頭に手を乗せた。

「心配かけて悪かったな。俺アもう大丈夫だ」

「…本当？」

「ああ」

銀時の言葉を聞いて、ヴィヴィオは安心したように笑った。

安心して気が抜けたのか、ヴィヴィオはウトウトしてきて、そのまま寝てしまった。

「やれやれ」

ヴィヴィオの寝顔を見て、銀時は溜め息をついた。

フェイトはヴィヴィオの背中に、そっとモーフをかけた。

すると病室の扉が勢いよく開かれた。二人は扉に顔を向けた。

銀時！銀さん！銀さん起きたの！？銀時、無事かい！？旦那ア生きてやすかア？

病室に入ってきたのは、機動六課のメンバー、ナンバーズ、沖田、月詠。

とにかく沢山の人達が、雪崩のように入ってきた。

「オイオイオイ！お前らどっかの大家族かアアア！？」

大人数で病室に入られ、銀時はビックリした。

「銀時イイ！心配したよオオオオ！！」

「目が覚めてよかったっス！！」

銀時のリアクションに構わず、アルフとウェンディは銀時に抱き付いた。

その瞬間、

「ぎゃああああああ！！！！」

体に激痛が走り、銀時は絶叫にも似た悲鳴を上げた。

銀時は体中に包帯、頭にも包帯が巻かれている。顔以外、包帯だらけで殆どミイラ男である。

「お前達！銀時は怪我人だぞ！」

「離れる馬鹿者！」

シグナムとトーレが二人に怒鳴った。

その後、

「やかましいわ！」

また扉が勢いよく開かれ、誰かが怒鳴りながら入ってきた。

全員の注目が扉に集まった。入ってきたのは聖王病院の婦長。見た目は『銀魂』の婦長にそっくり。額に青筋を立てて、眼鏡を光らせ怒っている。

「他の患者さんの迷惑なんだよ！バカどもがアアアア！」

「いや、アンタもうるさいよ！」というツツコミを入れる前に、婦長が襲ってきた。

鉄拳、蹴り、頭突き、目潰し、枕、タライと婦長の嵐のような攻撃が全員に襲い掛かった。もちろん銀時にも。

「何で俺までエエエエエ！？」

哀れ銀時。

再び病室に、いや病院全体に銀時達の悲鳴が響渡った。

*

婦長の人間離れた戦闘能力の前に歯が立たず、全員もれなくボロボロになっていた。

無事だったのはヴィヴィオのみ。スヤスヤと静かに寝ている。

「何で病院で怪我しなきゃならねーんだ？」

元々ボロボロだった銀時は、更にボロボロになってしまった。

婦長に殴られ、顔が所々腫れている。

「ごめんなさい、銀さん。私達のせいで迷惑かけて」

スバルが頭を下げた謝った。

「謝って怪我治るなら、医者はいらねェんだよコノヤロー」
完全に銀時は拗ねている。

「ま…まあ、とりあえず皆無事で良かったじゃん」
セインが言った。

ちなみにナンバーズは、いつものスーツ姿ではなく、白いシャツとズボンを着ている。

銀時がまだ拗ねていると、リインフォースが近寄って、銀時の手を握った。

「銀時…貴方が生きていて、本当に良かった」
目から涙を流して、安心と嬉しさで微笑んだ。

「…俺アそう簡単には死なねェよ」
いつもの気だるげな声で、リインフォースに答えた。

「そっついア何で俺、病院にいるんだ？あの後どうなったんだ？」
銀時がリインフォースに尋ねた。

自分そっくりな男、黒夜叉に斬られて意識を失い、その後どうなったのかわからない。

「はい。実はあの後…」
リインフォースは、銀時が意識を失った後の事を話始めた。

*

突然の乱入者、黒夜叉に斬られて銀時は倒れた。

「銀時！」

リインフォース達が必死に叫んだ。

銀時に反応はない。

出血も酷い。早く手当てをしなければ、手遅れになる。

だが、銀時に近づく事は出来なかった。

倒れてる銀時の前には、不気味な刀を持った黒夜叉が立っている。
黒い刀身には、銀時の赤い血がベットリと着いている。

黒夜叉はクリスに視線を向けた。

「…黒夜叉。何故キミがここにいる？」

クリスが黒夜叉に尋ねた。

「別に。暇だったから来た」

気だるげな声で、黒夜叉は答えた。

返事の仕方や、メンドくさそうに頭を掻く仕草は、銀時と全く同じだった。

リインフォースとナンバーズは、訳がわからなかった。何故、銀時が二人いるのか？彼は…黒夜叉は何者なのか？

リインフォース達が混乱している中、黒夜叉とクリスは身動きせずに見つめ合っている。

「そこをどきたまえ。後ろにいる出来損ない共を始末する」

クリスは右手を上げた。

リインフォース達は身構えた。黒夜叉の事を考える前に、この窮地を脱出する方法を考えるべきだ。

すると、黒夜叉は溜め息をついた。

「もういいだろう？コイツらを殺す必要はねエ」

黒夜叉から意外な言葉が出た。

リインフォースとナンバーズは驚いた。

クリスも目を細めている。

「コイツらを生かしたって、計画に支障はねエはずだ」

黒夜叉の気だるげな声に、僅かな凄みが加わった。

リインフォースとナンバーズは、黙って二人の様子を見ている。黒夜叉の考えがわからない。銀時を斬って、その後は私達を庇っている。

黒夜叉の目的は何なんだ？

数秒の沈黙の後、今度はクリスが溜め息をついた。

「…わかったよ。仕方のない奴だ」

ゆっくりと右手を下ろした。

「てつきり力ずくで来るかと思ったぜ」

「今の姿じゃ、キミに挑んでも戦いにすらならない。キミもわかっているだろ？」

クリスはニヤリと笑みを浮かべた。
リインフォースは怪訝な顔をした。

今の姿？ 一体どういう事だ？

考え込んでいると、クリスがこちらに顔を向けた。リインフォースとナンバーズに、緊張が走る。クリスを睨みながら、再び身構えた。「安心したまえ。今日のところは見逃してやる。黑夜叉に感謝するんだな」

そう言うと、クリスと黑夜叉の足元に緑色の魔法陣が展開された。

黑夜叉の足元にも現れたという事は、おそらく転移魔法だろう。

クリスは口元を歪め、邪悪な笑みを浮かべてリインフォースとナンバーズを見た。

「もし僕達の邪魔をしたければ、遠慮せずにしたまえ。その時は僕も『戦闘形態』となって、全力でキミ達を消そう」

クリスの赤い瞳がリインフォースとナンバーズを射抜く。

リインフォースとナンバーズは驚愕して、体が固まった。

『戦闘形態』？ クリスには、更に上の力があるのか？

恐怖で心臓が高鳴り、嫌な汗が体中から流れてくる。

「では、さようなら」

そう言い残し、クリスと黑夜叉の姿が消えた。

衝撃の事実にも、リインフォースとナンバーズはしばらく呆然となった。

異変に気付いて戻って来たウーノによって正気に戻り、銀時の応急処置をした。ルーテシア達やスカリエッティ達も戻って来て、転移魔法で移動した。

機動六課に戻り、フェイト達が駆け付けた。すぐに銀時は聖王病院に運ばれて、治療を受けた。ルーテシアの母親も、一緒に聖王病院に運ばれた。

スカリエッティは広域次元犯罪者で、フェイト達に逮捕された。ス

カリエツティは抵抗もなくフェイト達に従い、連れて行かれた。その時、ウーノとクアットロがスカリエツティに付き添った。他のナンバーズは、機動六課で保護する事になり、戻って来たフェイト達と共に銀時の目覚めを待った。全員で病室に付き添う訳にはいかなかったので、フェイトとヴィヴィオが付き添う事になったのだ。

*

「ということですよ」

リインフォースが説明を終えた。

トーレが少し前に出て言った。

「黑夜叉から受けた傷は、急所を外れていた。あの時、黑夜叉が出てこなければ、我々はクリスに消されていた」

「俺のそっくりは、俺達を助ける為に来たってか？もう少しマシな助け方はなかったのかよ」

黑夜叉に斬られた所を摩りながら、銀時は文句を言った。

「それにしても、銀時そっくりの黑夜叉って何者なんだ？」

腕を組んでヴィータが言った。

「謎は深まるばかりね」

ティアナが言った。

はやては考えた。

カリムの預言にあつた『黒き刃』とは、その黑夜叉ではないだろうか？

銀時も同じ事を考えていた。

今まで『黒き刃』とは、高杉の事を指しているのだと思っていた。だが腕と一体化した黒い刀を持った自分そっくりの男が現れ、預言の『黒き刃』は黑夜叉だと考えた。

それに高杉は『黒き刃』と言うより『黒い獣』だ。

チンクが顎に手をつけて言った。

「それに、黑夜叉が使っていた武器も気になる」

「腕と一体化してて、気味悪かったよな…」

ノーヴェも表情を険しくした。

黒い刀から、幾つものコードが伸びて腕と繋がって一体化していた。みんなが考え込んでいると、銀時が口を開いた。

「紅桜だ」

「え？」

全員の注目が銀時に集まった。

銀時は険しい表情をしている。

「今何と言った？」

シグナムが尋ねた。

「紅桜。戦えば戦うほど強くなる厄介な刀だ」

シグナム達に答えた。

銀時の脳裏に、紅桜を付けた似蔵との戦いが甦る。

使い込まれた紅桜は、戦艦十隻の戦闘力を有する。最後は使い手の

似蔵を侵食し、暴走した危険な武器だ。

「戦えば戦うほど強くなる刀？」

ティアナが驚いた顔で言った。

「まるで生きた刀じゃな」

壁に背をつけて月詠が言う。

「旦那と戦えば戦うほど強くなる刀ですか。こりゃあ最悪の組み合わせ

わせですねエ」

いつもの軽い感じで沖田が言う。

その時、

「悪いが、ソイツはちと違うな」

扉の外から声が聞こえてきた。

銀時達には聞き覚えのある声。

扉が開いて、ゴーグルをかけた老人が入ってきた。

平賀源外である。

「じーさん…！」

銀時は驚きの声を上げた。

「よオ。元気が銀の字？」

源外が挨拶した。

「いや、今のこの状態見て、元気そうに見えるか？」

ミイラ男状態の銀時が言った。

「まあそれは置いといて」

「置くなよ」

目を細めて源外を睨む。

「つーか何でアンタがいるんだよ？」

「いやア俺もこつちの世界に興味があつてな。装置直して来ちまつた」

頭を掻きながら、源外が答えた。

「そうか……つてアンタこつちに来たら、俺達帰れねエじゃねーかアアアア！！」

理由に納得した直後、銀時は怒鳴った。

こつちの世界に瞬間移動装置はない。

向こうで装置を操作する者がいなければ、装置を作動させて帰る事が出来ない。

「心配すんな。このリモコンのボタンを押せば、向こうの装置が作動して帰る事が出来る」

右手に持っているリモコンを銀時に見せる。

手の平サイズの小さなリモコンで、幾つかボタンがある。

「そんな便利なモンがあんのかよ？つーか、さっきから何で俺ばつかツッコんでんだ！？ユーノ！ティアナ！お前らツッコミ役なんだから、しっかりツッコめよ！！」

二人を指差して、銀時が怒鳴った。

「ああ、すみません。久しぶりの出番で、すっかり忘れてました」
頭を掻きながら、ユーノが答えた。

「別に貴方がツッコんでも、問題ないじゃないですか！」
ティアナは謝らずに反論した。

「おい。そろそろ本題行っていいか？」
騒ぐと、また婦長がやってきてしまう。
源外の言葉で、本題に入る事になった。

第二十一訓：病院で騒ぐな（後書き）

源外による紅桜の解説が始まる

そして、黑夜叉とゾーマの謎も明らかにならず？

黑夜叉「次回、リリカル銀魂 Strikers。『人間の体は未知である』。テイクオン！あつ、間違えた。テイクオフ！」

新八「いや、そのボケ、第一訓の後書きで銀さんがやってたから！」

銀時「あらら。新八、生きてたの？」

新八「いや、勝手に殺さないでくださいよ！ってか僕の初登場後書き！？」

第二十二訓：人間の体は未知である（前書き）

（作者の叫び）

赤夜叉「サマーウォーズ観てエエエエエ！」

以前とは違う紅桜！？

そしてゾーマと黑夜叉の正体は！？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十二訓：人間の体は未知である

聖王病院の屋上。

銀時達は、全員屋上に移動していた。ハッキリ言って、あの小さな病室に二十人以上の人がずっと入っているなど無理だ。というか、よく二十人も入れたな。

オットーとデイドは、銀時が目を覚ました事を、スカリエツティに知らせに行った。

屋上には、銀時達以外、誰もいない。少し強い風が屋上に吹いている。

ベッドの白いシートが干されていて、風でバタバタと揺れている。

屋上の中心辺りで、銀時達は足を止めた。先頭に立っている源外が振り返って、銀時達を見回した。

「それじゃ、説明するぞ」

源外の言葉に、銀時達は頷いて応えた。

みんな真剣な表情で、源外の説明が始まるのを待っている。

「まず銀の字が前に闘り合った紅桜は、『電魄』と呼ばれる人工知能を有し、使用者に寄生してその身体を操る。戦闘の経緯をデータ化して学習を積んでいって、能力を向上させる。月詠の姐ちゃんが言ったように、まさに生きた刀だ」

顎に蓄えた白い髭を右手で弄りながら、源外は以前の紅桜について説明した。

以前の紅桜の話は、銀時から聞いている。

「だが今回の紅桜は、以前の物とは全くの別物だ。セイン」

「はいはい」

呼ばれてセインは、源外の隣に移動した。

モニターを出して皆に見せる。映っているのは、黒夜叉の腕と一体化してる紅桜だ。

セインがパネルを操作すると、画面が変わり、紅桜から何かエネルギー

ギーが流れてるような映像が映る。

銀時達は、モニターを見て目を細めた。

「人間つてのは普段、肉体の潜在能力を30%くらいしか使えねんだ」

「何言つてんだ、じーさん？」

源外の言いたい事が解らず、銀時は怪訝な顔をした。

源外はモニターに映ってる紅桜を指差した。

「この紅桜は、使用者の脳に特殊な電流を流している。その電流を受けて刺激された脳は、肉体の中に眠る残りの70%の力を目覚めさせるんだ。つまり、潜在能力を全開にした状態になるわけだ」

源外の説明を聞いて、銀時達は愕然とした。

「するつてーと何ですかイ？ 黑夜叉は潜在能力を解放した、最強状態の旦那つて事ですかイ？」

特に動揺した様子もなく、沖田が尋ねた。

「黑夜叉つて野郎が何者かは、俺にもわからねエ。だが仮に姿だけでなく、身体能力も銀の字と同じだとしたら……」

源外はモニターから、ゆっくりと目を離して銀時達を見た。

「潜在能力を解放した黑夜叉は、最強最悪の敵になるわな」

太陽の光を受けて、源外の赤いゴーグルが輝く。

銀時は思わず目を細めた。

屋上が嫌な沈黙に包まれた。

*

クリスの城。

部屋に珍しくクリス、ゾーマ、黑夜叉の三人が揃っている。

黑夜叉は床に横なつて、イビキをかきながら寝ていた。口からは涎も垂れている。

ゾーマが呆れた顔で、銀時の寝顔を見た。

「…コイツ寝てばっかだな。銀時もこうなのか？」

振り返って、王座に座ってるクリスに尋ねた。

クリスは、いつものように本を読んでいる。ゾーマに声をかけられ、クリスは本から視線を外して、ゾーマを見た。

「ああ。キミと同じく記憶はないが、黑夜叉は限りなく”オリジナル”に近いよ」

「グータラ人間だな」

クリスの答えを聞いて、ゾーマは溜め息をついた。

クリスは、パタンと本を閉じた。

「それに比べてゾーマ。キミは変わったな。実際に”オリジナル”のキミには会っていないが、資料を見て”オリジナル”のキミの性格はわかったつもりだ。殺戮や破壊を楽しむ残忍な怪物だった。それが今では、戦いを楽しむバトル馬鹿だ」
可笑しそうにクリスが笑った。

「うるせーよ」

ゾーマはそっぽを向いた。

「キミの性格が”オリジナル”と違うのは、銀時に敗れたのが原因か：それとも遺伝子情報が不十分だったのか：”クローン技術”自体が未完成だったのか……まあ、そんな事はどうでもいいがな」
クリスは本を片手に王座から立ち上がり、本棚に向かって歩き出した。

本棚の前で立止り、持っている本を棚に戻す。次にどの本を読もうか選ぶ。

本を選びながら、クリスは二人と出会った日を思い出していた。

*

一年前。

どこその研究所に、クリスはいた。研究所の中には、白衣を着た研究員達の死体が倒れている。警備の魔導師が何人かクリスに攻撃を仕掛けたが、クリスは緑色の閃光を放って魔導師を殺した。

死体の数を増やしながら、クリスは研究所の中を進んで行った。

先ほど殺した研究員から、この研究所について聞いた。この研究所は、レジアスとかいう管理局の重鎮が秘密裏に設立したらしい。目的は、生物兵器による軍事力強化。

「平和の為に軍事力を強化？ふつ、笑わせる」

クリスは鼻で笑って、先へ進んだ。

やがて嚴重にロックされた扉の前に、たどり着いた。

クリスは右手を扉に向け、緑色の閃光を放って扉を破壊した。煙が立ち込めてる部屋の中に入った。煙が晴れてきて、部屋の中が見えてきた。

大型のコンピューターが何台もあり、部屋の奥には二つの生体ポッドがある。

生体ポッドの中には緑色の液体が入っていて、人影が浮かんでいる。クリスは生体ポッドに近づいて、中身をよく見た。

大型の生体ポッドの中に浮かんでいるのは、黒い巨体の怪物。

クリスは、生体ポッドの近くにある机に目を向けた。机の上には資料が置かれてあった。生体ポッドの中に入ってる怪物に関する資料だ。クリスは資料を手にとって読み出した。

「ほう」

クリスは興味深そうに、資料を読み続けた。

怪物の名前はゾーマ。古代の魔導師達が造った、生物型ロストロギアらしい。

世界を滅ぼす力を持っているようだが、一人の人間によって倒されたみたいだ。

クリスは、視線をゾーマの隣にある生体ポッドに向けた。

中型の生体ポッド。中には銀髪の男が、緑色の液体の中に浮いている。

クリスは別の資料を手にとって読んだ。

銀髪の男の名前は、坂田銀時。魔法なしでゾーマを倒した男。

その資料を読んで、クリスは銀髪の男にも興味を持った。紙をめく

って、更に資料を読み続ける。

この生体ポッドに入ってるゾーマと銀時は、オリジナルではない。ゾーマは銀時に倒された後、死体は本局で焼却処分された。だが、レジアスが部下に指示を出し、死体が焼却処分される前に、ゾーマの細胞と死体に着いてる銀時の血液を回収したのだ。回収した細胞と血液を使い、この研究所でゾーマと銀時の『クローン』を造り出したのだ。

クリスは、読み終えた資料を床に捨てた。

「面白い」

笑みを浮かべて、二つの生体ポッドを見つめた。

クリスは足元に魔法陣を展開させて、生体ポッドを破壊した。ガラスが碎け散って、緑色の液体が床にぶちまかれた。

クローン・ゾーマとクローン銀時が床に倒れる。

「…ん……？」

二人は頭を押さえながら、体を起こした。

「やあ」

クリスが二人に声をかけた。

二人の視線がクリスに向いた。

「…誰だお前？」

クローン・ゾーマが尋ねた。

「僕はクリス。クリス・ロードだ」

クリスは二人に名乗った。

そして二人に手を差しのべた。

「僕と一緒に来ないか？」

クリスは邪悪な笑みを浮かべて、二人を誘った。

クローン銀時は、メンドくさそうに頭を掻いた。

「わりーな。知らねー人についてはいくなって、母ちゃんに言われてんだ」

そう言っつて、クリスの誘いを断った。

クリスはしばし呆然となったが、しばらくして笑い出した。

「ククク。面白い男だ」

「あ？」

クローン銀時は目を細めた。

「まずは服を着たまえ。話はそれからだ」

「え？」

クリスに言われ、クローン銀時は自分の姿を見た。

下着も着てない、素っ裸だった。

「オイイイイ！キ タマ丸見えじゃねエかアアア！服どこだ、服！？」

キ タマ丸見えのクローン銀時は、慌てて服を探し始めた。クリスとクローン・ゾーマは、その様子を見て大笑いした。

こんなに大笑いしたのは何時ぶりだ？

笑いながらクリスはそう思った。

クローン銀時は、とりあえず黒いスーツを着た。本当は着物が着たかったのだが、コレで我慢する事にした。

「さて、改めて聞こう。僕と一緒に来ないか？」

クローン・ゾーマとクローン銀時は、しばし考えた。

クリスの誘いを断つても、これと言って他に行く所はない。

「俺ア別にいいぜ」

クローン・ゾーマは、クリスと一緒に行く事にした。

「キミはどうする？」

クリスはクローン銀時に顔を向けた。

クローン銀時は、頭を掻きながら考えている。

「ちっ。しょうがねーな」

渋々クローン銀時も了承した。

返答を聞いて、クリスは満足そうな笑みを浮かべた。すると、

「なあ」

クローン・ゾーマが、急にクローン銀時を睨みつけた。

「お前を見てると…何か怒りが込み上げてくんだけどよオ……どう

いう事だ？」

「あ？俺アお前なんて知らねーぜ」

二人はメンチを切り合う。

「ああ。キミは彼に殺されているからね」

クリスが言った。

「え？」

二人はクリスを見た。

しばらく呆然としていたが、自分が目の前の男に殺されたと知り、クローン・ゾーマの怒りは頂点に達した。

「テメエエエエ！よくも俺を殺しやがったなアアアア！」

クローン・ゾーマは怒りに任せて、拳を振るった。

クローン銀時は、ビビりながら拳をかわす。

「待て待て待てエエエ！俺知らねーよ！テメツ、クリーム！嘘言つてんじゃねエよ！！」

拳を避けながら、クリスに文句を言う。

「僕はクリームじゃなくてクリスだ。すまない。言い方が悪かったな」

謝るクリスだが、顔は笑っている。

明らかに今の状況を楽しんでいる。

もう少し楽しんでいたかったが、そのままクローン・ゾーマを暴れさせると危険なので、詳しく教えた。

とりあえず二人は、落ち着いてクリスの話を聞いた。二人はクローンで、ゾーマのオリジナルは、オリジナルの銀時に倒された事。クリスが知っている事を、全て二人に教えた。

「ふん」

「あつ、そう」

二人は特にシヨックも受けず、軽く答えた。

思ったよりリアクションが薄く、クリスは少しポカンとなった。

「…キミ達は、この事実を知ってシヨックはないのかい？」

思い切ってクリスは聞いてみた。

二人は顔を見合わせた後、クリスに向き直った。

「別に」

「細かい事考えるのは、苦手だからな」

二人は、自分達がクローンである事を深く考えていないようだ。答えを聞いたクリスは、思わず苦笑した。

「やれやれ。キミ達は変わっているね」

少し呆れながら、クリスは溜め息をついた。

「ほっとけ」

クローン銀時は拗ねた。

「さて、行くぞ。もうここに用はない」

三人は研究所を出た。

それから数カ月後、三人は高杉と出会った。

クローン銀時を見て、高杉は一瞬驚いたが、すぐに冷静になる。

高杉は、鬼兵隊で造った潜在能力解放型の刀『紅桜式』をクローン銀時に渡した。黒い着物も着て、クローン銀時の名前は”黒夜叉”となった。

クローン・ゾーマは、普通に”ゾーマ”と名乗った。

そしてクリスと高杉は手を組んだ。

*

二人に初めて出会った頃を思い出し、クリスは微笑んだ。

そして一冊の本を取り、王座に座った。

すると足音が聞こえてきた。足音は一定の速度を保ち、こちらに近づいてくる。

クリスの赤い瞳が、足音の主に向けられた。

「よオ」

煙管をくわえた隻眼の男が歩いてきた。

ゾーマも男を見た。黒夜叉は寝ている。

「調子はどうだい、クリス？」

隻眼の男、高杉がクリスに声をかけた。

「ああ。悪くないよ」

クリスは不敵な笑みで返事をした。

「そいつア良かった」

高杉は口から煙管を離し、フーツと煙を吐いた。

「もうすぐ公開意見陳述会が始まる日だ」

「ああ」

不敵な笑みから邪悪な笑みに変わる。

「その日、地上本部を襲撃する。ついでに機動六課にあるレリックも奪う」

世界を破壊する前の余興。

管理局の力が、人間の力が、いかに無力か思い知らせる。同時に己の愚かさを。

「ククク。俺も祭りの様子を見させてもらっぜ」

高杉が不気味に笑う。

全てを破壊し尽くすまで、獣の呻きは止まない。

*

聖王病院の屋上。

敵の力の強大さに、全員言葉を失っている。

重い沈黙に包まれた屋上。

その沈黙を、一人の男が破った。

「じーさん」

銀時が源外に声をかけた。

みんなの注目が、銀時に集まる。

周りの視線を受けながら、銀時は源外に言った。

「野郎が使ってる紅桜と同じ刀、造れるか？」

「え!？」

銀時の言葉に、源外以外の全員が驚いた。

源外はニヤリと笑った。

「若造が。俺を誰だと思ってるやがる？」

真選組の沖田がいるから、口に出しては言えないが、源外は江戸一番の機械技師。

源外の言葉を聞き、銀時は短く笑った。

「頼むぜ、じーさん」

「でも銀時。ソレって体に無理するんじゃない……」

フェイトが心配そうに言った。

「まあ何とかなるだろ」

気だるげに答えて、銀時は屋上の出入口に向かった。

「まあ造るのには時間がかかるからな。完成するまでは、銀の字には体の回復に専念するように言っといてくれ」

源外がフェイト達に言った。

フェイト達もわかっている。これ以外に、クリス達に対抗出来る手段はない。

それにフェイト達が止めようとした所で、銀時は止まらない。そんな事は、付き合いが短いナンバーズにもわかっている。

去っていく銀時の背中を見つめながら、フェイト達は拳を強く握った。

第二十二訓：人間の体は未知である（後書き）

地上本部壊滅を狙うクリス

フェイト達は阻止できるか！？

フェイト「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『悪意は止まらない』。テイクオフ」

第二十三訓：悪意は止まらない（前書き）

公開意見陳述会が行われる地上本部

フェイト達とナンバーズ数名が警備に向かう

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十三訓：悪意は止まらない

公開意見陳述会。地上本部、本局、各世界の代表が意見交換する会。それが今日、地上本部で行われる。

はやて率いる機動六課は、地上本部の警備に行く事になり、ナンバーズも協力して何人か一緒に行く事になった。

シャマル、ザフィーラ、オットー、デイド、リインフォースの五人は、機動六課に残って待機。

チンク、ヴィヴィオ、アルフ、ユーノ、クアットロ、ウーノの六人は、聖王病院に入院してる銀時の見張り。付き添いではなく、見張り。銀時を一人にしといたら、何をするかわからないからである。

ルーテシアは、母親が寝ている病室にいる。母親は死んでいる訳ではないので、何日かすれば目が覚めるそうさ。

ルーテシアは椅子に座って、母親が寝ているベッドの隣で静かに見守っている。

銀時の病室には、銀時と六人の他にフェイトもいる。警備に行く前に挨拶しに来たのだ。

フェイトは屈んで、ヴィヴィオの頭を優しく撫でた。

「ヴィヴィオ。銀時が逃げないように、しっかり見張ってね」

「うん、ママ！」

ヴィヴィオは、頷きながら答えた。

「俺ってそんなに信用されてねーの？」

銀時は、目を細めてフェイトを睨んだ。

「だって銀時って、ちょっと目を離すと何するかわからないから微笑みながらフェイトが言った。

「結構無茶する男だからな」

チンクが頷いた。

周りの皆も頷いている。

「オイオイ。さすがの俺も、こんな体じゃヤンチャは出来ねーよ」

傷はそれなりに治ったが、まだ体中に包帯を巻いている。まだまだ安静にしていけないといけない。

「とにかく銀時は、ゆっくり休んでね」

「へいへい」

銀時はベッドに寝っ転がった。

「それじゃあ行ってくるね」

フェイトは言うど、扉に向かって歩き出した。

「ママ、行ってらっしゃい！」

「気をつけて」

「フェイト、無理しないでね」

ヴィヴィオ、ウーノ、アルフの三人が言った。

「うん。ありがとう。行ってきます」

一度振り返って、皆に挨拶するとフェイトは病室を出て行った。

ドアが閉まった後、銀時は枕元に置いてあるジャンプを取って読み始めた。

「それは何だ？」

チンクが、ジャンプを指差した。

「男達が夢と冒険に心震わせる本、週刊少年ジャンプだ」

ジャンプから目を離さず、銀時は答えた。

「ジャンプ……」

ジャンプを見つめながら、チンクは呟いた。

「そっぴゃア、ドクターはどうした？」

尋ねながら銀時は、ジャンプのページをめくった。

「ドクターは留置所の中にいます。捕まるのは自分だけでいいと」

「……そうか」

ウーノの返事を聞いて、銀時はまたページをめくった。

他の皆も特にやる事もなく、病室は沈黙に包まれた。

アルフがウズウズして、腕をブンブン回す。

「あゝもう！病院ってのは、やる事がなくて暇だねエ！」

「おゝい。騒ぐのやめてくんない？またナース長、来ちまうだろ」

ジャンプに視線を向けたまま、アルフに言った。

「だあって暇なんだも〜ん」

「…十年経つても、お前変わってねエよな」

銀時は、横目でチラッとアルフを見た。

「それじゃあ、銀さんの体、調べてもいいですか？」

クアットロが手を挙げて言った。

全員の視線が、クアットロに集まった。

「アジトでは出来なかったけどオ、今なら銀さんの体を好きにだけ調べられるチャンスですしい〜」

眼鏡を光らせて、クアットロは銀時に近寄る。

不気味な笑みを浮かべ、息遣いも荒くなっている。スカリエツティ以上に不気味だ。

隣にいるウーノや、周りの皆も引いている。

「ナ…ナス長を呼べエエエエ！！」

顔を引きつらせて、銀時が叫んだ。

まあ周りの皆がクアットロを止めて、ナス長を呼ばずに済んだ。

クアットロは心底残念そうな顔をしている。

皆のお陰で助かった銀時は、再びジャンプを読み出した。

「パパ。ヴィヴィオもジャンプ読みたい」

「子供にジャンプは早い。絵本読んでなさい」

銀時がそう言うと、ヴィヴィオは頬を膨らませた。

「ヴィヴィオ。僕と絵本読もうか？」

絵本を片手にユーノが言った。

ヴィヴィオは、洪々ユーノと一緒に絵本を読み始めた。

「銀時。もう少しヴィヴィオに構ってやったらどうだ？」

溜め息をついて、チンクが言った。

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

*

地上本部。

公開意見陳述会に参加するため、会議室に続々と各世界や本局の代表が集まってくる。

会議室の中には、はやてとシグナム、カリムと秘書のシャツハ・ヌエラという女性もいた。

濃い髭を生やした男、レジアス中将とオーリスも来ている。

*

地上本部の外。

フェイト、なのは、ヴィータ、ギンガ、リインフォース・ツヴァイ、フォワードの四人は、本部の周辺を警備していた。ナンバーズのトール、ウエンディ、セイン、デイエチ、ノーヴェ、セツテもいる。沖田と月詠もいるのだが、沖田はいつものアイマスクをつけて、地面に座り、壁に寄り掛かって寝ている。

ティアナが溜め息をついて、寝ている沖田に近寄った。

「沖田さん。警備サボらないでください」

ティアナに起こされるが、沖田はアイマスクを外さない。

「起きちゃダメだ起きちゃダメだ起きちゃダメだ起きちゃダメだ」

「いや、なに他の作品の台詞アレンジして、自分に言い聞かせてるんですか！？いいから起きてください！」

ティアナは沖田の腕を引っ張って、無理矢理体を起こした。

起こされた沖田はアイマスクを外し、頭をぼりぼりと掻きながら言った。

「いや、エ アンゲリヨン新劇場版：破、面白かったなあ」

「それ映画観た作者の感想でしょう！」

すかさずティアナがツッコむ。

「今度はサマー……」

「もう映画の話はいいです!!」

ティアナが話を強制終了させた。

スバル達は、笑いながら二人の様子を見ていた。

「全く。貴様らには緊張感というものがないのか？」

トーレが呆れながら言った。

月詠が笑いながら、トーレの隣に歩み寄った。

「じゃが、緊張してガチガチに固まるよりは良からう？」

「それはそうだが…」

トーレは少し困惑した。

調子が狂う。

沖田という男も、銀時と似たような感じだ。実にマイペースな人だ。これから、あのクリスが襲撃してくるかもしれないと言うのに、全く緊張感がない。

機動六課部隊長、八神はやての知り合いの預言によれば、クリスが地上本部を襲撃する可能性がある。

気を引き締めなければならぬと言つのに、沖田のせいはこちらまで気が抜けてしまう。

「まあ悪くはなからう？」

微笑みながら月詠が言った。

トーレは少し考えた後、

「…まあな」

少し笑みを浮かべて答えた。

ティアナ達と別れて、スバルがノーヴェに近寄った。

「ねえねえ。ノーヴェの武装って、私のデバイスと似てるよね？」

「あ？ああ、そうだな」

素っ気なくノーヴェが答えると、セインが近寄ってきた。

「そういえばさア、あんたも戦闘機人なんだろ？」

「えっ!？」

スバルは少し驚いた顔をした。

「ドクターが言ってたっスよ。『タイプゼロ・セカンド』。あたし

達の元になった戦闘機人だつて。誰が制作したのかは、わからない
みたいっすけど」

ウエンデイが言った。

「…そつか。じゃあギン姉の事も？」

「知ってるよ」

スバルの問いに、セインが答えた。

スバルと姉のギンガは、共に戦闘機人の実験体として、人工的に生
み出された存在なのだ。

何者かがゲンヤ・ナカジマの今は亡き妻、クイント・ナカジマの遺
伝子を用いて生み出したクローンのような存在でもある。二人は戦
闘機人関連の事件を捜査していたクイントに引き取られ、娘として
平穏に育てられた。

「もしかして、ノーヴェとスバル達の元になつてる遺伝子って同じ
なんじゃないかな？」

セインが思いついて言ってみた。

「えっ!？」

ノーヴェとスバルが同時に驚いた。

「ああ、そういえば顔も似てるっす」

二人の顔を見ながら、ウエンデイが言う。

確かにスバルとノーヴェは、髪や瞳の色は違うが、二人とも顔がそ
っくりである。

ノーヴェとスバルは、顔を見合わせた。

「じゃあ…私達つて姉妹？」

「な…!だ…誰がお前らなんかの…!」

ノーヴェはそっぽを向いてしまう。

「まあまあ。仲良くやろうよ」

「そっつすよ」

セインとウエンデイが、ノーヴェに近寄る。

「……………」

ノーヴェは顔を赤くして、スバルを見た。

スバルは笑ってノーヴェを見ている。ノーヴェの顔は更に赤くなつていく。

「フンッ！」

目を閉じて、スバルから顔をそらす。

「……仲良くしてやるよ！」

少し照れた感じにノーヴェが言った。

「うん！」

スバルは笑顔で頷いた。

周りにいるセインとウエンディも、嬉しそうに笑っている。

デイエチとセツテは、ノーヴェ達がいる所とは、別の場所を警備している。

「まさか管理局の人間と協力する事になるとは、思わなかったな」
歩きながらデイエチが言った。

本来のストーリーでは、ナンバーズが地上本部を襲撃するはずだった。

だが銀時やクリスといった、イレギュラーな人物が現れた事で、ストーリーが大きく変わってきたのだ。

「銀時は、ちゃんと病院でおとなしくしてるかな？」

少し心配そうにデイエチが呟いた。

「姉達が見張っていますから、心配ないでしょう」

隣を歩くセツテが言った。

「そうだな」

デイエチは少し安心したように笑った。

*

フェイトとなのはは、地上本部周辺を見回っていた。

「今のところ、異常はないね」

「うん」

なのはの言葉に、フェイトは頷いた。

このまま何事も起こらなければいいが、そうはいかないだろう。フェイトの胸をよぎる不安があった。クリスの事もそうだが、不安はもう一つあった。

沖田から聞かされた一人の男。クリスと手を組んでと思われる、銀時達と同じ世界から来た危険な男。

もしかしたら、クリスと一緒に地上本部を襲撃しに来るかもしれない。

「フェイトちゃん」

不安に思っていると、なのはが近寄って声をかけてきた。

「私も一緒にいるから、頑張ろう」

力強く、優しい笑顔でなのはが言った。

そうだ。自分は一人じゃない。

なのはやフォワードの皆、沖田さんや月詠さん、ナンバーズもいる。

「うん」

フェイトも力強く頷いて応えた。

皆がいれば、きっと大丈夫。

まもなく公開意見陳述会が始まる。

*

病室。

ヴィヴィオはアルフと椅子に座って、仲良く寝てしまっている。

ウーノとクアットロは、スカリエッティの面会に行っている。毎日、面会に行っているそうだ。

ユーノとチンクは椅子に座って、それぞれ違う本を読んでいる。

銀時は相変わらずジャンプを読んでいる。

チンクは本を閉じて、銀時に顔を向けた。

「銀時」

「ん？」

銀時はジャンプから目を離さない。

「高杉晋助…とは何者だ？」

チンクの問いに、銀時はピクリと眉を動かした。

ユーノも本から目を離して、二人を見た。

「クリスと手を組んでると思われる男。お前と同じ世界の人間のようにうだが？」

銀時を真っ直ぐに見つめながら、チンクは聞いた。

病室が沈黙に包まれる。

「……………」

銀時は答えない。

ジツとジャンプを見ている。

チンクも黙っている。静かに銀時の答を待っている。

数分の沈黙の後、銀時が口を開いた。

「…………世界に喧嘩を売った大馬鹿野郎さ」

「え？」

チンクは少し目を見開いた。

それっきり銀時は黙ってしまった。

基本、銀時は自分達の事を他人に話さない。万事屋で一緒に働いてる新八や神楽も、桂から銀時の昔の話聞いた。

チンクはこれ以上は聞けず、黙り込んでしまった。

なんとなく、場に気まずい雰囲気があった。

「あ…そうだ、チンク。君達の姉の…ドゥーエとは連絡つかないのかい？」

気まずい雰囲気消すため、ユーノが話題を変えた。

「…ああ。ドゥーエは単独行動が多いから、あまり連絡がつかないんだ」

ユーノに顔を向けて、チンクは答えた。

ドゥーエは、潜入諜報活動に特化して長期独立行動を行うため、アジトにもほとんどいないし、連絡もつかない。

「早く、連絡がつくといいね」

「ああ」

チンクは短く答えて、本を開いてまた読み出した。
再び病室は沈黙に包まれた。

*

暗い空間。

空間には、幾つもの黒いプレートのような物が浮いている。

そして、この暗い空間に三つの明かりがあった。光を放っているのは、三つの生体ポッド。

生体ポッド中には黄色い液体が入っており、その中に浮かんでいるのは人間の脳。

「まさかジェイル・スカリエッティが捕まるとは……予想外の事態だ」

脳が入っている生体ポッドしかない空間に、人の声が響いた。

男の声である。

「『聖王のゆりかご』も、クリスとかいう男が暴れたせいで、使い物にならなくなった」

最初の声とは、別の男の声が喋った。

「聖王のゆりかご、戦闘機人計画、生物兵器計画。全ての計画が狂ってしまった」

また別の男の声。

声の主の正体。

それは、生体ポッドの中に浮かんでいる脳。彼らは脳だけで生きているのだ。

最高評議会。

管理局を生み出した人物達である。朽ちていく肉体を捨て、脳だけの状態となって評議会制を作って見守ってきた。

だが目的の為には手段を選ばなくなってしまう、広域次元犯罪者のスカリエッティを利用する等、次元犯罪者と変わらない存在と化している。

「あのクリスという男が現れなければ、我々の計画は遂行されたはずだ！」

男が声を荒げる。

「クローン・ゾーマとクローン銀時を盗んで我が物にしているのも、おそらく奴だ」

「うむ……早急に手を打たねば……」

最高評議会が、今後の事について話し合う。そのときだった。

「最高評議会つてのは、アンタらかい？」

声がした。

「！」

最高評議会は、声に反応した。

プレートを飛び移りながら、一人の男が最高評議会に近づいた。

やがて男は、三つの生体ポッドの前にたどり着いた。

「お偉いさんに会うには、コイツが必要なんだろ？」

言くと男は、手に持っている物を一口食べた。

食べた物は、真っ赤なリンゴ。

「き……貴様は……！」

最高評議会は動揺した声を出した。

男は銀髪の天然パーマに黒い着物、腰に刀を差している。

「アツポオ」

男、黒夜叉は、リンゴを片手にそう言った。

*

機動六課から少し離れた場所に、大きな人影があった。

離れた場所から魔力を抑えて、ジッと機動六課を見つめている。

ゾーマだ。

クリスに言われて、機動六課にあるレリックを奪いに来たのだ。ついでに機動六課を破壊するように言われた。

「あんまり気乗りしねエなア」

ゾーマは溜め息をついた。

ほとんどの戦力は、地上本部の警備に出向いている。これでは満足した戦いができない。

「まあ…最高評議会暗殺、なんてのよりはマシか」

そう言つて、無理矢理自分を納得させる。

「じゃあ、ボチボチ行くか？」

イマイチ緊張感に欠ける言葉を言いながら、ゾーマは動き出した。

*

夕刻を過ぎ、月が輝く夜。

地上本部で行われてる公開意見陳述会も、そろそろ終わろうとしていた。

フェイトとなのはは、地上本部周辺を飛んで見回っていた。

それぞれ見回りを終えて、二人は合流した。

「こっちは異常なし。フェイトちゃんの方は？」

「こっちも異常なし」

互いに報告を済ませる。

「もうすぐ会も終わるし、今日は何も起こらないのかな？」

怪訝な顔でなのはが言う。

フェイトは胸騒ぎがしていた。今のところ何も起きていないが、何だが嵐の前の静けさのようで怖い。

「フェイトちゃん」

フェイトが不安に思っていると、なのはが声をかけた。

なのはは、地上本部から少し離れたビルの屋上を指差している。

フェイトは指差している先を見た。

ビルの屋上に誰かがいる。

*

地上本部から離れたビルの屋上。

一人の男が、屋上から地上本部を見つめている。派手な着物を着て、腰に刀を差している。

口にくわえている煙管を離し、フーツと白い煙を吐いた。夜風に吹かれて、白い煙は消えていった。

その時、男の背後に二人の魔導師が降り立った。

「時空管理局、機動六課のフェイト・テストロツサと高町なのはです。今すぐ武装を解除してください」

手に持っているデバイスを、男の背中に向ける。魔導師は、フェイトとなのは。

二人に武装を解除するように促されるが、男は従う様子はない。

「もう一度言います。武装を解除してください」

フェイトがもう一度、武装を解除するよう促した。

男は答えない。

代わりに男は、ゆっくりと振り返った。

左目を包帯で隠している。

口元を歪めて不気味な笑みを浮かべ、鋭い隻眼が二人を射抜く。

フェイトとなのはは、男の顔を見た瞬間、冷汗を流した。

攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、高杉晋助と対峙した瞬間だった。

第二十三訓：悪意は止まらない（後書き）

高杉「死んじまったら、これから始まる祭りが見れねエだろ？クク
ク」

銀時「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『祭りは派手に』。
テイクオフ」

不気味な笑みを浮かべる高杉

地上本部、機動六課、フェイト達の運命は！？

第二十四訓：祭りは派手に（前書き）

（作者からのお知らせ）

赤夜叉「今回の話は長いです」

ついにクリス達が本格的に動き出す！

高杉と対峙したフェイト達は！？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十四訓：祭りは派手に

地上で何が起きようと、今夜も月は夜の世界を照らす。

月明りは、屋上にいる三人の男女の姿を照らした。

二人の女、フェイトとなのはは、デバイスを男の背中に向けて構えている。

フェイトとなのはにデバイスを向けられてる男、高杉は顔を上げた。「この世界にも随分と、デケー月が出てるな」

夜空に輝く月を見上げて、高杉が言った。

フェイトとなのはに背後をとられても動揺せず、いつもの落ち着いた様子で煙管を吹かしている。屋上に、不気味な雰囲気すら漂う。

「かぐや姫でも降りてきそうな夜だと思ったが：かぐや姫もビツクりな、美しい姫様達が降りてきたな」

ククク、と愉快そうに高杉が笑った。

フェイトとなのはは、高杉の背中にデバイスを向けたまま、微動だにしない。

危ない。

この男……危険な感じがする。

二人は、そう直感した。

今までフェイトは、執務官として世界中を飛び回り、様々な次元犯罪者達を逮捕してきた。

だが目の前にいる男は、それらの次元犯罪者がちっぽけに思える程の危険な感じを放っていた。

あのゾーマとも違う危険な感じ。

緊張で汗が流れる。自然とデバイスを握る手に力が入る。

なのはも同じのようだ。

冷たい夜風が、三人の頬を撫でた。

「どうした？ポーツと突っ立ってるだけか？」

後ろを見ずに、高杉が言った。

フェイトは、僅かに表情を強張らせた。

「…貴方は、高杉晋助ですか？」

「ほオ。機動六課の隊長殿に知られてるとは、光栄だねエ」

高杉は煙管を離し、白い煙を吐いた。

「貴方には聞きたい事があります。武装を解除して、おとなしく投降してください」

なのはが、再び武装解除を促した。

「悪いが、ソイツは出来ねエ相談だ」

言って高杉は、僅かに顔をフェイト達に向けた。

横目で 獣のような鋭い目が、二人を射抜くように見つめた。

その瞬間、フェイトとなのはに異変が起きた。

急に手足が痺れ、体が言う事を聞かなくなった。デバイスが音を立てて床に落ち、二人も床に倒れた。

「な…？これは…！？」

なのはは必死に体を起こそうとするが、体が痺れて動かす事も出来ない。

隣に倒れてるフェイトも同じだ。

「ククク。魔導師様にも、毒は通用するみてエだな」

倒れてる二人を見下ろしながら、高杉が言った。

「……ど…毒…？」

顔を動かして、高杉を見上げる。

「ああ。おっと、安心しな。全身麻痺の神経毒で、致死性はねエよ」

高杉は口元を吊り上げて、不気味な笑みを浮かべた。

その笑みに、フェイトとなのはは寒気を感じた。

「ほら。屋上の隅っこから煙が出てるだろ？」

高杉が指差して言った。

二人は高杉が指差した方を見た。よく見ると、小さなランプのような形をした物が屋上の隅にあり、穴から煙が出ている。

「月明りだけじゃ見え難い上に無臭だからな。気付かねエのも無理はねーよ」

高杉は煙管を口にくわえた。

「ちなみ俺は、毒を中和させる薬を飲んでるから麻痺にはならねエ。結構苦い薬だったかな」

最後に高杉は可笑しそうに笑った。

フエイトとなのは悔しさで歯噛みした。

こんな毒まで用意してるなんて……こちら側が高杉に気付くのを予測していたのか。

「私達をどうするつもり？」

高杉を睨みながら、なのはが言った。

「なアに。殺しはしねーよ」

高杉は振り返ってアル物を見た。

視線の先にあるのは、地上本部。

「死んじまったら、これから始まる祭りが見れねエだろ？ククク」

「祭りって……まさか……！？」

高杉の意図に気付いたフエイトは、驚愕して目を見開いた。

「いいから黙って見とけよ。すこぶる派手な見せ物が始まるぜ……」

*

地上本部の会議室。

公開意見陳述会が終わろうとした時、事件が起こった。

地上本部の全ての明かりが消え、機能が停止したのだ。会議室は真つ暗闇になり、会に集まった群衆はパニックになる。

「どうした？何事だ？」

レジアスが大声で叫んだ。

一人の局員がレジアスに近寄った。

「何者かが、地上本部の中枢システムを破壊したみたいですよ」

「何だと？一体誰が！？」

報告を聞いて、レジアスは声を荒げた。

混乱の中、はやてとシグナムは、カリムとシャツハと合流した。

「はやて」

「どうやら、始まったみたいや」

はやては険しい表情をした。

会議室を出ようと、何人かで扉を押すが開く気配はない。

はやて達は、完全に会議室に閉じ込められてしまった。

その時、真つ暗闇の会議室の中央に、緑色の魔法陣が出現した。

全員の注目が魔法陣に集まった。

群衆が騒いでいると、魔法陣の中から一人の男が現れた。

長い金髪に赤い瞳の男、クリスが騒いでる群衆を見回した。

「黙れ」

クリスが殺気のコもった声を発した。その瞬間、騒ぎはピタリと収まった。

はやては息を飲んだ。

この男がクリス。

リインフォースから話は聞いていたが、実際に見て力の強大さがわかる。

シグナムとカリム、シャツハもクリスの強大さを感じて冷汗を流し、顔色を悪くしている。

群衆の中には、クリスの殺気を受けて気絶して倒れた者がいる。

クリスは群衆を見回した。その中で目的の人物を見つけた。

レジアスは、クリスと目が合って、一気に血の気が引いて顔が青ざめた。

「やあ、レジアス」

笑みを浮かべてクリスは、レジアスに近づいた。

レジアスは恐怖で足がすくみ、動く事が出来ない。隣にいるオーリスも同様だ。

「初めまして。僕はクリス。クリス・ロードだ」

ニッコリと笑って、クリスは自己紹介した。

レジアスは一言も声を発せない。

「地上の平和の為に、随分と頑張っていたみたいですね。聖王のゆ

りかごや戦闘機人計画、生物兵器計画。色々やっていたみたいだ」
レジアスの顔色が更に悪くなり、目が見開かれた。
オーリスも動揺している。

クリスの言葉を聞いて、はやて達は怪訝な顔になる。

「聖王のゆりかご？戦闘機人計画？生物兵器計画？」

はやて達は、一瞬クリスが何を言っているのかわからなかった。

”聖王のゆりかご”が何なのかわからなかったが、戦闘機人という言葉で中身が見えた。おそらくレジアスは、ジェイル・スカリエツティと裏取引をしていたのだ。

「もうわかつてると思います、貴方達が設立した研究所からゾーマと銀時のクローンを連れ出したのは、僕です」

笑みを崩さずクリスが言った。

はやて達は、クリスの話に驚愕した。

ゾーマと銀時のクローン？

ホテル・アグスタに現れたゾーマと、スカリエツティのアジトに現れた黑夜叉は、レジアスが造ったクローン？

そこまで考えた時、クリスの雰囲気が変わった。氷のように冷たく、冷えた空気が場を包んだ。

「馬鹿な男だ。そんな事しても何も変わらん。争いを止めようとかを生み出せば、それに対抗しようとまた力が生まれ、争いは続く」
見下すような目をレジアスに向ける。

「それに…」

クリスの目が鋭くなる。

レジアスは体を大きく震わせた。

クリスから凄まじい殺気が放たれる。

「貴様ら如き下等なゴミが、彼らの魂を弄ぶな！！！」

初めてクリスが声を荒げて叫んだ。

クリスの怒気と殺気に圧され、また群衆の何人かが気絶して倒れた。目の前にいるレジアスも失神寸前である。

「レジアス。争いがなくなる簡単な方法を教えてやるう」

クリスは右手をレジアスに向ける。

「それはキミ達、下等な人間共が絶滅することだ」
クリスが冷たい声で言った。

「ま…待って！」

はやてが叫んだ。

クリスは横目ではやてを見る。

はやては重い威圧感に耐えながら、真っ直ぐにクリスを見つめる。

「主！」

「はやて！」

シグナム達もはやての傍に駆け寄った。

「邪魔だ。おとなしく見ている」

言うとクリスは、レジアスに視線を戻す。

「クリス！」

はやてがクリスの名を叫んだ。

クリスは、僅かに顔をはやてに向けた。

怯まずはやては、クリスに言った。

「確かに…レジアス中将がやってきた、人の命を弄ぶような計画は、許されない行為や。せやけど殺すのはアカン！」

必死にはやては、クリスを説得する。

クリスは、はやての言葉を聞いて溜め息をついた。

「キミはバカか？」

「え？」

「組織というモノには、必ずこういったクズ共がいるんだ。上層部のクズ共がいるから世界は腐っていく。生かして野放しにする方が愚かな行為だ」

威圧感を放ちながら、クリスが言う。

「そつやない！捕まえて、ちゃんと法で……！」

尚もはやては、クリスを止めようと説得するが、

「消えろ」

右手をはやてに向けて、魔力を溜める。

「危ない!!」

シグナム、カリム、シャツハがはやての前に出る。

クリスが魔力弾を放つ。

シグナム達が全力で障壁を張る。障壁と魔力弾が、火花を散らせてぶつかり合う。

クリスがパチンと指を鳴らす。直後、魔力弾が爆発した。

「きゃあああああ!!」

爆発を受けて、障壁は砕け、はやて達は後方へ吹き飛ばす。

クリスが追撃の魔力弾を放つ。魔力弾を受けた四人は、本部の外に吹き飛んだ。はやて達は、気を失って地面に向かって落下する。

クリスは足元に魔法陣を展開し、会議室を覆うように結界を張った。

「さて……」

レジアスに向き直る。

「待たせたね」

レジアスは絶望しきった顔をしている。

彼だけでなく、会議室にいる全員が絶望した。

その時、クリスの体に異変が起きた。

「安心したまえ。最高評議会とかいう神気取りのカス共も、始末される。黑夜叉の手によってね」

クリスの体が黒く変色していく。同時に禍々しい魔力がこれまでにないくらいに上昇している。

もはやSSSランクという、ランク付けが無意味な程に　。

死神。

恐怖を与え、魂を狩る死神。全員の目には、今のクリスの姿は死神に見えた。

「死後も拭えぬ恐怖を抱いて……消える」

クリスが重く低い声を発した。

直後、黒い爆発が起こった。

その場にいた全員は、悲鳴を上げる事すら出来ず、塵一つ残らず消滅した。

*

はやては、落下の途中で意識を取り戻した。

「シグナム！カリム！シャツハ！」

三人に呼びかける。

はやての声で、シグナム達も気がついた。
すると、

「はやてエエエー！」

声が聞こえた。

顔を上げると、ヴィータ、トーレ、セツテがこちらに向かって飛んでくる。ヴィータがはやてを抱え、トーレがシグナムを、セツテがカリムとシャツハを助けた。ゆっくりと地上に降りた。

「はやて！大丈夫か！？」

降りてすぐ、ヴィータが聞いた。

「うん。ヴィータのお陰で助かった。ありがとう」

はやては笑ってヴィータに応えた。

「私達も助かった。礼を言う」

「ありがとうございます」

シグナム達もトーレ達に礼を言った。

「礼はいらん」

「当然の事をしただけです」

無愛想にトーレとセツテが言う。

直後、上で黒い光が発し、大きな爆発音がした。

全員が上を向いた。

「な……！？」

驚愕と戦慄で、全員が目を見開いた。

地上本部の会議室から上の階が、今の爆発で全て吹き飛んでいるのだ。

「こ……こんな……事が……！？」

地上本部を見上げてる、シャツハの顔は蒼白した。その時、地上本部の周辺に幾つもの緑色の魔法陣が出現した。はやて達が身構えると、魔法陣から、背中に翼を生やした黒い怪物達が現れた。

「コイツら、ゾーマの怪物か！」

怪物達を見て、シグナムが叫んだ。

トーレとセツテが前に出て、固有武装を構える。

「はやて！シグナム！」

ヴィータが二人に、預かっていたデバイスを渡した。

「よし！いくで！」

はやて達は、デバイスを起動させた。

*

地上本部の周辺では、局員と怪物が戦っていた。

「うおおおおお！！」

スバルとノーヴェが、同時に拳を怪物に放った。

肉が潰れ、骨が砕ける音と共に、怪物は吹き飛んだ。

ティアナとウエンディは、射撃で援護する。怪物の急所目掛けて、魔力弾を撃つ。

デイエチもイノメスカノンで、怪物達を一気に撃ち抜く。

エリオは、ストラダの出力を最大にした突進で、怪物達を貫いていく。

沖田も素早い剣技で怪物達を切り裂いていく。真選組という仕事上、複数の敵を相手にするのは慣れている。

月詠はセインのディープダイバーのサポートで怪物達の間を突き、クナイの雨を放つ。

キヤロは『竜魂召喚』によって、フリードを本来の姿に戻した。フリードは巨大な竜となり、火炎砲で怪物達を焼き払う。

機動六課とナンバーズ、沖田と月詠の奮闘により、怪物達の数が減

つてきた。

その時、

「た…大変です！」

突然リインが驚きの声を上げた。

「どうしたんですか？」

スバルが尋ねた。

「今、連絡があつて、機動六課にゾーマが現れたです！」

「えっ!?!」

スバル達は驚愕した。

あのゾーマが、機動六課に現れた。

六課にはザフィーラやシャマル、ナンバーズもいるが、正直持ち堪えられるかどうか。

「私とエリオ君が行きます！」

「はい！」

キャロとエリオが申し出た。

地上本部を放つておいて、全員で行く訳には行かない。

「わかった。こっちも終わったら、すぐに行くからね！」

「無理するんじゃないぞ！」

スバルとノーヴェが言った。

「はい！」

エリオとキャロは、頷いて応えた。

二人はフリードの背中に乗り、機動六課に向かって夜空を飛んで行った。

「コイツらを片付けて、あたしらもとつと行くぞ！」

「うん！」

ノーヴェに伝えて、スバルは怪物達に向き直った。

*

「ククク。やっぱり祭りは派手じゃねエとな」

高杉は、ビルの屋上から地上本部の騒ぎを見ながら、楽しそうに笑っている。

後ろで倒れて、地上本部の騒ぎを見ているフェイトとなのはは、目を見開いて驚愕の表情を浮かべていた。

地上本部の上の階が、巨大な黒い爆発で跡形も無く吹き飛んだ。それから地上本部周辺に、ゾーマが生み出したモノと思われる怪物達が出現した。

「しかし機動六課の連中とナンバーズは、中々頑張ってるじゃねえか」

煙管をくわえて、高杉が言った。

他の局員の警備達は、怪物達に歯が立たず逃げ腰になっているが、機動六課とナンバーズは怯まず怪物達に挑み倒していつてる。

「真選組一番の剣の使い手、沖田総悟までいやがる。こいつア分が悪いかもな」

それでも高杉は、不敵な笑みを崩さない。

「どうして…こんな事を…?」

なのはが高杉を睨む。

「どうして? 簡単な理由だ。憎いからだよ」

振り返りながら、高杉が答えた。

「憎いから壊す。実にシンプルな理由だろ?」

「そんな…!」

高杉の答に、なのはは怒りを覚えた。

「憎いからと言って、こんな事をしていい理由にはならない!」

フェイトが、語気を強めて言った。

すると、高杉の顔から笑みが消えた。隻眼がフェイトを射抜くように、鋭く見つめる。

「……お前… 大事なモノを失った事があるか?」

高杉が低い声で、フェイトに尋ねた。

「え…?」

フェイトは動揺した。

不安が襲ってきて、胸を締め苦しめる。

「大事なモノを失った事もねエお前らに……あまっちよろい正義を語る小娘に……俺達の気持ちはわからねエよなア」

高杉の眼に、憎悪の光が宿った。

すると高杉の隣に、怪物が一匹降り立った。

「モニターを出せ」

高杉に命令され、怪物はモニターを出した。

映し出されたのは、機動六課隊舎。

*

暗い空間。

三つの生体ポッドは砕けて、中に浮いていた脳はぐちゃぐちゃになって床に落ちていた。

生体ポッドの前に立ってる黒夜叉は、溜め息をつくくと、紅桜式式を戻して鞘におさめた。

「醜いモノを嫌う人間……醜いモノになってまで生き長らえようとする人間……難儀な生き物だ」

最高評議会”だった”モノを見下ろして呟いた。

その時、黒夜叉の背後に、一人の女性が現れた。

長い金髪の美しい女性。体にピツタリとフィットしたスーツを着ていて、右手にはカギ爪に似た武器を付けている。

黒夜叉は振り返って、女性を見た。

「よオ。案内サンキューな。お陰で迷わず、この部屋まで来れたぜ」

黒夜叉は女性に礼を言った。

「……何故彼らを殺したんですか？」

女性は黒夜叉に尋ねた。

「仲間に頼まれてな。それに……俺自身、コイツらの事が気に入らなかつた」

脳を見下ろし、不快そうな顔をする黒夜叉。

答を聞いた女性は、溜め息をついた。

「私の仕事を、取られてしまいましたね」

「楽できてよかつたろ？ドゥーエ」

不快な表情が消え、黒夜叉は笑いながら女性、ドゥーエに言った。

ドゥーエは少し微笑んだ。彼女がナンバーズ二番のドゥーエである。

「それじゃあ私は、アジトへ帰ります」

最高評議会がいなくなった今、ここにいる理由はなくなった。

ドゥーエが振り返って、部屋を出ようとした時だった。

「待てよ、ドゥーエ」

黒夜叉が呼び止めた。

ドゥーエは足を止めて、振り返った。

「アジトに行っても誰もいねーぞ」

「え？」

ドゥーエは怪訝な顔をした。

「みんな捕まったからな」

黒夜叉が言った後、沈黙が訪れた。

ドゥーエは、目を見開いて驚愕している。しばし呆然としていたが、

すぐに我に帰り、黒夜叉に近寄ってカギ爪を向けて詰め寄った。

「ドクターが、妹達が捕まったですって！？嘘をつくな！！」

「待て待て待て！落ち着け！詳しく言えば、スカリエッツィは捕ま

ったが、ナンバーズは機動六課ってトコに保護されてる」

慌てて黒夜叉は説明した。

「ドクター……」

ドクターの逮捕を聞き、ドゥーエは少し落ち込んだ。

だが、すぐに気持ちを切り替えた。

「妹達は無事なのね？」

「ああ。保護されてるだけだからな。まあスカリエッツィの方も手

荒いには扱われてねーよ」

正直に黒夜叉は答えた。

妹達が無事だとわかり、ドゥーエはカギ爪を下ろした。

そして振り返って移動し始めた。

「オイ。どこ行くんだ？」

「決まってるじゃない。機動六課よ！」

振り返らずドゥーエは答えた。

「ドゥーエ！」

黒夜叉はプレートの上を飛び移り、ドゥーエの腕を掴んだ。

「は…離しなさい！」

ドゥーエは、黒夜叉の手を振りほどこうとする。

「今、機動六課に行くのは危険だ」

「うるさい！私の妹達がいるのよ！」

ドゥーエは、機動六課に行く事をやめない。

説得しても無駄だと判断して、黒夜叉は溜め息をついた。

「わかったよ。だったら俺と一緒に行ってやる」

「え？」

ドゥーエは動きを止めて、驚いた顔で黒夜叉を見た。

黒夜叉はドゥーエの腕を離さぬよう、掴んでる手に力を入れた。

*

機動六課は、火の海に包まれていた。隊舎の屋根は、所々吹き飛んで欠けている。地面も抉れ、大きな瓦礫や小さな瓦礫が、沢山落ちている。

隊舎の前には、ザフィーラ、シャマル、リインフォース、オットー、デイドが傷ついた体で立っていた。

「もうやめねーか？」

傷ついたザフィーラ達の前に立っているのは、ゾーマ。

「弱い者イジメは、俺の趣味じゃねーんだよ」

ゾーマは困ったように、頭をぱりぱりと掻く。

「諦めません！」

床に膝をついていた、シャマルが立ち上がる。

「我も…全力で此処を護る！」

ザフィーラも牙を剥く。

「僕も」

「私も」

オットーとデイドも立ち上がる。

「ここで倒れる訳には、いきません！」

ラインフォースが気迫を放ちながら、立ち上がった。

ゾーマは溜め息をついた。

「仕方ねーな………そんじゃ、少し眠っててもらっぜ」

ゾーマは右手を振り上げて、魔力を溜める。

ラインフォース達は身構えた。

「ゴオオオオオオ！！」

雄叫びと共に、右拳を振り下ろし、地面にぶつけた。

ラインフォース達に向かつて、地面に亀裂が走る。亀裂がラインフ

ォース達に到達した瞬間、地面から黒い閃光が襲ってきた。

「あああああ！！」

閃光を受けて、ラインフォース達は地面に倒れた。

ダメージが大きく、体が動かない。

「中に入らせてもらっぜ」

ゾーマは、倒れてるラインフォースを通り過ぎて、機動六課隊舎の

中に入っただけだ。

ラインフォースは歯を食いしばった。

強い。以前のゾーマより強くなっている。

己の無力さを悔やみながら、ラインフォースは意識を手放した。

*

「酷い……」

機動六課に到着したキャロとエリオは、現場の惨状を見て愕然とした。

地上に着陸し、フリードの背中から降りた。

「皆さん!!」

二人は、倒れてるリインフォース達を見つけた。

「しっかりしてください!」

リインフォース達に駆け寄って、必死に声をかける。

その時、

「ん?」

声が聞こえた。

二人は隊舎の入口を見た。

ゾーマが入口から出てきて、二人を見ている。手にはレリックが握られている。

「ああ…お前らか……」

ゾーマは、また困ったように頭を掻いた。

エリオの中で、フツフツと怒りが湧いてきた。ストラダーを握る手に力を入れる。

「……お前か……?」

震える声で小さく言った。

「あ?」

聞き取れず、ゾーマは首を傾げた。

「これをやったのは……」

エリオは顔を上げて、鋭い目でゾーマを睨みつける。

「お前かアアアアア!!」

怒鳴りながらエリオは、ゾーマに向かって走り出した。

「エリオ君!!」

キャラが叫ぶが、エリオは止まらない。

「ストラダー!!」

ストラダーの出力を全力全開に、ゾーマに向かって突進する。

「馬鹿が」

小さくゾーマは呟いた。

するとエリオの視界から、ゾーマが消えた。

「!?!」

ゾーマの姿が消えて、エリオは動揺する。

次の瞬間、頭に強い衝撃を受けた。気付いた時には、顔は地面にめり込み、ストラダは手から離れていた。

「怒りで頭に血が上って、冷静さを欠くんじゃねエ」

上からゾーマの声が聞こえた。

ゾーマはエリオの頭上に移動し、拳をエリオの頭目掛けて振り下ろしたのだ。

エリオは意識を失った。

ゾーマは拳を頭から離し、エリオから離れた。

「……………どうして…?」

「ん?」

小さな声が聞こえ、ゾーマは振り返った。

キヤロは顔を俯き、固く拳を握っている。

「……………どうして…こんな事するんですか…?」

手に付けているグローブ型デバイス『ケリュケイオン』が光る。

「お前、俺がいい奴だとも思ってたのか? 戦場で、そういう甘い考えは捨てな。俺達は敵同士なんだぜ?」

「……………貴方の事は…よく知りませんが…でも…貴方が心の底からの悪人には思えません!」

「甘い考えは捨てるって言うてんだっ!?!」

ゾーマが声を荒げて叫んだ。

キヤロはビクリと体を震わせた。だが一步も引き下がらない。

「……………お願いします」

瞳から涙が流れる。

ケリュケイオンの輝きが強くなる。

「私達の居場所を…壊さないでエエエエ!?!」

キヤロの叫び声と共に、足元と背後にピンク色の魔法陣が展開された。

「『竜騎召喚・ヴォルテール』!?!」

背後の巨大魔法陣から、巨体の竜が召喚された。姿は人型で”竜”
と言うより”竜人”である。

紅い炎を纏い、空に向かって雄叫びを上げる。

「おおっ！」

ゾーマは驚きと共に、興奮した声を出した。

召喚士つてのは、こんなヤツまで召喚できるのかよ。

ゾーマは喜びと興奮で口元を歪めた。

ヴォルテールが炎を溜める。

ゾーマはジツとヴォルテールを見つめて、魔力を溜めている。

確かに図体がデカく、力もそれなりにある。

だ。

ヴォルテールが炎の砲撃を、ゾーマ目掛けて放った。

「フンッ！無駄だアアアアアア！！！」

ゾーマも口から黒い閃光を放った。

黒い閃光は、炎の砲撃を掻き消し、巨体のヴォルテールを飲み込んだ。
だ。

一瞬の砲撃の後、焼け焦げたヴォルテールは地響きを立てて倒れた。

「あ……ああ……！」

キャラは目を見開いて戦慄した。

金縛りにあつたみたいで、体が動かない。

「お前の想いと度胸は認めよう。だがやはり………力が足りない」

呆然と立ち尽くすキャラに言う。

今のキャラに、ゾーマの言葉が聞こえているかわからないが。

「取るモン取ったから、俺は行くぜ。じゃあな」

キャラに背を向けて、ゾーマは立ち去ろうとした。

その時、

「黒夜叉？」

ゾーマの前に黒夜叉が立っていた。黒夜叉の後ろにはドゥーエがいる。
る。

「派手にやったな、オイ」

黒夜叉は、くしゃくしゃに頭を掻いた。

「まさか殺してねーだろうな？」

「全員生きてるよ。つーかその女……」

ゾーマがドゥーエに視線を向けた。

ドゥーエは、深刻な表情で走り出した。倒れてるオットーとディードに駆け寄った。体を起こして、ナンバーを確認する。名前は前からスカリエッティに聞いている。

「オットー！ディード！」

妹達の名を叫ぶ。

ゾーマは小声で黒夜叉に尋ねた。

「ナンバーズか？」

「そつだよ。No.2のドゥーエだ」

黒夜叉も小声で応える。

ドゥーエが振り返って、鋭い目で黒夜叉達を睨む。

「貴様らア！よくも……！！」

怒りと憎しみのこもった目で、黒夜叉達を睨む。

黒夜叉は溜め息をついた。

*

「あ……あぁ……！！」

なのはは声を震わせながら、燃え盛る機動六課隊舎と傷ついたリインフォース達の映ってるモニターを見つめた。

なのはの様子を見て、高杉は満足そうな笑みを浮かべた。

「どうだ？自分の大切なモノを傷つけられた気分は？」

二人を見下ろしながら、高杉が尋ねた。

フェイトは、怒りと悔しさで歯を食いしばり、高杉を睨んだ。

「高杉っ……！お前……お前エ……！！」

毒のせいで体が動かず、立ち上がる事も出来ない。

「俺達は壊すだけだ……腐った世界を」

クククク、ハハハハハ！
屋上から高杉が去っていく。
高杉の高笑いが、夜の屋上に響いた。

*

聖王病院の前。

一人の女性がいた。

さつきから、病院の入口前をウロウロしている。
長い黒髪の女性。フェイトの母親、プレシア・テストロッサである。
やっと仕事の休みが取れて、銀時の見舞いをしに病院前まで来たの
だが、久しぶりに銀時に会うと思うと緊張してきたのだ。

ああ、どうしましょう。私もう、おばさんになっちゃったし……何
だか会うのが恥ずかしいわ。

顔を赤くしながら、病院に入ろうか迷っている。
すると、

「あの…プレシア・テストロッサさんですか？」

「え？」

後ろから声をかけられ、プレシアは振り返った。
一人の少女が立っていた。

黒髪のポニーテールで、歳は十五、六才くらい。黒いＴシャツを着
て、黒のズボンを履いている。靴も黒。

まさに黒一色。

「プレシア・テストロッサさんですよね？」

少女は再びプレシアに尋ねた。

「え…ええ、そうだけど…貴女は？」

戸惑いながらもプレシアは答え、聞き返した。

「初めまして。私はアニスと申します。アルハザードの使いで参り
ました」

「えっ!？」

少女、アニスの言葉に、プレシアは驚いた。
今この娘、『アルハザード』と言ったの？
「坂田銀時さんに、お会いできますか？」

第二十四訓：祭りは派手に（後書き）

クリス達の圧倒的な力に、フェイト達は成す術もなく敗れてしまった

そしてアルハザードの使いの『アニス』は何を語る？

次回、クリスの正体が明らかに！？

プレシア「次回、リリカル銀魂 Strikers。『大き過ぎる力は人を変えてしまう』。テイクオフ」

第二十五訓：大き過ぎる力は人を変えてしまう（前書き）

銀八「初の」

生徒全員「教えて銀八先生！」

銀八「ペンネーム『十握剣』さんから『ゾーマってどんな姿なんですか？』という質問がありました。ゾーマは身長二メートル以上で、黒い鋼のような強靱な肉体で、目は赤く、額には一本の角が生えます。決してドクエのゾーマとは関係ありません。それじゃあ初の質問者『十握剣』さん。廊下に立ってなさい。もう質問受け付けねーからな。今回の話、大丈夫か？」

プレシアの前に現れたアルハザードの使い『アニス』

ついにクリスの正体が明らかに！

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十五訓：大き過ぎる力は人を変えてしまう

聖王病院の病室。

銀時はベッドの上で横になっていて、ジャンプを顔に乗せ、アイマスク代わりにして寝ていた。

ユーノも少し前から眠っている。

チンクは銀時の枕元に置いてあった、もう一冊のジャンプを読んでいる。思っていたより面白く、夢中になって読み、ページをめくっていく。

アルフは目が覚めて、大きな欠伸をかく。

隣に座ってるヴィヴィオは、まだ眠っている。

廊下から、足音が聞こえてきた。少し速足な感じで、銀時達がいる病室に近づいてくる。病室の前で足音が止まった。

ノックの音が聞こえた。

チンクとアルフは、ドアへ顔を向けた。

「銀時。プレシアだけど」

ドアの向こうから、プレシアの声が聞こえた。

「プレシア!？」

声を聞いて、アルフが大声を出した。

アルフの大声で、ユーノは目を覚ました。

「アルフ？」

ドアが開いて、プレシアが病室の中に入った。

「プレシア! 銀時の見舞いに来たのかい？」

「ええ。やっと仕事の休みが取れてね」

プレシアは病室に入って、見舞いの果物が入ったカゴをテーブルの上に置いた。

「プレシアさん。お久しぶりです」

ユーノが挨拶をした。

「あら、ユーノ。久しぶりね。元気だった？」

「はい」

ユーノは頷いて答えた。

ふとプレシアは、ベッドの前に座っているチンクと目が合った。チンクを見て、プレシアは微笑んだ。

「初めまして。私はプレシア・テストロッサ。よろしくね」

「は…初めまして。チンクです」

頬を赤くして、少し照れた感じでチンクは挨拶した。

「ん…ん」

ベッドで寝ていた銀時が、目を覚ましたようだ。

顔上のジャンプをどかして、ゆっくりと上半身を起こした。ぽりぽりと頭を掻き、手で眠たそうな目を擦る。

「銀時。プレシアが見舞いに来たよ」

まだ眠たそうな銀時に、アルフが言った。

「……あ…？」

半分寝ぼけながら、銀時は顔を動かした。

段々意識がハッキリしてきて、プレシアの姿をとらえた。

「…プレシア？」

首を傾げながら、銀時は呟いた。

「ひ、久しぶりね。銀時」

プレシアは頬を赤くした。

「おおっ久しぶりだな。あれ？ちよつと老け…」

言いかけ、銀時の右頬を何かが掠めた。

壁に”ドスツ”と刺突音がして、飛来した何かが刺さった。高速で

飛来したのは、一本の果物ナイフだった。

銀時は頬から血を流して、顔を青ざめている。周りの皆も青ざめて固まっていた。

その中でプレシアだけは、ニッコリと笑っていた。

「銀時。今何か言ったかしら？」

プレシアの手には、どこから取り出したのか、二本目の果物ナイフが握られていた。

「い……いえ……！何も言つてません……！すみませんでした！」
ひきつった笑みを浮かべて、銀時は謝った。

銀時の謝罪に満足し、プレシアは果物ナイフをしまった。
全員がホッと息をついた。

「それで、体の方は大丈夫なの？」

さつきまでと態度が一変し、プレシアは心配そうな顔で尋ねた。

「あ……ああ。もう大体治ったからな。心配いらねーよ」

少し動揺しながらも、銀時は答えた。

「そう。よかったわ」

プレシアは安心したように微笑んだ。

だがプレシアの表情は、すぐに真剣な顔に変わった。

「銀時。実は貴方に会わせたい人がいるの」

「あ？」

銀時は片眉を上げた。

プレシアは振り返って、開いてる扉を見た。

「いいわよ。入ってきて」

プレシアが言うと、一人の少女が病室に入ってきた。

病院の入口前でプレシアが会った、アニスという少女だ。

アニスは病室に入ると、ジッと銀時を観察する。

「何だよ？人のこと、ジッと見て」

少しイラついて、銀時が言う。

するとアニスは観察をやめて、大きく溜め息をついた。

「オイ。コイツ人のこと見て、溜め息ついたぞ」

銀時は不快感を露にする。

「気にしないで下さい。実物を見てガツカリしただけです」

「気にするわアアア！何勝手にガツカリしてんだコノヤロー！！」

「ご主人様から話は聞いていましたが……まさかこんな無気力全開の
生ける屍とは……」

アニスは再び溜め息をついた。

「お前ちよつと病院裏、来いやアアア！！」

銀時の堪忍袋の緒が切れた。

「銀さん、抑えて！」

「落ち着け、銀時！」

「また婦長が来ちゃうよ！」

ユーノ、チンク、アルフの三人が暴れようとする銀時を止める。

婦長という言葉聞いて、銀時はとりあえず怒りを抑えた。また騒いで、婦長にボコボコにされるのは御免だ。

「アニス。あんまり銀時を刺激しないで」

「すみません、プレシアさん」

素直にプレシアに謝るアニス。

こんな騒ぎの中でも、椅子に座って寝てるヴィヴィオ。どんだけ寝てるんだ。

「銀時。私達と一緒に、屋上に来てくれないかしら？」

プレシアが真剣な表情で聞いた。

銀時は首を傾げた。

*

病室の屋上。

銀時、プレシア、アニスの三人がいた。ユーノ達は銀時の病室で待っている。

何で屋上に移動したかと言うと、アニスが三人だけで話したいと言ったので、ユーノ達を病室に残し、屋上で話をする事になったのだ。

夜の屋上は、冷たい風が吹いていて少し寒い。

「で？話って何だよ？つーか何で、わざわざ屋上に移動しなきゃいけないんだよ？」

病室でのやり取りを引きずっていて、銀時はまだ不機嫌だ。

「すみません。アルハザードの存在を知っているお二人だけに話たかったので」

アニスは謝りながら、理由を言った。

銀時は、『アルハザード』と言う言葉にピクリと反応した。アルハザード。

かつてプレシアが求めた、失われし都。

以前、銀時とプレシアは偶然にも、そのアルハザードにたどり着いた。

アルハザードは意志を持った、何も無い真つ暗闇の空間。そこでプレシアの不治の病を治してもらった。アルハザードの存在を外に口外しないと約束し、二人は元の世界に帰った。

「アニスは、アルハザードの使いとしてやってきたのよ」
プレシアが言った。

「使いつて……アルフみたいな使い魔みてーなモノか？」
銀時がアニスに尋ねた。

「まあ、そんな感じで構いません。体は魔力で造られていて、一応自分の意志もあります」

アニスが説明した。

銀時は使い魔と似たようなモノと知っているが、実際は無から生み出されたようなモノで、使い魔とは別の存在である。

「んで？そのアルハザードの使いが何の用だ？」

銀時が本題を尋ねた。

「……クリス・ロードについてお話に來ました」
アニスが言った。

銀時とプレシアは、クリスの名を聞いて同時に表情を険しくした。

銀時はクリスと直接戦い、プレシアはアルフやフェイトからクリスの話を聞いている。

「……アイツは何者だ？」

一瞬強い風が吹いた後、銀時が尋ねた。

少しの間、静寂が訪れた。

また強い風が吹き、アニスは口を開いた。

「クリスは……アルハザード出身の魔導師です」

*

遠い昔。

アルハガードという小さな都があった。都を治める王がいて、意志ある空間に見守られ、民は平和に暮らしていた。

そんなアルハガードに、一人の赤ん坊が生まれた。生まれながらにして、長い金髪を生やした赤ん坊。

クリスの誕生である。

父親は王の臣下。母親はクリスと同じ、長い金髪の美しい魔導師。

クリスは生まれた時から、驚異的な魔力を持っていた。管理局のランク付けで言うなら、Sランク相当である。

両親は、将来クリスがアルハガードの地位でも高い位に着けると喜び、楽しみにしていた。

クリスも、自分に愛を注いでくれている、両親が好きだった。

三人は幸せな日々を送っていた。

だが、その幸せは長くは続かなかった。

クリスが七歳の時。

一人の臣下が、クリスの力に恐れを抱いたのだ。

王の座を狙う、自分の将来を脅かすと恐れを抱いた。

そこで臣下は、部下の魔導師達を率いて、クリス達を襲撃した。

両親はクリスを護る為に必死に戦った。だが数に押され、両親はクリスの目の前で殺された。

両親の血が、クリスの顔に飛び散った。顔に着いた血を手で触って見た。

目の前で起こった事が理解出来なかった。血まみれの両親は、クリスの目の前で倒れて動かぬ屍となっていた。

ようやく両親が死んだ、殺されたと理解する。

どうして両親は殺された？

両親が何か悪い事をしたのか？

それとも僕が何か悪い事をしたのか？

わからない。殺される理由がわからない。

呆然と両親の死体を見つめるクリスに、臣下が近づいた。

「悪く思うな小僧。お前のデカすぎる力は、俺の将来を脅かす脅威になる」

下品な笑みを浮かべる臣下。

呆然としていたクリスは、顔を上げて臣下を見上げた。

僕のせい？

僕のせいで、お父さんとお母さんは死んだ？

僕が生まれてこなければ、死ななかつた？

僕が強いから、お父さんとお母さんは死んだ？

「悲しむ事はない。すぐに死んだ両親の所に送ってやる。俺は優しいだろっ？」

下品な笑みを浮かべたまま、臣下は杖をクリスに向けた。

その時、クリスの中で、負の感情が目覚めた。

怒り。

憎しみ。

恨み。

呪。

殺気。

あらゆる負の情念が、クリスを支配し、動かした。

「じゃあな」

臣下が魔法を放とうとした瞬間、杖を持つ右腕が消えた。

「へ？」

臣下は呆然と無くなった右腕を見る。

傷口から、噴水のように鮮血が噴き出た。

「ああああああ！！」

傷口を押さえて、臣下は悲鳴を上げた。

後ろに立っている部下の魔導師達も動揺している。

その時、

「わめくなよ」

クリスの冷たい声が聞こえた。

臣下は涙目でクリスを見た。

「僕の両親は、最期まで貴様のような無様な悲鳴を上げなかった」
見ただけで人を呪い殺せそうな赤く鋭い瞳が、怯える臣下を射抜くように睨む。

両親が死んだのは、僕のせいじゃない。

両親が死んだのは、僕が強いせいじゃない。

「弱いからだ」

両親が弱いのではない。

コイツらが弱いからだ。

他の連中が弱いからだ。

弱いから奪おうとする。

弱いから悪あがきをする。

弱いから醜く愚かな行動を起こす。

そうだ。弱いからいけないんだ。弱い者は死ねばいい。弱い者に生きる資格はない。弱い者は必要ない。

僕以外の弱者など消えてしまえ。

クリスの体に魔力が漲り、一気に青年の姿に成長した。

「僕以外の弱者など……」

クリスの体が黒く変色していく。

臣下達は、恐怖で体が動かなくなり、”死神”と化したクリスの姿を青ざめた顔で見つめた。

「消えてなくなれエエエエエ!!!」

クリスから膨大な魔力が放たれた。

瞬間、辺り一帯が消し飛んだ。

クリスは殺戮マシンとなり、都を破壊していく。逃げ惑う人々を殺し、建物を破壊し、黒い火の海を広げる。

魔導師がクリスを止めようと魔法を放つが、全く歯が立たず、返り討ちに遭い、皆死んでしまった。

「クリス！やめろ！」

アルハザードの声が響き、白いバインドがクリスを拘束する。

「ハッハッハッハッ！」

クリスは笑いながら、軽々とバインドを破った。

アルハザードは驚愕した。クリスは魔力が高いと聞いていたが、まさかこれ程とは……。

クリスは頭上に、禍々しい巨大な黒い魔力球を作り出した。

「消える！出来損ない共！出来損ないによって出来た腐った世界！

！」

魔力球を都に向けて放った。

次の瞬間、都は跡形もなく消えた。

都は消え、真つ暗い空間となった。

アルハザードは、ただ見ている事しか出来なかった。自分の力ではクリスは止められない。

都を消滅させたクリスは、元の姿に、少年の姿に戻っていた。

一気に魔力を放出した事で、息を荒くし、汗だくになり、体力を大幅に減らしていた。

時間を掛けて呼吸を整え、クリスは暗闇の中で考えた。

何故こんなに強いのに、両親を救えなかった？

何故、両親を護れなかった？

クリスは考える。

あの時、自分は怯えていた。怖がっていた。
弱い。

そつだ。弱いから護れなかったんだ。

なら強くなればいい。誰よりも何よりも
強くなる。

弱者は消す。

愚かな考えを持っている弱者を消す。

出来損ないによって築かれた腐った世界を消す。

世界は何もしてくれない。

助けてくれない。

クリスは、アルハザードから姿を消した。

遠い昔の話である。

*

アニスの話は、ここで終わった。

屋上は重い沈黙に包まれた。

両親の死によつて覚醒した、死神。

アルハザードの消滅の真相。

「これが、私達が知っているクリスの全てです」

重い沈黙を破つて、アニスが言った。

大切なモノを護れなかった自分の無力さ、汚い人間に両親を殺され

たショック、それらがクリスを悪魔に変えてしまったのだ。

銀時は険しい表情をしている。

大切なモノを護れなかった悔しさ、無念さ。

攘夷戦争で大事なモノを取り零してきた自分には、クリスの気持ち

もわからないでもない。

でも、そんな過去を持つているからこそ、辛さや悔しさ、無念さを

知っているからこそ、クリスは止めなきゃいけない。

「あの時、クリスとクリスの両親を助けられなかった事を…クリス

を止められなかった事を…アルハザードは今でも悔やんでいます。

ですが、クリスはアルハザードの力では止められません」

アニスが銀時に近づく。

銀時の目の前で足を止め、アニスは頭を下げた。

「お願いします！クリスを止めてください！」

屋上に、アニスの懇願の声が響き渡った。

「勝手な願いだというのは、わかっています。ですが、クリスを止められる可能性があるのは、貴方だけなんです!」

必死に銀時に頼むアニス。

屋上に再び沈黙が訪れた。

プレシアは、黙って二人の様子を見守っている。

アニスは頭を下げたままだ。

銀時が溜め息をついた。

「ホントに勝手な願いだな」

頭をくしゃくしゃに掻いた。

「わりーが、初対面で俺を不快な思いにさせた、オメーの頼みはきけねーな」

そう言つて銀時は、頭を下げているアニスに背を向けた。

アニスは、まだ頭を下げている。

「まあでも、クリスは止めるけどな」

振り返らないで、銀時が言った。

アニスは頭を上げて、銀時の背中を見た。

プレシアも銀時を見た。

銀時は顔を上げて、星が輝く夜空を見上げた。

「もう二度と、大切なモノは取り零さねエ」

普段の気だるげな声とは違う、決意のこもった力強い声だった。

プレシアとアニスには、その時の銀時の背中がとても大きく見えた。

*

クリスの破壊行為により、地上本部は無残な姿に変わってしまった。建物の半分から上は消滅し、怪物達が暴れた事で、周りにも被害が出ている。

荒れ果てた地上本部の上に、クリスは立っていた。全身が黒い死神の姿で。

そこへ、怪物達を倒し終えた、はやてがやってきた。

「何の用だ？僕はもう帰るところだ」

振り向かずにクリスが言った。

はやてはクリスの後ろに降り立った。

「お前らの負けだ。消えろ」

「……確かに今回は、私達の負けや……けど……」

はやては、拳を強く握った。

「まだ終わってへん！」

地上本部に、はやての叫び声が響いた。

クリスは振り向かない。

「私達は……機動六課は、まだ終わってへん！」

「諦めの悪い、馬鹿が」

クリスが振り返った。

赤い瞳が、鋭くはやてを見つめる。

「私達は諦めない！未来を歩む事を諦めない！生きる事を諦めない！」

自分の……いや、自分達の想いをクリスにぶつける。

「銀ちゃんと一緒に、私達の世界を、未来を、大切なモノを護る！」

！！！

声と共にはやての眼には、強い決意と想いが宿っていた。

はやての想いを聞いたクリスは、笑みで顔を歪めた。

「クツ……ハハハハハ！！」

突然クリスは、顔を上げて笑い出した。

はやては怯まず、クリスを見つめてる。

「面白い冗談だ！」

クリスは笑いを止め、口元を不気味に歪めた邪悪な笑みを浮かべた。

「『戦闘形態』になる前の僕に敗れた彼に、何が出来る！？どう僕と戦うと言ったんだ！？」

はやては、今のクリスに違和感を感じた。

リインフォースの話では、クリスは銀時の事は認めていたようだ。

だが今のクリスは、銀時も見下しているように見える。それに、最初に会議室で見た時と性格が違うと言うか、雰囲気が違う。

あの黒い姿になってから。

「いいだろう！一週間後、僕は世界を消す計画を実行する！」

はやてが疑問に思っていると、クリスは手の平に一枚の紙を出した。出した紙を、はやてに向かって投げた。

はやては紙を受け取って見た。そこには地図が描かれてあった。

「その地図には、僕の城の位置が印されている！お前達、下等な種族に、僕を止められるものなら、止めてみるがいい！」

クリスの足元に、黒い魔法陣が展開された。

「世界が選ぶのは滅びか？未来への道か？」

クハハハハハハ！

高笑いを上げながら、クリスは消えていった。

ついに最終決戦の地と時が決まった。

第二十五訓：大き過ぎる力は人を変えてしまう（後書き）

新たに決意を固める銀時

クリスとの最終決戦の時が迫る！

はやて「次回、リリカル銀魂 Strikers。『バトル作品には修業がつきもの』。テイクオフ」

第二十六訓：バトル作品には修業がつきもの（前書き）

最終決戦の時、迫る！

銀時達に勝機はあるのか？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十六訓：バトル作品には修業がつきもの

翌朝、襲撃を受けた機動六課隊舎前に集まっている皆の前で、はやては打ち明けた。

一週間後、クリスが世界を滅ぼす計画を実行する事を話した。

誰もが驚愕を隠せなかった。やはりクリス達の強大な力を目の当たりにして、皆の気持ちは沈んでいるのようだ。

だが、この残された僅かな時間で、クリス達に対抗できるくらいに強くならなければいけない。

「皆が沈んでる気持ちもわかる。せやけど、ここで立ち止まる訳にはいかん！」

沈んでる皆の前で、はやてが力強い声を出した。

「私達に残された時間は短い。せやけど諦めずに、私達の世界を、大切なモノを護ろう！」

はやての声が、大空に響いた。

場が沈黙に包まれた。

沈黙の中、沈んでいた皆の顔つきが、少しずつ戻ってきた。

「わかりました！」

機動六課の皆が、力強く、大きな声で答えた。

皆の目から諦めの色が消え、大切なモノを護るといふ決意が宿った。

「あの…でも本部は、どうするんですか？」

スバルが手を挙げて聞いた。

「それなら心配いらんで。ちゃんと用意はしてある」

はやては笑みを浮かべて答えた。

皆の士気が戻ってきた中、フェイトとなのはは表情を暗くしていた。

*

聖王病院。

銀時はいつもの着物に着替えて、病室を出た。

傷が完治して、無事退院できたのだ。

迎えには、ナンバーズが来ている。

「よかつたな銀時。無事退院できて」

隣を歩くチンクが言った。

「ああ。そっぴやア昨日は、クリス達が派手にやってみてーだな」

「ああ……悔しいが、私達の完敗だ」

トーレの表情は険しい。

「しかも奴は、一週間後に世界を滅ぼすと宣言しました」

後ろを歩くセツテが言った。

「ふざけやがって！」

ノーヴェが拳を握って悔しがる。

「んで？これからどうすんだ？機動六課の隊舎はボロボロなんだから？」

ゾーマの襲撃を受け、機動六課隊舎は使える状態ではなくなった。

行動を起こすにも、機動六課隊舎に代わる本部が必要だ。

銀時の疑問に、セインが答えた。

「確か『アースラ』って艦船を本部にするらしいよ」

「アースラを？」

懐かしい名を聞き、銀時は目を見開いた。

次元航行艦アースラ。

クロノの母親、リンディ・ハラウンが艦長を務め、ジュエルシード事件、闇の書・ゾーマ事件の時に任務に当たった艦船である。

「老朽化が進んで、近々廃艦処分される予定だったみたいでしたが、はやてがプレシアさんとクロノという者に頼み、移動式の本部として使う事になったみたいです」

懐かしく思ってる銀時に、ディエチが説明した。

「なるほどねえ」

銀時は短く答えた。

話をしている内に入出口に着く。ドアが開いて、病院の外に出た。

そこで、オットーとデイドと見知らぬ女性が目に入った。銀時は目を細めた。

「ドゥーエー！」

「ドゥーエ姉様！」

ナンバーズが、女性に向かって一斉に走り出した。

銀時は首を傾げている。

女性は、ナンバーズのドゥーエである。

「久しぶりね。皆」

ドゥーエが優しく微笑む。

「ああ。久しぶりだな、ドゥーエ」

「連絡がつかないから、心配してたんだぞドゥーエ」

ドゥーエを取り囲んで、みんな再会を喜んでいる。

「ドゥーエ姉様！無事でよかったですウー！」

クアットロは、あまりの嬉しさにドゥーエに抱き付いた。

「ふふ。クアットロも元気そうね」

ドゥーエは、クアットロの頭を優しく撫でた。

完全に蚊帳の外の銀時は、呆然となって立っている。ナンバーズを

置いて、フェイト達の所へ行こうとした時、ドゥーエがやってきた。

「初めまして。私はドゥーエと申します。妹達がお世話になってます」

名前を聞いて銀時は、左手の人差し指を立てた。

「『トウース！』か？」

「ドゥーエです！」

人気お笑い芸人の真似をした銀時に、ドゥーエが怒鳴った。

「まったく……坂田銀時……本当に黒夜叉とそっくりね」

「……野郎に会ったのか？」

銀時の雰囲気が変わる。

「ええ。最高評議会という者と繋がっていた私に接触してきたわ。

私が名前を言ったら、貴方と同じ事を言ったわ」

懐かしみながら、ドゥーエは語った。

「昨夜、最高評議会を殺害したら、妹達が機動六課に保護されている事を教えてくれたわ。そして二人で機動六課に行って、傷ついたオットーとディードを見つけた。私は黑夜叉とゾーマを憎んだわ」
銀時は黙って聞いている。

周りにいるナンバーズもだ。

「私は彼に襲い掛かったわ。けど彼は、私の攻撃を受けた。そればかりか隣に立っているゾーマに、オットーとディードの治療を頼んだわ。私は驚いたわ。ゾーマの方も、二人の治療を了承したわ。しかも治療の後、彼とゾーマは私に『悪かったな』と謝罪までしたわ」
そこでドゥーエの話は終わった。

「ゾーマの奴、ホントに変わったな」
空を見上げながら、銀時が言った。

以前は人を助けるような事を、する奴ではなかった。しかも今話を聞くと、ゾーマは治療の魔法を使えるようだ。

銀時の中で、ゾーマのイメージがどんどん変わっていった。

「銀時」

「ん？」

ドゥーエに声をかけられ、顔を戻した。

「黑夜叉を……倒すの？」

ドゥーエは、少し不安そうな顔をしている。

「メンドクせーけど、向こうがやる気なら、倒すしかねーな」

「そう……」

ドゥーエは少し顔を俯かせた。

ドゥーエの反応を見て、ナンバーズも少し戸惑っている。

銀時は溜め息をついた。

「殺しはしねーから、そこんところは安心しな」

言いながら、銀時はドゥーエの横を通り過ぎた。

ドゥーエは振り返って銀時を見た。ドゥーエは安心したように、微笑んでいた。

「んで？フェイト達、今どこにいった？」

足を止め、振り返ってナンバーズに尋ねた。

*

本部をアースラに移し、機動六課とナンバーズ、銀時達は活動を再開させた。

とりあえず、少しでも強くなる為に、機動六課とナンバーズの面々は特訓する事になった。

その中で銀時は、

「ふ〜ん。頑張ってるね」

と他人事のように、特訓を拒否。

「……いや、頑張ってるんじゃないかって……銀さんも一緒に特訓しましょうよ」

スバルが特訓に誘う。

「いや、特訓とかメンドクせーから」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ!」

ティアナが怒鳴った。

「だってさ〜俺、病み上がりよ? 決戦の前に体壊したらダメだろ?

何より特訓なんて、メンドクせーしよオ」

「結局ソレじゃないですか! メンドクさいだけじゃないですか!」

銀時の発言に、ティアナは声を荒げる。

スバルがティアナを落ち着かせる。

そんな三人の様子を、沖田と月詠は静かに見守っていた。

*

結局、銀時は特訓に加わらなかった。トレーニングルームで、機動六課とナンバーズ、それに沖田と月詠が特訓を始めている。沖田が特訓とは珍しい。

銀時は、久しぶりのアースラの中を歩く。階段に差し掛かり、一段

一段踏みながら上っていく。

甲板に出る扉の前にたどり着いた。扉を開けて、甲板に出る。

外は既に夜。少し強い風が吹いている。

そして、甲板の端にいる一つの人影を見つけた。

銀時は目を細めて、人影をよく見た。

人影は、フェイトだった。

「んなトコで何やってんだ？」

銀時は、フェイトの背中に声をかけた。

フェイトは、ビツクリして振り返った。

そこで初めて銀時に気付いた。

「ぎ、銀時！どうしたの？こんな所で？」

「そのセリフ、俺がさっき言ったんだけど」

フェイトは顔を赤くした。

銀時はぽりぽりと頭を掻きながら、フェイトの隣に歩み寄った。

「どした？元気ねエじゃねーか。失恋でもしたか？」

「…そんなんじゃないよ」

フェイトは暗い表情で、夜空を見上げた。

二人とも黙ってしまい、甲板に静寂が訪れた。

夜空に星が輝いていて、甲板に冷たい風が吹いた、

「…私、何も出来なかった」

沈黙を破ったのはフェイトだった。

顔を俯いて、悔しそうに話し出した。

「…高杉の罠にハマって…体の自由を奪われて…ただ…見てる事

しか…出来なかった……」

握ってる拳が震える。

「…大切なモノが傷ついてるのに……私となのは……ただ見てる

事しか…出来なかった……」

俯いて前髪で隠れてる目から、一筋の涙が流れた。

銀時は、そんなフェイトの姿を黙って見つめてる。

「銀時!!」

不意に、フェイトが銀時に抱き付いた。

「!!!」

いきなり抱き付かれ、銀時は動揺した。

「……悔しいよ……」

ポツリ、とフェイトが呟いた。

「……私……悔しいよ……銀時……」

フェイトの肩が震えてる。

銀時は、こんな時どうすべきか考えた。

少し考えた後、震えてるフェイトの肩を掴んだ。

「……俺も……何も出来なかった」

夜空を見上げて、銀時が言った。

「え……?」

フェイトは、ゆっくりと顔を上げた。

「フェイト……俺の世界で昔、攘夷戦争って戦があった事は知ってるよな?」

フェイトは小さく頷いた。

「その攘夷戦争で、俺は大事な人を失った……俺を拾ってくれた……まあ恩師みてエなもんだ」

過去の記憶を思い出しながら、銀時は語った。

「護る事が出来なかった……その後、俺も仲間と一緒に戦に出た。

そこで、また大事な仲間を失っちゃった……その戦で、変わっちゃまった奴もいる……」

恩師の姿、かつての仲間達の姿、高杉の姿が頭に思い浮かんだ。

「……」

フェイトは黙って銀時の話を聞いている。

あまり自分の過去を語らない銀時が語る、攘夷戦争の記憶。

目の前で、同じ戦場で仲間が死んでいく。

きっと私には、想像も出来ない苦しみだったに違いない。

私の大切な人達は傷ついたけど、皆ここにいる。けど銀時の失った

仲間は、もう戻ってこない。

「フェイト」

銀時は顔を下げた。固い決意が宿ってる目で、フェイトの顔を見る。「お前に、俺と同じ思いはさせねえ」

フェイトの肩を強く掴む。

「俺がお前らを護る。だからお前も立ち止まらないで、自分に出来る事をするんだ」

真っ直ぐにフェイトを見つめながら、力強く言った。

フェイトも目をそらさず、銀時を見つめた。

やっぱり銀時は優しい。無愛想に振る舞ってるけど、本当は私達の事を心配している。

嬉しさで、また目から涙が零れてきた。

「うん。銀時……私、頑張るよ」

フェイトは力強く頷いた。

手で涙を拭いて、銀時に笑ってみせた。

銀時も安心したように微笑んだ。

その時、

「フェイトちゃん！」

甲板の入口から、なのはの声が聞こえた。

二人は甲板の入口にいる、なのはを見た。

「なのは！」

なのはが二人に駆け寄った。

フェイトは顔を真っ赤にして、慌てて銀時から離れた。

「なのは……もしかして……今の見てた……？」

「えっと……ごめんね……盗み見なんてイケないって思ってたんだけど……」

申し訳なさそうに、なのはが答えた。

「あのね、フェイトちゃん。私もあの時、見ている事しか出来なくて……凄く悔しかった」

真剣な表情に変わって、なのはが話し出す。

フェイトも真剣な表情で、なのはの話聞く。

「だからフェイトちゃん。一緒に頑張つて、今度こそ大切なモノを護ろう！」

「なのは……うん！」

二人とも笑顔になる。

フェイトの後ろで様子を見ていた銀時は、短く笑った。

「どうやら、二人はもう大丈夫みてエだな。」

そう思いながら、銀時は甲板を去ろうとした。

「待つて銀時！」

だが、銀時はフェイトに呼び止められた。

「何だ？」

足を止めて、後ろを振り返った。

そこには、何故かバリアジャケットを着て、デバイスを構えてるフェイトとなのはの姿があった。

「え……？」

身の危険を感じて、銀時は顔を引きつらせて冷汗を流した。

「ちよっ……え……？何してんの二人とも……？何でバリアジャケット

姿で、デバイス構えてんの……？」

「少しづつ後ずさりながら、銀時は尋ねた。」

「銀時、言ったよね？私達に出来る事をしろって」

「あ……ああ……言ったかもしれない……」

「今、私達に出来る事！それは、銀さんと模擬戦をする事です！」
張り切った声で、なのはが言った。

「全力全開！とか言いそうな雰囲気である。」

フェイトの方も、メチャクチャやる気満々だ。

「何で俺エエエエ！？」

銀時は、ありつたけの声で叫んだ。

「だって、出来る事をやれって」

「いや、言ったよ？確かにそう言ったけどさア、なに俺と模擬戦しなくてもよくね？」

うるたえながら銀時は、模擬戦を断ろうとする。

「銀さんが一番強いから、模擬戦をやるんです！」

「いや今の俺、丸腰よ？」

「銀さんなら大丈夫です！」

「何を根拠に言ってるの!？」

ダメだ。なのはは完全にやる気だ。

なのはの説得を諦め、銀時はフェイトに顔を向けた。

「フェイト！俺病み上がりだぞ？大好きな銀さんを殺す気か!？」

「銀時なら大丈夫だよ！」

「だから何を根拠に言ってるんだ!？お前ら俺に恨みでもあるのか!？」

フェイトの説得も失敗。

「いくよ、銀時！」

「いきます、銀さん！」

二人はデバイスを構え、銀時に向かって突進した。

「あああああ!！」

アースラの甲板に、銀時の悲鳴が響いた。

頑張れ銀時！

銀時フェイト！

ちなみに、アースラの一室でヴィヴィオは、アニスと仲良く遊んでいた。

第二十六訓：バトル作品には修業がつきもの（後書き）

無事立ち直ったファイトとなのは

次回、ついに銀時の新しい剣が完成！？

フェイト「次回、リリカル銀魂 Strikers。『魔王討伐には最強パーティーで臨め』。テイクオフ」

第二十七訓：魔王討伐には最強パーティーで臨め（前書き）

世界の滅亡を防ぐ為、特訓を開始する機動六課とナンバーズ

そして最強の助っ人達が登場！？

フェイト「『リリカル銀魂 Strikers』。始まります」

第二十七訓：魔王討伐には最強パーティーで臨め

アースラに本部を移して三日目。機動六課とナンバーズ、銀時達の特訓は続いていた。

ティアナとウエンディは射撃の特訓。自身の周りを飛び回る的を撃ち抜く。

ノーヴェ、スバル、ギンガは三人で模擬戦。トレーニングルームに拳と蹴りがぶつかり合う音が響く。

ザフィーラは、オットー、デイドと模擬戦。

沖田、シグナム、エリオの三人で模擬戦。三人の刃が火花を散らせてぶつかり合う。

月詠とチンクはセインとの連携。ディープダイバーを使った、敵の隙を突く戦法だ。

なのはとディエチが、砲撃の撃ち合いをしている。トレーニングルームが壊れなければいいが。

フェイトは、トーレ、セツテと模擬戦をしている。高速で繰り広げられてる攻防は、常人の目では捉えられない。

皆それぞれの特訓をしていた。

実は、新しくこの特訓に参加してる人物がいるのだ。ルーテシアである。

母親が眠っている病院を離れ、一緒に戦いたいと言ってきたのだ。話し合った結果、ルーテシアも一緒に戦う事にした。

そのルーテシアは、キャラと召喚魔法で特訓をしている。ここまでは普通の特訓。

「おーし。んじゃ特別訓練始めんぞ〜」

特に張り上げるわけでもない、気だるげな声が出た。

全員が動きを止め、声の主を見た。

トレーニングルームの入口に、銀時、クアットロ、ウーノ、ドゥーエの四人がいた。

特別訓練。

全員は嫌な予感がした。

昨日から始まった銀時の特別訓練。銀時が考えたのだから、まともな訓練ではなかった。

そして特別訓練開始。

まずはティアナとウエンディ。ほぼゼロ距離から複数の魔力弾を撃つて、その全てを撃ち落とせなんて事を銀時が言う。

「おらおらティアナ、ウエンディ。ゼロ距離ぐらいクリアしねーと、一流のガンマンになれねーぞ」

彼女達はガンマンじゃなくて魔導師です。それに一流のガンマンでもゼロ距離は無理です。

次はノーヴェ、スバル、ギンガ。キャロの真竜・ヴォルテールとルーシアの召喚した希少个体、白天王を素手で倒せと言う。ちなみに白天王の大きさは、ヴォルテールと同じくらい。

「逃げんな、ノーヴェ、スバル、ギンガ。逃げてたら訓練にならねーだろ？」

いや、逃げますよ。てか、アンタ殺す気でしょ？

沖田、シグナム、エリオには、両手両足に重りを付けて、なのは、デイエチ、フェイト、トーレ、セツテと三対五の模擬戦をしるなんて、とんでもない事をやらせた。

「沖田、シグナム、エリオ、もうバテてんじゃねーぞー」

白い悪魔と金色の閃光、ナンバーズ相手に倒れずに頑張ってるんですから、むしろ褒めてあげて下さい。

まるで人を苦しめるのが目的みたいな、無茶苦茶な特別訓練が続いた。

クアットロは、その光景を楽しそうな表情で眺めていた。

*

数時間後、超過酷な銀時の特別訓練が終わった。

みんな体中ボロボロで、床に大の字になって倒れていた。息も荒く、汗もダラダラ流している。

そんな彼女達に、銀時はこう言った。

「よし。今日のおふざ　じゃねーや、今日の特別訓練は終了だ！」

いや、おふざけって言いそうになつたる！こんなの訓練じゃないっス！ただのイジメだ！クアットロも楽しそうに見てんじゃねーよ！ウーノ、何で止めなかった!？

機動六課とナンバーズの非難の声を浴びながら、銀時はうーんと考えた後、言った。

「まだ元気あるな。もうちょい続けるか？」

「いや、いい加減にしろオオオ!!！」

銀時にクロスミラージユを向けて、ティアナが怒鳴った。

その時、

「おーおー、随分賑やかにやってるなア」

老人の声が出た。

トレーニングルームの入口を見ると、源外がいた。何か細長い物が入ってる袋を持っている。

「じーさん」

「よオ銀の字。頼まれてた代物が出来上がったぞ」

「マジでか？」

みんな源外のところへ駆け寄った。

源外は袋の中から、一本の木刀を取り出して、銀時に手渡した。木刀には『洞爺湖』と書かれてある。

「銀の字の家にあった、もう一本の木刀を改造した。電流装置を作動させれば、電流が脳を刺激して潜在能力を解放する事が出来る」顎髭を弄りながら、源外が説明した。

すると、急に表情を険しくした。

「それでな銀の字、問題はここからだ」

源外の険しい表情を見て、とりあえず銀時も真剣な顔になる。

「潜在能力つてのは、普段は体の内に眠っているものだ。肉体がその強大な力に、ついていけねーからな。ソイツを全解放するって事は、体に大きな負担をかける事になり、下手をすりゃあ寿命を縮める事にもなる」

「えっ!？」

源外の説明に、その場にいる銀時以外の全員が声を上げた。

「それであの黑夜又つて野郎だが、恐らく相当な訓練を積んで長時間の潜在能力全解放を可能としてる」

「で？俺はどうなんだ？」

全く動揺を見せない銀時が尋ねた。

「銀の字が潜在能力全解放して戦える時間は、恐らく五分が限界だ」
「五分!？」

思わずフェイトは、驚きの声を上げた。

五分。いくらなんでも短すぎる。リスクが高い上に使用時間も短い。銀時は僅かに片眉を動かしたただけであまり動揺せず、手に持っている木刀を見つめた。

「まあ、なんとかなるだろ」

「それじゃあ使い方の説明をするぞ。銀の字、木刀の柄を押ししてみる」

「よし」

銀時は木刀の柄を押しした。

直後、木刀の先っちょから黒い液がピュウ、と出た。

「少し多めに醤油が出る」

と源外。

「やっぱりかいいいいい!!うつすら予想はしてたけどな!ってか木刀から醤油出るって、原作で一回やってるだろうがアアアアア!」

激しく銀時はツッコんだ。

「よく見る銀の字。醤油の量が前より多いだろ」

「んなもん、どうだっていいんだよ!」

声を荒げる銀時。

その様子をフェイト達は、ポカンとした顔で見てる。

「本当の使い方は、木刀の柄を素早く二回押すんだ。そうすれば木刀を掴んでる手を通って、電流が脳を刺激して潜在能力を解放できる。電流は調整できるようにしてあるから、好きな程度に潜在能力を解放する事もできる」

これで源外の説明は終わった。

「サンキューな、jeeさん」

「礼はいらんわい」

源外は瞬間移動装置のリモコンを取り出した。

「ああ、そうだ銀の字。もう少ししたら助っ人が来るからよろしくな」

「助っ人？」

銀時は目を細めた。

源外はスイッチを押して、銀時達の前から姿を消した。

*

しばらくして、源外が言った通り助っ人がやってきた。

助っ人を見て、銀時と月詠は少し驚いた顔をして、沖田は顔をしかめた。

「銀さん！何で僕達に黙ってこっちの世界に来てるんですか！？しかも十年後の世界！」

現れて早々、銀時に怒鳴ったのは眼鏡をかけた地味な男、志村新八。

「銀ちゃん！大人になったフェイト達とイチャイチャしてたアルか？」

そう言ったのは、怪力無双のチャイナ服を着た娘、神楽。

二人の隣には、沖田と同じ黒い制服を着た男が二人いる。

「総悟。テメツ随分長い間、仕事サボりやがったな」

額に青筋を浮かべ、鋭い目で沖田を睨むのは、真選組副長、土方十

四郎。

「帰ったら始末書地獄だ。覚悟しておけ、総悟」

腕を組んで言ったのは、真選組局長、近藤勲。

銀時は頭を抱えた。

助っ人つてコイツらかよ。まあ、うつすら予想はしてたし、最強の助っ人には違いない。

沖田の方も、真選組二人の姿を見て、ガツクリと肩を落としている。

「新八さん！神楽ちゃん！」

「土方さん！近藤さん！」

なのはとフェイトが、懐かしさと再会の嬉しさに新八達の名を呼んだ。

「なのはちゃん！『StrikerS』だから大人になってる！」
成長したなのは達を見て、新八は顔を赤くした。

「新八、何顔赤くしてるアルか？キモイアル」
顔を赤くして緊張してる新八を見て、神楽は引いた。

「ほオ。金髪の嬢ちゃんか。デカくなつたな」
タバコに火をつけながら、土方が言った。

「いやア美人になつたなア、フェイトちゃん！こいつはお妙さんにも匹敵する美しさかもしれんな！」

馬鹿みたいな大声で、近藤が言う。

「皆さんも元気そうでしたです」
フェイトは、ニッコリ笑って応えた。

周りにいる機動六課やナンバーズは、新八達が誰なのかわからずポカンとしてる。

「あの～なのはさん。この人達って……？」
スバルが遠慮がちに尋ねた。

「ああ、紹介するね。彼は志村新八さん。銀さんが営んでる万事屋で働いてる人だよ」

「志村新八です。よろしくお願ひします！」

なのはの紹介の後、新八は皆に頭を下げて挨拶した。

「ああ！銀さんが言ったた”江戸一番のツッコミ使い”って貴方！？」

新八を指差して、ティアナが叫んだ。

「えっ！？いや、そりゃあ、まあ…一応僕はツッコミ役ですけど…」
綺麗な女の子から”江戸一番”と言われて、新八は少し照れた。

「新八のくせに照れてんじゃねーヨ。ツッコミ以外地味のくせに」
「んだとコラアアアア！僕らの世界でツッコミ役は、物凄く重要なんだぞオオオオ！！」

神楽の発言にキレル新八。

なのはは若干、困った顔になる。

「えっと…新八さんの隣にいる女の子は、同じく万事屋で働いてる神楽ちゃんです」

「神楽アル！」

元氣よく神楽が挨拶した。

「それでこちらが、真選組副長の土方十四郎さん」

次にフェイトが、土方を紹介した。

と、ここでまたティアナが言う。

「ああ。沖田さんが嫌ってる、上司の土方さんですか」

「総悟：お前こつちの世界に来て、俺の命狙う事考えてんのか？」
静かに怒りながら、土方は沖田を睨んだ。

「当然でさア。ティアナと組んで、バリバリ命狙うんで、覚悟して
いてください土方さん」

「今ここで、お前の命奪ってやろうかアアアア！！」

土方は刀を抜いて、沖田に襲い掛かる。

沖田は刀を振り回す土方から逃げる。

「最後に、真選組局長の近藤勲さん」

「いや、真選組は野郎ばつかですが、ここは美女ばかりですなア」
機動六課とナンバーズの面々を見回して、近藤が言った。

その時、トレーニンブルームにヴィヴィオ、アルフ、ユーノ、アニ
スが来た。

やってきたヴィヴィオは、足を止めて近藤を見上げた。近藤もヴィヴィオを見た。

「あっ、ゴリラだ」

近藤を指差して、ヴィヴィオが言った。

「えっ!?!」

ヴィヴィオの発言に、近藤はショックを受けて目を剥いた。

銀時や神楽、ナンバーズ数名は笑っている。

「ヴィヴィオ!」

慌ててフェイトは、ヴィヴィオに駆け寄った。

「いや、お嬢ちゃん?俺、ゴリラじゃないから!ゴリラに似てるって言われるけど、違うから!人間だから!」

必死に自分が人間である事を主張する、ゴリラ顔の近藤。

ヴィヴィオは銀時に顔を向けた。

「銀時パパ!ゴリラがいるよ!」

「えっ!?!」

万事屋二人と土方は、思わず声を上げた。

銀時も顔をひきつらせた。

「銀時……パパ?」

「銀ちゃんの隠し子アルか!?!」

新八は呆然となり、神楽はハシヤギ出す。

「万事屋……お前……」

土方も軽蔑の眼差しで銀時を見る。

「違アアアう!誤解すんな!ヴィヴィオは俺の隠し子じゃねエエエ

エ!?!」

銀時は必死に誤解を解こうとする。

「ヴィヴィオ……パパの子じゃないの……?」

ヴィヴィオは、瞳をうるうるさせて銀時を見つめた。

「いや、そうじゃなくて」

「俺はゴリラじゃない!」

銀時と近藤が、必死に誤解を解こうと叫ぶ。

この騒がしい光景を見て、機動六課とナンバーズの面々は思った。
賑やかな連中だなあ。

*

何とか隠し子の誤解は解けた。近藤の方も、何とかヴィヴィオに人間だと解ってもらえた。

銀時はトレーニングルームを出て、廊下を歩いている。
すると、前からスバルが歩いて来た。あまり元気がないように見える。

「銀さん」

「スバル。どした？何か表情くねーぞ」

首をぼりぼり掻きながら、スバルに尋ねた。

スバルは顔を俯いて話した。

「…私、銀さんに憧れて…：銀さんみたいに、誰かを助けられる人になりたくて…：機動六課に入ったんです…：…」

スバルが機動六課に入った想いを語る。

昔、自分を助けてくれた銀髪の男は、やっぱり銀時だと考えている。

銀時は、未だにスバルを助けた事を否定しているが。

「…でも…いざ任務に当たると、護られてばかりで…：今回の戦いも…私なんかがいても…役に立つのかなって思って…：…」

弱気な声で話す。

普段、スバルは前向きで明るいけど、こういう内気で気が弱い所もあるのだ。

しかも世界の存亡を賭けた決戦が近づき、とてつもないプレッシャーが降り懸かってきた。

銀時は溜め息をついた。

「スバル。お前は一人で戦ってんのか？」

「え？」

スバルは顔を上げて、銀時の顔を見た。

「一人で戦ってんのかつて聞いてんだよ」

「い…いえ…ティアアやキャロ、エリオ…ノーヴェ達と一緒に……」
再度聞かれ、スバルは答えた。

「だろ？お前一人で戦ってんじゃないよ」

耳の穴をほじりながら、銀時が言う。

「頼り頼られる仲間がいる。マツハキヤリバーって頼りになる相棒がいる。そいつらと一緒になら、何だつてできるだろ」

そう言つてスバルの肩を叩いて、横を通り過ぎた。

「こん中で役に立たねエ奴なんていねーよ。まっ、一人で気負い過ぎねーで、頑張りな」

銀時は手をヒラヒラと振つて、歩いて行つた。

スバルは、銀時の後ろ姿を見つめた。

一人じゃない。

仲間やマツハキヤリバーと一緒になら、何だつてできる。

スバルは、待機状態のマツハキヤリバーを見た。

「マツハキヤリバー……」

いつの間にか、さっきまでの不安は消えていた。

「一緒に頑張ろうね。マツハキヤリバー」

力強く、マツハキヤリバーを握つた。

スバルは、銀時が去つたあとを見た。

「ありがとう。銀さん」スバルの表情は、普段の明るい笑顔に戻つていた。

*

アースラの甲板。

銀時が一人、甲板に立っていた。静かで夜風が気持ちいいこの場所は、銀時のお気に入り場所になっている。

夜空を眺めていると、後ろで扉が開く音がした。振り返って見ると、フェイトがいた。

「銀時。ここにいたんだ」

「ああ。何か気に入っちゃまってよ」
フェイトに答えて前に向き直る。

銀時の隣にフェイトが歩み寄った。

「銀時……」

「ん？」

呼ばれて、横目でフェイトを見た。

「あんまり……無理しないでね」

「え？」

「小さい頃、私も無茶してたけど……銀時の方が、結構無茶してたから……」

昔の事を思い出しながら、フェイトは言った。

魔導師でもないのに、暴走したジュエルシードを素手で掴んだり、ゾーマに一人で挑んだり、銀時は無茶な事ばかりしてきた。

他人に無茶をするな、と言ったときながら自分が無茶をする男なのだ。
フェイトは、そっと銀時の手を握った。

銀時は少し驚いた顔をした。

「銀時……みんなで、生きて帰ってこよう」

フェイトは、銀時の顔を見つめて言った。

言われて銀時は、頭をぼりぼりと掻いた。

「心配しなくても、俺ア死なねーよ」

銀時は微笑みながら、フェイトの顔を見た。

「生きて帰って、お前に言いたい事があるからな」

「え？」

フェイトは首を傾げた。

「銀時、私に言いたい事って何？」

「さーて、俺アもう寝るわ」

「ちよつと、銀時！」

フェイトは、甲板を去ろうとする銀時を追った。

最終決戦の日まで、あと僅か。

*

クリスの城。

薄暗い廊下を、一人の男が歩いていた。高杉である。

廊下を歩いて行くと、壁に寄り掛かっているゾーマを見つけた。

「よオ」

ゾーマが声をかけた。

高杉は足を止めて、ゾーマを見た。今は、いつもの煙管をくわえていない。

「何か用か？」

「ちよっとお前に興味があつてな」

壁から背を離して、高杉の前に立つ。

「俺とちよっど鬪り合わねーか？」

ニヤリとゾーマが笑う。

高杉も短く笑った。

「俺は無駄な喧嘩はしねーんだ」

言つてゾーマの横を通り過ぎる。

「いいじゃねーか。ちよっどだけだよ」

振り返つて高杉を見る。

瞬間、上段から刃が襲つてきた。ゾーマは右腕を頭上に構え、刃を防いだ。

ゾーマは、自分に刃を放つた高杉を見た。

「ほう。今のは結構マジだったんだがな。いい反応じゃねーか。流石は最強のロストロギア」

言つて高杉は刃を引いた。鞘に刀をおさめて、いつもの煙管を出して口にくわえた。

「もうすぐ銀時達との戦だな。連中の片付けは頼んだぜ」

ゾーマに背を向けて、高杉は歩き出した。

高杉が去つたのを見届けて、ゾーマは刃を防いだ右腕を見た。刃を

受けた所に切り傷が出来ていて、血が流れている。
とんでもねえ”獣”だぜ。
ゾーマは口元を歪めて笑った。

第二十七訓：魔王討伐には最強パーティーで臨め（後書き）

戦いの準備は整った

次回、ついに最終決戦開始！

新八「次回、リリカル銀魂 Strikers。『緊張し過ぎると腹を下す』。テイクオフ」

第二十八訓：緊張し過ぎると腹を下す（前書き）

やれる事は全てやった

後は己の力、仲間の力を信じて闘い、護るのみ！

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十八訓：緊張し過ぎると腹を下す

クリスが世界を消すと宣言した日。最終決戦当日。

アースラは、修理中の機動六課隊舎前に待機していた。

待機しているアースラの横に、銀時、ヴィヴィオ、プレシア、アニスがいた。

戦場にヴィヴィオを連れていく訳にはいかないのです、プレシアに預ける事になったのだ。

「ヴィヴィオを頼んだぜ。プレシア、アニス」

「ええ」

「はい」

二人は頷いて答えた。

「パパ……」

ヴィヴィオが、今にも泣きそうな顔で銀時を見つめる。

銀時は溜め息をついて、そっとヴィヴィオの頭に手を乗せた。

「そんな顔すんなよ。必ず帰ってくるからよ」

「本当……？」

「ああ、約束だ。侍は、果たせねエ約束はしねーからな」

必ず帰ってくると、ヴィヴィオと約束する。

ヴィヴィオは、必死に泣くのを我慢して頷いた。

「…わかった。ヴィヴィオ、パパとママの事、待ってる！」

ヴィヴィオの言葉を聞いて、銀時は満足そうに微笑んだ。

手をヴィヴィオの頭から離し、プレシアとアニスに向き直る。

「銀時。気をつけてね」

「ご武運を」

プレシアとアニスは、心から銀時の無事を祈った。

「ああ」

銀時は短く答えた。

プレシア達は、迎えの車に乗って去っていった。

銀時は、まだアースラには乗らなかった。

もう一人、ここで会う予定の人物がいるからだ。しばらく待っている、一台の車がやってきた。

隊舎の前で車は止まり、ドアが開いて一人の男が降りてきた。

男はスカリエッティ。

スカリエッティは、歩いて銀時に近づいて行った。

銀時の前に来て、スカリエッティは足を止めた。スカリエッティの後ろには、見張りと思われる管理局の者が二人立っている。

「急に呼び付けてすまないね。行ってしまっ前に、どうしてもキミと話がしたくてね」

先にスカリエッティが口を開いた。

笑みを浮かべる彼の手足には、枷が付いている。逃げられないようにする為だ。

「用があるなら、さっさと頼むぜ。時間ねーんだからよ」

耳の穴をほじりながら、銀時が言う。

とても決戦前の態度とは思えない。

「私が最高評議会と裏取引をして、『聖王のゆりかご』という古代ベルカ、聖王時代に生み出されたロストロギアを動かそうとした事は、もう知ってるかい？」

「あゝ聞いたような、聞いてねエような……」

と銀時は曖昧な返事をする。

「私は最高評議会を利用し、聖王のゆりかごを我が物として、この手で歴史を変えようとした。……だが、アジトとして使っていた聖王のゆりかごは、クリスの襲撃を受けて使い物にならなくなってしまう」

スカリエッティは、遠い目をしながら話を続けた。

「正直、聖王のゆりかごがなくなってしまったら、私は他にやる事がない。他に興味がなかったからね。……キミに会うまでは」

遠い目をしていたスカリエッティが、銀時に目を向けた。

「私が生み出した彼女達、ナンバーズがこの先どういう風に生きて

ゆくのか、興味を持った」

そう言つてスカリエッティは、着ている白衣のポケットに手を入れた。入れた手をポケットから出して、銀時にある物を差し出した。彼の手の平にあつたのは、青い液体が入ってる小さなビンだった。

銀時は片眉を上げた。

「コイツア何だ？毒か？」

「毒じゃない。この薬は、体の傷を瞬時に癒し、体力も回復させる瞬間回復薬さ。キミの新しい武器は、体に相当な負担がかかるとウーノとクアットロから聞いてね」

銀時はスカリエッティから薬を受け取つた。

「アンタいつの間に、こんな薬作つたんだ？」

「八神部隊長に頼んだのさ。許可が下りるのに時間がかかったが、何とか独房から出れて、研究室を借りて薬を製作できた」

スカリエッティは短く笑つた。

彼程の大犯罪者を牢から出すのは、さぞ大変だつたらう。

「私に出来る事はこれくらいだ。彼女達の未来を護ってくれ」

スカリエッティの頼みを聞き、銀時は溜め息をついた。

「オメーに頼まれなくても、そのつもりだ」

薬をしまいながら、銀時は答えた。

「じゃーな」

スカリエッティに背を向けて歩き出す。

「銀時」

スカリエッティが銀時を呼び止めた。

銀時は足を止めて、振り返つた。

「ナンバーズ全員の体内に、私のコピーが仕込んである。戦いが終わった後で取り除いてやってくれ」

「え…？」

銀時は目を見開いて固まつた。

場が沈黙して、風がヒユウ、と吹いた。

*

スカリエツティとの話を終えて、銀時はアースラの中に戻った。自分のコピーを他人の体内に仕込むなんて……何考えてんだアイツ？ますます、あの野郎が苦手になったぜ。

廊下を歩いて、一つの扉の前で止まる。

扉を開けると、広い部屋の中には機動六課とナンバーズ、万事屋と真選組全員が集まっていた。

銀時は全員の様子を見渡した。

全員、覚悟を決めた表情をしている。

銀時は、ぼりぼりと頭を掻いてから言った。

「それじゃあ、行くか」

「はい！」

全員が力強く、大きな声で応えた。あつ、真選組は応えてないや。ついに出発のときがきた。

*

機動六課隊舎を出発したアースラは、クリスの城へ向かって進路を進めていた。

ブリッジに、ほとんどのメンバーが揃っている。その中の一人、志村新八は緊張とプレッシャーで体が震えていた。

「新八。ガタガタ体震えて、今更ビビってきたアルか？」

神楽が、からかうように言った。

「びびってねーしゅー！」

「あはは！新八、噛んでる〜！」

新八を指差して、セインが笑う。

「ちっ、違う違う！これアレですから！武者震い！そう！武者震いですー！」

身震いしてる自分に言い聞かせるように、必死に新八は叫んだ。

そんな新八の横に立っている銀時が、急に腹とお尻を押さえた。

「ヤベツ。緊張し過ぎて俺、ウ コしたくなってきた。トイレどこだっけ？」

「銀時イ！ウ コとか言うんじゃないやねエエエ！って、あたしもウ コって言うっちゃったアアア！！」

頭を抱えて、苦悩するノーヴェ。

「オイオイ、ノーヴェ。お前がツッコミやっちゃったら、新八の存在価値がなくなっちゃうだろ？」

「いや、余計な心配いらないですから」

あんまり嬉しくない銀時のフォローに、新八は一言返した。

「ったく。テメーら遠足に行くんじゃないぞ。緊張感つてもんがねーのか？」

クールにそう言った後、土方は懐からボトルを取り出し、中身のマヨネーズを飲んだ。

「いや、緊張感ブチ壊しいイイイ！！」

新八とユーノのダブル眼鏡がツッコんだ。

「何でマヨネーズ持ってきて、今飲んでるんですか！？」

「マヨがなくては戦はできねーだろ？」

「勝手に変な諺、作るなアアア！！」

ブリッジに新八のツッコミが響いた。

新八のツッコミを久しぶりに聞いて、フェイトやなのはは笑っている。

フェイトの隣に、トーレがやってきた。

「コイツら、いつもこんな感じなのか？」

「そうだよ。リラックスできるでしょ？」

フェイトは笑いながら、トーレに答えた。

トーレは溜め息をついた。

「銀時の仲間は賑やかっスね」

「不安が吹き飛んだ」

賑やかと言うより、騒がしい銀時達を見て、ウエンディやディエチもリラックスしてきた。

今の所、飛行も順調に進み、はやてがクリスから受け取った地図に従って、アースラは街から遠く離れた山脈に入った。まるで人の侵入を拒むかのような、険しい山脈。

その山脈の中に、大きな古城を発見した。

はやては、モニターに映ってる古城と地図を交互に見た。

「間違いない。あの城や」

確認を済ませ、アースラを近くに着陸させた。

ウーノやクアットロのような、あまり戦闘向きでない者はアースラに残り、他の全員は外に出て、古城の前に集まった。

正門の前に立って、城を見上げる。

「ええな皆？この城に入ったら、もう後戻りはできない」

城を見上げたまま、はやてが言った。

「必ず勝って、大切なモノを護ろう！」

「はい！」

はやての言葉に、機動六課の面々は力強く応えた。

そして一同は、城の中へと足を踏み入れた。全員が城の中に入ると、正門の扉が閉じられた。扉には嚴重に結界が張られて、外に出る事は不可能になった。

直後、上から沢山の影が落ちてきた。

全員が身構えた。

「へっ…どうやら、歓迎パーティーの始まりみてエだな」

影を見て銀時が言った。

「ギャゴオオオオオ！！」

「グロロロロロ！！」

ゾーマが生み出した大量の怪物達が雄叫びを上げる。

怪物達の中には、以前とは違う姿の怪物がいた。

頭が二つある怪物。腕が四本ある怪物。岩のような甲羅を纏ってる怪物。恐竜に似たような怪物。

様々な姿の怪物が、鋭い牙を剥きながら銀時達を睨む。銀時達も、それぞれの武器を構えて怪物達を見据えた。

「ギャゴオオオオ!!!」

怪物達が動き出した。

雄叫びを上げながら、一斉に銀時達に迫る。

だが同時に、なのはとデイエチが動いていた。前に出て、怪物達に向けてレイジングハートとイノーマスカノンを構え、魔力を溜めた。二人の後ろで、銀時はニタリと笑った。

「さあ、楽しいパーティーの始まりだ」

銀時が言った直後、

「デイバインバスター!!!」

「発射!!!」

二つの閃光が放たれた。

閃光は怪物を飲み込み、壁に激突して大爆発を起こした。

銀時達の闘いが、始まった。

*

いつもの王室のような部屋ではなく、最上階の広い部屋にクリスはいた。

後ろには、巨大な装置が設置されている。

装置の前に立っているクリスは、手に持っている水晶玉を眺めている。水晶玉には、城内で怪物達と闘っている銀時達の様子が映し出されていた。

「来たか」

水晶玉を眺めながら、クリスが呟いた。

「白夜叉。僕の元まで辿り着けるか？」

クリスは口元を歪め、邪悪な笑みを浮かべた。

*

一階の部屋で、銀時達は怪物達と闘っていた。なのはとデイエチの砲撃で数を減らし、同時に出来た隙を突いて一斉に怪物達を攻める。銀時の無茶苦茶な特別訓練が奏効したのか、次々と怪物達を倒していく機動六課とナンバーズ。

怪物の動きは素早い、動きが大雑把で攻撃がかわし易い。

逆に機動六課やナンバーズは、大きな動作をせずに攻撃をかわし、隙を突いて攻撃をしている。それに隊長、副隊長一同は、能力限定を完全解除しており、本来の力を発揮して闘っている。

そして万事屋と月詠、真選組。

圧倒的な闘いの経験と、常人離れた身体能力を活かして、次々と敵を斬り伏せていく銀時。彼と共に様々な闘いに出て、経験を積んだ新八も……それなりに頑張っている。宇宙最強の戦闘民族『夜鬼族』の神楽も、怪力を誇って怪物を蹴散らす。幼い頃から鍛えられた技を駆使して、月詠も怪物を倒していく。

数々の修羅場を潜り、闘い続けている真選組も、次々と怪物を斬り倒していった。

数では敵が勝っていたが、実力は銀時達の方が、圧倒的に上だった。振り下ろされる刀。放たれる魔砲。飛び散る鮮血。

数十分後には、床は怪物達の死体でいっぱいだった。天井や壁、床は怪物の血で紫色に染まっていた。

「さて、片付いた所で先に進むか」

土方は一旦、刀を鞘におさめた。

近藤や沖田達も刀をしまふ。

「進むって行っても土方さん……」

沖田は前を見て言った。

「通路が三つもありますぜ」

部屋には、銀時達が入ってきた入口の他に、通路は三つあった。どれも上へと続く階段になっている。

「戦力を均等に分けて進もう」

トーレが提案した。

「スパウザーでも使うのか？」

「いや、あんな紛い物はありませんし、使いませんから」
即座に新八が、銀時にツッコんだ。

数分の話合いの結果、三組のメンバーが決まった。

「みんな、上で会おう！」

「はい！」

はやてに伝えて、三組はそれぞれ三つの通路に入った。
階段を上って、上に進んでいく。

*

一組目、沖田、ティアナ、土方、近藤、神楽、エリオ、キャロ、ル
ーテシア、トーレ、セツテ、ウエンデイ、アルフ。

薄暗い階段を上って行くと、上に光が見えてきた。出口だ。

一行は、駆け足で階段を上った。そして一行は、階段を上り終えて
広い部屋に出た。

一行が部屋に入った瞬間、

「ゴオオオオオオオオオオ！！！」

部屋に雄叫びが響いた。

広い部屋を揺るがすような雄叫び。沖田達にも声の振動が、ビリビ
リと伝わってきた。

広い部屋の中で雄叫びを上げるのは、黒い巨体。

「ゾーマー！！！」

雄叫びを上げた巨体を見て、ティアナが叫んだ。

ゾーマは、天井に向けていた顔をゆっくりと下げ、赤い目を沖田達
に向けた。

一同は身構えた。

「一味違う奴の登場か……」

ゾーマを睨みながら、土方は油断なく腰の刀に手をつけた。

真選組は『闇の書・ゾーマ事件』には関わっていないなかったので、ゾーマとは今回が初対面である。

「銀時はいねーのか……少し残念だが、何人か骨のありそうな奴がいるな」

ゾーマは嬉しそうに笑みを浮かべた。

*

二組目は、なのは、ユーノ、デイエチ、月詠、セイン、ギンガ、オットー、デイド。

階段を上り終えて、なのは達も広い部屋に着いた。

部屋を中心に、一人の男が立っていた。煙管をくわえて、やってきたなのは達を見据えている。

「よオ。また会ったな」

隻眼の男が、煙管をくわえたまま笑みを浮かべた。

「高杉晋助……！」

高杉の姿を見て、なのはは鋭い目で睨む。

地上本部、機動六課襲撃事件での出来事を思いだし、凄まじい怒気を放つ。

「たまには、俺も祭りに参加しようと思ってな」

煙管を離して、口から白い煙を吐く。

なのはの怒気を受けても、全く動揺しない。

「今回は毒はねーから、安心しな」

口元を歪め、高杉は不気味に笑った。

*

三組目は、銀時、新八、フェイト、リインフォース、ドゥーエ、スバル、ノーヴェ、チンク、はやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ、リインフォース・ツヴァイ。

階段を上って辿り着いたのは、ほかの二組と同じような広い部屋だった。

この部屋で銀時達を待ち構えていたのは、黒い着物を着た、銀髪の侍だった。

「テメーは……」

銀時は、銀髪の侍を睨んだ。

「よオ。また会ったな、銀時」

銀時のクローン、黒夜叉が挨拶した。

「あれが……銀時のクローン、黒夜叉……」

銀時の隣で、フェイトが呟いた。

見た目は本当に、銀時とそっくりだ。

新八も黒夜叉を見て、目を見開いて驚いている。

一歩も動かず、互いに見据える銀時と黒夜叉。

今、それぞれの死闘が始まる。

第二十八訓：緊張し過ぎると腹を下す（後書き）

次回、全面对決開始！

そして高杉がどうやって『リリカルなのは』の世界にやってきたのか明らかに！？

土方「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『世界の在り方は一つじゃない』。テイクオフ」

第二十九訓：世界の在り方は一つじゃない（前書き）

↓作者の質問と答

赤夜又「読者の皆さん、こんにちは、こんばんは。今回は僕の方から、皆さんに質問があります。銀さんはラスト、結婚して終わる方がいいでしょうか？それとも恋人になって終わる方がいいでしょうか？もしよろしければ、感想・評価にご意見を書いてくださいな。一応結末は考えてますが、もしかしたら、読者の意見で結末が変わったり変わらなかつたり……。それとメッセージに『シャルは銀さんの事どう想ってますか？』という質問がありました。シャルは、銀さんに特別な感情は抱いてません。フラグ立ってません」

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第二十九訓：世界の在り方は一つじゃない

石作りの古城の二階に幾つかある、広い部屋の一つ。

黒夜叉と銀時達が対峙していた。互いに一步も動かず、見据え合ったままだ。新八も目を見開いて、驚いた表情で黒夜叉を見ている。銀時やナンバーズから黒夜叉の事は聞いていたが、本当に銀時そっくりだ。

思わず銀時と黒夜叉を、交互に見た。

「ゾロゾロと来たな」

沈黙を破ったのは、黒夜叉。

メンドくさそうに、頭をぼりぼりと掻いた。

「どうしますか、主はやて？」

はやての隣に立っている、シグナムが聞いた。

はやては、ジツと黒夜叉を観察している。見れば見るほど銀ちゃんやな。いや見た目もそうやけど、あのメンドくさがり屋な所なんて、そっくりや。そこ通してくれへんか？と聞いてみれば、意外と通してくれるかもしれん。そう思い、はやては口を開いた。

「あの、黒夜叉さん…そこ通してくれへんかな？」

「いいよ、別に」

黒夜叉は即答した。

「えええっ!？」

はやて以外の全員が驚いた。

「いや、アンタここの番人みたいな人でしょ？敵の僕ら通しちゃっていいんですか!？」

新八が黒夜叉に聞いた。

すると黒夜叉は、耳の穴をほじりながら答えた。

「だって、お前ら人数多いじゃん。全員と闘うなんてメンドくせーよ。何人か先に通せば、数は減るし、クリスの奴に聞かれても『いや、人数多くて何人か突破されちゃいました。テヘツ』ってな感じ

で、ごまかせるだろ？てか、ごまかせるかもしんじゃないじゃん。てか、ごまかせるといいよね？」

「ただ楽しただけじゃん！何最後の『テヘッ』て？全然可愛くないから！気持ち悪いから！！」

新八が、額に青筋を立ててツッコんだ。

「黙れ、ツッコミ少年」

「ツッコミ少年って言うな！名を言え、名を！」

黒夜叉の言葉にキレル新八。

まんま、銀時と新八のやり取りみたいである。

「まあまあ、新八さん落ち着いて」

「完全に黒夜叉のペースだぞ」

スバルとノーヴェが、新八を落ち着かせる。

はやては、一步前に出て黒夜叉に尋ねた。

「ほんまに通つてええんやな？」

「いいよ。全員じゃなけりやな」

言つて黒夜叉は、後ろを指差した。

黒夜叉が指差した先には、上へと続く階段があった。

「オイ。俺がここに残るから、オメーらは先に上に行つてろ」

「銀ちゃん」

「早く行け」

銀時は黒夜叉を見据えたまま、はやて達に先に行くよう促した。

今は一刻も早く、一人でも多くクリスの元へ辿り着かなければならない。

「…わかった。頼んだで銀ちゃん」

「おお」

はやては守護騎士四人とリイン、スバルとノーヴェとチンクを連れて階段へ向かった。

黒夜叉の横を通り過ぎて、はやて達は階段を上った。

銀時は溜め息をついた。

「何でお前ら残つてんだ？」

振り返らずに、後ろにいる四人に聞いた。

「銀時を一人にすると危ないから。大丈夫。はやてには念話で伝えてあるから」

フェイトが答えた。

「僕も万事屋の一員ですからね」

新八が答えた。

「私は銀時とユニゾンが出来ますから」とリインフォース。

「私も。貴方達の闘いを見届けたいのです」

黒夜叉を見つめながら、ドゥーエが言った。

銀時は軽く舌打ちした。

「勝手にしろ」

ぶっきらぼうに言った。

すると、黒夜叉も溜め息をついた。

「一番メンドクセエ奴が残っちまったな…」

*

二階にある別の広い部屋。

ゾーマと対峙してる沖田達。エリオとキャロは、機動六課隊舎での敗北を思い出していた。

もう負けない。もう、あんな思いはしたくない。今度こそ、自分達の大切なモノを、居場所を護ると心に誓った。

「ほう」

エリオとキャロの顔を見て、ゾーマは笑みを浮かべた。

二人の顔付きが、以前と違う。

闘いに対する覚悟が出来た顔をしている。

いい顔してるじゃねエか。

ゾーマがそう思った時だった。

いきなり一本の赤い傘が目の前に現れ、鈍い音を立ててゾーマの顔

面に直撃した。傘の一撃を受けたゾーマは、何度も床に体を打ち付けながら吹き飛び、壁に激突した。壁の破片が飛び散り、砂埃が立ち込めた。

続いて沖田が、どこからかバズーカを取り出して肩に担いだ。狙いを定めて弾を発射して、ゾーマがいる砂埃の中に命中し、大きな爆発音を立てて爆発した。

ほとんどの人が、口を大きく開いて呆然となっている。

「これで一体、倒したアル」

ゾーマを吹っ飛ばした傘の持ち主、神楽は澄ました顔で言った。

「とつとつ次のステージに行くぜい」

バズーカを撃った沖田も、何事もなかったかのように平然としていた。

「え……？あの……いいんですか……？」

いち早く正気に戻ったティアナが、二人に尋ねた。

「先手必勝アル」

「勝負に、綺麗も汚いもねえんだぜ」

当然のように二人は答えた。

「ま……まあアリじゃないっすか？」

ウエンディが苦笑いする。

土方は、頭を抱えて溜め息をついた。

「こいつは驚いた。傘の嬢ちゃんは、力だけなら銀時より上か？」

砂埃の中から声が聞こえた。

全員が身構えて、砂埃を見た。少しずつ砂埃が晴れていき、中から

無傷のゾーマが出てきた。

「嬢ちゃん。さては人間じゃねーな？」

ゾーマの赤い目が、赤い傘を持つてる神楽を見据える。

土方達は顔を険しくした。神楽の一撃と沖田のバズーカを受けて、

ゾーマにはダメージがない。

「楽しい喧嘩になりそうだぜ」

ゾーマはニヤリと笑った。

*

三つ目の広い部屋。

なのは達は、高杉と対峙していた。

互いに動かず、声も発さず沈黙が部屋を包んでいた。

高杉は煙管を口にくわえ、刀を腰の鞘におさめたままだ。一見無防備に見えるが、隙がない。下手に攻撃をしても、避けられてしまう。沈黙と重い緊張感が続く中、月詠が一步前に出た。

「ぬし、高杉と言ったな？」

「ああ」

煙を吐いた後、高杉は短く答えた。

「ぬしはどうやって、この世界を知った？そしてどうやって、この世界にやってきた？」

月詠は、高杉の存在を知ってから抱いていた疑問を尋ねた。

「…数カ月前、攘夷浪士の間で妙な噂が流れた。」桂小太郎がアニメの世界に行った”ってな」

なのはとユーノは、目を見開いた。

桂小太郎。あだ名はヅラ。以前は高杉と同じ、過激派攘夷浪士だったが、考え方を変え、今では穏健派となっている。

その桂は、無理矢理瞬間移動装置に入って、なのは達の世界に来て『闇の書・ゾーマ事件』に巻き込まれたのだ。

「俺達はその噂の真相を調べた。そしてあの、源外つてじーさんに辿り着いた。あのじーさんが作った装置で、別の世界に行くとは…」
「ククク。ヅラや銀時は相変わらず馬鹿やってるよなア」
可笑しそうに高杉は笑った。

「だが、同じ仕組みの装置を作って、この世界に来た俺も馬鹿かもな」

高杉は、離していた煙管を口にくわえた。

「ただヅラや銀時は、この世界の事を誤解してる」

「誤解？」

月詠が目を細めた。

「この世界は、アニメの世界なんかじゃねエ」

高杉が衝撃の一言を言った。

月詠、なのはとユーノが驚愕な表情を浮かべた。事情を知らないデイチ達は、首を傾げている。

「考えてみる。どうして三次元の世界で生きてる俺達が、二次元の世界に行ける？」

「それは……源外の装置で……」

「そこだよ」

高杉が月詠の声を遮った。

「そもそもじーさんが作った装置は、二次元の世界に行く為の装置じゃねエ。あくまで別の場所へ移動する装置だ。二次元の…架空の世界に行くなら不可能だ。ならこの世界は何なのか？答は簡単だ。ここは架空の世界なんかじゃなく、実在する本物の世界なんだよ」高杉の言う事に間違いはない。

確かに源外が作った装置は、二次元へ移動する為の装置ではない。高杉は説明を続ける。

「いわゆる『並行世界』ってヤツだ。様々な可能性の世界。この世界も、その無数の可能性の中の一つ。装置が『リリカルなのは』のDVDの内容を読み取り、俺達は『リリカルなのは』と酷似したこの世界へ移動した。こういう事だ」

説明を終えて、高杉は煙管を離して煙を吐いた。

なのは達は、動揺を隠せなかった。今まで、自分達は架空の存在で、この世界も架空の世界だと思っていた。だが真実は違った。なのは達もこの世界も、実在する一つの世界。

「さて、お喋りはここまでだ」

高杉の雰囲気が変わった。

鋭い殺気が放たれ、なのは達は身構えた。

「始めようぜ」

高杉の鋭い目が、なのは達を射抜く。

「ユーノ君！」

なのはが叫んだ直後、ユーノが魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を出して、高杉の体を拘束した。

高杉は抵抗する様子もなく、ジツと自分の体を縛っている鎖を見ている。

なのは、デイエチがレイジングハートとイノーマスカノンを高杉に向けて構える。

「デイエチ！」

「大丈夫。ちゃんと手加減はする」

二人は魔力を溜める。

拘束されて、二人に武器を向けられても高杉は動揺せず、射抜くような目でなのは達を見つめている。

「デイバインバスター！！」

「発射！！」

二つの閃光が発射された。

閃光は真っ直ぐに高杉に迫る。閃光が当たる直前、高杉は薄笑みを浮かべた。

閃光が直撃して、大爆発が起こった。部屋が揺れ、天井から小さな石がパラパラと降ってくる。

砂埃が立ち込めて、高杉の姿が確認できない。

なのはとデイエチは、警戒を解かずにレイジングハートとイノーマスカノンを構えている。

煙が晴れてきて、人影が見えてきた。

「なっ……！？」

なのは達は驚愕した。

煙の中から現れた高杉は、無傷だった。

何事もなかったかのように、煙管をふかしている。

「お前らの魔法は、煙を巻き上げるだけか？」

笑みを浮かべて、高杉が言った。

「そんな…！手加減したとはいえ、直撃したはずなのに…！！」
デイエチは、信じられないといった顔をしている。

月詠は、高杉の体をよく見た。体に薄い緑色の光を、纏っているように見える。

「ぬし…魔法が使えるのか？」

「コイツはクリスの魔法さ。魔法攻撃を無力化させる、クリスが作った特殊な魔力の鎧。よく出来てるだろ？」

なのはは、表情を険しくした。高杉が魔導師に対抗する術を、用意していない訳がなかった。

「お前らの魔法は、俺には通用しないって事だ」

言って高杉は、腰の刀に手をつけた。

ゆっくりと鞘から抜いて、鈍く光る銀色の刃が出てきた。

なのは達は身構えた。

「さて、今度は俺が攻撃する番だな」

刀を片手に、高杉の鋭い隻眼が、目の前の獲物を射抜くように見据えた。

第二十九訓：世界の在り方は一つじゃない（後書き）

なのは達の魔法は、高杉には通用しない！？

次回、高杉の凶刃が、なのは達に襲い掛かる！

なのは「次回、リリカル銀魂 Strikers。『諦めの悪い奴は最後に何をするかわからない』。テイクオフ」

第三十訓：諦めの悪い奴は最後に何をするかわからない（前書き）

（作者の独り言とお礼）

赤夜叉「読者の皆さん。こんにちは、こんばんは。前回の質問、というかアンケート？にお答え頂きありがとうございます！まさかあんなに意見が来るとは思いませんでした。皆さんの意見を参考に、ラストシーンを考えたいと思います。いや〜しかし、とうとう三十まできちゃったなア。とまあ作者の独り言はこの辺にして、本編をどうぞ！」

高杉となのは達の激戦が始まる

勝利はどちらの手に！？

なのは「『リリカル銀魂 Strikers』。始まります」

第三十訓：諦めの悪い奴は最後に何をするかわからない

高杉が床を蹴って、なのは達に向かって走り出した。

月詠がなのは達の前に出て、両手に数本のクナイを構えた。高杉に狙いを定め、素早くクナイを放つ。

高杉は右手に握ってる刀を振るって、向かってくるクナイ全てを弾き落とした。走る勢いを落とすことなく、なのは達に迫る。

「はああああ！！」

ギンガが前に出て、高杉の顔目掛けて拳を振るった。

高杉は、なんなく拳をかわし、刀を振りぬいた。ギンガは、後ろへ跳んで紙一重で刀をかわし、前髪が少し切られた。

遠距離攻撃型のデイエチは、高杉から離れて距離をとった。

オットーが高杉に向かって、手の平から無数の光線を出す。

高杉は怯む事なく、オットーに向かって走り出した。刀で光線を斬り、弾き、紙一重で避けながら、勢いを落とすことなく、オットーとの距離を縮める。

チャンスと見たデイードが、赤いエネルギー刃の双剣、ツインブレイズを構えて高杉の背後に回った。上段に構えたツインブレイズを、高杉の背中目掛けて振り下ろす。

だが、ツインブレイズは、高杉の背中には届かなかった。デイードの気配を読み取り、素早く振り返りながら刀を振るって、ツインブレイズを弾いた。

「な……！？」

デイードは驚いて、一瞬動きが止まってしまった。

高杉がデイード目掛けて刀を振ろうとして　ハツとなって横を向いた。

何かが高杉に向かって飛来してきた。デイードへの攻撃をやめ、横から飛来してきた物を刀で弾いた。飛来してきた物　月詠のクナイが床に突き刺さった。

デイドは、急いで高杉から離れた。

高杉は、クナイが飛んできた方を見た。そこに月詠の姿はなかった。同時に高杉の背後の床から、月詠とセインが現れた。セインのデイドライバーで、高杉の背後に回ったのだ。

月詠は、至近距離から高杉に向かって複数のクナイを放った。

直後、高杉が振り返り、刀でクナイを弾き、顔目掛けて飛んできたクナイを、首を横に動かしてかわした。

月詠とセインは驚愕した。

まさか：！？この至近距離からのクナイを防ぎ、かわした！？

驚愕している月詠に向かって、高杉は横薙ぎに刀を振るった。

月詠は焦った。防御が間に合わない。

その時、セインが月詠の前に出て、障壁を張った。

高杉の鋭い刃は、セインの障壁を二つに切り裂いた。

セインは月詠を連れて後ずさった。

「セイン！」

「いてて…」

セインは左腕を押さえて、顔を歪めていた。

手を離すとセインの左腕は、今の高杉の斬撃を受けて、少し斬れていた。傷口は、バチバチと電気が鳴っている。

「すまん、セイン。わっちを庇って…」

「平気、平気。これくらいどうって事ないよ」
笑ってセインは答えた。

「お喋りしてる暇があるのか？」

声が聞こえて、二人はハツとなって前を見た。

右手に刀を構えてる高杉が立っていた。

二人に向けて、刀を振り下ろそうとした時、

「デイドライバーシューター！！」

なのはの声が、高杉の動きを止めた。

横を見ると、複数の桜色の魔力弾が高杉に向かって飛んできた。しかも軌道が不規則で捉らえにくい。

高杉は軽く舌打ちして、月詠とセインから離れた。

走る高杉。不規則な軌道を描きながら、高杉を追う魔力弾。すると高杉は走るのをやめ、立ち止まって魔力弾に向き直った。

微動だにせず、ただジツと不規則に動く魔力弾を睨んでいる。ギリギリまで魔力弾を近づけさせ、高杉は動いた。刀を振るって、全ての魔力弾を斬った。ほんの一瞬の出来事だった。

なのはや周りのみんなは、驚愕して目を見開いた。

魔力弾を斬った高杉は、刀を下ろし、なのは達を睨むように見据えた。

「こんなお遊びで、俺を倒せると思ったのか？」

銀時と互角　もしかしたら、それ以上かもしれない剣技でなのは達を圧倒する高杉。

だが、ここで月詠は、ある違和感を感じた。高杉が纏っている魔力の鎧は、魔法を無効化させる。もしかしたら、物理攻撃も無効化できるかもしれない。それなのに高杉は、わざわざ刀で魔法を防いだり、かわしたりしている。

「ぬし…何故、鎧で攻撃を無効化できるのに、刀で防いだりするのじゃ？」

高杉は一瞬目を細めたが、すぐに口元を歪めて笑みを浮かべた。

「なアに、単純な理由だ。単に、この鎧に頼ってばかりいたくねエからだ」

ゆっくりと高杉が歩き出した。

なのは達は一斉に身構えた。

「そんな事より、続きを始めようぜ」

獣のような鋭い目が、なのは達を射抜く。

同時に重い威圧感が、なのは達を襲った。額から汗が流れる。思わず武器を握る手に、力が入り過ぎてしまう。

床を蹴って、再び高杉は走り出した。

「くっ…！」

月詠がクナイを放つ。

高杉は、刀を振るってクナイを弾きながら前に進む。進んでる途中で、気配を感じて横を向いた。

デバイス『リボルバーナツクル』を装着してる左拳を構えたギンガがいた。

「ナツクルバンカー!!!」

硬質フィールドを纏った拳を、高杉に向かって放った。

紙一重で高杉は拳をかわし、ギンガに向かって刀を振るった。刀は右脇腹から左肩にかけて、ギンガを斬った。

「がふっ!」

ギンガが口から血を吐いた。床に膝をつき、その場に倒れた。

「ギンガ!」

月詠がギンガに向かって走り出す。

「チエーンバインド!!!」

ユーノが緑色の鎖状のバインドで、高杉の体を拘束した。

その隙に月詠は、ギンガを抱きかかえて高杉から離れた。月詠が見た限りでは、傷は深くはない

「オットー!」

「プリズナーボックス!!!」

ユーノの声に応え、オットーが青い透明のボックスの中に高杉を閉じ込めた。

結界と同等の性能を持つ、捕獲技能だ。

「みんな離れて!」

デイエチが叫んだ。

既にイノーマスカノンを構えて、発射準備を進めていた。

高杉は鎧の力で、チエーンバインドを破った。

そして自分を閉じ込めている青いボックスを睨みながら、刀を鞘におさめ、居合いの構えを取った。

もうすぐイノーマスカノンのエネルギーが最大になるうとした時、

高杉がカツと目を見開き、鞘から刀を素早く抜いて、青いボックスに斬撃を放った。

刀の一撃は、ボックスを切り裂いてしまった。

「っ！？」

オットーは、驚いて声も上げられなかった。

「俺をナメるなよ？」

噛み付きそうな鋭い目で、オットーを睨む高杉。

高杉はボックスの外に出て、そのままデイエチに向かって走った。

「くっ！」

やむを得ず、デイエチはイノームスカノンを発射した。

しかし、砲撃は簡単に避けられてしまい、デイエチと高杉の距離はどんどん縮まる。

「ユーノ！ギンガの治療を頼む！」

「は…はい！」

ギンガをユーノに任せ、月詠が高杉に向かって駆ける。

ツインブレイズを両手に構えたデイドも、月詠の隣を走る。

「高杉イイイイ！」

叫びながら月詠は、両手にクナイを構える。

高杉は足を止め、不敵な笑みを浮かべて振り返った。

月詠はクナイを放ち、高杉はクナイを弾きながら、月詠達に向かって走り出した。

月詠は、腰に差してある小刀を抜いて構えた。

互いの間合いに入り、刀と小刀が火花を散らせて交わった。

デイドが、背後から高杉に迫る。

高杉は左手で月詠の手首を掴み、背後にいるデイドに向かって放り投げた。

月詠はデイドにぶつかり、二人は地面に倒れた。

二人に追撃を放とうとした時、高杉の頭上に桜色の輝きが現れた。上を見ると、なのはが高杉に向けてレイジングハートを構え、魔力を溜めていた。

「デイベインバスター！！！」

先ほど撃ったモノより、デカイデイベインバスターが放たれた。

桜色の閃光は、高杉の姿を飲み込んだ。直後、大爆発が起きて、部屋が大きく揺れ、砂埃が立ち込めた。

なのはは砂埃の近くに着地した。両手でレイジングハートを構え、砂埃を見つめる。

すると、砂埃の中から高杉が勢いよく現れた。なのはが反応するよりも早く、刀で突きを繰り出す。刀はなのはの左肩に突き刺さり、白いバリアジャケットが赤く滲んだ。

「くっ！」

なのはは、痛みで顔を歪める。

高杉は刀を引抜き、なのはは傷口を押さえ、床に膝をつけた。

「なのはー！」

ユーノが叫びながら、立ち上がった。

「チエーンバインド！」

緑色の鎖状のバインドを出し、高杉の体を拘束しようとする。

だが高杉はバインドを避けて、刀を振り下ろしてバインドを斬った。バインドは床に落ちて消えた。

「そこで黙って見てろ。でなきゃ、この小娘の首、斬り落とすぞ？」

ユーノは悔しそうに歯を食いしばった。

強い。強すぎる。

まるで歯が立たない。

高杉は、目の前で膝をついてるなのはを見下ろした。

「自分の無力さがわかったか？」

冷たい氷のような目で、なのはを見下ろしながら言う。

「相手を噛み殺す”牙”も度胸もない、あまっちょろい小娘が、俺達を止めるなんざ出来ねエんだよ」

高杉の目には、世界に対する憎しみと怒りが宿っていた。

なのはは、ゆっくりと立ち上がった。出血が止まらず、傷口の周りは血で真っ赤に染まっていく。

「確かに私は……あまっちょろい小娘かもしれない……」

顔を伏せたまま、なのはが言った。

高杉は目を細めた。

「でも…だからって、逃げる訳にはいかない」
なのはは顔を上げた。

その瞳には、力強い『何か』が宿っていた。

「あまつちよろくても…私は私なりに、全力で大切なモノを護る！
大切なモノを失って悲しむ人を出さない為に！！みんながいる、こ
の世界を護る為に！！」

自分の想いと決意をぶつけて、なのはは高杉から離れた。

「レイジングハート！ブラスターモード！！」

レイジングハートの形が変わった。

同時に、なのはのバリアジャケットも形が変わった。昔の 闇の
書・ゾーマ事件の時に形が似ている。

高杉は、

「ほっ」

と短く呟いただけで、動揺していない。

なのははレイジングハートを高杉に向けて、先端に魔力を集束させ
る。

「これが私の全力全開！」

集束が終わり、なのははレイジングハートを振り上げた。

「スターライトブレイカー！！！！」

レイジングハートを振り下ろし、巨大な桜色の閃光が放たれた。

その膨大な量の魔力の塊を目にして、高杉は目を見開いた。桜色の
閃光は高杉を飲み込み、壁を破壊して外へ突き出た。

やがて閃光は消えて、辺りは砂埃が立ち込めた。

なのはは肩で息をして、両手でレイジングハートを構えて真っ直ぐ
に砂埃を見つめた。

壁には、スターライトブレイカーで出来た大きな穴があった。

「す…凄い……！！」

ユーノ達は、目を見開いて驚愕していた。

なのはのスターライトブレイカーは何度か見た事があるが、今のは

威力が段違いだ。

いくら魔力の鎧を纏った高杉でも、アレを食らったらひとたまりもないだろう。

ユーノがそう思った時だった。

「…驚いたぜ。まさか、こんな切り札があつたとはな」

砂埃の中から声が聞こえた。

なのは達は、目を見開いて固まった。砂埃の中から、人影が出てきた。ゆっくりとした足取りで近づき、姿がハッキリと見えてきた。

砂埃の中から出てきたのは、紛れもなく高杉だった。しかし無傷ではなく、左肩の部分の着物が破れ、肩から血を流していた。だが重傷という訳ではない。

「クリスの鎧を破つちまうたア…なかなかの魔砲だぜ」
余裕の笑みを崩さず、高杉はなのはに近づく。

なのはは驚愕の表情を浮かべたまま、動くことができなかった。今のスターライトブレイカーで、魔力と体力を大幅に消費したからだ。自分の切り札も、高杉を倒すまでには到らなかつた。

ユーノ達も、信じられない光景を目にして、動くことができなかった。

高杉が、なのはの前で立ち止まった。

「認めるぜ。お前にも”牙”がある事を」

ゆっくりと刀を上段に構える。

「だが、お前の”牙”は、俺の魂には届かねエ」

獲物を狩る獣の目で、高杉はなのはを見つめる。

なのはも目をそらさずに、見つめ返す。

「じゃあな、小娘」

高杉の口から、死刑宣告が出された。

「なのはアアアアア！！」

ユーノが叫んだ。

しかし高杉は止まらない。

高杉の刃が、なのはの頭目掛けて振り下ろされた。

その時、

「小娘じゃない」

高杉の足元 床から声が聞こえた。

声を聞いた高杉は、寸前で刃を止めた。足元を睨みつける。

この声は……！

危険を察して、高杉は後ろへ跳んだ。

直後、床が斬られて穴が出来た。突然出来た穴から、一人の人物が姿を現した。

なのは達は、呆然となつてその人物を見つめた。

鬱陶しい黒い長髪に着物姿。右手に刀を握っている。

「桂だ」

高杉を見据えながら乱入者、桂小太郎が名乗った。

「桂さん!!？」

なのはとユーノが驚きの声を上げた。

「あれが高杉の言つていた……桂小太郎か？」

桂を見ながら、月詠が呟いた。

桂はなのはに振り返った。

「高町殿、大丈夫か？」

「は……はい！桂さんのお陰で助かりました！ありがとうございます
！」

なのはは桂に礼を言った。

「さすが未来の世界だ。随分と大きくなつたな。おこづかいに五十

円あげよう」

「あ……いえ、結構です」

なのはは、やんわりと断った。

ユーノ達が、なのは達に駆け寄った。

「ククク……ツラ、まさかお前までいたとは驚きだぜ」

高杉の声を聞き、桂達は振り返った。

「俺の事を嗅ぎ回ってる連中がいてな。調べてみたら、高杉……お前だったか」

桂は目を鋭くして、高杉を見据えた。

「仲間に頼んで鬼兵隊の隠れ家を突き止め、源外が作った装置と同型の装置を見つけた。お前達がつけた物だな」

「隠れ家に侵入して、装置を使って、この世界にやってきたって訳か」

「俺は変装が得意だからな。誰にも怪しまれずに、ここまで来れた」桂の答を聞いて、高杉は短く笑った。右手に持ってる刀を構える。

「高町殿。ここは俺が引き受ける。みんなは先に進め」

桂が刀を構えながら、なのは達に言った。

「でも、桂さん…！」

なのはが戸惑う。

「俺の心配ならいらん。早く行け！」

振り返らずに、なのは達に先に行くよう促した。

なのはは覚悟を決めて、拳を握った。

「みんな、行こう」

「けど、なのは…」

「桂さんなら大丈夫だよ」

なのはが答えた。

ユ一ノ達は少し悩んだが、桂を信じて先に行く事にした。

「わかった。行こう！」

ユ一ノ達は、上へと続く階段へ向かって走った。

なのはは足を止めて、桂に振り返った。

「桂さん。ありがとうございます」

もう一度、桂に礼を言って、なのはは階段へ向かった。

なのは達が階段を上り、部屋には桂と高杉だけが残された。

「ククク。馬鹿な連中だぜ。俺にやられた方が、まだマシだったのによオ」

「何？」

桂は目を細めた。

「お前も最上階に行ってみるか？『悪魔』が待ってるぜ」

口元を歪め、高杉は不気味に笑った。

*

「ふんごオオオオ!!」

「うおおおお!!」

何人かの叫び声が、部屋に響いた。

上から神楽が傘を振り下ろし、沖田が下から斬撃を繰り出した。

「ゴオオオオオ!!」

雄叫びを上げる黒い巨体、ゾーマ。

左腕で傘を防ぎ、右手に障壁を展開させて刀を防いで、回し蹴りで二人を吹き飛ばす。

「チエーンバインド!!」

「アルケミックチエーン!!」

アルフとキャロの二人が出したバインドと鎖が、ゾーマの体を縛って動きを拘束する。

「いくぞ、トシ!!」

「おう!!」

「ストラーダ!!」

近藤、土方、エリオの三人が、ゾーマに向かって突っ込む。

「ゴオオオオオ!!」

ゾーマは力技で無理矢理バインドと鎖を破り、衝撃波を放って近藤達を吹き飛ばした。

トーレとセツテ、ルーテシアの召喚獣、ガリユーがゾーマの背後に回った。

攻撃を仕掛けようとした時、ゾーマが上体を後ろにそらしてトーレ達の姿を捉らえた。

「バアアアアア!!」

ゾーマは拳のラッシュを放ち、三人を吹き飛ばした。

「ぐあっ!!」

拳を受けた三人は、床に倒れた。

上体を戻して、ゾーマは飛来してくるモノに気付いてジャンプした。ティアナとウエンディが放った魔力弾が、ゾーマの下を通り過ぎた。二人は悔しそうに顔を歪めた。

ゾーマは着地して、周りを見回した。

「どうした、どうした？もう終わりか？」

第三十訓：諦めの悪い奴は最後に何をするかわからない（後書き）

まさかの桂参戦！

沖田達は、ゾーマの圧倒的な力に苦戦していた！

ゾーマ「次回、リリカル銀魂 Strikers。』いくらカルシウム摂ってもキレルものはキレル」。テイクオフ！」

第三十一訓：いくらカルシウム摂ってもキレルものはキレル（前書き）

死闘第二戦！

圧倒的な力を誇るゾーマに対抗する術はあるのか！？

神楽「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるアル！」

第三十一訓：いくらカルシウム摂ってもキレルものはキレル

何の飾り気もない、殺風景な石作りの広い部屋。壁や天井に赤い光があり、それが部屋の明かりとなっている。

何度か揺れが起きて、天井から小石やら埃やらがパラパラと降ってきた。

この部屋で、死闘を繰り広げている者達がいた。

古代の魔導師が生み出した魔導生物兵器、ゾーマ。

宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』の一人、神楽。真選組の近藤、土方、沖田。機動六課のフォワード、ティアナ、エリオ、キャロとフリード。フェイトの使い魔、アルフ。スカリエツティが生み出した戦闘機人、トーレ、セツテ、ウエンデイ。キャロと同じく召喚士、ルーテシア。ルーテシアの召喚獣、ガリユー。

余裕の笑みを浮かべるゾーマに対し、神楽達は険しい表情をしていた。

これだけの人数で攻めて、傷一つ付けられないなんて……。

両手にクロスミラージュを構えて、ティアナがゾーマを睨む。

ウチの総悟や、あの万事屋の怪力娘を軽くあしらうたア……とんでもねエ化け物だぜ。

土方は口から、ペツと血を吐き捨てた。口の中が切れて血の味がする。

睨み合いが続き、重い沈黙が部屋全体を包む。

「さアて……」

ゾーマが沈黙を破った。

両拳を力強く握る。

「そろそろ第二ラウンドを始めようぜ。にらめっこは性に合わねエからな」

重いプレッシャーと共に魔力を放ちながら、ゆっくりと神楽達との距離を詰めていく。

神楽や真選組、トーレ達接近型も、少しずつ前に進む。射撃のテイアナとウエンディ、サポートのアルフ、キャロ、ルーテシアは後ろへ下がる。

ゾーマと神楽達。ジリジリと近づき、互いの間合いに入った瞬間、両者は動いた。

ゾーマは右拳を突き出し、神楽は傘を横薙ぎに振るった。拳と傘が激突して、衝撃で床が揺れてるように感じた。

その隙に正面から沖田、右側から土方、左側から近藤、背後からトーレとセツテがゾーマに迫った。

全員の一斉攻撃が入るかと思われた時、

「六手拳!!!」

ゾーマの左右の肩から一本ずつ、背中から二本と四本の腕が生え、腕の数は計六本となった。

沖田達は驚愕した。

腕は沖田達の攻撃を防ぎ、驚愕して出来た隙を突いて拳を叩き込んだ。

六人は拳を受けて吹き飛ばされた。

その時、ゾーマの頭上で攻撃の準備をしている者がいた。ストラーダの先端には、黄色い魔力刃が発動している。

「うおおおおお!!!」

ストラーダを構えて、魔力推進でゾーマに向かって垂直に突進する。ゾーマは上を向いた。

ストラーダの魔力刃を一組目の腕が掴んで止めた。魔力で腕を強化させて、ストラーダはビクとも動かない。二組目の腕が、エリオの体を掴んだ。

「ゴオオオオオオ!!!」

ゾーマは叫びながら、エリオを床に叩きつけた。床がへこみ、周りに亀裂が広まった。

「がはっ!!!」

エリオは口から血を吐いた。

そして三組目の腕が、エリオに向かって振り下ろされる。

その時、複数の魔力弾が腕に当たって弾いた。すかさずガリユーが横から飛んできて、エリオを掴んで離れた。

ゾーマは魔力弾が飛んできた方を見た。

ティアナとウエンデイが、クロスミラージユとライディングボードを構えていた。銃口から煙が出ている。

「ゴオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げて、ゾーマは二人に向かって走り出した。

二人は魔力弾を発射するが、ゾーマは拳で弾きながら前に進む。拳を振りかぶり、ティアナに向かって振り下ろす。

ティアナに当たる直前、オレンジ色の鎖が、ゾーマの腕や体に巻き付いて動きを止めた。

「二人から離れな！！」

チエーンバインドを放ったアルフが叫んだ。

「アルフさん！」

「今のうちに離れるっスよ！」

ウエンデイがティアナを連れて、ゾーマから離れた。

「うおおおおお！！」

沖田、土方、近藤、神楽、トーレ、セツテ、がゾーマに迫る。

ゾーマはチエーンバインドを力づくで破り、六本腕を駆使して、沖田達の攻撃を防ぐ。

猛攻を受ける中、神楽の傘を掴み、傘を掴んでる神楽ごと振り回す。刃で防ぐ訳にはいかず、土方達はゾーマから離れた。ゾーマは神楽を壁に向かって放り投げる。物凄いスピードで壁に激突して、砂埃が立ち込めた。

「はあっ！」

ゾーマの左側から、セツテがブーメランブレードを投げる。

ゾーマは左拳を突き出して、ブーメランブレードを弾こうとするが、ブーメランブレードは当たる寸前に左に軌道を変えて拳をかわす。拳をかわしたブーメランブレードは、ゾーマの顔に迫る。

だが、間一髪でゾーマは右拳を振るって、ブーメランブレードを弾いた。反撃とばかりに三本の左腕を、セツテ目掛けて伸ばす。三つの拳が、セツテの体に激突した。

「がはっ！」

セツテは、そのまま伸びる腕に押されて、壁に激突した。

ゾーマは伸ばした三本の腕を戻した。

セツテは、壁にめりこんだまま気絶した。

「おのれエー！」

トーレが高速機動・ライドインパルスを発動した。

高速のスピードで、ゾーマの周りを飛び回って翻弄しようとする。

すると、ゾーマは少し身を屈めた。

次の瞬間、

「バアアアアアア！」

叫び声と共に、ゾーマの体から槍のような鋭い針が、無数に突き出た。

あまりの数にトーレは避けきれず、両足に針が刺さってしまっ

「ぐうう！」

痛みで動きが止まってしまった。

「ゴオオオオオオ！」

その隙を逃さず、ゾーマはトーレの頭に拳を叩きつける。

「がっ！」

頭に衝撃を受けたトーレは、そのまま床に倒れてしまっ

何とか意識はあるものの、今の衝撃で体が言うことを聞かなくなっ

てしまった。

ゾーマが追撃を放とうとした時、突然部屋が揺れ出した。

異変を感じたゾーマは、トーレへの攻撃を中止して、後ろを振り返った。

ゾーマの視線の先には、二つの巨体が佇んでいた。

キャラコが召喚したヴォルテールと、ルーテシアが召喚した白天王である。

てかこの二体が納まる、この部屋ってどんだけ広いんだよ？

「コイツは前の…それにもう一人召喚士がいたのか」

二つの巨体を見上げながら、ゾーマは笑みを浮かべた。

「今度こそ、貴方を止めます！」

ゾーマを見つめながら、キャロが言う。

「やってみな」

ゾーマは正面から迎え撃つ気のようなうだ。

ヴォルテールが、砲撃のために炎を溜め始めた。白天王も、腹部にある巨大な水晶体に魔力を溜める。

ガリユーは、ゾーマの近くで倒れてるトーレを抱えて離れた。

その直後、ヴォルテールのオレンジ色の砲撃と白天王の魔力砲が同時に放たれる。

ゾーマも口に溜めていた魔力を使って、魔砲を放った。

三つの閃光がぶつかり合い、火花が散って衝撃が生まれた。

ヴォルテールの砲撃は、以前より威力が上がっていて、ゾーマの魔砲に耐えている。白天王の魔力砲もゾーマの魔砲を押し返そうとする。

「お願い、ヴォルテール！」

「頑張つて、白天王！」

キャロとルーテシアは、己の召喚したモノ達の後ろで闘いの様子を見守っていた。二体の勝利と無事を祈りながら。 。
だが、二人の願いは碎かれる事になる。

「ゴオオオオオオオオオオ！」

ゾーマが魔力を上げたのだ。

魔砲の威力が上がリ、ヴォルテールの砲撃と白天王の魔力砲を掻き消す。魔砲は勢いが止まる事なく、二体の巨体を飲み込み、二体の後ろの壁を破壊した。

「ヴォルテール！！！」

「白天王……………！！！」

二人は目を見開き、涙を浮かべて叫んだ。

魔砲が収まり、二体の姿が見えてきた。全身に火傷を負って煙が出ている。

二人は、急いでヴォルテールと白天王を引っ込めた。ゾーマの前から二つの巨体が消えた。

「さて……」

ゾーマが歩き出した。

キヤロとルーテシアが身構えると、二人の前にガリユーとアルフが立った。

「アルフさん！」

「ガリユー……」

キヤロとルーテシアは、アルフとガリユーの背中を見つめた。

二人は、怯むことなくゾーマを睨む。

「敵わねエとわかってても、己の主人と仲間を護るか。立派じゃねエか」

ガリユーとアルフの姿勢に称賛しながら、ゾーマは近づく。

右腕を振りかぶり、二人を殴ろうとした時、ゾーマの背中に複数の魔力弾が直撃した。

「ん？」

後ろを振り返って、狙撃手を見た。

後ろには、ウエンディとティアナがいた。だが二人ではない。同じ姿をしてる者が何人もいる。しかも、どんどん数を増やしていつて

る。

「こつちだ化け物！」

ゾーマが首を傾げていると、後ろから声が聞こえた。

振り返ると、土方、近藤、沖田がいた。

こちらと同じ姿の者が沢山いて、数を増やしている。

「こいつは……」

ゾーマは記憶を辿った。

確か、幻術を使う小娘がいたな。

ホテル・アグスタでも同じ事があった。ただ一つ違うのは、幻の数

が以前より多くなっている。

ブーステッドイリユージョン。キャロのブーストで強化された、ティアナの幻術魔法だ。

ティアナが幻術を出した直後、キャロがブーストを施して強化させたのだ。

ゾーマの周りを囲んでいた大群が、一斉に襲い掛かる。ゾーマは六本腕を振るって風払おうとする。だが、ゾーマの拳は体をすり抜けた。襲い掛かってきたのは、全て幻だった。

一連の動作を終えたゾーマの背後に、刀を上段に構えた土方が現れた。

「うりゃああああ!!」

気合一閃。

上段から振り下ろされた刀は、背中から生えてる腕を一本斬り落とした。

本物の土方に気付いたゾーマは、背中から生えてるもう一本の腕で捕らえようとする。

だが、その腕も、横から現れた近藤によって斬られた。床に腕が落ちて、トカゲの尻尾のようにバタバタ動いている。

腕は残り四本となった。

土方と近藤は、また幻の中に紛れた。ゾーマは二人を探すが、本物と幻を区別する能力はないので、どれが本物かわからない。

二人を探していると、今度は複数の魔力弾が迫る。ゾーマは、素早い拳のラッシュで魔力弾を全弾、弾く。

その瞬間、土方と今度は沖田が背後から斬りかかる。ゾーマは両肩から生えてる腕で、刀を防御した。

その時、ズバツと何かが斬れる音がした。ゾーマの両肩の腕が、ポトリと床に落ちた。二本ともだ。

ゾーマは落ちた腕を一瞥すると、自分の腕を斬った物を見た。ブーメランブレードが宙を飛び、使い手のセットの手に戻った。

「……さっきのお返しです」

セツテは、小さく笑み浮かべた。

これでゾーマの腕は、二本に戻った。

「ハツハツハツハツハツ！！いいぞ！そうこなくちゃ面白くねエ！」
ゾーマは楽しそうに笑い上げた。

「ゴオオオオオオオ！！！」

雄叫びを上げ、魔力による衝撃波を生み出す。

衝撃はゾーマを中心に、部屋全体に広まり、全ての幻を消す。全員、吹き飛ばされて壁にめりこんだ。

「がはっ……………！」

みんな口から血を吐いて、床に倒れた。

ゾーマは部屋は見回して、ある人物を探した。目的の人物を見つけると、ゆっくりと歩き出す。

「く……………」

ティアナが傷ついた体を起こした。

すると、大きな影が近づいてくる。影の主はわかっている。顔を上げると、ゾーマがティアナの前に立っていた。

「大したもんだぜ。あれだけの数の幻を作るのは、相当大変だったんじゃないか？」

「……………」

ティアナは何も答えない。

「はは。嫌われたもんだな。あつ、俺、悪人だったな」
苦笑した後、思い出したようにゾーマが言った。

だがすぐに笑みが消えた。

「わりーな。クリスに全員始末するように言われてんだ」
拳を握り、振りかぶる。

ティアナはクロスミラージュを構えて、魔力弾を発射する。だが、左拳で全弾、弾かれてしまった。

「じゃあな」

拳を振り下ろす。

ティアナは、目を閉じずに拳を見つめた。

自分は、この拳を受けて死ぬんだと思った。

だが、ティアナは死ななかつた。突然ゾーマの腕が爆発したのだ。ティアナは何が起こったのかわからなかつたが、ゾーマは右を見る。ティアナは、ゾーマの視線の先を追った。そこには、発射口から煙が出てるバズーカを担いでる沖田がいた。

「沖田さん!!」

ティアナは涙目で叫んだ。

沖田はバズーカを乱暴に床に落として、腰の刀を抜いた。

「ティアナから離れるオオオオ!!」

怒声と共に、ゾーマに向かって走り出す。

「いいぞ!来い!!」

ゾーマも走りだし、正面から迎え撃つ。

拳と刀がぶつかり合って、火花が散る。沖田は素早く鋭い斬撃を繰り出す。ゾーマも拳を魔力で強化させ、器用に斬撃を捌く。

沖田が横薙ぎに刀を振りぬく。ゾーマは右手で刀を受け流し、左腕を振りかぶって、沖田の顔目掛けて振り下ろそうとする。

拳が沖田の顔に当たる直前、

「ほあちゃあああ!!」

後ろから声が聞こえ、同時にゾーマの後頭部を衝撃が襲った。

「私を忘れんじゃねーヨ」

ゾーマの後頭部に飛び蹴りを放った女の子　　神楽が床に着地した。

「チャイナ!今更、目立つな!」

沖田が刀を構え直して、神楽に叫んだ。

「うるさいアル!ボロボロのお前は休んでるアル!」

「お前が休んでろ!!」

「お前がもつと休め!!」

ゾーマを間に挟んで、二人は口喧嘩を始めた。

「いや、こんな時まで喧嘩すんじゃねエエエ!!」

立ち上がりながら、土方が叫んだ。

その直後、沖田はゾーマに腹を殴られた。沖田は後方に吹き飛び、

壁に激突した。

「総悟才オオオ!!」

近藤が叫ぶ。

「沖田さん!」

「大丈夫っスか!？」

「沖田!」

ティアナ達が駆け寄った。

沖田は腹を抱えてうずくまっている。

ゾーマは神楽に振り返った。

「次はお前だ」

神楽は身構えた。

「おおおおっ!!」

吠えながらゾーマに向かって走る。

連続で拳や蹴りを繰り返すが、ゾーマは神楽の動きを見切っているらしく、攻撃を全て捌く。

「バアッ!!!」

突然ゾーマが大声を発した。部屋全体が揺れるような大声。

「……!？」

神楽は衝撃波のようなゾーマの大声に当てられて、動きが止まってしまう。

次の瞬間、ゾーマの大きな手が、神楽の小さな首を掴んだ。ゆっくりと右腕を上げて、神楽の足が床から離れる。

「神楽ちゃん!!」

キャラロが叫んだ。

ガリユーとアルフが護ってくれたお陰で、キャラロとルーテシアは軽い怪我で済んだ。

首を掴まれてる神楽は、苦しそうに顔を歪めて、バタバタ暴れてる。神楽をジッと見つめながら、ゾーマが言った。

「嬢ちゃん。お前、力を隠してるな？」

「!!!」

神楽は目を見開いた。

「いや、力を抑えてると言った方が正しいか？お前は全力で闘ってるつもりでも、力を出し切ってねエ」

周りの皆は、怪訝な顔をしている。

実は、ゾーマの読みは当たっていた。人を傷つける為ではなく、自分の護りたいモノの為に戦うと決めた神楽は、無意識に夜兎の血を抑えこんでいる。

ゾーマの本能が、神楽の中に眠る夜兎の本能に気付いたのだ。

「今ここで、その力使わねーと……」

ゾーマが言いかけた時だった。

エリオがゾーマの背後にいた。電気を纏った右拳を振りかぶり、

「紫電一閃！！！」

ゾーマの背中に拳を叩き込んだ。

バリアジャケットの右手の裾が弾け飛んだ。

魔力を電気に変換した、魔力付与攻撃が入った。

だが、

「力を使わねーと」

振り返ってエリオの頭を掴み、床に叩きつけた。

「みんな死んじまうぜ」

低い声でゾーマが言った。

「エリオ！」

「エリオ君！！！」

神楽とキャラ口が叫ぶ。

ゾーマは立ち上がるうとするエリオの頭を、左足で踏ん付けて床にめりこませた。

「野郎！」

土方と近藤が走り出す。

「バアッ！！！」

ゾーマは二人に顔を向けると、黒い閃光を放った。

土方と近藤は、舌打ちして後ろに跳んで避けた。閃光は床を突抜け

て、穴を作った。

「そこで、じつとしてる」

ゾーマは赤い目で、二人を睨んだ。

土方は顔を険しくさせた。

その間にもゾーマは、エリオを踏む力を強めていった。

「あ…… ああああ!!」

エリオの悲鳴が部屋に響いた。

「エリオ君!!」

キヤロは涙を流しながら叫ぶ。

「やめろ！お前やめるアル！！エリオから離れろ！」

「だったら力を使え！じゃなきゃエリオは死ぬぜ！エリオだけじゃ

ねエ！ここにいる全員もな！」

神楽を睨みながら、ゾーマが言う。

ゾーマは闘ってみたいのだ。力を発揮した神楽と。一体どれほ

どの力なのか、興味がある。

「そろそろ頭が潰れるぞオ！」

ゾーマが更に足に力を入れる。

エリオの頭が、ミシミシと軋む。

「いやアアアアア！」

キヤロが目を閉じて悲鳴を上げた。

その時。

ドクン

駄目アル。

ドクン

血が騒ぐ。

ドクン

暴れる。

ドクン

夜兔の血が……。

「ぬっ!?!」

ゾーマは足の力を緩めた。

とんでもない殺気が、自分に向けられている。

殺気の出所　右手で掴んでる神楽を見た。

神楽は右腕を振り上げる。次の瞬間、右の肘を振り下ろし、同時に勢いよく右膝を上げて、上下挟むように肘と膝をゾーマの右腕に叩き込んだ。

肘と膝を叩き込まれた所から、血が吹き出る。

「うおっ!?!」

ゾーマは驚きの声を上げた。

周りにいるティアナや土方達も、目を見開いて驚いている。

神楽の首を掴んでいた手を離す。

自由となった神楽は、ゾーマの腕の上を走って顔に近づき、顔に回し蹴りを叩き込む。

「ブアガッ!」

蹴りを受けたゾーマは、後方に吹き飛んで床に倒れた。

同時に神楽も床に着地した。

ティアナ達は、呆然となって神楽を見ている。

ゾーマが、ゆっくりと立ち上がった。傷ついた右腕が治癒していく。

「ははは……ようやく目覚めたか」

顔を上げて神楽を見る。

ゆっくりと歩きながら、神楽も顔を上げた。神楽の顔を見た瞬間、

ティアナ達は寒気を感じた。

神楽は笑っていた。目を見開き、歯を見せて不気味な笑みをしている。

神楽は床を蹴った。

「はははっ！いいぞ！これで対等な闘いが出来る！！」
ゾーマも笑いながら走り出した。

互いに拳を突き出す。拳がぶつかり合って、両者の腕に衝撃が走る。巨体のゾーマが、上から左拳を振り下ろす。神楽は足で拳を蹴り上げ、素早くゾーマの懐に入り、腹に蹴りを叩き込んだ。

「うごあー！！」

ゾーマは口から血を吐く。あのゾーマがダメージを受けた。

「ゴオオオオオオ！！」

雄叫びを上げ、ゾーマは神楽に膝蹴りを入れる。続けて両手を組み、上から振り下ろして頭を叩きつけた。神楽は床に両手をつき、ゾーマの足を睨んで足払いをする。

バランスを崩して、ゾーマは片手を床につけた。直後、神楽はゾーマの顔を蹴り上げた。

「ゴア……！！」

口から血を吐きながら、ゾーマは後退した。反撃しようと、右拳に魔力を溜める。

「ゴオオオオオオオ！！！！」

雄叫びを上げながら、ゾーマは右拳を放つ。

神楽は顔を伏せて、胸の前で腕を交差させて防御する。ゾーマの右拳と神楽の腕がぶつかり、神楽は後方へ押しやられた。

ゾーマの拳から、白い煙が出てくる。

神楽は防御を解いて、顔を上げた。

「クスクス」

神楽は笑っていた。

その様子を見て、ゾーマは苦笑いした。

「……今のは、俺の渾身の一撃だったんだぜ？笑いながら防がれる

と、自信なくすぜ」

神楽は走って勢いをつけ、跳躍してゾーマの顔面にドロップキックを決める。

戦況は一気に逆転して、神楽がゾーマを圧倒していた。

だが、ティアナ達は、神楽の闘っている姿を見て戦慄していた。

神楽は常に笑っていて、ゾーマを一方的に攻撃し続けている。

ティアナは神楽から目を離さずに、隣にいる沖田に聞いた。

「沖田さん……神楽って……あんな風になっちゃうんですか……？」

「……あんなチャイナ、初めて見るゼイ……」

沖田も珍しく目を見開いて驚愕している。

他のみんなも、目の前で闘っているのが本当に神楽なのか？と思っていた。

夜兎の血が目覚めた神楽は、攻撃の手を休めない。拳、蹴り、肘打ち、膝蹴り、回し蹴り、次々と攻撃を繰り返す。

攻撃を受け続けていたゾーマは、後ろによるけて、ついに床に倒れた。

口からは紫色の血が垂れ、体中には打撃を受けたアザがあり、両腕は完全に折れている。ゾーマの回復能力が、追いついていないようだ。

神楽が、傷ついて動けないゾーマの体に右足を乗せた。

自分を踏ん付けてる神楽を見て、ゾーマは呟いた。

「あゝ……まいったねエ、コイツは……とんでもねエモン目覚めさせちまったなア……」

ゾーマは苦笑した。

「……全然、対等な闘いじゃねエな……どっちが化け物かわかんねエぜ……」

神楽が足に力を入れて、ゾーマを強く踏んだ。

「ぐあ……！」

口を大きく開き、血を吐いた。

「神楽ちゃん、やめて！もういいよ！！」

キヤロが涙目で叫ぶが、神楽は止まらない。

すると、オレンジ色の鎖状のバインドが、神楽の体に巻き付いて動きを止めた。

「神楽！」

後ろから神楽に抱き付いた。

チエーンバインドを放ったアルフだ。

神楽はバインドを破ろうとする。

「もういいよ、神楽！コイツはもう動けないよ！アンタは充分、あたし達を護ってくれたよ！！神楽！！」

必死に神楽を止めようと叫ぶアルフ。

すると、神楽から放たれていた殺気が消えた。笑みも消え、ゆっくりと目を閉じて体から力が抜けていった。

「神楽！！」

アルフはバインドを解いて、神楽を抱きかかえた。

「神楽……」

神楽を離さないように、アルフは強く抱いた。

周りのみんなが、アルフと神楽に近寄った。

*

「ん……」

神楽は目を覚ました。床に横になっている。

目の前にはアルフがいた。

「神楽！気がついたかい!?」

「アルフ……」

周りには、土方達も集まっている。

神楽は、何が起こったのか思い出した。

「……私……また負けたアル……」

神楽の拳が震えている。

「……夜兔の血に……負けたアル……」
悔しさで涙が流れる。

右腕で涙を流す目を隠した。

夜兔の血に、自分自身に負けた事が悔しい。

「神楽……」

アルフは、なんとか神楽を励まそうとしたが、言葉が思い浮かばなかった。

周りのみんなも同じらしく、黙っている。

だがこの沈黙を、意外な人物が破った。

「まあ元気出せよ、嬢ちゃん」

声を聞いて、神楽はピタリと泣きやんだ。

ガバツと上半身を起こして、声の主を見る。

神楽から少し離れた所に、ゾーマが座っていた。

「よオ」

「お前……!!」

神楽がゾーマに飛び掛かろうとする。

「待て、落ち着け!」

「ゾーマは負けを認めた!もう闘う必要はない!」

土方とトーレが、神楽を抑える。

二人に抑えられてる神楽を見ながら、ゾーマが言う。

「嬢ちゃん。お前の事情は知らねエけどよオ、お前は仲間を護ったじゃねエか」

暴れていた神楽が、動きを止めた。

「お前は仲間を護った。それは間違いねエ。俺が言えるのは、こんだけだ」

ゾーマが言い終わると、神楽は少し顔を俯いた。

土方とトーレは、神楽から手を離れた。

すると、誰かが神楽の肩に手を置いた。振り返って見ると、アルフだった。

「神楽。確かに、負けるのは辛いけどさ……諦めずに頑張ろうよ!

そうすれば、きっと自分を変える事ができるよ！」

「アルフ……」

アルフの励ましを受けて、神楽の顔に、いつもの力強い感じが戻ってきた。

神楽の様子を見て、みんな安心したように笑った。

「ほれ。早くクリスの所に行った方がいいんじゃないか？」

「お前に言われなくてもわかってるアル、デカブツ」

ゾーマに言い返して、神楽は上へと続く階段に顔を向ける。

「よし。行くアル！」

「おおっ！」

「チャイナ！お前が仕切るな！」

階段へ向かおうとして、キャラロが振り返ってゾーマに近寄った。

「あの、私達が戻るまで此処にいてください」

「オイオイ。俺を一人にしたら、逃げるかもしれないねエぞ？」

「大丈夫です。私、ゾーマさんの事信じてますから」

キャラロは笑顔でゾーマに答えた。

ゾーマはブーツとなって、キャラロの笑顔に見惚れる。

「私達、絶対戻ってきますから」

キャラロは笑顔でそう言つと、みんなの元へ行こうとする。
すると、

「キャラロ」

ゾーマがキャラロを呼んだ。

「はい、何ですか？」

キャラロは足を止めて、ゾーマに振り返った。

そしてゾーマの口から、とんでもない言葉が出た。

「俺の嫁になってくれ」

「はあ……!?!?」

ティアナ達が驚きの声を上げた。

しばしキャラロはブーツとしていたが、

「え……ええっ!?!?!?」

言葉の意味を理解して、顔を赤くして大声を上げた。

「ゾーマ……テメエ、ロリコンか!？」

少し引き気味に、土方が叫んだ。

「ロリコン? 何だそれ? え? 俺なんかマズイ事言ったか?」

ロリコンの意味を知らないゾーマは、首を傾げた。

「えっと……あの……」

キャラは顔を赤くして、手をもじもじさせている。

「こおの変態デカブツウ!」

神楽とエリオが鬼の形相でゾーマに近づく。

指をポキポキと鳴らしながら、凄まじい怒気を放っている。

その様子を見て、ゾーマは冷汗を流した。

「おい、嬢ちゃん、坊主……俺が何を……」

「死ねやアアアア!」

最後まで言わせてもらえず、ゾーマは神楽とエリオの鉄拳を受ける。再び神楽にボコボコにされるゾーマ。エリオの紫電一閃が何発も入る。二人に続いて、沖田やティアナ、ナンバーズやルーテシアもゾーマに制裁をくわえる。

「ああああああ!!」

部屋にゾーマの悲鳴が響いた。

制裁を終えた後、神楽達は階段を上り、部屋にはボロボロになったゾーマが残った。

第三十一訓：いくらカルシウム摂ってもキレルものはキレル（後書き）

夜兔の血が目覚め、辛くも勝利した神楽達

今回は死闘第三戦、銀時VS黒夜叉！

黒夜叉「次回、リリカル銀魂 Strikers。『時々自分は何の為に生きているのか考える時がある』。テイクオフ」

第三十二訓：時々自分は何の為に生きているのか考える時がある（前書き）

（作者の一言）

赤夜叉「……かき氷食べたい」

白と黒

二匹の夜叉が激突し、短き死闘が幕を開ける！

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第三十二訓：時々自分は何の為に生きているのか考える時がある

時は少し遡る。

他の二部屋と全く同じ内装の広い部屋。

部屋の中で、二人の銀髪の男が向かい合っている。坂田銀時と、彼のクローン、黒夜叉。腰に差してある獲物をそのままに、ジッと静かに見据え合っている。銀時の後ろに立っている、フェイト、新八、リインフォース、ドゥーエも黙ったままだ。

時折、部屋の外から大きな音が聞こえてくる。なのは達と神楽達は、既に戦闘を開始しているようだ。

しばらく別の部屋からする音を聞くと、黒夜叉は溜め息をついた。

「他の連中は、もうおっ始めてるみてーだな。俺らもそろそろ始めるか？」

黒夜叉は肩をコキコキ鳴らして、気だるげに言う。

すると、

「ちょっと待って」

フェイトが銀時の横に出た。

「貴方はどうして、クリスに協力してるんですか？」

黒夜叉が銀時のクローンと知った時から、ずっと疑問に思っていた。世界を滅ぼそうとするクリスに、何故協力するのか。

「どうしてって……………」

黒夜叉は頭を掻きながら悩んだ。

悩んで考えて、こう答えた。

「わかんねエ」

「え？」

予想外の答えに、フェイトは少し戸惑った顔になる。

他のみんなも怪訝な顔をして、銀時は片眉を上げた。

「クリスの話じゃあ、俺は最高評議会とレジアスって奴らによって造られたぞうだ。あっ、あとゾーマもな。まあ最高評議会もレジア

スも死んじまつたけどな。あつ、最高評議会は、俺が殺したんだけどな」

時々、付足しながら説明をする黒夜叉。

「造られたのはいいんだけどよオ……なんつーか……目的がねーんだよ。俺はゾーマみてエに、強い奴と闘いたいとか思ってたねーし。クリスの世界を滅ぼすって計画もどうでもいいんだ。でもそうなる……俺は何の為に生きてんのか、わかんねーんだ……」

そこまで語ると、黒夜叉は急に目付きを変えた。

鋭い目で、銀時を睨むように見据える。

「そこで、ふと思っただ。俺のオリジナルのお前と闘って勝てば、何かわかるんじゃないかっつてな」

黒夜叉の雰囲気が変わった。

先ほどまでの気だるげな感じが消えて、肌突き刺すような鋭い殺気を放っている。

フェイトは目を見開いて、汗を流した。

「黒夜叉！」

ドゥーエが声を出して前に出た。

黒夜叉は、視線を銀時からドゥーエに移した。

「どうしても……闘わなければ、いけないのですか……？」

「……わりーな、ドゥーエ。こいつだけは譲れねエんだ」

黒夜叉の意志は変わらない。

答えを聞いたドゥーエは、悲しげな表情をした。

「二人とも」

銀時がフェイトとドゥーエの肩を掴んだ。

「銀時……」

「こいつに説得は無駄だ。後は俺がやる」

二人を後ろに下からせて、銀時は歩き出す

「銀時！ユニゾンを……！」

「いや、俺一人でいい」

手をヒラヒラ振って、リインフォースに返事をした。

「銀さん！」

新八が叫んだ。

「新八。今回はボケなしでいくから、ツッコミもなしだ」

「ちよつとオ！それ僕はいらないつて事ですか！？」

怒鳴る新八。

新八の怒鳴り声を無視して歩く銀時。

黒夜叉と銀時の距離は縮み、二人の間が約三メートルの所で銀時は足を止めた。

黒夜叉が短く笑った。

「……この時を待つてたぜ」

腰の刀を掴んで、ゆっくりと鞘から抜いていく。

刃を鞘から出し切ると、刀から不気味な黒いコードが何本、何十本と出てきた。黒いコードは生き物のように動き、刀を持つ右腕に絡

み、コードの先が腕に突き刺さる。体内に電流が流れ、脳に達し、刺激を与えた。

潜在能力を解放させる、紅桜式。刀身は大きくなり、紫色の光を放っている。

銀時も腰に差してある木刀を抜いた。

左手で、木刀の柄を押す。

ピュウ、と木刀の先つちよから、黒い液体が出た。醤油である。

「あれ？」

「おいイイイイ！ただ醤油が出るだけじゃん！！ボケなしでいくつて言つて、普通にボケてんじゃん！！緊張感ブチ壊しだよ！！」

「うるせー新八！ちよつとやり方、忘れちまったんだよ！」

キれる新八に怒鳴る銀時。

ドゥーエとリインフォースは、呆れた顔をしている。黒夜叉も目を細めて、銀時を睨んでる。

「銀時！正しい使い方は、柄を素早く二回押すんだよ！」
慌ててフェイトが教えた。

言われて銀時は、木刀の柄を素早く二回押す。

その瞬間、体に電流が走り、脳が刺激された。
銀時と黒夜叉、二人の潜在能力が全解放となった。
互いに睨み合い、剣を構える。

次の瞬間、二人の剣が同時に振りぬかれた。
フェイト達が見守る中、銀時の闘いが、始まった。

目にも止まらぬ……いや、目にも写らぬ速さで振りぬかれた両者の
剣が、火花を散らせてぶつかり合う。剣がぶつかり合った音と衝撃
が、部屋全体に響き渡った。衝撃で床がヒビ割れた。

「っ！！」

あまりの音の大きさに、思わずフェイト達は耳を塞いだ。頭の中が
痺れるような感覚になる。

更に衝撃もフェイト達の所まで届き、少し後ろに押しやられた。

銀時と黒夜叉は、攻撃の手を休めず、神速で剣を振り続ける。ぶつ
かる度に轟音が響き、衝撃が広がった。

「うおおおおお！！」

雄叫びを上げ、木刀を振り続ける銀時。

「は……早過ぎて見えない……！！」

目を擦りながら、新八が言った。

銀時と黒夜叉の、人間の域を超えた超人の動きを、新八は捉らえる
事が出来なかった。新八だけではない。隣にいるリインフォースと
ドゥーエにも見えていない。

「……凄い……！！」

二人の激戦を見て、フェイトは呟いた。

どうやらフェイトには、二人の動きが辛うじて見えているようだ。
文字通り剣撃の嵐。剣が振りぬかれ、ぶつかり合う度に床が抉れ、
ヒビ割れが広がっていく。

両者の実力は、まさに互角。デタラメな剣筋も力も速さも、全て同
じ。

ただ一つ、両者には違いがあった。

体が引き裂かれそうだ。

銀時が顔を歪める。

両者の違い　それは時間。

銀時が潜在能力を全解放して闘える時間は、僅か五分。対して黒夜又は、三十分の戦闘が可能である。

体に走る激痛に耐えながら、銀時は木刀を振り続ける。

残り時間、四分。

銀時の動きが、僅かに鈍くなった。強大な力に体が悲鳴を上げて、動きを鈍らせているのだ。

横薙ぎに紅桜式式が振られ、銀時の顔に迫る。顔を右に向けながら、後ろに引いて紙一重で刃をかわす。左頬に僅かに刃が掠れ、傷口から血が流れた。

再び刃が銀時に迫る。上段から紅桜式式が、銀時の頭目掛けて振り下ろされる。銀時は軽く舌打ちしながら、木刀を頭上に構えて防御する。

黒夜叉の一撃が、木刀に激突した。その瞬間、銀時の体に衝撃が走った。まるで、巨大隕石の落下を受け止めたような重量感と衝撃。

黒夜叉の重い一撃に、銀時の両足は床にめりこんだ。

「うおおおおお!!」

雄叫びを上げ、銀時は紅桜式式を弾いて、黒夜叉の腹目掛けて突きを繰り出す。

だが銀時の突きは、上から振り下ろされた紅桜式式によって防がれた。

黒夜叉が一步踏み出し、鋭い横薙ぎの一撃を放つ。激痛で僅かに動きが鈍ってる体で防御は間に合わず、銀時は後ろへ跳んでギリギリで避けた。着物の腹の辺りが斬られる。

闘いの様子が辛うじて見えているフェイトは、顔色を悪くした。

「銀時が押されてる……!!」

「えっ!?!」

新八達は、驚いた顔でフェイトを見た。

「銀さんが押されてるって……どうして！？力は互角のはずじゃ……！」

「確かに力は互角だけど、その力にまだ慣れてない銀時の方が、体に掛かる負担が大きいんだ……！」

フェイトは表情を険しくした。

ほぼ防戦一方となり、銀時の体に、黒夜叉から付けられる傷が増えていく。着物はあちこち斬られ、破れてボロボロになっている。体の方も、最初は浅い傷だったが、徐々に受ける傷が深くなっていく。銀時は一旦黒夜叉から離れる。だが同時に黒夜叉も動き、二人の距離は離れない。

黒夜叉が、神速で紅桜式式の突きを放った。

直後、ドスツと何かが刺さる音と共に、二人の動きが止まった。

フェイト達は、銀時が紅桜式式の突きに、やられたのかと思った。

だが、

「ごはっ！」

違った。

攻撃を受けたのは、黒夜叉。その腹には、銀時の木刀がめりこんでいた。

紅桜式式の突きをかわし、カウンターの要領で、黒夜叉の腹に木刀の突きを放ったのだ。

「ぐ……！」

歯を食いしばりながら、黒夜叉は紅桜式式を振る。

刃は銀時の左肩を斬りつけた。傷口から鮮血が噴き出し、床に飛び散った。

今、両者の力は拮抗していた。

残り時間、三分。

何故だ？

刃を交えながら、黒夜叉は疑問に思う。

何故コイツは闘い続ける？

コイツが潜在能力を全解放できる時間は、おそらく五分。俺も最初はそうだった。

しかも体に無理をさせているから、痛みには耐えながら動かなければいけない。

ハッキリ言つて、潜在能力を全解放で五分間ずっと闘つのは自殺行為だ。相手が自分と同等の実力なら尚更だ。

だがコイツは潜在能力全解放状態で、俺と二分以上闘っている。

二人の刃がぶつかり合い、火花が散り、甲高い音が響く。

何がお前を動かす？

何がお前を後押ししている？

ソレが俺の探してる答なのか？

お前を倒せば、ソレが解るのか？

「ぬがアアアアア！」

黒夜叉が雄叫びを上げ、右手の紅桜式を振る。

「おおおおおお！」

銀時も両手で木刀を振るう。

二本の剣がぶつかり、二人を中心に強い衝撃が生まれた。

黒夜叉の右腕が痺れ、銀時の両腕は所々肉が切れ、血が吹き出す。

銀時の肉体に限界が迫る。

「銀時！！！」

フェイトが叫ぶ。

銀時と黒夜叉の動きが止まった。

残り時間、二分。

「わからねエ……」

黒夜叉が口を開いた。

「何でお前は、そこまで闘える？力に慣れていないお前が……力の

反動で体が崩壊していくお前が……何で俺と互角に闘える？何で倒れない？」

時間が経つにつれて、銀時の体は傷つき、崩壊していく。だが銀時は止まらない。倒れない。

肩で息をしながら、銀時が言う。

「……闘うさ。体ボロボロになろうが、手足ちぎれようが、ためーの魂がある限り、俺ア闘い続ける」

鋭い目が、黑夜叉を射抜くように見据える。

「俺の後ろに、大事なモンがある限り……俺を支えてくれてる奴らがいる限り、俺ア倒れねエよ」

揺るがぬ決意と闘志。黑夜叉は、銀時の目に光が走ったような気がした。

「黑夜叉……テメーの剣は何の為にある？」

銀時が黑夜叉に聞いた。

突然問われた黑夜叉は、答える事ができなかった。

「テメーの剣には何にもねエ。そんな軽い剣じゃ、俺は斬れねエよ」

銀時は木刀を水平に構える。

「……ボロボロの体でよく言っぜ」

黑夜叉は短く笑うと、銀時と同じく紅桜式を水平に構えた。

「こいつでシメーだ！」

これが最後の一撃になる。

二人の目が、カツと見開かれた。

「おおおおおおお！！！」

二人の雄叫びが重なり、渾身の突きが同時に放たれた。

刃の先が衝突する。直後、紅桜式式の黒い刀身にヒビが入った。ヒビは刀身全体に広がり、次の瞬間、紅桜式式はガラスのように粉々に砕け散った。細かく砕けた紅桜式式の破片は、小さな音を立てながら次々と床に落ちていく。

紅桜式式を突き破った木刀は、そのまま黑夜叉の顔目掛けて迫る。

黑夜叉は目を見開いて、己に迫る木刀を見続ける。

黑夜叉の額に　木刀の突きが決まった。
突きを受けた黑夜叉は、目にも止まらぬ速さで吹き飛び、後方にある石の壁を突き破って隣の部屋へ突っ込んだ。
銀時は、息を荒くして壁に出来た穴を見つめる。
フェイト達も、驚愕の表情で壁の穴を見つめている。
砂埃が立ち込める隣の部屋で、黑夜叉は大の字になって倒れていた。
「……………」
顔を動かして右手を見ると、紅桜式はなくなっていた。
「あゝあ……………」
黑夜叉は小さく溜め息をついた。
「わりー、クリス…………俺、負けちゃった」

*

死闘を終えて、銀時は電流のスイッチを切った。
「っ……………」
瞬間、ドツと疲労感と痛みに襲われ、銀時は膝をついた。

「銀時！」
「銀さん！」

フェイト達が銀時に駆け寄った。

「フェイト…………わりーが…………服の中にしまった…………青い薬、取ってくんねーか…………？」

「青い薬だね？わかった」

言われてフェイトは、銀時の着物の中に手を入れて薬を探す。

着物の中で小さなビンのような物を掴み、手を出した。小さな透明のビンで、中には青い液体が入っている。

「これでいいの？」

「ああ」

銀時は頷いて答えた。

フェイトはビンの蓋を外すと、薬を銀時に飲ませた。

飲み終わると、体中の傷が治癒していき、疲労感も消えていった。

「凄い……！」

新八が呟いた。

疲れが全快し、傷も完治して銀時は立ち上がった。

「スゲーな。マジで治っちまったよ」

治った自分の体を見て、銀時は驚いた。

「銀時、この薬どうしたの？」

フェイトが薬ビンを片手に尋ねた。

「スカリエツティに貰った」

「スカリエツティに！？」

「ドクターに！？」

フェイトとドゥーエが同時に驚いた。

「あの男、いつの間にかそんな薬を……」

ラインフォースも意外そうな顔をしている。

「んな事よりよ……」

銀時は、視線を壁に出来た穴に向けた。

全員も、ハツとなって壁の穴を見た。

「黒夜叉！！」

ドゥーエは慌てて穴に向かって走り出した。

穴を通って隣の部屋に入り、床に倒れてる黒夜叉を見つけた。

「黒夜叉！！」

慌ててドゥーエは、黒夜叉に寄り添った。

「黒夜叉！大丈夫ですか？」

「ドゥーエか……ああ……まあ、頭がちっとクラクラ、ガンガンするがな」

頭を押さえながら、黒夜叉は答えた。

すると、銀時達もやってきた。

黒夜叉は顔を銀時に向けた。

「……随分と重い一撃だったぜ」

言って黒夜叉は短く笑った。

「何となく、わかったような気がするぜ……お前の強さが……」

「そうかい。で、どうよ？探してた答は見つかったのか？」

「……………さあな……………」

黒夜叉は顔をそらして、溜め息をついた。

「銀さん、そろそろ先に進んだ方が……………」

少し小さめの声で、新八が言った。

黒夜叉は、目だけ動かして銀時達を見た。

「行け。こんなトコで立ち止まってる暇なんて、ねーだろ」

「へっ。オメーに言われなくても行くさ」

笑って銀時は答えた。

「ドゥーエ。貴女はどうします？」

リインフォースが聞いた。

「……………すみません。私は、ここで黒夜叉の手当てを……………」

「わかりました」

リインフォースは頷いて答えた。

「それじゃあ、行くか」

「はい！」

銀時とフェイト、新八とリインフォースは部屋を出て、上へと続く階段へ向かった。

「黒夜叉」

銀時達が行った後、ドゥーエは黒夜叉に声をかけた。

「お願いがあります」

「お願い？」

黒夜叉は片眉を上げた。

ドゥーエの顔が、赤く染まっっていく。

「私を……………貴方の傍に居させてください」

黒夜叉は目を見開いた。

ドゥーエは、真っ直ぐに黒夜叉の顔を見つめる。

「何で……………？」

「貴方が好きだからです」

迷わずドゥーエは答えた。

黒夜叉は更に驚いた。

同時に黒夜叉は焦った。

一体こんな時、どうすればいいんだ？くそっ！銀時に聞いておくべきだった！なんかアイツの周り綺麗な姉ちゃんいっぱい居たし。

「……俺なんかで、いいのか？」

迷い、戸惑いながら、黒夜叉はドゥーエに聞いた。

「貴方の傍に居たいんです」

ドゥーエの想いは本物のようだ。

自分の事を想っている女性を見つめて、黒夜叉はある想いを抱き、ある決意を誓う。同時に腕を伸ばし、ドゥーエを掴んで抱き寄せた。

「く、黒夜叉!?!」

ドゥーエは顔を真っ赤にさせて動揺する。

「ドゥーエ」

ドゥーエを抱いたまま、黒夜叉が言う。

「俺はこれから、お前を護るために剣を振るっ」

その言葉を聞いて、ドゥーエは目を見開いた。驚きの表情は、すぐに嬉しさで笑顔に変わる。

「黒夜叉!」

ドゥーエは、力いっぱい黒夜叉を抱いた。

黒夜叉もドゥーエを離さないように、力強く抱いた。

ただ、体が傷ついてる黒夜叉は、ドゥーエに抱きしめられて、ちょっと痛がった。

*

城の最上階。

巨大な装置の前に、クリスが立っている。一言も喋らず、ただジッと目の前にある装置を見つめていた。

すると、後ろから階段を上ってくる音が聞こえてきた。クリスは振

り返らず、音を聞いている。一人ではない。複数の人間が上ってくる。

そして、その複数の人間が階段を上り終えて、部屋に入ってきた。

「クリスー!!」

後ろから名を呼ばれ、部屋に声が響いた。

クリスは、ゆっくりと後ろを振り返った。

階段の前にいるのは、はやて達だった。

そして、はやて達が来て間もなく、なのは達と神楽達も別の階段から上がって部屋に入ってきた。

「なのはちゃん!みんな!」

みんなに気付いて、はやてが声を上げた。

「はやてちゃん!銀さんは!?!」

「銀ちゃんは、下で黒夜叉と闘ってる」

なのはの問いに、はやては答えた。

クリスは顔をしかめた。

ゾーマの魔力は感じる。つまり連中はゾーマを殺さずに倒して、ここまで来たのか。

しかし高杉はどうした?彼も敗れたのか?彼は魔導師ではないから、魔力を感じて確かめる事ができない。

黒夜叉と白夜叉。この闘いは短時間で終わるだろう。

「クリス」

クリスが考え込んでいると、はやてが声をかけた。

「残りは貴方だけや」

「それがどうした?僕が一人でキミ達が大勢いるから、僕の負けだと言いたいのかい?」

クリスの余裕の態度は崩れない。

シグナムとヴィータが、テバイスを構える。

「主はやて。やはり戦闘は避けられないようです」

「速攻で潰すぞ!!!」

二人同時に飛び出す。

カートリッジロードをして、シグナムのレヴアンティンが炎に包まれる。

ヴィータもカートリッジをする。グラーファイゼンに巨大な噴射推進機構が備わり、もう片方の面にはドリル状の先端が備わった。

「紫電一閃!!」

「ツエアシユテールングスハンマー!!」

左右から、炎の刃とドリル先端が付いたハンマーが、クリスに迫る。当たる直前、クリスが両腕を振って、何かが碎ける音がした。碎けたのは、シグナムとヴィータのデバイスだった。

「なっ……!!?」

シグナムとヴィータは、驚愕の表情になる。目の前で起こった事が信じられず、自らの碎けたデバイスを見た。

次の瞬間、二人の体を何かが貫いた。真っ赤な血で染まって、二人の体を貫いてるのは、クリスの腕だった。真っ赤な腕から血が、ポタツポタツと床に落ちる。

「う………はあ!!」

シグナムとヴィータは、共に口から血を吐いた。

「シグナム!!」

「ヴィータちゃん!!」

はやてとなのはが叫んだ。

「どうせなら、全員一斉にかかってくるといい」

腕を抜いて、シグナムとヴィータが床に倒れた。

出血で床に血の池が広がっていく。

「一人で僕と、まともな闘いができる者などいないだろう?」

第三十二訓：時々自分は何の為に生きているのか考える時がある（後書き）

クリス・ロード

その力、魔王の如く

はやて「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『銀魂と絆 序
の幕』。テイクオフ」

第三十三訓：銀魂と絆 序の幕（前書き）

自分達の世界を護るため、はやて達はクリスに挑む！

そして全てに決着をつけるため、坂田銀時、決戦の場へ見参！！

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第三十三訓：銀魂と絆 序の幕

シグナムはうつすらと目を開けた。目の前に赤い池が見える。それが自分の腹に空いてる穴から流れ出ている血だと、すぐにわかった。出血と共に、カも体から抜けていく感じた。

血の池の向こうに、ヴィータが倒れているのが見える。ヴィータの所にも血の池が広がっている。

「シグナム！！」

「ヴィータちゃん！！」

はやてとなのはが聞こえる。

シグナムは必死に意識を繋ぎ止める。

「まだ殺しはしない」

倒れている二人を通り過ぎて、クリスは足を止めた。

「絶望と恐怖、後悔を味わわせる。死は一瞬だ。それではダメだ。僕に盾突いた事を後悔させ、死んだ後も拭えぬ恐怖と絶望を抱かせる。それが『真の敗北』だ」

口元を歪めて笑みを作った。

「貴様……！！」

トーレが怒鳴る。

同時に隣に立っているセツテが、クリス目掛けてブーメランブレードを放つ。クリスは横に跳んで、高速で飛来してくるブーメランブレードを避ける。避けられたブーメランブレードは、セツテのIS『スローターアームズ』で軌道を変えて、再びクリスへ向かって飛ぶ。

クリスはブーメランブレードを一瞥すると、反対方向から魔力を感じて、そちらを見る。そこには、レイジングハートを構えてるなのはがいた。

「デイバインバスター！！」

レイジングハートから、桜色の閃光が放たれる。

左右からブーメランプレードとディバインバスターに挟まれ、クリスは足を止めた。両腕を上げて、手の平から緑色の閃光を放つ。閃光はブーメランプレードを弾き、ディバインバスターを掻き消した。
「く……！」

なのはは横に跳んで、間一髪で緑色の閃光を避けた。

セツテは悔しそうな顔で、ブーメランプレードを戻した。

「ノーヴェー！ギン姉！」

「おおっ！」

「いくわよ！」

スバル、ノーヴェ、ギンガの三人が、空中に道を作って走り出す。

道はクリスの周囲を囲むように作られ、三人はバラバラにその上を走り回る。

「無駄な事だ」

三人の動きを目で追いながら、クリスが呟いた。

ウイングロードの上をマツハキャリバーで走りながら、スバルはクリスを見た。

よし。クリスの注意は私達に向いてる。

（ティア！準備はいい？）

（ウエンディもいいか？）

スバルとノーヴェが、ティアナとウエンディに念話を送った。

（ええ！準備万端よ！）

（いつでもいけるっすよ！）

念話を受けて、ティアナとウエンディは答えた。

二人は別々に離れた所から、クリスに狙いを定めていた。

スバル達がクリスの注意を引き、ティアナとウエンディが、挟み打ちの形でクリスを撃ち抜く。それがスバル達の作戦。

（シュート！！）

ティアナのクロスファイアシュートと、ウエンディの魔力弾が同時に発射された。

左右から複数の魔力弾が、クリスに迫る。クリスの目はスバル達に

向いたままだ。このまま直撃するかと思った。

その時、クリスが笑みを浮かべた。

「言っただろ。無駄な事だと」

スバル達から視線を外さず、クリスは両腕を魔力弾に向ける。

長方形の透明な壁が手の前に出現し、複数の魔力弾を受け止めた。

ティアナは驚いたが、クリスの魔法はこれで終わりではなかった。

クリスの出した透明な壁は、受け止めた魔力弾を二人に向けて跳ね返した。ティアナとウエンディは避けようとしたが、スピードが加速していて回避が間に合わない。しかもクリスの魔力も加わって、

魔力弾が大きくなっている。

当たる。

二人が、そう思った時だった。

「ティアナアアア！」

「ウエンディイイ！」

叫び声と共に、人影が二人の前に現れた。

人影は二人を庇い、背中に魔力弾を受ける。魔力弾が爆発して、砂埃が起こった。

砂埃が立ち込める中、ティアナとウエンディは顔を上げて、自分を助けてくれた人の顔を見る。

「……いてて……ガラにもねエ事しちまったぜエ……」

ティアナの目に入ったのは、頭から血を流して笑みを浮かべてる沖田だった。

「沖田さん！！」

ティアナは涙目で叫んだ。

「ったく……手間のかかる妹だぜ……」

ウエンディを庇ったノーヴェエが、笑みを浮かべて言った。

「ノーヴェエ！！」

ウエンディも涙を流して叫ぶ。

沖田は背中に酷い火傷を負い、ノーヴェエは背中の機械の部分が露出して、電気がバチバチ鳴っている。

沖田とノーヴェは、力無くティアナとウエンディの腕の中に倒れた。
「沖田さん！！しっかりしてください！沖田さん！！」

「ノーヴェ！起きるっス、ノーヴェ！！」

ティアナとウエンディが、必死に二人に呼びかける。

「総悟オオオオ！！」

近藤が叫ぶ。

「貴様アアア！！」

トーレが怒鳴りながら、インパルスブレードを出してクリスに向かって駆ける。

「オオオオオオ！！」

ザフィーラが雄叫びを上げ、オットーが両手をクリスに向ける。

直後、白と緑の線が床から突き出て、クリスの動きを封じるように困んだ。

「チエーンバインド！！」

続いてユーノとアルフが、クリスをチエーンバインドで縛った。

そして、クリスの周りを走っていたギンガも動く。

「オオオオオオ！！」

「ハアアアア！！」

右斜め上からトーレのインパルスブレードが、左斜め上からギンガのリボルバーナックルが放たれる。

「小賢しい！！」

クリスは魔力を解放して、体から衝撃波を出して線とバインドを粉々に砕く。

両手を上に上げて、トーレとギンガに向けて緑色の閃光を放つ。二人の姿は、閃光の中に飲み込まれた。

「ギン姉エエ！！」

「トーレエエ！！」

スバルとチンクが、同時に叫んだ。

閃光が消えて、二人の姿が見えてきた。全身がボロボロになり、黒い煙を立てながら床に落ちた。

スバルは、傷ついたギンガの姿を見つめた。
すると、スバルの瞳の色が、緑色から黄色へ変わった。

「うあああああ！！！」

ギンガの姿を見て戦闘機人に目覚めたスバルは、激しく泣き叫び、怒りと共にクリスに向かっていく。

「スバル！！！」

沖田を抱いたまま、ティアナが叫ぶ。

クリスがスバルに体を向ける。

「わあああああ！！！」

怒りと気迫と共に、スバルは右拳を振りかぶり、クリスに殴りかかる。

「フツ！」

クリスも魔力で強化させた拳を振るう。

両者の拳が激突して、次の瞬間、スバルの拳が壊された。指は変な方向に曲がり、手の甲から血が噴き出る。

スバルは後方へ飛ばされ、壁に激突する。口から血を吐き、ズルズルと力無く床に倒れた。

「スバルウウウ！！！」

ティアナの叫び声が、部屋に響いた。

スバルを倒したクリスは、手の平から四つの緑色の閃光を放つ。閃光は、ザフィーラ、オットー、アルフ、ユーノに迫る。

四人が反応する間もなく、閃光が直撃して爆発した。爆発で煙が立ち込めて、中から閃光を受けてポロポロになった四人が出てきて、床に倒れた。

「ユーノ君！アルフさん！」

「ザフィーラ！」

「オットー！」

なのは、はやて、デイドが叫んだ。

「どうした？僕を止めるんじゃないのか？」

クリスの声を聞いて、なのはとディエチが同時に構えた。

レイジングハートに魔力が溜まり、イノームスカノンにもエネルギーが溜まる。

「スターライトブレイカー!!!!」

「発射!!!!」

二つの閃光が放たれた。

閃光は、真っ直ぐにクリスへ迫る。クリスは両手の間に魔力を溜め、二つの閃光へ向かって両手を突き出して、巨大な緑色の閃光を放った。

緑色の閃光は、二つの閃光を掻き消して、なのはとデイエチに迫る。閃光に飲み込まれる直前、なのはは悔しさで、目から一筋の涙を流した。

閃光は二人の姿を飲み込み、壁を突き破って、大量の砂埃を巻き起こす。

閃光が消えて、砂埃の中から、バタツと人が倒れる音がした。それがなのはとデイエチが倒れた音だと、すぐにわかった。

「あ……ああ……!!!!」

次々と倒れていく仲間達を見て、シャマルは涙目になって体を震わせる。

「シャマル!!!」

そんなシャマルに、はやてが声をかけた。

シャマルは、はやてに顔を向けた。

「私とリインでクリスを食い止める!その間にシャマルは、みんなの担当てを!!!」

「は……はい!」

シャマルは頷いて答えた。

はやてはクリスに向き直り、隣にリインがやってくる。

「いくで、リイン!!!」

「はいです!はやてちゃん!!!」

リインは、はやての目の前に移動した。

「ユニゾン・イン!!!」

二人の声が重なり、白い光に包まれる。

クリスは、僅かに目を細めた。

やがて光が収まり、ユニゾンしたはやてが姿を現した。ユニゾンによつて、髪の色が少し薄くなっている。

はやては、目の前に巨大な白い魔法陣を展開させる。

これからははやてが使う魔法は、超長距離魔法なのだが、クリスを止めるにはこれしかない。クリスの近くに倒れていた者達は、ティアナやウエンディ、セイン達が離れた所まで運んでいた。魔法陣に魔力の塊が現れる。

「フリースヴェルグ!!!」

はやての声を合図に、巨大な白い閃光が、クリスに向かって放たれる。

クリスは、右手を前に出した。

「握り潰せ」

右手が黒くなり、クリスの前に巨大な黒い魔法陣が展開される。すると、魔法陣から巨大な黒い手が現れ、重い音を立てて、白い閃光を受け止めた。

「なっ……!!?」

はやては、目を見開いて驚愕した。

次の瞬間、風船が割れるような音を立てて、白い閃光は黒い手に握り潰された。

「そ……そんな……」

自らの魔法が破られ、はやては愕然となる。

クリスは緑色の球体を二つ、手の平の上に出して、はやてとシャマルに向かって放つ。

「!!!」

気付いたときには遅く、球体は二人に直撃して爆発した。

強烈なダメージを受けて、はやてはユニゾンが解けてしまう。リインが外に出て、三人は糸が切れた操り人形のように、力無く床に倒れた。

はやて達が床に倒れたのを確認して、クリスは満足そうに笑みを浮かべる。その時、上から気配を感じて顔を上げた。

クリスの頭上に、クナイとナイフを構えてる月詠とチンクがいた。

「射てエエエエエー!!」

月詠の声と同時に、クナイとナイフの雨がクナイに降り注ぐ。

クリスは障壁を張って防御する。チンクが指を鳴らすと、チンクが放ったナイフが爆発した。

煙が舞い上がって、すぐに中からクナイが放たれた。クナイは、月詠とチンクの手足に刺さる。

「ぐ……!!」

痛みに顔を歪めながら、二人は床に落ちた。

直後、クリスの背後の床から、土方、近藤、神楽、エリオ、セツテ、デイド、セインが現れる。セインのデーパーダイバーで、床の中を移動してクリスの背後に出たのだ。

全員が一斉に攻撃しようとした時、

「無駄だ!!」

クリスが後ろに振り返り、右手を出して緑色の閃光を放った。

放たれた閃光は、土方達を飲み込んだ。

閃光が消えて、土方達は壁に叩きつけられた。

「……なのはさん……エリオ君……みんな……!!」

キャロは何もできずに、倒れた仲間達を見つめた。肩に乗ってるフリードも、ガタガタ体が震えていた

隣にいるルーテシアも、声も出せずに震えている。

まるで、悪夢を見ているみたいだった。傷つき、倒れていく仲間。

自分は何もできずに、震えて見てるだけ。

全員、致命傷だ。

起き上がる者は、誰もいない。

「所詮、出来損ないは出来損ないだな」

見下すような目で、倒れているなのは達を見回した。

ティアナは、悔しさで涙を流し、恐怖で体が震えて動けない。ウエ

ンデイも同じ状態だった。

「ふふ。絶望、恐怖、後悔。この三つをよく味わいたまえ」
クリスは目を閉じて、薄く笑った。

その時、背後に人の気配を感じて振り返った。

そこには、右手とりボルバーナツクルが砕けて、バリアジャケットも体もボロボロのスバルが立っていた。右手は機械が露出してバチバチ鳴り、頭から血を流しながらも、真っ直ぐにクリスを見据えている。

「スバル!!」

ティアナが叫び、クリスは睨むようにスバルを見据える。

「……声が聞こえるかい？キミは、もう終わったんだ。恐怖と絶望を抱いて、おとなしく寝ている」

クリスの声には、僅かな苛立ちが混ざっていた。

スバルの目。目が死んでいない。絶望の色が、全くない。

スバルが口を開いた。

「……怖く……ないよ……」

「……何？」

クリスは目を細めた。

「貴方の事……全然、恐くない……だつて……銀さんが、貴方よりもずっと強いから……!」

スバルの言葉を聞いて、クリスは顔をしかめた。

「……白夜又は来ない。黑夜叉に始末されてるはずだ」

「私は信じるよ……」

絶望的な状況だというのに、スバルは笑っていた。

その事が、クリスの苛立ちを増させる。

「銀さんは……どんなにボロボロになっても、倒れない……どんな絶望的な状況でも、決して諦めない……」

スバルは、傷だらけの体を動かそうとする。

「泣きながらでもいい……ボロボロでみっともなくともなくても……諦めないで、進み続ける……私は、銀さんを信じて希望の道を進む」

そうやってスバルは、力強い一步を踏み出した。

クリスの目が、カツと見開かれる。右手を伸ばして、スバルの首を掴んだ。

「……そんなに”死”がお望みなら……今すぐ消してやろう」

クリスの顔は、苛立ちで歪んでいた。

スバルの目は、希望の光を持ったままだ。クリスが望んでいたのは、こんな目ではない。

左手に魔力を溜めて、スバルに放とうとした時、後ろから左腕を斬りつけられる。

「何っ!？」

クリスは後ろを振り返った。

そこにいたのは、肩で息をしながら吐血をして、腹に穴を開けたシグナムだった。手には、刀身が砕けたレヴァンティンが握られている。

シグナムの姿を見て、クリスは驚いた。

この女……どこにこんな力が？

クリスはシグナムを睨む。

シグナムは、顔を僅かに上げて、射抜くような鋭い目でクリスを見据える。

「……私達は……最後まで、諦めない……必ず護り通す……」

「貴様アアアア!！」

クリスが声を荒げて、左手を伸ばしてシグナムの首を掴んだ。

「二人一緒に、あの世にいくがいい!！」

首を掴んでる手に、魔力を溜める。

「やめてエエエエ!！」

悲鳴のようなティアナの叫び声が、部屋に響渡る。

その時、

「離せ」

クリスの背後から、声が聞こえた。

声を聞いて、クリスの動きが止まる。ゆっくりと後ろを振り返る。

牙を剥いた獣のような鋭い目をした銀髪の侍が、そこにいた。

「そいつらを……俺の大事なモノを離しやがれ」

「し……白夜叉……!!」

銀髪の侍、銀時の姿を見てクリスは驚愕した。

直後、銀時は下から木刀が振り上げ、クリスの顎を打って吹き飛ばす。木刀の一撃を受けたクリスは、離れた所にある巨大な装置の前まで吹っ飛んだ。

クリスの手から、スバルとシグナムが離れ、銀時が受け止めた。

「ぎ……銀時」

銀時の腕に抱かれてるシグナムが、小さな声で呟いた。

同じく銀時に抱かれてるスバルは、すでに気を失っている。

「ぎ……銀さん！」

「銀時……!!」

ティアナやウエンディ達も、銀時の名を叫んだ。

「みんな!!」

少し遅れて、フェイト達も部屋に到着した。

「フェイトさん！」

キャラが涙目で叫んだ。

フェイトは部屋を見回して、状況を把握する。

「リインフォース！新八さん！倒れてる皆を離れた場所に集めて、治療をお願い！」

「わかりました！」

「はい！」

フェイトに伝えると、二人は素早く動いた。

「ティアナとウエンディ、キャラとルーテシアも手伝って!!」

「はい！」

四人は新八達と協力して、倒れている仲間を離れた所まで運ぶ。

「ウエンディ」

スバルとシグナムを抱いている銀時が、ウエンディの前にやってきた。

「二人も頼む」

「わかったっす！」

ウエンディは、銀時から二人を受け取った。背を向けて、銀時は歩き出す。

「……後は俺達に任せな」

銀時が足を止めると、フェイトが隣にやってきた。

装置の前に倒れたクリスが、顎を押さえながら立ち上がった。

この僕がダメージを受けた？この力は……まさか……。

「潜在能力解放……！」

ギリツと歯を食いしばって、目を鋭くして銀時を睨む。

「クリス」

銀時が、木刀をクリスに向ける。

「ここで終いにしよーや。テメーの憎しみも……俺達の闘いも……かつての”白夜叉”の眼でクリスを見据える。

「オーバードライブ……真ソニックフォーム！」

隣にいるフェイトのバリアジャケットが、金色に輝く。

光が納まり、レオタードに似た、黒く薄いバリアジャケット姿のフェイトが現れた。

手には、二つの剣を合わせた巨大な魔力刃を備えた、バルディッシュ・アサルト『ライオットザンバー』が握られている。

銀時も電流を強くして、潜在能力を全解放状態となる。

クリスは二人の姿を見つめて、口元を歪めた。

「……いいだろう。終わりにしよう」

クリスは、全身に魔力を漲らせる。

「あああああああ！！」

気合と共に、魔力が上がっていく。

魔力が上がるにつれて、体が黒く変色して、『戦闘形態』へと変貌していくクリス。

「ハアアアアアア！！白夜叉アア……決着^{ケリ}をつけてやるウ……！！！！」

今までのクリスとは、まるで別人。禍々しく凄まじい魔力と殺気が、

放たれる。

銀時とフェイトは、クリスの強大な力に怯むことなく、武器を構えて一歩踏み出す。

「いくぜ、フェイト」

「はい！」

次の瞬間、二人は同時に駆け出した。

銀時の最後の闘いが、始まった。

第三十三訓：銀魂と絆 序の幕（後書き）

ついに宿敵・クリスとの決着をつける時が来た

銀時、フェイト 対 クリス・ロード

最後の死闘開始！！

フェイト「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。 『銀魂と絆
二の幕』。 テイクオフ」

第三十四訓：銀魂と絆 二の幕（前書き）

世界を滅ぼさんとする男、クリス・ロード

銀時とフェイトは、クリスを倒して野望を阻止できるのか!?

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ!」

第三十四訓：銀魂と絆 二の幕

二階の一室では、桂と高杉の攻防が繰り広げていた。互いの体には、刃で出来た多くの切り傷がある。だが、どれも致命傷にならない軽いものだ。

間合いを広げて、動きを止めた。両者は少し息が乱れて、肩で呼吸をしている。

桂が攻撃を仕掛けるタイミングを見計らっていると、体が急に重くなる感覚に襲われた。

「な……！？」

突然、上の階から重く禍々しいプレッシャーが降り注いだ。

「何だこれは！？」

思わず桂は、顔を上げて天井を見る。

すると、高杉が笑い出した。

「ククク。どうやらクリスが戦闘形態になったみてエだな」

「戦闘形態だと？」

桂は怪訝な顔をする。

「もう誰にも止められねエぜ」

高杉は口元を歪めて、不気味な笑みを浮かべた。

*

「クリスの奴……戦闘形態になりやがったな」

天井を見上げながら、黒夜叉が呟いた。

隣を見ると、ドゥーエが少し顔を悪くして、汗を流している。

「大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫です」

黒夜叉に心配かけまいと、ドゥーエは笑って答えた。

「この魔力は……クリスの……？」

「俺ア魔力は感じねエが、この禍々しいプレッシャーは紛れもなくクリスのだ」

「……銀時達は、勝てるの……？」

不安げにドゥーエが尋ねた。

頭をぽりぽりと掻いてから、黑夜叉は答えた。

「わかんねエ……」

*

リインフォース達は、離れた所になのは達を運び、治癒魔法で手当てをしている。

「銀さん……！フェイトちゃん……！」

新八は祈るような気持ちで、二人の後ろ姿を見守った。

銀時とフェイトの前で、クリスは変化していく。全身が黒く変色して、長い金髪は燃えるような赤色に変わった。

「ハアアアアア！！白夜叉アア……！決着をつけてやるウ……！！！」

『戦闘形態』へと姿を変えたクリスが、銀時達を睨みながら声を上げる。

銀時とフェイトは、クリスから放たれる鋭い殺気、禍々しい魔力、重い威圧感に耐えながら武器を構えて一歩踏み出した。

「いくぜ、フェイト」

「はい！」

次の瞬間、二人はクリスに向かって駆け出す。

「おおおおおお！！！」

銀時はクリスに向けて、水平に構えた木刀の突きを放つ。

クリスは、右手で木刀を掴んで受け止める。その時、銀時の隣にいたはずのフェイトがいない事に気付いた。

クリスがフェイトがいない事に気付いたのと、フェイトがクリスの背後に回ったのは同時だった。フェイトは、上段からバルディッシ

ユを振り下ろす。気配に気付いたクリスは、素早く振り返って左手を突き出し、黒い障壁を出してバルディッシュの刃を受け止める。その瞬間、刃と障壁の間で火花が散った。

クリスは、木刀を掴んでる右手を振って、銀時をフェイトに向けて放り投げる。フェイトは高速で避けて、銀時は目の前に迫る壁を蹴って、クリスへ向かって跳ぶ。

同時にクリスも床を蹴って、銀時に向かっていった。腕を振りかぶって、銀時の左頬に右拳を叩き込んだ。

銀時は口から血を吐きながらも痛みと衝撃に耐えて、床に足をつけ、倒れないように踏ん張る。クリスを睨みつけると、木刀を振るって、クリスの顔を殴り返した。

直後、クリスの前にフェイトが現れた。バルディッシュを振り下ろして、金色の刃がクリスの体を斬りつける。

右胸部の辺りを縦に斬られ、クリスは吠えた。

「虫けらがアアアア！調子に乗るなアアアア！」
口を大きく開き、黒い閃光を放つ。

銀時とフェイトは、同時に剣を横薙ぎに振りぬいて、閃光を切り裂いた。

「ぬう！」

閃光を切り裂かれ、クリスは顔を歪める。

「うおおおおお！！！」

「はあああああ！！！」

二人はクリスに向けて、剣を振るう。

クリスは右手で木刀を、左手でバルディッシュを弾く。二人は攻撃の手を休めず、木刀とバルディッシュを振り続ける。クリスも両腕で攻撃を防ぐ。途中で手を開き、二人に向けて黒い閃光を放つ。

二人は紙一重で閃光をかわして、その隙にクリスは後ろへ下がって距離をとりながら両手を頭上に掲げた。両手の間に、黒く丸い魔力の塊を生成した。

「龍！」

両手を振り下ろし、黒い魔力の塊を銀時とフェイトに向けて投げる。塊は、巨大な黒い龍へと姿を変えて、城全体が揺れるような雄叫びを上げながら、銀時とフェイトに迫る。スカリエッツィのアジトでの戦いで、銀時を倒した攻撃魔法だ。

銀時は、怯まず龍に向かって走り出す。龍が銀時を飲み込もうと大きな口を開いた瞬間、銀時は下から木刀を振り上げ、強烈な一撃を龍の顎に叩きつける。顎に一撃を受けて、龍の顔は上に向いた。その時、一つの影が龍の目の前に現れた。バルディッシュを上段に構えた、フェイトだった。

「はあっ！！」

勢いよくバルディッシュを振り下ろし、龍の頭を二つに割った。瞬間、龍の体が段々薄くなり、消滅した。龍が消えて、銀時は再びクリスに向かって走る。

銀時が木刀を振りぬき、クリスが拳を放ち、ぶつかり合って周りに衝撃が広がる。木刀の連撃と拳のラッシュがぶつかり合う。

クリスは、上から振り下ろされる木刀を左手で弾き、

「どおおおおお！！！」

同時に右手の掌底を銀時の腹に叩き込む。

「ぶっ！！！」

銀時は苦痛に顔を歪め、腹を押さえながら後方へ吹き飛ばす。

クリスは、そのまま突き出した手の平から黒い閃光を放って追撃する。銀時は自身に迫る閃光を見ると、横薙ぎに木刀を振りぬき、重い音を立てて閃光を弾いた。閃光は壁を破壊して、外へ突き出た。クリスが銀時を睨んでいると、フェイトがバルディッシュを構えて背後に回り込んだ。

高速でバルディッシュを振って、クリスの背中を斬りつけようとする。だが、クリスは振り返りながら後ろ回し蹴りを放ち、バルディッシュを蹴り上げる。そして無防備となったフェイトの腹に、拳を叩き込んだ。

「う……か……はあ……！！！」

フェイトは腹を押さえながら吐血して、床に両膝をついてうずくまった。

クリスは片足を上げ、うずくまってるフェイトの頭目掛けて、踵落としを振り下ろす。踵落としがフェイトの頭に当たる直前、クリスはグイッと後ろに引つ張られる。踵落としの軌道がズれて、フェイトの前の地面を粉々に砕いた。

クリスは、キッと目を鋭くしながら後ろを見る。後ろには、クリスの服を掴んでる銀時がいた。

「うおおおおお!!」

気合いと共に木刀を振りぬぎ、クリスの顔に重い一撃を叩き込む。

休む間もなく、銀時は木刀の連撃をクリスに繰り返す。顔、腕、腹、足、あらゆる場所に打撃の雨を浴びせる。

連撃を受け続ける中、クリスの赤い眼が銀時を睨み、

「アッ!」

声を上げ、腕を振りかぶって右拳を銀時の顔に叩き込む。

銀時の動きが止まり、連撃も止んだ。

「アッ!!」

続いてクリスは、銀時の顔に蹴りを放つ。

重い打撃音が響き、銀時の体がフラつくと、クリスは右足を上げて踵落としの体勢をとる。

「アアアアアア!!」

叫びながら足を振り下ろし、踵落としが銀時の頭に決まった。魔力で強化された重い一撃を受け、銀時は一瞬目が霞み、床に片膝をつく。

トドメの一撃を放とうと、クリスが魔力を溜めようとした時、

「クリス!!!」

後ろから声が聞こえ、クリスは振り返った。

同時に金色の刃が振り下ろされ、左肩から右脇腹にかけてクリスの体を斬った。

「な……!!? 貴様ア、まだ動けたのかアア……!!」

クリスは、忌々しげにフェイトを睨む。
フェイトもクリスを睨み返す。

「銀時は、殺させない!!!」

「小娘がアアアアア!!!」

クリスは怒声を上げて、右手でフェイトの首を掴んだ。

「が……!くはっ……うう……」

フェイトは、目を硬く閉じて苦しむ。

「フェイト!!!」

リンフォースが叫ぶ。助けに行きたかったが、ここを離れる訳にはいかない。まだ全員の治癒が済んでいない。

新八達も助けに行きたい気持ち在必死に抑え、歯を食いしばった。

クリスは腕を上げて、フェイトの足が床から離れる。

「どうだ? 苦しいか、小娘?」

「……くっ……あ、ああ……がはっ……」

フェイトは、目を見開きながら目に涙を浮かべる。首を締められて、徐々に呼吸が小さくなっていく。

「苦しいだろオ!? 今、楽にしてやる!!!」

クリスは手に力を入れて、フェイトの首をへし折ろうとする。

だが次の瞬間、腕に衝撃が走った。

ミシミシと骨が軋む音が、クリスの腕から鳴る。

「ぬう!!!」

衝撃と痛みでクリスは、フェイトの首から手を離す。

そして右側に顔を向けて、腕に打撃を加えた人物を睨んだ。

木刀を構えてる銀時が、クリスを睨み返す。

「白夜アアアアア!!!」

怒鳴りながら、クリスは腕を振りかぶり、銀時の顔を殴ろうとする。だが、一瞬銀時の方が動きが早く、木刀がクリスの顔を捉らえた。

「ガアアアアア!!!」

怯まずクリスも反撃の拳を振るい、銀時の腹を殴る。

銀時が木刀で殴り返す。

クリスも拳で殴り返す。

銀時が殴る。

クリスも殴る。

両者、防御を捨てた凄まじい殴り合いを始めた。

「ゲホツ……ゲホツ……ぎ、銀時……」

クリスの手から解放されたフェイトは、首を押さえながら上体を起こした。

壮絶な殴り合いの中、クリスは魔法が使えずにいた。魔力を溜める隙がなく、魔法が使えないのだ。

次の瞬間、クリスと銀時は同時に攻撃して、拳と木刀が両者の顔を殴った。攻撃を受けて、二人ともよろける。

この隙に、クリスは魔力を溜め始めるが、

「おおおおおおお！！」

銀時が雄叫びを上げ、魔法を使おうと集中力を欠いたクリスの腹に、木刀の突きを繰り出す。

「おごオ……！！」

クリスは口から血を吐いて、後ろへ押しやられた。

だが、クリスは不敵な笑みを浮かべた。

これで銀時との距離が離れた。

クリスの足元に黒い魔法陣が展開された。

直後、銀時の頭上にたくさんの黒い槍のような魔力の塊が出現した。

「終わりだ、白夜又アアアアア！！」

クリスの声を合図に、黒い槍が一斉に動き出す。

高速で動き回りながら、銀時に襲い掛かる。

その時、突然金色の線が現れた。高速で飛び回り、黒い槍を次々と破壊していく。

「何イ！？」

クリスは顔を歪めた。

突然現れた金色の線は、金色の光を纏ったフェイトだった。ほとんどの魔力を高速移動に回し、最高速度を維持して飛び回り、バルデ

イッシュユで黒い槍を破壊していく。

五秒もしない内に、黒い槍は全て破壊された。

フェイトは宙に佇んで、肩で息をしている。

「馬鹿な……！全て破壊しただと……！！？」

クリスは驚愕の表情で、宙に佇むフェイトを睨む。

「うおおおおお！！！」

木刀を構えた銀時が、雄叫びを上げながらクリスに迫る。

ハツとなって、クリスは銀時に意識を戻した。銀時は、木刀を上段から振り下ろす。今からでは防御が間に合わない。

クリスが防ぐ事を諦めた瞬間、

「っ！！！」

銀時の動きが止まった。

直後、銀時の腕や足、体中の肉が裂け、そこから大量の鮮血が噴き出た。

五分。

潜在能力を全解放して闘える時間を超えてしまった。限界を超え、肉体が崩壊する。悲鳴を上げる事すらできない激痛が、銀時を襲う。

「銀時イ！！！」

フェイトは目を見開き、涙目で叫ぶ。

「銀さん！！！」

「銀時！！！」

新八達も叫ぶ。

そして、この隙をクリスが逃すはずが無かった。腕を振りかぶり、銀時の頭目掛けて手刀を振り下ろす。銀時は必死に意識を繋ぎ止め、体を動かして手刀を避けようとする。

次の瞬間、銀時の左腕が宙を飛んだ。血を飛び散らせながら、ポトツと床に落ちた。

銀時は歯を食いしばりながら激痛に顔を歪め、その場に片膝をつく。

「どうやらタイムリミットを過ぎたようだなア、白夜又アアア！」
邪悪な笑みを浮かべて、クリスは銀時を見下ろす。

「……あ……ああ……！」
左腕を失った銀時の姿を見て、フェイトの中に悲しみと怒りがこみ上げてきた。

バルディッシュを握る手に力が入り、血が流れる。

「わあああああああ！！！」

感情が爆発して、叫びながらクリスへ向かっていく。

クリスは人差し指をフェイトに向けると、指先から黒い光線を放つ。
光線はフェイトの右肩を貫いた。

「うああ！！！」

右肩を押さえ、フェイトは床に落ちた。

クリスは続いて、倒れたフェイトの左足を撃ち抜いた。

「あああああ！！！」

フェイトは左足を押さえ、悲鳴を上げる。

クリスはその様子を、愉快そうな表情で眺めてる。

「クククツ！いいぞ。最高の気分だ！もっと泣き叫べ！お前の泣き

叫ぶ声は、僕の心を潤わせる！」

クリスが邪悪な笑みを浮かべて、フェイトの姿を眺める。

その時、後ろから肩を掴まれた。

クリスが振り返ると、顔面に頭突きを食らった。

「ブガツ……！！！」

頭突きを食らったクリスは、鼻から血を流す。

目の前には、噛み付きそうな獣の眼で、クリスを睨む銀時がいた。

とつくに限界を超え、左腕も失い、想像を絶する激痛に襲われながらも手から木刀を離さず、クリスに立ち向かう。

「こオの、死に損ないがアアアア！！！」

クリスが叫ぶのと同時に、銀時は木刀の突きを放つ。

クリスは突きをかわし、左手で木刀を掴み、右腕を振りかぶる。

「ガアツ！！！」

腕を振り下ろし、肘打ちで木刀を折る。

目を見開いて動揺してる銀時の腹に、クリスは蹴りを叩き込む。腹を押さえながら後方に吹き飛び、床に倒れて、折れた木刀が手から離れた。

「ぎ……銀時……！」

ズルズルと体を引きずりながら、フェイトはゆっくりと銀時に近づく。

「銀さん……！」

「フェイトさん……！」

新八とキヤロが叫ぶ。

何もできない自分に腹が立つ。悔しくて、握ってる拳が震える。

「銀時……！！！」

フェイトは銀時の元へ辿り着いて、声をかける。

近くで見ると、銀時の体は本当に酷い状態だった。体中に切り傷のような傷があり、左腕も失って、全ての傷口から大量の鮮血が流れ出ている。筋組織もボロボロで、力を入れて体を動かすのも困難な状態だ。頭からも血を流し、鼻血も流している。血を垂れ流してる口から、弱った呼吸の音が聞こえてくる。

「……どうやら……力を使い果たしたようだな……」

肩で息をしながら、クリスが言う。

クリスも、銀時から受けたダメージが大きいようだ。

「ククク……僕をここまで追い詰めた人間は、キミが初めて……」

「いや、キミ達二人が初めてだよ……」

口元の血を手で拭く。

クリスの雰囲気、戦闘形態前に戻っている。

「だが……結果はこれだ」

クリスは、ニヤリと笑みを浮かべる。

「キミ達がどんなに頑張ろうと、僕を倒す事はできない！」

「くっ……！！」

フェイトは、悔しそうにクリスを睨む。

すると、隣にいる銀時が上体を起こす。

「銀時！！」

フェイトが体を支える。

フェイトに体を支えられ、銀時は傷だらけの体を起こして立ち上がった。

「……そうだったな」

クリスは、傷だらけの姿の銀時を見つめる。

「キミはいくら体が傷つこうが、何度でも立ち上がる」

「……わかってるじゃねーか……」

銀時は、かすれた声を出す。

呼吸も弱く、体中傷だらけで左腕も失い、白い着物は大量の出血で真っ赤に染まっている。立っているのも辛い状態で、潜在能力を解放する木刀も、もうない。

しかし、それでも銀時は諦めない。倒れない。彼の眼は死んではいない。

銀時の闘志は、魂は折れてはいない。

クリスは、そんな銀時の眼を真っ直ぐに見据える。

「……いいだろう。白夜叉。キミのその不屈の魂を打ち砕いてやる」

クリスの足元に、黒い魔法陣が展開される。

銀時を護るように、フェイトが前に立つ。

「これから使う変身魔法は、あまりに強力過ぎて完全に理性を失い、力を制御する事ができない。だから使いたくなかったのだが……キミの魂を打ち砕くには、圧倒的な絶望を与えるしかない」

「……そんな強力な魔法を使ったら、お前の後ろにある装置も巻き込まれるんじゃない」

「装置は、僕が張った結界によって護られている。巻き込まれて、破壊される事はない」

クリスは笑ってフェイトに答えた。

「終わりだ。」 真の絶望”を味わうがいい」

第三十四訓：銀魂と絆 二の幕（後書き）

銀時「クリス。こいつら全員の魂がこめられた、この剣の切れ味。しかとその身に焼き付けな」

フェイト「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。『銀魂と絆 大詰め』。テイクオフ」

銀時 対 クリス

死闘完全決着！！

第三十五訓：銀魂と絆 大詰め（前書き）

更なる変貌を遂げたクリス

世界が選ぶのは、クリスか？銀時か？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第三十五訓：銀魂と絆 大詰め

銀時やフェイト達が呆然と見上げる中、黒い巨体の悪魔は空に向かって吠える。

変身魔法によつて、変貌したクリス。悪魔と呼ぶに相応しい、その姿は、フェイト達に絶望を与えた。

フェイトは、あまりの恐ろしさに体を震わせる事もできない。声も出ない。呼吸する事を忘れてしまいそうな程の、圧倒的な威圧感。クリスの赤い双眸が、一つの山を見た、山を見つめて、大きな口を開く。鋭く尖った歯が並んでる口の中で、黒い魔力が集束される。次の瞬間、雄叫びを上げて、口の中に溜めた魔力を山に向けて放つ。高速で放たれた黒い閃光は、山に直撃して黒い爆発を起こした。黒い煙が晴れていくと、山は跡形もなく消えていた。

「……………！！」
クリスの次元違いの圧倒的な力を目にして、フェイト達は声を出せず戦慄した。

巨悪を目の前にして、みんな希望を失っていた。ただ一人を除いて。

銀時は拳を握る。

「まだだ……………」

「……………」

小さな呟きを聞いて、フェイトは銀時に顔を向けた。

「まだ……………終わっちゃいねエ……………」

「銀時……………」

巨大な絶望を前にしても、銀時の眼は死んでいない。

銀時の眼を見て、フェイトの中に、僅かな光が生まれる。希望の光が。

クリスの赤い双眸が、部屋に向けられた。銀時とフェイトは身構えたが、クリスが見ているのは二人ではなかった。クリスの視線が捉

らえているのは、リインフォース達だった。

「な……!?!」

リインフォース達は、クリスと目が合い、体が固まった。

銀時は焦る。

「待てクリス！テメエの相手は俺達だろオオ!!」

クリスに向かつて叫ぶが、クリスは全く反応しない。

銀時の叫びを無視して、巨大な腕をリインフォース達に向けて伸ばす。

「逃げるオオオオ!!」

喉を痛めながら、銀時はありつたけの声で叫ぶ。

だが、漆黒の腕はリインフォース達の目の前まで迫っていた。今から避けるのは間に合わない。護りの結界を張っているが、簡単に破られてしまうだろう。

リインフォース達は、覚悟を決めて目を硬く閉じた。

その時、リインフォース達の前の床が砕け、下から大きな人影が現れた。

「オオオオオオ!!」

雄叫びを上げ、クリスの巨大な拳を受け止める。

拳に押されるが、リインフォース達の手前ギリギリで止まった。

「オオオオ?」

クリスは首を傾げて、拳を引いた。

「あ……意識が飛びそうになつたぜ」

拳を受け止めた人物が、呟いた。

リインフォース達は、目を開いてクリスの拳を止めた人物を見る。

見た瞬間、キャラは目を見開いた。

キャラ達を助けたのは、二階でキャラ達と闘った、ゾーマだった。

「ゾーマさん!!」

キャラは弾んだ声を出した。

「よオ、キャラ。わりーな。下で待ってるって約束、破っちゃった」
キャラ口に振返り、笑ってゾーマは答えた。

銀時とフェイト、リインフォース達は目を丸くして驚いている。

「それにしても……コイツは……」

ゾーマは黒い巨体を見上げる。

「クリスです……変身魔法で姿を変えて……」

「マジでか？魔力の感じがクリスと似てるが……まさか、こんな変身魔法があつたとはな……」

「ゾーマさんも、知らなかつたんですか？」

「ああ。知らねエ」

キャラ口と会話をしながら、ゾーマはクリスを見つめる。

普通に会話をしてる二人の様子を見て、新八とリインフォースは目を細めた。

「え……？あの……キャラちゃんとゾーマ……何で普通に会話してるの……？」

「えっと……まあ色々ありまして……」

苦笑しながら、ティアナは答えた。

ゾーマとリインフォース達の様子を見て、銀時とフェイトは複雑な表情をしている。

「どうして、ゾーマが……？」

「……よくわかんねーが、とりあえず向こうは大丈夫っぽいな……」
とりあえず二人は、一安心した。

だが安心したのもつかの間、クリスが巨大な手の平を銀時とフェイトに向けた。手の平に黒い魔力が集束していく。

「銀時！フェイト！危ないっス！！」

ウエンディの叫び声で、銀時とフェイトは上を向いた。

同時にクリスの手の平から二人に向けて、黒い閃光が放たれる。当たる直前、二人の前に人影が現れた。

「てえアアアアア！！」

銀時とフェイトに迫る閃光を、回し蹴りで弾く。

弾かれた閃光は、空の彼方へ飛んでいった。

新たな乱入者は、床に着地すると閃光を蹴った足を摩る。

「いてて……足折れるかと思っただぜ」

乱入者は振り返って、銀時とフェイトを見る。

「よオ。無事か？」

「黒夜叉!？」

二人を助けたのは、黒夜叉だった。

「銀時!フェイト!」

後ろからドゥーエが走ってきた。

「ドゥーエ!」

「二人とも大丈夫ですか？」

「はい。なんとか……」

フェイトは頷いて答えた。

すると銀時は、黒夜叉に顔を向けた。

「っーかお前。俺のクローンなのに、俺より凄くね？」

「俺ア長い間、潜在能力を解放する訓練をしてたからな。紅桜式がなくても、ある程度、自分の意志で潜在能力を解放できるんだ。

もちろん全解放は無理だけどな」

「マジでか?それ反則じゃね？」

銀時は目を見開いて驚いた。

「それよりお前、随分ボロボロじゃねーか」

「イメチェンだ」

「んなグロイイメチェンがある訳ねーだろ!」

銀時にツッコむ、黒夜叉。

ゾーマは銀時と黒夜叉のやり取りを見て、溜め息をついた。

「あの、ゾーマさん」

そんなゾーマに、キャラが声をかけた。

ゾーマはキャラに振り返った。

「何とか……できそうですか？」

「ああ、無理だな。あんな馬鹿デカい魔力、俺にはどうする事も出来ねエな」

軽い感じでゾーマは答える。

黒夜又はクリスを見上げる。黒い巨体も、部屋にいる者達を眺めていた。

「……随分変わったなア、クリス」
そう呟いた黒夜又は、複雑な表情をしている。

クリスから目を離して、銀時に顔を向ける。

「で、どうすんだ？何か手はあるのか？」

「……まあ、あるっちゃあるけどな」

「えっ!？」

フェイトとドゥーエが驚く。

銀時は振り返って、リインフォースを見る。

「リインフォース！ちよつと来てくんねエか？」

「え!？あつ、はい!」

呼ばれてリインフォースは、慌てて銀時の元に駆け寄った。

次に銀時は、フェイトに顔を向けた。

「フェイト。バルディツシュ貸してくんねエか？」

「え?どうするの?」

フェイトは困惑の表情を浮かべる。

「リインフォースとユニゾンすれば、俺も魔力を使えるからな。お前達の魔力を借りて、バルディツシュの刃を強化させてクリスをぶった斬る」

銀時の言葉に、フェイトは目を見開いて驚愕した。

ドゥーエとリインフォースも驚き、黒夜又は僅かに目を細めた。

「そ……そんな……！無茶だよ銀時！そんな体で……!!」

全身血だらけで傷ついた銀時の姿を見て、フェイトは止めようとする。

「リインフォース。ユニゾンして治癒魔法使えば、傷は治るだろ？」

「……全ての傷を癒すのは無理ですが……」

「なら充分だ」

「銀時!!」

フェイトが声を荒げる。

銀時の肩を強く掴んだ。

「心配いらねーよ」

頭を掻きながら、銀時が言う。

「俺ア死なねエよ」

銀時は、微笑みを浮かべる。

その微笑みを見て、フェイトは思い出す。銀時は一度こうだと決めたら、それを曲げない。どんなに周りが止めようとしても、銀時は止まらない。

ゆっくりと、銀時の肩から手を離す。諦めたように、顔を俯かせる。

「……………わかった」

涙が出るのを、必死に堪える。

「銀さん!!!」

後ろから声が聞こえた。

銀時は振り返って、後ろを見る。そこにはリインフォースの治癒魔法で回復した、はやて率いる機動六課とナンバーズ、神楽達と真選組がいた。

「話は聞きました」

「私達の力が必要なら、いくらでも銀ちゃんにあげる!!!」

「あたし達の力を見せてやるっス!!!」

「ボコボコにするアル!!!」

「ここまで来たら、やるしかありませんぜエ」

機動六課とナンバーズ、神楽達が、覚悟と気合いのこもった声を出す。

「ちよ〜つと待ってエ!」

突然、最上階の入口から、声が聞こえた。

みんなが入口を見ると、クアットロとウーノがいた。

「私達も協力させてもらうわよオ」

「妹達が闘っているのに、見ている事しかできないのは、やはり悔しいですから」

急いで駆け付けたみたいで、二人は肩で息をしている。

これで全員揃った。

「よし。それじゃあ、いくぜリインフォース」

「はい」

リインフォースが、銀時の前に立つ。

「ユニゾン・イン!!!」

二人の姿を、白い光が包む。

光が収まり、ユニゾンが完了した銀時が姿を現した。リインフォースが治癒の力を働かせて、銀時の傷を少し癒す。

クリスは動かない。まるで銀時達の反撃を待っているかのように、ジツと銀時を見つめて沈黙している。

「フェイト」

銀時が、フェイトに右手を伸ばす。

フェイトは頷くと、バルディツシュを銀時の手に握らせた。

「バルディツシュ。銀時をお願い」

「Yes sir」

主人の声に応えるバルディツシュ。

銀時は、フェイトの想いを受けて、バルディツシュを力強く握った。

そして、キツと目を鋭くしてクリスを見上げる。

クリスの赤い双眸も、銀時を見つめ返す。

「いくぜ、テメーら!」

「はああああああ!!!」

銀時の声に応え、なのは達が魔力を解放する。

桜色、白、赤、緑、オレンジなど、なのは達の魔力が体から放たれ、

銀時に降り注ぐ。なのは達の魔力を受け、銀時の体が虹色に輝く。

「おおおおおお!!!」

魔力を受け取った銀時は、雄叫びを上げた。

「いくよ、銀時!!!」

フェイトの体から、金色の魔力が解放された。

銀時は金色の魔力を受けて、更に魔力が膨れ上がる。

「うおおおおお!!!」

雄叫びを上げ、膨大な魔力を制御しようとする。

「銀さん!!!」

「銀ちゃん!!!」

「銀時!!!」

新八、神楽、月詠が叫ぶ。

「いけエ、万事屋ア!!!」

「負けんのはゴメンだぜ!!!」

「旦那ア、頼みますぜ!!!」

近藤、土方、沖田も叫ぶ。

魔力を持つてない彼等は、声を出して銀時を励まし、激励する。

「おおおおおおお!!!」

銀時の中の膨大な魔力が、バルディッシュへと流れていく。

体の輝きが消えて、代わりにバルディッシュに刃が生成された。銀色に輝く長い刀身の周りが、バチバチと鳴る。

「おおつ……!!!」

「こいつア、スゲーな……!!!」

黒夜叉とゾーマは、思わず刃に見惚れる。

銀時は、銀色の刃をクリスに向ける。

「クリス。こいつら全員の魂がこめられた、この剣の切れ味。しかとその身に焼き付けな」

銀時は鋭い目で、クリスを射抜くように見据える。

「オオオオオオオオオ!!!」

クリスが雄叫びを上げる。

大量の魔力が、口の中に溜まっていく。クリスも、この一撃で勝負を決めるようだ。

「オオオオオオオオオ!!!」

雄叫びと共に、クリスの口から巨大な黒い魔力玉が放たれた。

「うおおおおお!!!」

銀時は迫り来る魔力玉に向けて、バルディッシュの突きを放つ。黒い魔力玉と銀色の刃が、火花を散らせて激突する。

「いけエエエエ!!!」

「銀時イイイイ!!!」

見守っているフェイト達が、銀時に声を飛ばす。

フェイト達の声を受け、勢いを落とさず、床を蹴ってクリスの顔の前まで跳躍する。

クリスが銀時の姿を捉らえると、銀時はバルディッシュを振り上げた。

「おおおおおお!!!」
神速でバルディッシュを振り下ろす。

巨大な銀色の刃は、クリスの体を左肩から右脇腹にかけて斬りつけた。

傷口から黒い魔力が、血のように噴き出る。

「オ、オ、オ、オ、オオオオオオオオオオ!!!」

傷口を押さえながら、クリスは悲鳴のような大声を上げる。

クリスの体が後ろに傾き、大きな地響きを立てて倒れた。砂埃が巻き上がり、巨体のクリスの姿を包み込む。

銀時は床に着地して、砂埃を見つめながら肩で息をする。

後ろで鬨いの様子を見守っていたフェイト達も、ジッと砂埃を見つめた。

煙が晴れていき、クリスの姿が見えてきた。クリスは元の姿に戻っており、胸に大きな斬り傷を負って、大の字になって床に倒れている。

「……………やった…………?」

クリスの姿を見て、月詠が呟いた。

そして周りにいる皆が、一斉に飛び跳ねる。

「やったアアア!!!」

大声で全員が喜んだ。

ゾーマは、口を開いて驚いている。

床に倒れているクリスは、目を見開いて呆然としている。

「……………負けた…………?……………僕が……………?」

青空を見ながら、小さく呟いた。

「……………これが人間の……………絆の力……………!?!」

*

二階で闘っている、桂と高杉の動きが止まった。上の部屋から伝わってくる、黒く重いプレッシャーが消えたのだ。

「これは……………?」

「クリス……………まさか、負けたのか?」

高杉は、僅かに目を細めた。

「高杉。どうやら、お前達の負けのようだな」

刀を構えたまま、桂が言う。

だが、高杉は不敵な笑みを浮かべている。

「……………そうだな。それじゃ俺は、退散させてもらっぜ」

そう言うと高杉は、刀を腰の鞘におさめた。

「高杉!」

桂は、高杉を追おうと走り出す。

だが、ゾーマが生み出したと思われる怪物が数体現れて、桂の行く手を塞いだ。

「く……………!」

桂は顔を険しくした。

「まだだ……………まだ終わらねエぜ……………」

不気味に呟きながら、高杉は桂に背を向ける。

「高杉イイ!!」

襲い掛かる怪物達を斬り倒しながら、桂は高杉に向かって叫んだ。

高杉は懐から煙管を出して、口にくわえながら出口へ向かい、静かに部屋を去っていった。

*

「銀時！！」

フェイトは、闘いに勝利した銀時に駆け寄った。

「よオ……フェイト……」

銀時が、疲れ切った顔で振り向いた。

「やったね、銀時」

「ああ、死ぬかと思っただけだな……」

死闘に勝利した銀時の体は、立っているのが不思議な位、ボロボロだった。

改めて銀時の傷だらけの体を見て、フェイトは涙をぼろぼろと流し始める。

「……よかった……銀時が生きてて……本当に、よかった……」
嬉しさで、涙が止まらない。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

新八と神楽が、駆け寄ってくる。

その後ろから、機動六課、ナンバーズ、真選組、とにかく全員が駆け寄ってきた。

みんなの力を合わせて、クリスに勝った。全てが終わった。

だが、突然けたたましい機械音が最上階に響き、勝利を喜び合っていた一同の動きが止まった。

「な……何この音!？」

なのは達は最上階を見回した。

銀時は、音の出所を見た。視線の先にあるのは、クリスの結界によって守られていた、巨大な四角い装置。

全員が装置を見た。

轟音と共に、装置の前面から大きな砲身が出てきた。

銀時達は、呆然となって砲身を見つめる。

「え……?何アレ?嘘、何アレ?ヤダ、何アレ!？」

ゴウン、ゴウン、という大きな音と共に、砲身にエネルギーが溜まっていく。

「な…なんて魔力なの！？あんなの撃つたら、ここら一带ふっ飛ぶわよ！！」

「ええっ！？」

ティアナの言葉に、新八達は驚く。

「ああ。アレ、大量のレリックをエネルギーにしてるから、威力ハ
ンパねーぞ」

「ええええっ！！？」

ゾーマの言葉に、新八達は目を剥いて更に驚いた。

すると黑夜叉が、ゾーマに向かって叫んだ。

「ゾーマ！お前の魔砲で、あの大砲ぶっ壊せ！！」

「いや無理だろ！こんな所で魔砲ぶっ放したら、全員吹き飛ぶぞ！」
なのは達は、クリスとの闘いで魔力を使い切っている。

全員が慌てふためいていると、一人の男が大砲に向かって駆け出した。

「銀時！！」

フェイトが、駆け出した男、銀時に向かって叫んだ。

銀時は床を蹴って跳躍して、バルディッシュを振り上げる。残つて
る魔力をバルディッシュに注ぎ込み、銀色の刀身が伸びた。

「うおおおおおお！！」

雄叫びを上げながら、銀色の刃を振り下ろす。

次の瞬間、振り下ろされた銀色の刃によって、大砲は縦に真っ二つ
に斬られた。銀時の一撃で、エネルギーのチャージが止まる。

「やったアア！！」

新八達が叫んだ。

しかし、

「大砲に修復不可能の損傷を負いました。自爆システムが作動しま
す」

大砲から機械的な音声が聞こえ、大砲内部が赤く光る。エネルギー
源であるレリックが、強い光を放っているのだ。

「ちっ！！」

ゾーマは舌打ちして、腕を伸ばす。

伸ばした腕は倒れているクリスを掴み、腕を戻して引き寄せた。

「全員一箇所に集まれエエエー!!」

黒夜叉が叫び、なのは達は一箇所に集まった。

「お前も早くしろ!」

ゾーマはフェイトの腕を掴んで、引つ張り寄せた。

「まだ銀時が……銀時!!」

フェイトは、大砲の真上にいる銀時に向かって叫んだ。

銀時は、赤い輝きを放つ大砲を見つめた。

あ……これ無理だ……。

銀時がそう思った瞬間、大砲は赤い大爆発を起こした。ゾーマは強力な結界を張って、自分となのは達を護る。爆発は城を吹き飛ばした。

*

クリスの城から少し離れた森の中を、高杉は一人歩いていた。後ろから爆発音が聞こえ、衝撃が伝わって来て、後ろを振り返った。爆発がおさまって、城があった場所から煙が立ち上っている。高杉が煙を見ていると、突然白い光が高杉を包んだ。次の瞬間、高杉の姿は消えた。

*

江戸から少し離れた森の中に、今は使われていない廃ビルがあった。壁や柱にはヒビ割れが走り、所々崩れかけている。そんな廃ビルの中に、複数の男女と丸い装置があった。彼等は、高杉が率いる武装集団『鬼兵隊』のメンバーである。装置の中が強く光り、メンバーは手で目を覆った。そんな中、一人だけグラサンをかけている者がいた。ヘッドホンを目に付けて、曲

を聞いている。男の名前は河上万斉。人斬り万斉と恐れられる剣豪である。

光が収まると、装置の中から高杉が出てきた。

「晋助様！」

そう言つて高杉に駆け寄つたのは、金髪で赤い着物姿の女性。

彼女の名前は、来島また子。

紅い弾丸と恐れられる拳銃使いである。

「大変です、晋助様！！桂が……！！！」

「ああ、わかつてる。向こうで、ツラと会つた」

高杉は、また子の言葉を遮つた。

すると、一人の男が高杉に近づいた。

「移動装置を作つた春雨の科学者が、全員いなくなつてしまいました。おそらく桂とその仲間が連れ去つたのでしょう」

高杉にそう言つたのは、武市変平太。

鬼兵隊の謀略家。ちなみに本人はフェミニストと言っているが、口リコンの疑いがある。

報告を聞いて、高杉は歩き出した。メンバーもあとに続く。

その時、移動装置が爆発した。

高杉達が振り返つて見ると、装置は粉々になつていた。

桂が変装して装置に入った時に、時限爆弾を仕掛けて置いたのだ。

「桂アアアアア！！！」

また子が額に青筋を立てて、この場にはいない桂に怒鳴る。

「やられたでござるな。これでは修復は不可能でござる」

ヘッドホンで曲を聞きながら、万斉が言った。

粉々に粉碎した装置を見て、高杉は短く笑つた。

「構わねエさ。計画は失敗した。もう向こうの世界には用はない」

煙管をふかしながら、高杉は再び歩き出した。

万斉達もあとに続き、鬼兵隊は廃ビルから去つていった。

*

クリスの城は、大砲の自爆で跡形もなく吹き飛び、大きなクレーターができていた。

煙が晴れていき、ゾーマの結界で護られたフェイト達の姿が見えてきた。

近くで待機しているアースラも、所々破損しているが、なんとか無事である。

ゾーマは結界を解いて、溜め息をついた。

「あゝ……マジで死ぬかと思っただぜ」

「高杉の野郎……物騒な物運びやがって……！」

黒夜叉が、この場にいない高杉に怒りをぶつける。

「た……助かった……！」

全員がホッと安堵した。

「銀時……！！」

フェイトが辺りを見回して、銀時の姿を探す。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

新八と神楽も声を出して、銀時を探す。

他のみんなも、銀時を探し始める。

ゾーマも、飛び散ってる瓦礫をひっくり返しながらか、銀時を探す。

一つの瓦礫をひっくり返すと、長髪の男を発見した。

「……誰だお前？」

「……お……お前、じゃない……桂だ……」

息も絶え絶えに、桂が言った。

「銀時……！！」

フェイト達は必死になって探すか、銀時は見つからない。

見つかったのは、銀時が持っていたバルディッシュだけだった。

フェイトは見つけたバルディッシュを、両手でギュッと強く握り締めた。

第三十五訓：銀魂と絆 大詰め（後書き）

消えた銀時の行方は？

スバル「次回、リリカル銀魂 Strikers。『過去があるからこそ現代がある』。テイクオフ」

第三十六訓：過去があるからこそ現代がある（前書き）

（作者の悩み）

赤夜叉さん。エンディングは決まりましたか？

赤夜叉「…………… 超迷ってます」

えええっ！？まだ決まってるんですか？

赤夜叉「そっだよ！まだ決まってるーんだよ！フラグ立て過ぎて困ってんだよオ！！仮に一夫多妻制にしたとしても、ある程度人数を絞らないと！ああああ！！」

それ完全に自業自得じゃん！後先考えないから！

赤夜叉「皆さん！計画的に行動しましょう！」

サブタイトルが銀魂っぽいのに戻りました

銀時とリインフォースは何処へ？

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第三十六訓：過去があるからこそ現代がある

アースラの局員も協力して、辺りを搜索したが、結局銀時は見つからなかった。

ちなみにゾーマに見つけられた桂は、真選組に見つかる厄介なので、急いでキャプテン・カッラーに変装した。

「通りすがりのキャプテン・カッラーです」
これで真選組の目をごまかした。

新八と神楽は、桂の姿を見て驚いた。

一方、フェイトはクレーターの中心に立って、辺りを見渡している。すると、局員に連行されていく、クリスの姿が目に入った。フェイトの中で怒りや悲しみがこみ上げてきて、クリスに向かって走り出す。

クリスはフェイトに気付いて、顔をそちらに向けた。フェイトがクリスの胸倉を掴む。

「フェイトちゃん！」

なのは達が駆け寄る。

フェイトは涙目でクリスを睨み、怒りをぶつける。

「返せ！銀時を返せエ！！」

フェイトは、目から大粒の涙を流す。

「フェイトちゃん！落ち着いて！！」

「フェイト！！」

なのは達が、フェイトを押さえる。

だがフェイトの怒りは収まらず、なのは達に押さえられても暴れている。噛み付きそうな目で、クリスを睨む。

クリスは溜め息をついた。

「……彼は死んでいない」

「え……？」

クリスの言葉に、フェイトは動きを止めた。

「どういう事ですか？」

新八が尋ねた。

だがクリスはそれっきり何も答えず、フェイト達から顔をそらして、局員に連行されて行った。

フェイト達は、黙ってクリスの後ろ姿を見つめた。

「あれ？」

クリスがアースラの中に連行された後、セインが声を上げた。

「どうした、セイン？」

チンクが聞いた。

「黒夜叉とドゥーエ姉がいない」

「あっ！」

周りを見回すと、黒夜叉とドゥーエの姿がなかった。

すると、

「おゝい。こんな置き手紙があつたぞ」

ゾーマが、一枚の紙を手にして声を上げた。

一同が集まって、紙に書いてある内容を読む。

『管理局に捕まったら、取調べとか取調べとか取調べとか、メンドくさそうだからドゥーエと旅に出ます。 黒夜叉』

「取調べばつかじゃん!!」

新八がツツコんだ。

*

目の前に広がるのは、赤い空。

アレ？なんだコレ？空が真っ赤だ。

彼は床に倒れていて、うつすらと開けた片目で、真っ赤な空を見ている。

アレ？真っ赤なのは、俺じゃねーか。

彼は頭から血を流し、体中も血だらけだった。そして左腕がない。

アレ？何で俺、こんなことになってんだっけ？アレ？こんな第一章の時も、やらなかつたっけ？アレ？

*

（銀時！）

銀時の頭の中で、女性の声が響く。

（銀時！起きてください！）

女性が声を大きくして、銀時を起こす。

「ん……？」

銀時は両目を開けて、ゆっくりと上体を起こした。頭を、くしゃくしゃと掻く。

（銀時。よかった。目が覚めましたか）

「リインフォース」

女性の声は、リインフォースだった。銀時の中から声が聞こえてくるといふ事は、リインフォースとのユニゾン解けていないようだ。銀時は周りを見回した。どこかの建物の中のような。しかも炎に囲まれていて、幾つか柱が倒れて、壁も崩れて道を塞いでいる。

「何だ？火事か？つーか、どこだ此処？」

（私にもわかりません。気がついたら、此処にいました）

銀時は記憶を辿る。

確か変身魔法で強化したクリスを、フェイト達と力を合わせて倒した。その後、妙な装置が大砲に代わり、バルディッシュでソレを破壊した。そしたら大砲が自爆して………気がついたら此処にいた。「よっこいしようち」

とりあえず、銀時は立ち上がった。

座って考えていても、何もわからないし、解決策も思いつかない。

「とりあえず此処から出るぞ。このまま此処にいたら、丸焼きになっちゃうからな」

(そうですね。外に出てから、帰る方法について考えましょう)
銀時は出口を求めて、適当に歩き出した。

*

出口を求めて、炎が燃え盛る建物の中を歩き回る。炎の勢いが増していき、建物内の暑さが増していく。ただでさえクリスとの死闘で傷つき、体力を消耗している銀時には、この環境はキツイ。大量の汗を流しながら、重い足取りで通路を進んでいく。

「おーい……そろそろ出口、見つけねーと……マジでヤバイんだけど……」

(頑張ってください、銀時!)
リインフォースが励ます。

すると、途中で銀時は足を止めた。キョロキョロと周りを見る。

(銀時? どうしました?)

「いや……今、声が聞こえたような……」

銀時は、声があったと思われる方へ歩き出す。

少し歩くと、広い場所に出た。その中心辺りにある石像の前に、女の子がいた。顔を俯きながら、泣いている。

(銀時、女の子がいます)

「親とはぐれたのか?」

銀時が呟いた時だった。

女の子の背後にある、人型の石像の足の部分にヒビが入った。ヒビは広がり、女の子に向けて石像がズレる。

(銀時! …!)

「ちっ!」

軽く舌打ちをして、銀時は走り出す。

女の子は振り返って、自分に向かって倒れてくる石像に気付く。

「ひい……! …!」

女の子は短い悲鳴を上げて、目を硬く閉じて頭を抱えた。

もう助からない。女の子が、そう思った時だった。

「待て待て待て待て待て待て待てエエエエー！」

銀時が叫びながら、全速力で女の子の元へ向かう。

石像が落ちる直前で、女の子を抱きかかえて走り去る。銀時の後ろで、石像が音を立てて床に落ちて、粉々に砕けた。

銀時の中にあるリインフォースは、ホッと一安心した。

女の子は、自分を抱えている銀時の着物を離さぬよう、ギュッと強く握っている。

「大丈夫か？」

銀時が、女の子に声をかけた。

声を聞いて女の子は、ゆっくりと目を開けて顔を上げる。緑色の瞳をしている女の子は、銀時の顔を見た。

「……おじさん……誰……？」

「おじ……！？」

おじさん、と呼ばれて銀時はショックを受けた。

一旦、女の子を床に降ろして、銀時は自分の右腕の匂いを嗅いだ。

女の子は、不思議そうな顔で銀時を見つめている。

「あのさ……俺、加齢臭とかする？」

右腕から顔を離して、やや落ち込みぎみに女の子に尋ねた。

銀時の中にいるリインフォースは、必死に笑いを堪えている。

すると女の子は突然、驚愕の表情を浮かべる。

「お……おじさん……！腕が……！」

震える指で、銀時の失った左腕を指差す。

「ん？ああ。こいつア元からだ。お前を助けた時に失くした訳じゃねーから気にすんな」

チラッと左腕を見て、銀時は軽く答えた。

「っーか、いい加減『おじさん』って呼ぶのやめてくんない？せめて『お兄さん』って呼んでくんない」

真顔で銀時が言った。

銀時の年齢は、まだ二十代前半……いや、二十代後半……あれ？ど

「うちだっけ？まあとりあえず二十代なので、おじさんと呼ばれるのは、まだ早い。」

おじさんと呼ばれるのが納得いかず、小さくブツブツ文句を呟きながら、銀時は、再び女の子を抱き上げた。その時、銀時は痛みで顔を歪めた。

「結構、体に無理させたからな……」

（はい。正直、生きてるのが不思議なくらいです）

銀時は周りを見回して、どこか外に出れそうな通路を探す。どこの通路も瓦礫の山に塞がれているが、銀時は一箇所の通路に目を付けた。その通路も瓦礫の山に塞がれているが、周りに比べたら軽い方だった。

ソコから出る事に決めて、銀時は女の子に顔を向けた。

「今からあそこを蹴破って、外に出る。しっかり俺につかまってる」
女の子は頷くと、銀時の体を強く抱いた。

自分につかまっていたのを確認して、銀時は通路に向かって走り出す。勢いを落とさずに瓦礫の山に迫る。

「うおりゃアアア！！」

力強く床を蹴り、瓦礫の山を蹴破った。

通路の先に、出口と思われる穴を見つけて、銀時は走る。

炎の中を駆け抜け、建物の外へと出た。

「ふう……どうやら外に出れたみてエだな」

外に出たのを確認して、銀時は女の子を床に降ろした。

「お兄さん。助けてくれて、ありがとう！」

「おお」

女の子のお礼に、銀時は短く応えた。

火災はおさまってないので、二人は建物から離れた。離れた所から見て、燃えているのが空港である事がわかった。

銀時は、これからどうするか、ぱりぱりと頭を掻きながら考える。すると、銀時を見つめながら女の子が言った。

「……お兄さん、凄いなア」

「ん？」

銀時は考えを中断して、女の子に顔を向けた。

「私……弱虫で……ずっと泣いてばっかで……何にもできなかった……」

自分の情けなさや悔しさで、女の子は泣き出す。

泣いている女の子を見て、銀時は溜め息をついた。

「んなことねエよ」

「え？」

女の子は、涙を流しながら銀時を見る。

「オメーは家族見つける為に、あの炎の中を歩き回ったんだろ？」

言うと銀時は、女の子の頭に手を乗せた。

「泣きながらでもいい。ポロポロでみつともなくても、諦めねエで進み続けたんだ。恥じる事なんてねーぜ」

銀時は優しく微笑んだ。

女の子は、いつの間にか涙が止まっていた。

「オメーの家族も、きつと無事さ」

「お兄さん……」

また女の子は、涙を流す。

今度は悔しさや情けなさからではなく、嬉しさで涙が出てくる。

（あの……銀時）

（ん？何だ、リインフォース？）

念話みたいな感じで、二人は会話をする。

（この女の子。見覚えがありませんか？）

（は？あるわけねーだろ。こんなガキ、初めて見るぜ）

言われて銀時は、泣いている女の子を見る。

青い髪でショートカット。緑色の瞳をしている。

すると、銀時は首を傾げた。

あれ？言われて見てみると、何か見覚えがあるような……。

銀時は、目を閉じて考える。空港の火災で、女の子を助けた。現状と似たような話を、誰かから聞いたような気がする。

銀時は考える。

そして思い出した。

「あっ!!!」

目を見開いて、女の子を指差す。

「スバルウウウ!!!」

銀時の大声に、女の子はビクツと体を震わせた。

「お、お兄さん……どうして私の名前、知ってるの?」

マジでかアアア!?

銀時は頭を抱えて、今は夜で真っ暗な空を仰ぐ。

(どうやら私達は、大砲の自爆が原因で、過去にタイムスリップしてしまつたようですね)

冷静にリインフォースが言った。

「タイムスリップ!? おい、マジでか!?!」

「お兄さん、大丈夫?」

銀時のただならぬ様子に心配して女の子　スバルが声をかけた。

「お……おお、大丈夫だ。心配いらねーよ」

明らかに、動揺しまくっている銀時。

(おい! どうすんだよ? これ帰れるの? 元の世界に帰れるのか!?)

(わかりません)

(わかりません、じゃねーよ! 何とかしてくれ! 頼む! 三百円あげるから!)

(なんでもかんでも、三百円で解決できると思ったら、大間違いですよ!)

二人が念話で話し合っていると、スバルが振り向いて空を見上げた。こちらに向かってくる、白い点を見つけた。段々近づいてきて、白い点が人である事がわかった。デバイスを持って、白いバリアジャケットに身を包んでいる。

「お兄さん! 助けが来たよ!」

女の子は後ろを振り返った。

「……あれ?」

だが、そこに銀時の姿はなかった。
今さっきまで居たのに、忽然と消えてしまった。辺りを見回すが、やはりいない。
スバルは、少し淋しげな表情になるが、すぐにそれは消えた。そして決心する。
私も、あの銀髪のお兄さんのように、強くて誰かを助けられる人になる。
その時のスバルの顔は、少し大人びていた。

*

現代。

アースラの中。死闘を終えた後で、みんな疲れて休憩所で眠っている。

その中で、フェイト、シグナム、アルフ、スバルの四人は眠っていなかった。銀時とリインフォースの事が心配で、眠れないようだ。顔を俯きながら、スバルが口を開いた。

「フェイトさん……二人とも、無事ですよね……？」

「……うん。きっと大丈夫だよ……信じて待とう」

スバルの頭を優しく撫でながら、フェイトは答えた。

すると、何の前触れもなく四人の目の前に銀時が、パツと姿を現した。

「あれ……？」

口を開いたのは銀時。

フェイト達は、銀時の姿を見て固まっている。

（銀時！ここはアースラの中です！私達、帰ってこれました！）

「……なんかプレシアと帰ってきた時と、同じような気がするんだけど……」

「銀時……！」

「どわっ……！」

いきなりフェイト達が、銀時に抱き付いた。

「銀時！！よかった……！本当によかった……！！」

「銀さん……！リインフォースさん……！！」

「銀時、リインフォース！二人とも、よく無事だった！」

「銀時イイイ！」

四人は涙を流しながら、銀時とリインフォースの生還を喜んだ。

「あの……」

銀時の隣に、ユニゾンを解いたリインフォースが現れた。

四人の視線が、リインフォースに集まる。

「銀時……気絶しました……」

言いながらリインフォースは、銀時を指差した。

四人は銀時を見る。

銀時は白目を剥いて、口を開いて気絶している。

「銀時イイイイイイ！！！」

フェイト達の悲鳴のような叫び声が、アースラの中に響いた。

第三十六訓：過去があるからこそ現代がある（後書き）

銀時「殺せエエエ！！いつそ一思いに、俺を殺してくれエエエエ
エ！！次回、リリカル銀魂 StrikerS。『誰にでも帰る故
郷がある』。テイクオオオオフ！！」

お帰り、お疲れ、銀さん！

エンディングをどうするか悩む作者

果たしてエンディングは決まるのか？

そして次回、銀時の身に何が！？

第三十七訓：誰にでも帰る故郷がある（前書き）

）作者の独り言

赤夜叉「銀魂のサブタイトルは変わってるから、考えるのが大変だ」

銀時の左腕は治るのか？

そしてクリスは……

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ」

第三十七訓：誰にでも帰る故郷がある

ある一室で、男は体を震わせていた。青ざめたその表情から、何かに怯えている事が容易にわかる。

男は、何度も逃げ出そうとした。だが逃げられない。男の体を拘束しているバインドが、男の逃走を許さない。

頼む。お願いだ。

男は心の中で願う。

どうせ……俺はもう逃げられねーんだ。

台の上で拘束されてる男は、逃げる事を諦めた。

もう二度と、ここから生きて出られないんだろ。

ゴクリ、と唾を飲み込む。

地獄のような苦しみを味わうくらいなら、いつそ一思いにトドメを刺してくれ。

男は死を願った。

目を、カツと見開いて男は叫んだ。

「俺を殺せよオオオオオ！」

部屋に響くは、男の悲痛な叫び声。

「殺るなら、さっさと殺りやがれエエエエ！」

口を大きく開き、男は叫ぶ。

「俺は……俺はもう耐えられねエ！俺を殺して、この恐怖から解放してくれエ！もう……限界なんだよ……！」

あのクリスとの死闘でさ希望を捨てずに闘い抜いた男は、今は絶望を抱いて必死の形相で叫んでいる。

額から大量の汗を流して、男は必死に訴えた。

「なア……頼むよオ！お願いだア……！早く……早く俺を殺してくれエエエエ！」

「静かにして下さい、銀さん。傷に響きますよ」

優しく男に声をかけたのは、ウーノ。

「もう、銀さんつたら大げさですよ？」

ウーノの反対側に立っている、クアットロが言った。二人の言葉からわかる通り、先ほどから台の上で叫び声を上げているのは、坂田銀時。

「さて、気は済んだかい銀時？」

そう言っただけを浮かべたのは、スカリエッティ。

彼は普段の白衣姿ではなく、透明な手袋に、緑色の手術服を着ている。ウーノとクアットロも同じ恰好だ。

銀時達がいるのは、とある病院の手術室。傷ついた銀時の治療、斬れた左腕を戻すために此処にいる。

銀時は、血走った目でスカリエッティを睨む。

「何でお前が俺の手術をするんだよ！？普通の医者、呼べエエエエ！！！」

「いやア」何故か偶然”病院の先生方が全員、気分を悪くしてねエ。それで私が君の手術をする事になったのだよ」

スカリエッティは、楽しそうに笑いながら答えた。

「絶対お前が何か飲ませただろ！？医者が全員同時に、気分悪くする訳ねエだろオオ！！！」

「いやいや、偶然だよ。ハッハッハッ」

心底楽しそうに笑うスカリエッティ。

「銀さん、怖がらないで下さい。別に貴方に危害をくわえる訳ではありません」

「そうですね。これから傷ついた銀さんの体を治すんですからア、怖がる事なんてありませんよ」

ニコニコ笑いながら、クアットロが言った。

「いや……お前らの場合、俺を解剖したり、改造手術したりしそうなんだけど……」

不安を隠しきれない表情で、クアットロ達を見る。

「安心したまえ。ちゃんとキミの体を元通りに治すよ」

スカリエツティは、チラツと視線を横に向けた。

視線の先には、台の上に乗っている銀時の斬れた左腕があった。

銀時は諦めたように、深い溜め息をついた。

スカリエツティは、銀時に顔を向き直した。

「では、治療を始めよう」

「おいイイイイ！今『治療』と書いて『かいぞう』って読んだろ！？やっぱ改造手術する気だろ！？」

「メス」

隣に立っているウーノに左手を出して、メスを求めた。

「無視すんなアアアア！っていうか麻酔は？麻酔したのか！？オイ、答える！あああああああ！！！」

手術室に、銀時の叫び声が響いた。

*

手術室の前では、フェイト達が長椅子に座って待っていた。

銀時……大丈夫かな？

手術が開始してから、約二時間。銀時の悲鳴が、手術室から何度も聞こえてきた。

一体どんな手術が行われているのか？ちゃんと麻酔をしているのか？そもそもスカリエツティで大丈夫なのか？

フェイトの中にある不安は、時間が進むにつれて増す一方だった。

他のみんなも落ち着かない様子で、足を何度も組み替えたり、手術室の前をグルグル歩き回ったり、貧乏揺すりをしている者がいる。しばらくして、『手術中』の赤いランプが消えた。全員が一齐に、手術室に目を向ける。

手術室の扉が開かれて、スカリエツティとウーノが出てきた。

「スカリエツティ……」

フェイトが一步前に出た。

「安心したまえ。手術は成功した。腕もちゃんと元通りに治したよ」

「本当か!？」

シグナムが、少し大きな声で聞いた。

スカリエツティが後ろを向くと、手術室からクアットロがストレッチャーを押して出てきた。ストレッチャーの上には、気絶してる銀時が横になっている。

「銀時!！」

「銀さん!！」

みんなが銀時に駆け寄る。

死んでいるように見えるが、ちゃんと呼吸をしている。傷口も塞がっていて、左腕も元通り繋がっていた。

「戦闘機人の研究のために、人体の構造について調べていたからね。手術は完璧だよ」

「いや、本当に完璧なんですか?手術室から、何回も銀さんの悲鳴が聞こえてきたんですけど……」

新八が目を細めて、スカリエツティを睨む。

「彼は、私が改造手術をするんじゃないかと怖がっていてね。そこをからかってやったら、思った以上に面白い反応をしてくれた。いや、実に楽しかったよ。ハッハッハッ」

「おいイイイイ!手術前に、患者を追い詰めるような事するなアアアア!！」

新八が、額に青筋を立てて怒鳴る。

フェイトもスカリエツティに殴りかかろうとするが、シグナム達に止められた。

「ハッハッハッ。改造はしてないから安心したまえ。それじゃあ、私はこれで」

そう言つてスカリエツティは、ウーノとクアットロを連れて去つていく。

新八達は、スカリエツティの背中を射抜くように睨みつけた。

*

「それにしても、銀さんはどうやってこの世界に戻ってきたんでしょうか？」

廊下を歩きながら、ウーノが疑問を口にした。すると、隣を歩くスカリエツティが答える。

「おそらく自爆の時に、レリックの高エネルギーを浴びて、銀時は過去にタイムスリップした。そして体に浴びた高エネルギーが消えて、強制的にこの世界に戻ってきたんだろう」

「と言うことはア、レリックは本来、時空移動するためのロストロギアなんですかア？」

「まあ、あくまで仮説だがね。レリックがなくなってしまった今となっては、確認しようがない」
扉を開けて、病院の外に出る。

外には黒い車が一台止まっていて、管理局の局員が二人、車の横に立っていた。

「ありがとう。ここまででいいよ」

「はい。では、ドクター。お気をつけて」

「また面会に行きますわア」

挨拶をして、スカリエツティは局員と一緒に車に乗った。

エンジン音が鳴り、局員がアクセルを踏んで車は走り出した。

*

個室のベッドの上で、銀時は目を覚ました。

「銀時。気がついた？」

フェイトが言った。

「フェイト……？」

フェイトの顔を見て、銀時が小さく呟いた。

「気分はどうだ？」

シグナムが聞いた。

「……………ああ、悪くねえよ」

銀時は上体を起こして、自分の体を触った。傷口は塞がっていて、左腕もついている。体には、特に違和感はない。

「どうやら、ちゃんと治したみてーだな」

「僕達も少し不安でしたけど、大丈夫みたいです」

新八も、ホッと安心した顔をしている。

「まあなにはともあれ、これで一件落着だな」

そう言っつて銀時は、またベッドに横になった。

するとリインフォースが、深刻な表情で口を開いた。

「実は銀時……………」

「ん？」

「クリスが消えました」

「え？」

「銀時が手術を受けてる間に、連絡がありました。収容所からクリスが姿を消したと」

場の空気が重くなった。

だが銀時は、

「ふ〜ん。そうなんだ」

と軽い返事をした。

「いや、ふ〜ん、じゃなくて……………」

「そういえば、アニスって女もいつの間にかいなくなってたアル」
酔昆布をかじりながら、神楽が言った。

「そうか……………」

そう言っつと銀時は、窓の外を眺めた。

もう外は夕方だった。

*

真っ暗い何もない空間。一人の男が、暗い空間に立っている。

男は空間を見渡す。前を見ても、後ろを見ても、右を見ても、左を見ても何も無い。

銀時から受けた傷が癒えていない体で、クリスは立ち尽くしていた。何故、自分は此処にいるのか？闇を見渡しながら考える。

その時、

「クリス」

暗闇に声が響いた。

声を聞いて、クリスは僅かに顔を上げた。

「……………アルハザードか」

クリスは、小さく呟いた。

「……………すまない」

「……………」

「キミの家族を護れず……………キミの事も……………救う事ができなかった……………」

過去の悲劇を思い返ししながら、アルハザードはクリスに謝った。

謝罪を受けたクリスは、短く笑った。

「……………もういいさ」

謝られたところで、家族は戻ってこないし、何にもならない。

クリスが、そう思った時だった。

「クリス」

また声が聞こえた。

後ろから、今度は女性の声だ。

クリスは振り返って、後ろを見た。

黒髪のポニーテールの少女が立っている。

クリスは、僅かに目を細めた。

アルハザードの生き残りか？

「誰だ？」

「アルハザードの使いの、アニスと言います」

そうか、とクリスは短く答えた。

名乗り終えると、アニスはクリスに歩み寄った。ゆっくりと手を伸ばして、クリスの手を握った。

手を握られ、クリスは目を見開いて僅かに動揺した。

アニスは、ニッコリと微笑んでクリスを見る。

「おかえりなさい」

優しい声で、クリスにそう言った。

アニスの言葉が、クリスの心にしみた。アニスに握られている手が、小さく震える。

ああ……そうか。

クリスは気付いた。

僕は、ただ此処に帰ってきたただけなんだ。

収容所を脱走して、アルハザードにやってきた理由。故郷に帰りた。それだけだった。

世界を滅ぼす事なんて……本当はどうでもよかったのかもしれない。

自分の手を握ってる、アニスの手を握り返す。

ただ此処で、一緒に暮らしたかった。

両親の姿が、クリスの脳裏に甦る。

父さんと母さんと。

クリスの目から、一筋の涙が流れる。

「……ただいま」

掠れたような小さな声で、アニスに返事をした。

彼は自ら全てを破壊した。自ら全てを捨てた。

やり場のない怒りをぶつける為に、他の世界を滅ぼそうとした。

家族を愛し、愛する家族を失い、孤独となった彼は他にどうする事もできなかった。

彼は、ゆっくりとその場に座り込んだ。

脳裏に甦るのは、戦闘好きの巨人と黒い侍。

二人と一緒に過ごした日々は、とても楽しかった。

ゾーマ……黒夜叉……。

二人と出会えて彼は、幸せだった。

ありがとう。

彼は心の中で、二人に礼を言う。

「……アニス、アルハザード。僕は疲れた……少し眠る」

「……ああ」

「……はい。おやすみなさい」

クリスは静かに目を閉じた。

アニスとアルハザードに見守られ、クリスは安らかな笑顔で眠りについた。

*

ゾーマは、キャラに保護される事になった。

死闘を終えて、アースラで戻ってすぐに機動六課隊舎の修復作業を手伝った。

キャラは近くで、ゾーマの作業の様子を見ている。

すると、途中でゾーマの作業の手が止まった。

「ゾーマさん？」

キャラが声をかけた。

だがゾーマは、キャラの声には答えず、空を見上げた。

「クリス……」

ゾーマの呟きは、作業の音に掻き消されて、誰にも聞こえなかった。

*

ミッドチルダの街中に、一組のカップルが歩いていた。

一人は青い制服姿の女性。もう一人は、黒いスーツ姿の男性。歩いている途中で、男性が足を止めた。

「黒夜叉？」

女性も足を止めて、男性　黒夜叉を見る。

女性の正体は、ドゥーエ。

黒夜叉は最高評議会を殺害した容疑があるので、死闘の後、フェイト達の前から姿を消した。ドゥーエは、黒夜叉と一緒にいる事を選んだ。

黒夜叉は、ジツと夕焼け空を眺めている。隣にいるドゥーエは、首を傾げた。

道を歩く人々は、二人を避けながら歩いていく。

黒夜叉は、最初は淋しそうな表情をしていたが、しばらくして微笑みに変わった。

「まあ、ゆつくり休めや」

夕焼け空に向かって、黒夜叉は小さく呟いた。

隣にいるドゥーエは、優しく彼の手を握った。

第三十七訓：誰にでも帰る故郷がある（後書き）

生まれて育ち、家族と過ごした故郷で眠りについたクリス

そして次回は、いよいよ銀時が……！？

どうなる恋の行方！？銀時「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r
S。『男なら惚れた女は一生護れ』。テイクオフ！」

第三十八訓：男なら惚れた女は一生護れ（前書き）

銀時、沖田、ゾーマ

今回は、この三人が中心？

あつ、銀時は主役だから当然か

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜ！」

第三十八訓：男なら惚れた女は一生護れ

闘いを終えた、万事屋、真選組、機動六課、ナンバーズは、隊舎が直るまでの間、管理局が用意したマンションに泊まる事になった。夜が更けていき、三人一組となつて、それぞれの部屋で寝ている。しかし、起きている者もいた。

マンションの一室。

ミッドチルダにしては珍しく、床が畳で和風的な室内である。布団が三つ『川』の字で敷かれていて、三人の男が横になっている。

「旦那ア。いい加減、誰が好きなのか教えてくださいよオ」

左端で横になっている、沖田が声をかけた。

「バカヤロー。まだ話、始まったばかりだぞ？んな早い段階で、オメーや読者にバラす訳ねーだろ」

真ん中の銀時が、気だるげに、と言いか眠たそうに答えた。

「いいじゃねエかよ。教えるよ」

そう言うのは、右端の布団で横になっているゾーマだ。

「何で、お前が俺達と同じ部屋なんだよ？つーか、このやり取り修学旅行？」

少し声を大きくして、銀時がツッコんだ。

「いいから教えるよ」

「そういうゾーマは、どうなんだよ？え？ロリコン魔人さんよオ？」

「ロリコンの何が悪い？愛に年の差なんて、関係ねーんだよ！」

「いや年の差どころか、種族が違うだろ！！つーかお前の口から”

愛”って言葉が出て、ちよっとビックリしたぞ！」

声を荒げて反論するゾーマに、再び銀時がツッコむ。

そこで沖田が喋り出す。

「エリオもキャラの事、狙ってるみてエだから、告白するなら早い方がいいですぜ」

「そうだな。よし！俺、決めた！明日、キャラに告白するぜ！」

右拳を握って、ゾーマは決心した。

銀時は、左側にいる沖田を見る。部屋の電気は消えていて、暗くてよく見えないが、沖田の顔は笑っているように見えた。普通の笑みではない、腹黒い笑みだ。

コイツ……ゾーマがフラれるイベントを楽しむつもりだ。

沖田の腹黒い笑みを見た瞬間、銀時はそう確信した。

銀時が沖田の思惑を見抜いた時、ゾーマが声を出した。

「そっぴやア沖田。お前とティアナってオレンジ色の髪の女。お前から付き合ってるのか？」

「ああ。ティアナが俺に、好意を寄せてるのは気付いてましたがねエ、俺はあえて気付かないフリをしてやす」

「うわゝ、コイツ最悪だわ」

銀時は、目を細めて沖田を睨む。

「ぶつちやけ、お前はどうかなんだ？」

ゾーマが沖田に聞いた。

「教えませんぜ」

「はあ？何だよそれ！？結局お前ら二人の真相は秘密かよ！」

「もう、うるせーよ！いい加減、寝かせるデカブツ！！」

修学旅行の夜的な会話は、強制終了となった。

*

翌朝。

銀時達は、機動六課隊舎の修復作業の手伝いをしている。なのは達は他の仕事に回っているので、手の空いている銀時達が手伝う事になったのだ。その中にはゾーマもいる。

そして、作業してる場所から少し離れた所には、キャロとヴィヴィオがいる。キャロはゾーマを保護してる身なので、ゾーマの様子見をしているのだ。ヴィヴィオは、フェイトが仕事に出掛けているので、キャロと一緒に銀時の作業場に来たのだ。

作業をしていると、ゾーマと神楽は力加減を間違えて、木材やら何やらと色々壊している。他の作業員さんに怒られて、二人は材料運びをさせられた。

「よし。昼食の時間だ！」

作業の監督さんが、大声で作業員に伝えた。

みんな作業をやめて、昼食をとり始める。

銀時達が、隊舎から少し離れた所に座ると、ヴィヴィオが手に弁当箱を持ってやってきた。

「パパ、一緒に食べよう」

「おお」

銀時がヴィヴィオから弁当箱を受け取ると、

「旦那」

沖田に肩を掴まれた。

「ん？」

銀時が振り返ると、沖田はスツとある方向を指差した。

沖田が指差す方を見ると、ゾーマとキャロが見えた。コソコソと隊舎裏の方へ向かっている。

「あの巨体でコソコソって……」

銀時が小さく呟いた。

「旦那」

沖田が銀時を呼ぶ。

誘っているのだ。

昨夜、ゾーマは今日キャロに告白すると宣言した。その様子を銀時と一緒に、見に行きたいのだろう。

他人の告白シーンを覗き見るなんてヤボだが、あのゾーマの告白が成功するかどうか気になるのも確か。

「ちつ。しょうがねーな」

銀時がそう言うと、沖田はニヤリと笑った。

「わりー、ヴィヴィオ。俺、向こうで弁当食ってくるから、お前は

新八達と食っててくれ」

「あつ！パパ！」

銀時は弁当を片手に、沖田と一緒に走って行ってしまった。

「ん？どうしたヴィヴィオ？」

月詠が声をかけると、ヴィヴィオは頬を膨らませた。

「パパのバカ」

*

みんな、隊舎前の方に集まって昼食を食べているので、隊舎裏の方には誰もいない。だからゾーマは、キャラを連れて隊舎裏にやってきました。

そして、その後をつける男が二人。銀時と沖田は隊舎の陰から、コツソリと隊舎裏にいるゾーマとキャラを見ている。

「あの……ゾーマさん。お話って、何ですか？」

「あ……あの……その……」

ゾーマは顔を真っ赤にして、戸惑っている。

様子を見ている沖田は、ニヤニヤと笑みを浮かべている。銀時の方は、少し呆れた様子で見ている。

「ま……前によオ……俺の嫁になってくれて言ったよな……？」

「は……はい……」

思い出したキャラは、顔を赤くして俯いた。

ゾーマは、ゴクリと生唾を飲み込んだ。心臓の鼓動が早くなっている。

「アレ……本気なんだ……」

「え？」

キャラは、少し驚いた表情で顔を上げた。

銀時と沖田も、真剣な表情になる。

まさか……言うのか？マジで言うのか？マジで告白すんのか？

二人が見守る中、ゾーマは頭を下げながら、ついに言う。

「俺と結婚してくれエエエエ!!」

「ええっ!?!」

キャラは目を見開いて、驚いた。
「やっ、やったッ!!」

銀時と沖田も、目を剥いて驚愕した。

シユールだった。ゴツイ魔人が女の子にプロポーズ。あの宮 アニメでも、こんなシユールなシーンはなかったハズだ。

ゾーマは頭を下げたまま微動だにせず、キャラからの答を待っている。

キャラは顔を真っ赤にして少し考えると、何かを決意したような表情になった。

「あの、ゾーマさん」

「は、はいっ!!」

声を聞いて、ゾーマはバツと顔を上げた。

そしてキャラは、意を決して答を言う。

「ごめんなさい!!」

ゾーマの時間が止まった。

口を大きく開いて、固まっている。

「あゝ、やっぱりフラれちゃいましたねエゝ」

予想通りの結末に、沖田は小さく呟いた。

「まあ人生、成功もあれば失敗もあるさ。あつ、アイツ人じゃなかった」

結果はどうあれ、ゾーマは今回、大きな一歩を踏み出した。

強く生きる、ゾーマ。

銀時が心の中で励ました時だった。

「ゾーマさん。私……まだ、結婚できる年齢じゃないので……だから、その……」

キャラの話は、まだ終わってなかった。

ゾーマはハツとなって、キャラの話を聞く。

銀時と沖田も、改めてキャラに視線を向ける。

キャラは胸の前で、小さな両手をギュツと握った。

「こ……恋人からなら……」

「えええっ!!?」

キャラの答にゾーマは大声で驚いた。

あまりの衝撃告白に、銀時と沖田も思わず大声を出しそうになったが、両手で口を塞いでなんとか抑えた。キャラの予想外の答に、二人は動揺を隠せない。

キャラの目の前にいるゾーマも動揺を隠せずに、体を震わせていた。

「ほ……本当に、いいのか……?」

声も震えている。

「……はい……」

キャラは、か弱い声で答えた。

ゾーマは一瞬、これは夢ではないかと思った。だが夢ではない。これは現実だ。

「…………や……」

ゾーマは震える手で、拳を強く握った。

「やったアアアアア!!」

空に向かって、ゾーマは歓喜の声を上げた。

その時だった。

「うわアアアアア!!キャラオオオオオ!!」

草村から、エリオがストラードを構えて出てきた。

「エリオ君!?!」

エリオを見て、キャラはビツクリした。

「ゾーマアアアアア!!」

エリオは血の涙を流しながら、ゾーマに突進する。

「邪魔!!」

ゾーマは平手打ちでエリオを叩き、空の彼方へ吹っ飛ばした。

「キャラオオオ!大好きだアアアアア!!」

ゾーマは嬉し泣きをしながら、キャラを抱きしめた。

「ゾ……ゾーマさん!!」

キヤロは耳まで真っ赤になる。
銀時と沖田は、目を剥いて、口を大きく開いて驚愕している。
なんじゃそりゃアアアアアアアアアア！！
二人は心の中でシャウトした。

*

ゾーマの恋の行方は、沖田の予想を大きく裏切る結末になった。

銀時は、動揺が収まらないまま、みんなやゾーマ達とは別の所で弁当を食べている。

沖田は弁当を忘れて、取りに行くのもかったるいから昼寝をしている。

奇跡ってあるんだなア、と弁当を食べながら銀時は思った。

「沖田さん」

弁当を食べていると、ティアナがやってきた。

「おい」

銀時は肩を叩いて、沖田を起こす。沖田はアイマスクを外して、ティアナを見た。

「ティアナ。何か用かい？」

「あの……お弁当、作ったんですけど………」

ティアナは顔を赤くして、両手で弁当箱を沖田に差し出す。

両手の指には、沢山の絆創膏ばんそうこうが貼ってある。

銀時は目を細めた。

あれ？もしかして、これ告白イベント？

「あつ、じゃあ俺も向こうで弁当食べるわア」

銀時は弁当箱を持って、そそくさと去っていった。

沖田は去っていく銀時の背中を見つめて、ティアナは沖田に弁当箱を差し出したまま、固まっている。

銀時の姿が見えなくなると、沖田はティアナに顔を向けた。

「弁当、貰うぜエ」

「は、はい！」

ティアナから弁当箱を受け取り、蓋を開ける。

ウィンナーに卵焼きにプチトマト等、弁当のオカズはベタである。

沖田は箸を持つと、オカズを食べ始める。

「どうですか……？」

隣に座ってるティアナが、少し不安げに聞いた。

「ん〜」

もぐもぐとオカズを食べて、飲み込んだ。

「初めてにしちゃ、上出来だな」

「ほ、本当ですか！？」

「ああ」

答えて、沖田は食を進める。

ティアナは、沖田の答にホッとした。

弁当を食べ続ける沖田の隣で、ティアナは改めて告白する決意をする。

そしてティアナは、膝の上で拳を握り、意を決して口を開いた。

「あの……沖田さん！」

「ん？」

「私……沖田さんが好きです！！」

「ああ、知ってますぜエ」

「ええっ！？」

沖田の言葉を聞いて、ティアナは驚いて目を見開いた。

「気付いてないフリしてたんですア」

弁当を食べ終えて、沖田は意地悪な笑みを浮かべた。

「……酷いです、沖田さん」

ティアナは、ムツとした顔になって沖田を睨む。

「俺ア”S”だからなア」

箸をしまって、弁当箱も横に置いた。

「……私は、自分の想いを伝えました。今度は、沖田さんの答を聞かせてください」

ティアナは真剣な表情で、沖田を見つめる。

「知りたいですかイ？」

沖田がそう聞くと、ティアナは頷いた。

その直後、沖田の顔がティアナに近づき 二人の唇が重なった。ティアナは目を見開いき、顔を真っ赤にさせて混乱する。

沖田が唇を離すと、また意地悪な笑みを浮かべてティアナを見る。

「あゝあ。キスしちゃったア」

「……………お……………沖田さん……………！」

ティアナは、心臓が破れそうだった。

「これが俺の答でさア」

「……………バカ」

ティアナは沖田に抱き付いた。

ここに本日、二組目のカップルが誕生した。

*

新八達やヴィヴィオがいる所に戻って、銀時は弁当を食べていた。

ヴィヴィオや新八達と軽い会話をしながら、弁当を食べて銀時は一人、考え事をしていた。

しばらくして、ゾーマとキャロ、沖田とティアナが戻ってきた。何かこう、カップルのオーラの的なモノを出している。

俺もそろそろ、伝えるか。

沖田達を見ながら、銀時はそう思った。

*

夜になり、みんなが寝静まった頃、フェイトはマンションの屋上へ向かっていた。階段を上って、屋上の扉の前に辿り着く。

ノブを握って、扉を押し開けた。開けた瞬間、冷たい夜風がフェイトの顔に吹きつけた。

屋上を見ると、数メートル先に、月を見上げてる男が一人いた。

男は振り返って、フェイトを見る。

「夜の屋上はさみーな、フェイト」

男は銀時だった。

「ごめんね、銀時。遅くなっちゃって」

フェイトは謝りながら、銀時に歩み寄る。

「それで、話って何かな？銀時」

「お前に言いたい事がある」

そう言って、銀時は一步フェイトに歩み寄る。

その時、フェイトはドキツとして、少し頬を赤くした。銀時は、いつもの死んだ魚のような目ではなく、キリツとした真剣な目をしていた。

「フェイト」

ジツとフェイトの顔を見つめる。

フェイトも顔を赤くしながらも、銀時の顔を見つめ返す。

「俺の傍にいてくれ」

「え？」

「傍で、俺を支えてくれ」

「そ……それって……」

フェイトの顔が真っ赤になり、心臓が高鳴る。

「お前じゃなきゃ、ダメなんだ」

銀時の想いのこもった、力強い言葉がフェイトの胸に響く。

フェイトの目から、涙が溢れ出る。

「私なんかで……いいの……?」

「言っただろ？お前じゃなきゃ、ダメなんだって」

銀時が微笑む。

「銀時！！」

フェイトは銀時に抱き付いた。

嬉しさで涙を流しながら、離さないように強く、強く銀時の体を抱

きしめる。

銀時も、フェイトの肩を掴む。離さないように強く。

「フェイト。絶対にお前を離さねエ。絶対にお前を取り零さねエ」

「うん」

銀時の胸の中で、フェイトは小さく頷いた。

「お前は、俺が一生護る」

「うん」

また頷いた。

頷いた後、フェイトは顔を上げて、銀時の顔を見つめる。

「でも、護られてばかりいるのは嫌だから……私も銀時を護るよ」

「ああ」

銀時は短く答えた。

涙で潤んでるフェイトの瞳は、銀時の顔を見つめている。

「ねエ、銀時。お願いがあるんだ」

「何だ？」

「キス……して欲しいんだ」

少し恥ずかしげに、フェイトが言った。

銀時は頭をくしゃくしゃと搔いて、少し考える。

そしてフェイトの肩に手を戻して、ゆっくりと顔をフェイトに近づける。

二人の唇が、そっと重なった。フェイトは目を閉じて、キスを続ける。お互い離さないように、手に、腕に力を入れる。

長いキスを終えて、二人は唇を離れた。

「シグナム達に話したら、殺されるだろうな……俺」

夜空を見上げながら、銀時が呟いた。

雲がなく、沢山の星が宝石のように綺麗に輝いてる満天の星空が見える。

「大丈夫だよ、銀時。言ったでしょ？私も銀時を護るって」
フェイトはニッコリと微笑む。

果たして本気で怒った彼女達を、止める事ができるのだろうか？あ

る意味彼女達は、クリスマスよりも恐ろしい。

そんな事を思いながら、銀時は溜め息をついた。

するとフェイトが、銀時の胸に顔を寄せて、再び抱き付いた。

「銀時。愛してるよ」

銀時の胸の中で、フェイトは想いを口にする。

銀時は、少しぎこちない感じに両手を動かし、フェイトの体を抱いた。

「ああ」

短くフェイトに答える。

夜空に浮かぶ月は、見守るように二人の姿を照らしていた。

第三十八訓：男なら惚れた女は一生護れ（後書き）

フェイト「次回、リリカル銀魂 Strikers。『思い出は心の中に』。テイクオフ」

フェイトと共に歩んでゆく事を決めた銀時

そして次回、なのは達と別れの時……

第三十九訓：思い出は心の中に（前書き）

スバル「なのはさん。レイジングハートを構えて、どうしたんですか？」

なのは「私の出番が少ないから、これから赤夜叉を潰しに行くんだよ」

スバル「ダメですよ、なのはさん！そんな事したら最終回を迎える前に、この小説終わっちゃいますよー！！」

エリオ「赤夜叉殺す！！クソ作者！！」

スバル「エリオまでエエー！銀さん、止めてくださいーい！！」

銀時「『リリカル銀魂 Strikers』。始まるぜー！！」

スバル「銀さアアアん！！」

第三十九訓：思い出は心の中に

クリスとの死闘から数日。

銀時達は、聖王病院にやってきた。廊下を歩いて、個室の前で足を止めた。フェイトが扉をノックする。

「どうぞ」

中から返事が返ってきた。

フェイトがノブを握り、扉を開ける。

「お邪魔します」

挨拶をして、個室に入った。

ベッドの上でルーテシアの母親、メガーヌ・アルピーノが上体を起こして、隣に座っているルーテシアと話をしていた。二日前に意識を取り戻したのだ。

二人は扉の方に顔を向けた。

「あら、いらつしやい」

メガーヌは、笑顔でフェイト達を迎える。

「こんにちは。調子はどうですか？」

「皆さんのお陰で、すっかりよくなりました。ありがとうございます。ありがとうございます」

穏やかな笑顔で、メガーヌは答えた。

隣に座っているルーテシアも、嬉しそうに微笑んでいる。

メガーヌは長い間眠っていたので、体が少し弱っていた。なので、体力が回復するまで、聖王病院で入院を続ける事が決まった。と言っても、回復が早いので、明日くらいにはもう退院できるそうだ。

「んじゃ、俺とフェイトは先に出るぜ」

そう言つて銀時とフェイトは、扉の方へ向かう。

「銀さん。どこに行くんですか？」

「ちつと挨拶にな」

銀時が扉を開ける。

廊下に出ようとした時だった。

「銀時」

ルーテシアが呼んだ。

銀時は振り向いて、ルーテシアを見た。

ルーテシアは、少し頬を赤くして微笑んで言った。

「ありがとう」

お礼の言葉を聞いた後、銀時は前に向き直って、手をヒラヒラと振って応えた。

そして部屋を出て、二人は廊下を歩いていった。

*

銀時達の協力もあつて、機動六課隊舎は元通り修復した。

なのは達は、再び隊舎を本部にして仕事をしており、ナンバーズも協力して現場を飛び回っている。

聖王病院を出た銀時とフェイトは、隊舎前に来ていた。

「いくよ、銀時」

「お、おお」

フェイトの隣にいる銀時は、若干緊張した様子で答えた。

これから二人は、プレシアに報告しに行くのだ。結婚する事を。隊舎に入って、廊下を歩いていく。プレシアを呼んである部屋の前に到着する。

扉を開けると、部屋の中にプレシアがいた。

「母さん」

「フェイト。あら、銀時も一緒？」

「ああ」

二人は部屋の中に入って、扉を閉めた。

「それで、大事な話って何かしら？」

椅子に座って、プレシアが尋ねた。

フェイトと銀時も、プレシアの前に置かれてる椅子に座る。一回深

呼吸をしてから、フェイトはプレシアに向き直った。

「実はね、母さん……私、銀時と結婚したいの！」
ついにフェイトは、自分の母親に言い放った。

プレシアは一瞬、言葉の意味が解らなくて、呆然となった。

「けっ……！」

フェイトの言葉を理解した瞬間、プレシアは目を見開いて驚いた。

「あ、でも、すぐに結婚する訳じゃなくて、銀時の世界に行つてから結婚するの」

「け……結婚！？貴女と銀時が……！？」

「……はい」

フェイトは、頷いて答える。

動揺が収まらないまま、プレシアは銀時に顔を向けた。銀時は苦笑いしながら、ぽりぽりと頭を掻いている。

「母さん。私は本気で銀時を愛してる。銀時も本気で私を愛してるの。だから、お願い。私と銀時の結婚を許してください！」

フェイトが頭を下げ、プレシアにお願いする。隣に座っている銀時も、珍しく頭を下げている。

自分に頭を下げてお願いする娘を見て、プレシアは真剣な表情になった。目を閉じて考える。

時間にして一分ぐらいの沈黙だが、二人にはもっと長い時間のよう感じた。

プレシアがゆっくりと目を開けて、口を開く。

「二人とも頭を上げて」

フェイトと銀時は、頭を上げた。

プレシアは厳しい目つきで、銀時を睨んだ。室内の空気が、ひんやりと冷たい感じに変わった。睨まれた銀時は、少し動揺した。

「銀時。貴方、ちゃんとフェイトを幸せにできる？」

威圧的な声で、銀時に聞いた。

銀時は、射抜くようなプレシアの目に怯まず、見つめ返す。

「ああ」

覚悟のこもった声で、短くプレシアに答えた。

答えを聞いたプレシアは、満足そうに笑みを浮かべた。室内の空気が元に戻る。

「わかったわ。二人の結婚を許します」

「母さん……………ありがとう！」

嬉しさのあまり、フェイトはプレシアに抱き付いた。

プレシアも優しく娘を抱きしめる。

銀時は緊張が解けて、溜め息をついた。プレシアに睨まれた時、銀時は一瞬殺されるかと思った。だって、プレシア怖いもん。

「フェイト。少し銀時と話があるから、外で待っていてくれるかしら？」

「うん。わかった」

言われてフェイトは、プレシアから離れる。扉を開けて部屋を出た。部屋には、銀時とプレシアの二人つきりになった。

「んで？俺に話って何だ？」

いつもの感じに戻って、銀時が尋ねた。

するとプレシアは、立ち上がって銀時に近寄る。顔を見ると、頬がうつすら赤くなっていた。

銀時が目を細めた瞬間、突然プレシアが抱き付いてきた。

「な……………！？」

プレシアの予想外の行動に、銀時は驚いて目を見開く。

「オイ、プレシア！アンタ、いきなり何すんだ！？」

「……………ごめんなさい、銀時。もう少しだけ、このままでいさせて…」

戸惑っている銀時に、プレシアが言う。

銀時は、訳がわからないといった顔で、プレシアを見ている。

「……………フェイトの前じゃ、こんな事できないから……………」

「プレシア……………」

プレシアに抱き付かれたまま、静かに時間が過ぎていく。数分後、プレシアはゆっくりと銀時から離れた。

「ありがとう、銀時」

「別に……俺ア何にもしてねェし……」

銀時は、素っ気なく返事をする。

「で？話つてのは？」

「話つていうか、貴方にちよつと言いたい事があるの」

プレシアは、ニッコリと笑った。

表情は笑顔だが、先ほどよりも物凄いプレッシャーが、プレシアから放たれている。

「銀時。フェイトを幸せにしなかつたら……殺すわよ」

わずかに殺気の混じった威圧的な声が、銀時の耳から入って頭の中に響いた。

銀時は思わず後ずさりながら、顔を引きつらせた。

「わ……わかっ……わかりました。ちゃんと幸せにします……！」

少し上擦った声で、プレシアに答えた。

答えを聞くと、プレシアは放っていたプレッシャーと殺気を消した。

「フェイトを、お願いね」

その時にプレシアが浮かべていた笑みは、とても穏やかな感じだった。

ああ、と銀時は短く答えた。

話は終わり、銀時は部屋から出た。部屋に残ったプレシアは、深い溜め息をついた。

結局、私は最後まで銀時に想いを伝える事ができなかった。

でも、あの子はちゃんと想いを伝えて振り向かせた。

あの子は、私なんかよりずっと強い娘だわ。

プレシアは、窓から外を見た。隊舎の外で、フェイトは銀時と腕を組んで歩いている。とても嬉しそうな笑顔で、銀時と何か話をして
いる。

「フェイト。幸せになりなさい」

二人の姿を見守りながら、プレシアは娘の幸せを願った。

*

翌日。

銀時達が、元の世界に帰る日がやってきた。機動六課やナンバーズのメンバーが、見送りのために隊舎前に集まった。

「いろいろ世話になったな。ありがとうよ」

「いいえ。私達の方こそ、銀さんや皆さんのお陰で助かりました。ありがとうございます！」

笑顔でなのはが礼を言った。

「ありがとうございます！！」

機動六課のメンバーも、声を揃えて銀時達に礼を言った。

「沖田さん。必ずまた会いに行きますから！」

「ああ。待つてませエ」

ティアナは、機動六課の試験運用期間中は、こちらに残る事にしたのだ。

「エリオ、元気ないみたいだけど、大丈夫？」

エリオの隣にいるルーテシアが、声をかけた。

「あ、うん。大丈夫だよ」

と答えるエリオだが、やはり元気はない。

まだキャロの事で、落ち込んでいるようだ。

ちなみに、沖田とティアナ、ゾーマとキャロが付き合っている事は皆知っている。

「まっ、気持ちにはわからねーでもねーよ」

頭を掻きながら、銀時が言う。

「ていうかキャロ。お前こんなゴリラの進化系みたいなデカブツのドコに惚れたんだ？」

「ゴリラの進化系で何が悪い？お前、ゴリラパワーは半端なくスゲーぞー！」

と言ったのはゾーマではなく、近藤。

「うるせーよ。進化前のゴリラは黙ってる。余所でレベル上げしてこい」

銀時はシツシツと、どっか行けという感じに手を振る。近藤の相手を済ませて、銀時はキャラロに向き直った。

「で？どうなんだ？」

再びキャラロに理由を聞く。

全員の注目が、キャラロに集まる。

特にエリオは、目からビームが出そうな感じで、キャラロを見つめている。

みんなの注目を浴びる中、キャラロは意を決したように言った。

「ゾーマさんは……たくましい、お父さんみたいな感じがして……そんな所が好きになりました」

「どこがお父さん!!?」

銀時と新八の叫びが重なった。

「こんなデカブツがお父さんだったら、間違いなく俺グれるぞ!!
一夜にして暴走族の総長になれる勢いでグれるわ!!」

「オイ。魔砲、食らわせるぞコラ」

静かに怒りながら、ゾーマが言う。

周りの皆は、衝撃を受けて開いた口が塞がらない。特にエリオは、衝撃のあまり白目を剥いている。

「恋は盲目だな」

と桂……じゃなかった、キャプテン・カッターラが言った。

「いや、恋は盲目とか、そんなレベル超えてますから」と新八。

「あ、皆ちよつといいかな？」

動揺が収まらない一同に、フェイトが声をかけた。

「実は、皆にお知らせがあるんだ」

「お知らせ？」

みんなが首を傾げる。

「実は私……」

フェイトは頬を赤くしながら、銀時の横に移動した。そして、みんなにあの事を発表する。

「向こうの世界に行つて、銀時と結婚します！」
衝撃の事実パート2。

一同は、一瞬意味が理解できずに呆然としていたが、やがて意味を理解して驚愕した。

「ええええええ!!?」

全員が驚きの声を上げた。

あまりの声の大きさに、銀時は両手で耳を塞いでいる。

「ちよっ……マジですか銀さん!? マジで、フェイトさんと付け、結婚するんですか!?!」

「そうだよ」

「できちゃった結婚アルか!?!」

「ちげーよ」

銀時は新八と神楽の問いに、メンドくさそうに答えた。

「おめでどう、フェイトちゃん! 式には呼んでね」

「うん」

なのはは二人の仲を祝い、フェイトも嬉しそうに答える。

おめでどう! 銀時が結婚なんて想像できねー! おめでどう! 全ての子供達におめでどう!

周りから祝いの言葉が飛び交う。

そんな中、この事実にはシヨックを受けている者達がいた。シグナム、アルフ、リインフォースの三人とナンバーズ数名である。

アルフとリインフォース、ナンバーズ数名は、フェイトの結婚宣言を聞いて、銀時の事を諦めていたが、シグナムは違った。

ズンズン、と前へ進むと銀時の前へやってきた。

「何だ?」

銀時はかったるい声で、目の前にいるシグナムに聞いた。

「銀時……お前がスタロツサをつ……妻に選んだのなら、それはもう変わらないだろう……」

「そうだな。これで恋の騒ぎから解放されて、俺もゆっくりできるぜ」

「だが、銀時！」

急にシグナムが大声を出した。

銀時も含め、みんなが驚いた。

「お前の妻になれないのならば、私は銀時の愛人になろう！」

「いや、おかしいイイイイ！」

即座に銀時がシャウトした。

シグナムの爆弾発言に、やはり周りの皆も驚いている。

「お前そんな事言うキャラじゃねーだろ！？完璧にキャラ壊れてるよ！ヴォルケンリッターの将、『剣の騎士シグナム』は何処にいった！？」

「私は諦めないぞ、銀時！」

「いや、もう諦めるよ！！」

「だったら、あたしも愛人になる！」

と手を挙げたのは、アルフ。

「オメーは、ペットでいいだろう！」

そんなこんなで、騒がしい見送りは終わり、銀時達は元の世界に戻った。ちなみにフェイトも機動六課の試験運用期間は、こちらに残る事にした。

最後に銀時が、新八にこう謝った。

「わりーな、新八。俺ばっかツツコミやっちまって」

「赤夜叉アアアア！！僕の出番を増やせエエエエ！！」

「……わっちが出た意味はあったのか？」

最後に月詠が、ボソツと呟いた。

第三十九訓：思い出は心の中に（後書き）

銀時&フェイト「次回、リリカル銀魂 S t r i k e r s。 『家族
つて温かい』。 テイクオフ」

いよいよ次回……

『白夜叉鎮魂歌』

終幕

最終訓：家族って温かい（前書き）

赤夜叉「いや、今回で最終回ですよ。ちょうど四十話。これ凄くね？」

凄くね？って言うか、赤夜叉さんに聞きたい事があるんですけど。

赤夜叉「いいよ。なんでも答えてあげるよ。」

この小説、どの辺が『白夜叉鎮魂歌』なんですか？

赤夜叉「さあ、読者の皆さん！今回で最終回ですが、最後まで楽しんでください！！」

おゝい。

赤夜叉「後書きも読んでね！」

別れと新たな始まりの最終回

銀時&フェイト「『リリカル銀魂 Strikers』。始まります！」

最終訓：家族って温かい

人生には、出会いがあれば別れもある。別れというものは、突然やってくる。本人が望まなくても、勝手にやってきてしまう。

江戸のかぶき町にある、平賀源外の工場。源外に呼ばれて、銀時は工場内に入った。工場内には、沢山の機械やら道具やらが置かれている。

「オーイ、ジーさん。来たぞ」

工場内を見回しながら、源外を呼ぶ。

「来たか、銀の字」

すると、奥から源外がやってきた。

「で？話って何だよ？」

「実はな……」

源外は髭を触りながら、重い口を開いた。

「もう向こうの世界には、行けなくなっちまう」

「……………」

返す言葉が見つからなかった。

源外の言った意味が、よくわからない。

「……………どういう事だ？」

何とか銀時は、言葉を発した。

「もうフェイト達の世界には行けねえんだ。いや……正確に言えば、

『10年前のフェイト達の世界』には行けなくなっちまう」

「何でだ？」

「装置が、現在のフェイト達の世界に座標を固定し始めたんだ。D
VDを基に移動して故障したり、急いで修理して使用したり、いき
なり出力を最大にして使用したり、色々無理をしてきたからな。そ
れに、コイツア元々、過去や未来を行き来するための装置じゃない
からな」

源外の説明を、銀時は呆然となって聞いていた。

だが、妙に冷静なところもあつた。10年後のフェイト達の世界に行つた時、フェイトは俺に『久しぶり』と言つた。それはつまり、俺が10年間フェイト達の世界に行っていない事を示している。

「ジーさん。アイツら……真選組の方にも装置があつたら？ソイツは使えねエのか？」

「以前、新八と真選組の連中が話してるところを聞いたんだが、真選組の方の装置は、最初の移動の時に完全に壊れて使い物にならなくなつちまつたそうだ」

源外の言葉を聞いて、銀時は苦い顔をした。

もう会えない。覆す事の出来ない現実が、目の前にある。脳裏に、10年前のフェイトの笑顔が浮かぶ。

銀時は、思わず拳を強く握つた。

「……ジーさん。まだ10年前の世界に行けるか？」

「ああ、今ならまだ行けるぞ。ただし、向こうに居られる時間は短いぞ。そろそろ限界だからな」

「構わねエ」

銀時は答えると、装置の扉を開けて中に入った。

源外も装置を作動させる。装置の中が赤く光り、銀時の姿はなくなつた。

*

海鳴市。下校時刻になり、街には家へ向かう学生でいっぱいだった。その中に、フェイト・テストロッサの姿があつた。白い制服を着て、カバンを持ってマンションへ向かっている。なのはやすずか達の姿はない。おそらく習い事に行っているのだろう。

一人で大通りを歩いていると、フェイトは途中で足を止めた。彼女の視線の先に、白い着物を着た銀髪の男が立っていた。

「銀時!!!」

フェイトは、走って銀時に近寄った。

「よオ、元気かフェイト」

「うん。銀時の方こそ大丈夫？全然連絡がつかなかったから、心配してたんだよ」

「心配かけて悪かったな。ちつと色々あってな」

そう言つと銀時は、一瞬寂しそうな表情をした。

フェイトは、その表情を見逃さなかった。

「……銀時、何かあったの？」

「……場所、変えるぞ」

銀時は、フェイトの手を掴むと有無を言わず歩き出した。

「ぎ、銀時！？」

フェイトは戸惑いながらも、銀時の後をついて行った。

少し歩いて、小さな公園についた。夕方で、他に人影はない。

銀時は手を離すと、フェイトと向き合った。その顔は、真剣な表情をしていた。

「銀時……？」

不安になったフェイトは、銀時の名を呼んだ。

通りで寂しそうな表情を見てから、フェイトの中に不安が生まれ、時間が経過していくにつれて、大きくなっていた。

銀時は、意を決してフェイトに言った。

「もう……お前とは会えねエ」

「え……？」

フェイトの目が見開かれる。

一瞬、強い風が吹いた。風に吹かれて、フェイトの長い金髪がなびく。

何の事だか解らず、フェイトは混乱しながら、無理矢理笑顔を浮かべた。

「な……何言ってるの、銀時？」

「……………」
銀時は答えない。

「も、もう……………会えないって……………嘘だよね？」

「……………」
「私を驚かそうとしてるんでしょ？」

「……………」
銀時は何も答えない。

フェイトはその時、悟った。

銀時の言った事は、本当なんだと。もう会えないと。

そう悟った時、フェイトの目から大粒の涙が零れてきた。

「ヤダ……………イヤだよ……………」

かぶりを振りながら、フェイトは小さく呟いた。

「イヤだよ！銀時！！」

泣きながら銀時に抱き付く。

「会えなくなるなんて……………イヤだよ……………！絶対にイヤだ……………！！」
涙が止まらない。

離れたくない。

銀時の着物を、ギュツと強く握る。離してしまつたら、もう銀時に会えない。

銀時は、ゆっくりと屈んで、フェイトの肩を掴んだ。

「すまねエな、フェイト。こっちの勝手な都合で……………」

「銀時……………お願い……………行かないで……………もっと……………もっと……………銀時と一緒に居たいよ……………！」

小さな肩を震わせて、嗚咽を漏らすフェイト。

銀時は、肩から手を離すと、フェイトを力いっぱい抱きしめた。

「ぎ、銀時……………？」

「……………俺ア最低だな。こんなイイ女、泣かせるなんてよ」
力を緩めず、強く、強く、フェイトを抱きしめる。

「い……………痛いよ、銀時……………」

フェイトが痛みを訴え、銀時は力を緩めて腕を離れた。

真っ直ぐにフェイトを見つめて、銀時は言った。

「フェイト。しばらくは会えねエが、必ずまた会いにくる」

「……………本当？」

やっと涙が止まり、フェイトは銀時に聞いた。

「ああ。約束だ」

フェイトにそう答えると、銀時の体が段々薄れてきた。そろそろ時間のような。

「じゃあな……………フェイト」

優しく微笑んで、フェイトの頭に手を乗せた。

「銀時……………大好きだよ」

消えていく銀時に、別れの言葉を言わず、自分の想いを伝えるフェイト。

フェイトの想いを聞いて、嬉しそうに笑みを浮かべた直後、銀時の姿は消えた。

銀時が消えて、一人公園に残されたフェイトは、空を見上げた。夕焼け空は、星が輝く夜空に変わっていた。

綺麗な夜空を眺めながら、フェイトは一筋の涙を流した。

*

装置の中に、銀時が戻ってきた。これでもう、10年前のフェイト達とは会えない。

中から出てきて、源外に一言礼を言うと、工場の外へ出ていった。

源外は何も言わず、無言で銀時の背中を見送った。

銀時は万事屋に戻って、ソファーに横になった。胸が苦しくて、眠れなかった。

*

黒夜叉とドゥーエは、ミッドチルダの街中にあるホテルにいた。旅

に出ます、と置き手紙を書いたものの、特に行くアテもなくお金もそんなに無いので、旅をするのはやめにしたのだ。

二人はベッドの上で寝ている。時計の針が七時を指したところで、目覚まし時計が鳴った。黒夜叉の隣で寝ているドゥーエは、腕だけ動かして目覚まし時計のスイッチを押して、音を止めた。眠い目を擦りながら、上体を起こす。カーテンの隙間から、太陽の光が差し込んでいる。

「ふあ〜」

ドゥーエは、口に手を当てて欠伸をした。

ちなみに彼女は今、下着を着けていない。裸である。掛け布団で胸を隠し、まだ眠っている黒夜叉に顔を向ける。

「黒夜叉。朝よ」

黒夜叉の体を揺する。

「ん……」

ドゥーエに体を揺すられ、黒夜叉が僅かに目を開けた。

「おはよう、黒夜叉」

「……………今、何時だ？」

「朝の七時よ」

「……………あと二時間寝る」

時間を聞くと、黒夜叉は掛け布団をかぶって寝ようとする。

「黒夜叉」

「朝弱いんだよ。俺の血圧をいくつだと思ってやがる？」

「知りませんよ、そんなの。とにかく起きてください！」

無理矢理ドゥーエは、黒夜叉から掛け布団を奪い取った。

「……………つたく」

頭をぼりぼりと掻きながら、黒夜叉は上体を起こした。

「大体お前が早く寝かせてくれねエから……………」

「……………だって……………黒夜叉の……………凄く気持ちよかったから……………」

頬を赤くしながら、ドゥーエは体をくねらせる。

黒夜叉は頭を抱えて、溜め息をついた。

「これ全年齡対象の小説だから、あんまそういう事言つな。ついでに服着ろ」

「わかりました」

ドゥーエは着替えを始める。

黒夜叉は、再びベッドに横になる。

そういえば金がなくなってきたな、と黒夜叉は思った。

「……万事屋やろうかな」

黒夜叉は小さな声で、ボソツと呟いた。

*

江戸のかぶき町。

その街中に、大江戸結婚式場というのがあった。原作では結婚式場の名前とか出てないが、多分こんな名前のはずだ。

広い式場には、沢山の椅子とテーブルが並んでいる。そして席には、新八や神楽、定春、真選組、機動六課、ナンバーズ。

その他、とにかくみんなが席に着いていた。

「しかし、あのグータラ男が結婚とはねエ。今でも信じられないよ。そう言ったのは、万事屋銀ちゃんのお家さん、お登勢である。」

「原作デモ、結婚スル様子ナシテ、一ミリモアリマセンシネ」

頭に猫耳を生やしているのに、顔が濃くて全く萌えられない女性、キャサリンが言った。

「銀時様も、これを機会に責任感というのを覚えて、家賃をきちんと払ってもらいたいです」

機械家政婦の、たまが言った。

隣のテーブルには、ちよつと……いや、かなり不気味な集団がいた。「いやだ〜。パー子に先越されちゃうなんて、く〜やく〜い〜！」

不気味な集団は、全員オマである。

「まあ、野郎には何度か世話になったからねエ。結婚式ぐらい祝つてやろうじゃない」

オ マの集団の中でも、かなり大柄な人物が言った。

かまっ娘倶楽部のオーナーにしてかぶき町四天王の一人、鬼神マドマーゼル西郷。攘夷戦争時代は、白フン一丁で天人の戦艦に乗り込んで暴れ回り、『白フンの西郷』と呼ばれた伝説の男。本名は西郷特盛。

かまっ娘倶楽部の様子を見て、なのは達は冷汗を流して顔を引きつらせた。

なのはが、苦笑しながら聞く。

「新八君、あの人達って……？」

「ああ。変わってますけど、みんなイイ人達ですよ」
慣れてる新八は、驚いてる様子もなく答えた。

隣に座ってる神楽は、我慢できずに、テーブルの上に用意されている料理を食べ始めている。

「っていうか、何でアンタが此処にいるんですか!？」

神楽にツッコむのかと思いきや、新八は別の人物に向かって叫んだ。
新八の視線の先にいたのは、白いスーツ姿のスカリエッティだった。

「銀時の結婚式と聞いて、脱獄してきたんだよ」

当然とばかりに、スカリエッティは答えた。

「あつ！屁怒紹もいるぞ！」

ヴィータが、屁怒紹を指差して叫んだ。

シグナムの表情が、凍りついた。

「しかし結婚式をやる金なんて、万事屋にあつたのか？」

怪訝な顔で土方が言う。

「お金の方は、フェイトさんとプレシアさんが、何とかしたみたい
です」

ティアナが答えた。

「やれやれ」

土方は溜め息をついた。

その時だった。式場の明かりが、フツと消えた。

「皆さん、長らくお待たせ致しました。新郎新婦の入場です」

司会の人がマイクの前で言うと、式場の扉が開かれた。扉にライトが当てられて、二人の人影が入ってきた。黒い着物姿で入ってきたのは、坂田銀時。服装はちゃんとしているが、目はいつも通り、死んだ魚のような目をしている。銀時の隣にいるのは、純白の綺麗なウエディングドレスに身を包んだ、フェイト・テスタロッサ。少々緊張している様子で、頬もうっすらと赤くなっている。互いの手を握って、式場に敷かれているカーペットの上を歩いていく。

「おめでとう！」

「お幸せに！！」

二人の姿を見て、みんなが拍手で迎え、祝福の言葉を浴びせる。

「ママー！パパー！」

ヴィヴィオが手を振りながら、二人に声をかけた。

銀時は、チラツと横目でヴィヴィオを見る。フェイトは、ニッコリ笑って手を振った。

「フェイト綺麗だなア……。ねえ、プレシア？」

「ええ」

アルフの言葉に、プレシアは小さく頷いた。

綺麗なウエディングドレスに身を包んだ娘の姿を見て、プレシアの目に涙が浮かぶ。

「本当に……綺麗だわ」

プレシアの目から、一筋の涙が流れた。

「羨ましいぞ、万事屋アア！俺も必ずお妙さんと……」

言い切る前に、お妙の右ストレートが近藤の顔面にめりこんだ。

銀時とフェイトは、前の方の席に座った。

「それでは、夫婦始めての共同作業に移らせて貰います」

司会の人が言うと、スタッフの人達がケーキを運んできた。

銀時とフェイトは席を立ち、ケーキの前にやってくる。二人の手には、ケーキを切るためのナイフ。金色の刃が備わってるバルディ

ツシユが握られていた。

「いや、何でバルディッシュ！？普通のナイフでいいでしょう！」
と新八がツッコんだ。

「フェイト。お前もサラッとボケるようになったな」

「銀時達の影響かもね」

フェイトは笑って銀時に答えた。

やれやれ、と溜め息をついて、銀時はフェイトと一緒にバルディッシュでケーキ入刀をした。

夫婦初の共同作業を終えて、二人は席に戻った。

「それでは続いて、ある大物人物からの祝いの手紙を、志村新八さんに読んでいただきます」

「え？僕ですか？」

司会の人言葉に、新八は自分を指差して驚いた。

「新八さん。こちらへ、どうぞ」

「は……はい」

新八は席を立って、司会の人隣にやってきた。

司会の人から手紙を渡されて、マイクの前に立つ。みんなの視線を浴びながら、新八は手紙を開いた。

「銀さん、フェイトさん。この度は、ご結婚おめでとございます
新八の朗読が始まった。

「まさか銀さんが結婚する事になるとは、私も予想してませんでした。今まで、後先考えないで書いてきましたからねエ」

「オイ、その手紙書いたの、アイツじゃねエのか？」

銀時が、顔をしかめながら言った。

「まず、銀魂とリリカルなのはのクロス自体が、無理あるんですよ。世界観が全然違いますからね。他にも課題がいっぱいあって、本当に大変でした……って、これお祝いの手紙じゃないじゃん！ただの苦勞話じゃん！！」

「赤夜叉だろ！？この手紙、書いたの赤夜叉だろ！！」

朗読の途中で新八が怒鳴り、銀時も叫んだ。

「銀時、新八、とりあえず落ち着いて！」

フェイトが二人をなだめる。

作者 赤夜叉からの手紙に怒る銀時と新八は、フェイトに声をかけられて気分を落ち着かせた。

気を取り直して、新八は朗読を再開する。

「話がそれてしまい、申し訳ありません。何が言いたいかと言いますと、グダグダだったけど書いてて楽しかった、という事です。では最後に銀さん。フェイトさんを幸せにして、銀さん自身も幸せになつてください。赤夜叉」

新八が朗読を終えて、手紙を畳んだ。

聞き終えた銀時は、頭をぼりぼりと掻いた。

「……まあ、最後の方の言葉は、ありがたく受け取ってやるよ」

銀時の隣で、フェイトはクスクスと笑っていた。

「続きまして、花嫁によるブーケ・トスを行います」

「ブーケ・トスって普通、教会でやるんじゃないっけ？」

銀時が聞いた。

「それでは、お願いします」

銀時の指摘を無視して、司会の人は先を促す。

フェイトは、両手でブーケを持ちながら立ち上がった。くるり、と後ろを向き、皆に向かってブーケを投げた。ブーケが式場の宙を舞う。

そして、

「うおりゃアアアアア！」

ブーケ目掛けて、女性陣が一斉に飛び出した。

お妙、神楽、キャサリン、なのは、シグナム、ティアナ、はやてがブーケの奪い合いを始める。繰り出される鉄拳、蹴り、魔砲、剣撃、その光景はまさに死闘の極地。

死闘に巻き込まれて、周囲の人々が宙を舞っていく。

「だア〜くそっ！やっぱ、こうなるんじゃないか。っーかスゲーグダグダだな」

頭を抱えて、銀時が呟いた。

その時、フェイトは殺気を感じ取り、銀時を抱えて後ろへ跳んだ。直後、数本のクナイが床に突き刺さった。

「誰？」

床に着地して、周囲を警戒しながらフェイトが言った。

すると、目の前に一人の女性が現れた。ロングヘアで眼鏡をかけた、なかなかの美人。

女性を見て、銀時は苦い顔をした。

「げっ！お前……！」

「銀さん酷いわ！私という女がいながら……！」

突然現れたこの女性は、猿飛あやめ。通称さっちゃん、元お庭番衆のくの一で、現在は始末屋をやっている。

「銀さん！私達、SMプレイを一緒に楽しんできた仲じゃない！」

「SMプレイなんて、した覚えはねーよ……！」

勝手な事を言うさっちゃんに、怒鳴る銀時。

さっちゃんは、視線を銀時から隣にいるフェイトに移した。

「貴女！こんな結婚式、私は認めないわ！貴女なんかより、私の方

が銀さんのメ　豚に相応しいんだから……！」

「いい加減にしるオオオオオ……！」

怒声を上げながら、銀時はさっちゃんに回し蹴りを食らわせる。

「ああああん……！」

回し蹴りを食らったさっちゃんは、気持ちよさそうな声を上げながら式場の外へ吹っ飛んだ。

さっちゃんを退場させて、銀時はフェイトに向き直る。フェイトは、何やら少し不機嫌そうな顔をしていた。

「フェイト。誤解するんじゃないぞ？アイツは、ただの納豆臭い変態ストーカーで、彼女でもなんでもねエ」

さっちゃんとは何もない事を、必死に訟える。

少し動揺してる銀時の様子を見て、フェイトは短く笑った。

「大丈夫だよ、銀時。ちゃんと信じてるから」

ニツコリ笑って、銀時に答えた。

それを聞いて、銀時はホツと胸を撫で下ろす。結婚式にまでバルデイツシュを振り回されたら、たまったものではない。

銀時が安心したのと同時に、ブーケ争いにも決着がついた。

「やったー！フェイトちゃん、やったよー！」

ブーケを勝ち取ったのは、なのはだった。

周囲には、力尽きた女性達が倒れていて、なのは自身もボロボロである。

「よかったね、なのは！」

「うん！」

なのはは、嬉しそうに頷いた。

「なのは」

すると、そこへユーノがやってきた。

「ユーノ君」

なのはもユーノを見る。

互いに少し頬を赤くして、見つめ合う。

数秒の見つめ合いの後、ユーノが動いた。手を伸ばして、なのはの肩を強く掴む。

「なのは！」

「は……はい！」

なのはが返事をした後、ユーノは言った。

「僕と結婚しよう！」

なのはにプロポーズをした。

周りには皆は、啞然となって二人を見ている。

なのはも一瞬、呆然としていたが、すぐに我に帰り、嬉しそうに笑った。

そして、

「うん！」

満面の笑みで頷いた。

ユーノは喜んで、なのはを抱きしめた。

新八は二人の姿を見て、眼鏡のレンズにヒビが入った。

「あゝあ。新八の恋が、完膚なきまでに叩きのめされたな」

「ちよつと、可哀相だね」

放心状態の新八を見て、フェイトは苦笑した。

「でも、ユーノ君。今日は、フェイトちゃんと銀さんの結婚式だから……」

「あ、ああ！そうだね！」

慌ててユーノは、なのはから離れた。

「つたく、どいつもこいつも好き勝手騒ぎやがって」

「まあまあ」

愚痴を零す銀時をなだめるフェイト。

その後、フェイトは顔を赤くして銀時に声をかけた。

「……ねエ、銀時」

「ん？」

銀時は頭をぼりぼりと掻きながら、顔をフェイトに向ける。

「どうかな？私のドレス姿……？」

少し恥ずかしそうに、フェイトが聞いた。

銀時は、ドレス姿のフェイトを見つめた。光に当てられて、純白のドレスと長い金髪が輝いて見える。結婚式など忘れて、思わず見惚れてしまう程、美しかった。

「綺麗だよ」

銀時は、素直な感想を口にした。

「ありがとう」

礼を言った後、フェイトは銀時にキスをした。

*

結婚式を終えて、飲み会やらもやった後、解散した。銀時、フェイト、ヴィヴィオ、アルフの四人は万事屋に帰った。ヴィヴィオは、なんやかんやで銀時とフェイトの養子となつて一緒に暮らす事にな

り、アルフもフェイトの使い魔、万事屋のペットという事で同じく一緒に暮らす事になった。

ちなみにエリオとキヤロは、プレシアが保護者となって面倒を見る事になった。

今、万事屋には神楽と定春はいない。これからは、下の階にあるスナックお登勢か、新八の家に泊まるそうだ。

銀時達は階段を上ると、玄関前まで歩いてきた。銀時の背中、ヴィヴィオは小さな寝息を立てて寝ている。

扉を開けて、中に入り、明かりをつける。

居間に入って明かりをつけた。

「ふにゃ〜。疲れた〜」

居間に入るなり、アルフはソファに倒れた。

「アルフ、お疲れ様」

フェイトは、アルフの頭を優しく撫でる。

頭を撫でられながら、アルフはそのままソファの上で寝てしまった。た。

「ったく。んなトコで寝たら風邪ひくぞ」

銀時は和室へ向かった。

和室から掛け布団を持ってきて、ソファの上で寝てしまったアルフの体にかけてあげた。

その後、和室へ戻って布団を敷いて、その上にヴィヴィオを寝かせた。

「銀時」

窓際に立っているフェイトが、声をかけた。

「ん？」

ヴィヴィオに掛け布団をかけると、銀時はフェイトの隣に歩み寄る。

「見て。月が綺麗だよ」

言われて銀時も、窓の外を見た。

星が綺麗に輝いている夜空に、大きな月が見える。

静かに月を眺めていると、手に温かい感触がした。見ると、銀時の

手の上にフェイトの手が重なっている。

「今日から、私達『家族』だね。銀時」

月を眺めたまま、フェイトが言った。

銀時は、月明りに照らされたフェイトの横顔を見た。

綺麗だ。

それ以外に、言葉が思い浮かばなかった。銀時は、そっとフェイトの指に自分の指を絡める。

また月を見る。

初めてフェイト達と出会った時のような、とても大きく、強く温かい輝きを放っている月。

月を眺めながら、銀時は一言呟いた。

「あつたけエ」

最終訓：家族って温かい（後書き）

こんにちは、こんばんは！作者の赤夜叉です。

最終回どうでしたか？グダグダだったでしょう？（笑）

これでリリカル銀魂は、終了となります。いや〜長かった。俺、飽きっぽい性格なんですけど、よくここまで書けたなと自分で思ってます。まあ、銀魂は大好きな作品ですし、小説を書き始めてリリカルなのはも好きになりましたし。なんとか完結できて良かったです。

続編や新たなクロス小説ですが、今のところ書く予定はありません。ぶっちゃけた話、あんまり他のアニメとか知らないんです（汗）

それでは読者の皆さん。こんな作品を読んで頂き、ありがとうございます！
いました！今まで応援、ありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4169h/>

『リリカル銀魂 StrikerS』～白夜叉鎮魂歌～

2010年10月12日03時02分発行